メ羊肉及ビ酪漿ヲ食ハズ、常ニ鯽魚ノ羹ヲ食フ、渇スレバ茗汁ヲ飲ム、高帝曰ク、羊肉ハ魚羹ニ何如、茗汁ハ、酪漿ニ何如ト、蕭曰ク、羊ハ陸産ノ最、魚ハ水族ノ長、羊ハ齊魯ノ大邦ニ比シ、魚ハ鄙莒ノ小國ニ比ス、惟ダ酪中ラズ、茗ノタメニ奴タリ、彭城ノ王勰曰ク、卿齊魯ノ大邦ヲ亟ンゼズシテ、鄙莒ノ小國ヲ愛ス、明日爲メニ鄙莒ノ會ヲ設ク、亦酪漿アリ、因リテ茗ヲ呼ビテ——トナス」

【樂土】「タノシキ」場所、詩經に「樂土樂土、爰得我所」

李商隱の行次西郊詩に「伊昔稱——所賴牧伯仁」

【樂德】（德ヲ樂ム）淮南子に「古之存己者、——而忘賤、故名不動志、樂道而忘貧、故利不動心」

【落馬】馬より落つる、南史宗室傳に「義宣大懼、——、仍便步地」宋書沈懷文傳に「託疾——」墜馬に同じ、

【落帽】（孟嘉——）を見よ、その故事によりて九月九日の節句を——の辰といふ、

【落泊】「オチブレル」北史盧思道傳に「再被笞辱、因而——不調」落魄に同じ、次條を見よ、

【落魄】「落チブルル」史記の酈生傳に「酈食其ハ、陳留ノ高陽ノ人ナリ、好ンデ書ヲ讀ム、家貧ニシテ——シ、以テ衣食ノ業ヲ爲スナシ」の註に「落魄ハ貧クシテ家業ナキナリ」又志行衰惡の貌ともいふ、夷白齋詩話にも「張靈——不羈、寄情詩賦、魄の音は正しくは「タク」

【落莫】「サビシク」「ツマラヌ」資治通鑑 唐紀文宗帝の條に「王涯待之殊——」胡三省の註に「落ハ冷落ナリ、莫ハ薄ナリ、唐人ノ常語ナリ」韓愈の送楊少尹序に「不——」否」

【落髮】「カミヲソル」文字禪の眞覺傳に「長而——」剔髮、翦髮、薙髮、削髮皆同じ、

【落筆蠅ヲ點ス】呉錄に「曹不興、畫ヲ善クス、孫權屏風ニ畫カシム、誤リテ筆ヲ落シ、素ニ點ス、因リテ就キテ以テ蠅ヲ作ル、既ニ進御ス、權以テ眞蠅トナシ、手ヲ舉ゲテ之ヲ彈ズ」

【駱賓王】唐の婺州義烏の人、七歲能く詩を賦す、王勃、楊炯盧照隣と文章を以て名を齊しうす、海內これを四傑と稱す、初め趙王の府屬となる、高宗の末、長安主簿と爲る、武后の時しばしば上疏して事を言ひ、臨海丞に貶せられ、怏怏として志を得ず、官を弃てて去る、徐敬業の兵を起すや、署して府屬となす、敬業のために檄を天下に傳へ、武后の罪を暴斥す、后之を讀みて嬉笑するのみなりしが「一抔之土未乾、六尺之孤安在」の句に至り愕然として曰く、誰かこの檄を作れる

と、或人實王を以て對ふ、后曰く宰相安んぞ此の人を失ふを得んと、敬業敗れ、實王亡命して之く所ろを知らず（駱丞集）を參看せよ、

【洛浦ノ宓妃】後漢書張衡傳に「載太華之玉女兮、召洛浦之宓妃」注に「宓妃ハ洛水ノ神ナリ」曹植の洛神賦に「臣聞河洛之神名曰宓妃」

【雒裙】「ウスギヌ」の「モスソ」玉勃の採蓮歸樂府に「桂棹蘭橈下長浦——玉腕搖輕橈」

【洛陽】周公の初めて都を營みしところ、洛邑ともいふ、晉の司州河南郡——縣、北魏の洛州——郡——縣は、今の河南河南府洛陽縣の東北二十淸里に在り、隋以後の——縣は卽ち今の洛陽縣治これなり、史記留侯世家に「上在——南宮」

【雒陽】洛陽に同じ、詩經の成廟の釋文に「洛ハ水名、字水ニ从フ、後漢、洛陽ニ都シ、火德ヲ以テス、水火ヲ忌ストス、故ニ改メテ各旁隹ニ爲ル」

【洛陽耆英會】（耆英會）を見よ、

【洛陽花】牡丹をいふ、一名鹿韭、一名鼠姑、一名百兩金、羣芳譜に「唐宋ノ時、洛陽ノ花、天下ノ冠タリ、故ニ牡丹ハ竟ニ洛陽花ト名ヅク」歐陽修の花敍に曰く「洛陽城圍數十里、而諸縣之花、莫及城中者と

【洛陽ノ紙價貴シ】著書の多く世に行はるるにいふ、晉書文苑傳に「左思字太冲、齊國臨淄人、貌寢口訥、而辭藻壯麗、造齊都賦、一年乃成、復欲賦三都、構思十稔、及賦成、時人未之重、張華見曰、班張之流也（班固兩都賦を作り、張衡二京賦を作れるをいふ）於是競相傳寫、洛陽爲之紙貴」（十年構思）を參看せよ、

【洛陽城頭桃李花】（年年歲歲）を見よ、

【洛陽負郭之田】（負郭二頃）を見よ、

【洛陽名園記】一卷、宋の李格非撰す、洛陽の園圃、富弼以下凡十九所を記せり、敍述頗る雅飾と爲す（李格非）を參看せよ、

【樂浪】兩漢の郡名、幽州に屬す、晉は平州——郡、今の朝鮮平安道平壤府治これなり、漢書武帝紀に「元封三年夏朝鮮斬其王右渠、降、以其地爲——臨屯、元菟、眞番郡ニ張衡の東京賦に「西包大秦、東過——」

【碌碌】碌は山上の大石、——は石堅くして相入れざる貌、楚辭に「山阜兮——」

【落落】胸の「ヒロヤカ」にして細事に「カカハラザル」義、十六國春秋後趙の石勒傳に「勒曰大丈夫行事當磊磊——如日月之皎然」また志大にして相合はざる貌、後漢書耿弇傳に「嘗以

爲——難」合、有」志者事竟成也」

【羅紈】「ツタカヅラ」のまとへる「ノキ」孟浩然の宿立公房詩に「昔溯春泉滿、——夜月閑」

羅紈は「ウスキカトリギヌ」鹽鐵論に「夫——文繡者、人君皇妃之服也」とあり、褌は昔の屬「アブラガヤ」羅紈の如き美服を被る者は必ず麻褌の如き粗服を著ることあり、桑華は永くつづかずして衰微するに至るに喩ふ、淮南子に「有」榮華」者、必有」憔悴」——」——」——」之」——」紈一本に綺に作る、

【螺髻】髻は「モトドリ」「クブサ」古今注に「童子結髮亦爲」——」——」

また明一統志に「——山在」臨安府河西縣西五里」山頂如」佛之——」然」

また青山に喩へてもいふ、惠洪の秋晩同」超然」山行詩に「高秋霜葉魚肥赤、落日遠山——青」黃庭の舟次」九山」詩に「水雲盡」處列」奇峯」——參差杳靄中」螺一に贏に作る、同じ、

【羅髻】前條に同じ、

【羅徑】「ツタカヅラ」の「コミチ」元好問の同」希顏」再登」箕山」詩に「千年箕山洞、——深以悄」

【羅月】「ツタカヅラ」に照る月、沈佺期の入」少室溪」詩に「相留且待雞禾熟、夕臥深山——春」李白の贈」嵩山焦鍼師」詩に「——挂」朝鏡、松風鳴」夜弦」

【羅軒】「ツタカヅラ」のまとへる「ノキ」孟浩然の宿立公房詩に「昔溯春泉滿、——夜月閑」

【羅紈】アル者必ズ麻褌アリ」（有」羅紈」者必有」麻褌」）羅紈は「ウスキカトリギヌ」鹽鐵論に「夫——文繡者、人君皇妃之服也」とあり、褌は昔の屬「アブラガヤ」羅紈の如き美服を被る者は必ず麻褌の如き粗服を著ることあり、榮

ず、玉合は「タマノカウバコ」銀合子は「ギンノカウバコ」玳合は「タイマイ」の「カウバコ」

【螺杯】 鸚鵡螺に同じ、(鸚鵡杯)を見よ、

【羅拜】 「ナラビテ」ヲガム」唐書に「突厥下」馬」——遁去」

【羅幕】 「ウスギヌ」の「マク」陸機の君子有所思」行に「遂宇列」綺窓」闌室接」——」

【羅布】 「ツラネシク」晉書庾亮傳に「遣」諸軍」——」江汚」

【羅浮】 水經注に「洞庭南口、有」——山、高三千六百丈」四機活法に「羅山浮山體ヲ合ス、故ニ——ト稱ス、增城博羅二縣ノ境ニ在リ、高サ三千丈、七十ノ石室、七十ノ長溪アリ、燿眞天ト名ヅク、浮山ハ乃チ蓬萊ノ別島ナリ、堯ノ時、洪水ノタメニ浮ビ至リテ羅山ニ依リテ止マル、故ニ——山トイフ」事類統編地輿部廣東省惠州府の條に「梅花村在」羅浮山麓」云云」初學記に「——二岳風雨ヲ以テ合離シ、蓬萊三山波濤ニ隨ヒテ上下ス」

【羅敷】 古の美人の名、樂府に「趙王欲奪」邑人王仁妻——」——拒之、其詞曰、使君自有婦、——自有夫、東方千餘騎、夫壻居」上頭」古——行に「日出東南隅、照我秦氏樓、秦氏有」好女、自名爲」——」

【螺杯】 鸚鵡螺に同じ、唐百官志に「左尚署令一人掌」宮中——」退齋雅聞錄に「——」詩云、尊前獨垂」淚、應」爲」未」灰」心」

【蠟丸】 蠟を丸としてその內に書狀を入れ祕密にするなり、唐書玄宗紀に「顏眞卿以」——」達」表」(蠟書)を見よ、

【蠟屐】 屐(アシダ)に蠟を塗るなり、晉書阮籍傳に「阮孚字遙集、其母卽胡婢」也(中略)初祖約性好」財、孚性好」屐同」是累、而未」判」其得失、有」詣」約、見」正料」財物、客至」屛當不」盡、餘」兩小簏」以著」背後、偃」身障」之、意未」能」平、或有」詣」阮、正見」自蠟」屐、因嘆曰、未」知一生當」著」幾量屐、神色甚閑暢、於」是勝負始分」孚は籍の次子約は豫州刺史逖の子、

【臘月】 陰曆十二月をいふ、臘祭を行ふによりて名づく、次條を見よ、

【臘祭】 臘は陰曆十二月の祭の名なり、禮記の月令に「天子孟冬臘」先祖五祀」」說文に、「冬至ノ後、第三ノ戌ノ日ニ百神ヲ——ス」風俗通に「夏ニハ清祀トイヒ、殷ニハ嘉平トイヒ、周ニハ大蜡トイヒ、漢ニハ臘トイフ、臘ハ獵ノ義ニテ、獵シテ獸ヲトリ、以テ先祖ヲ祭ル」と

あり、一解に「臘ハ合祭ノ義ナリ」と、また一解に「臘ハ接ナリ、新故交接之ヲ臘トイフ、大ニ祭リテ以テ功ヲ報ズルナリ」

【蠟書】 「ラフニテ、ツツミタルフミ」剪燈新話に「呂文煥以」——」告急於朝」註に「——ハ奏辭ヲ書シテ、之ヲ蠟丸中ニ藏シ、敵人ヲシテ搜索シテ疑ハザラシメ、且ツ水濕ヲ防グナリ」(蠟丸)を見よ、

【蠟燭】 陸田錄に「邠州花——」花——は「エラフソク」をいふ、韭燭に同じ、韓翃の寒食の詩に「日暮漢宮傳」——」輕烟散」入五侯家」蠟一に蝋に作る、

【蝋燭】 蠟燭に同じ、北魏李順傳に「義恭獻」——」十挺」

【羅浮ノ夢】 錦字箋に「隋ノ趙師雄羅浮ニ遇ル、一日天寒シ、日暮松林酒肆ノ旁舍ニ於テ美人ノ淡粧素服出デテ迎フルヲ見ル、師雄與ニ語言ス、極メテ清麗ニシテ芳香人ヲ襲フ、因リテ與ニ、酒家ヲ叩キ共ニ飮ム、師雄醉臥シ、覺ムルニ及ビ、起チテ視レバ、大梅樹下ニ在リ、翠羽嘈囋ス、相顧ミレバ月落チテ參橫ス、惆悵シテ已マズ」

【蠟梅】 一に臘梅とも書く、臘月開きその香梅に似たりとの意、灌木、叢生す、高さは丈に至り、枝葉對生す、冬時九瓣の花を開く、皆下へ向ふ、唐梅、南京梅等の和名あり、正保年中、唐土より來る、釋名に「時珍曰此物本非」梅類」因」其與」梅同」時香又相近」色似」蜜蠟」故得」此名」

蠟梅　宋　楊萬里

天向」梅梢」別出」奇、國香未」許」世人知、殷勤滴蠟」緘封却、偷被」霜風」拆一枝」

【臘八粥】 事文類聚に「南方專ラ臘月八日ヲ用ヒテ漉佛ス、皇朝東京十二月初八日、都城ノ諸大寺、浴佛會ヲナス、竝ニ七寶五味ノ粥ヲ設ク、之ヲ臘八粥トイフ」詳しくは夢華錄を見よ、

【蠟淚】 「ラフソク」の「ナガレ」をいふ、陸游の秋風亭拜寇萊公遺像詩に「人生窮達誰能料、——成」堆又一時」

【羅袂】 「ウスギヌノタモト」李邕の春賦に「玉顏景照、——風飜」

【羅鞾】 「ウスギヌ」の「タビ」曹植の洛神賦に「凌」波微步、——生」塵」

【羅網】 「アミ」禮記の月令の注に「鳥罟ヲ——ト曰フ」淮南子に「鷹隼未」擊、——不」得」張」於」谿谷、草木未」落、斤斧不」得」入」山林」

【喇嘛教】 吐蕃の始祖、棄宗弄贊以來、歷代佛法を尊信せしが、皇紀千四百七年、北印度烏萇（ウダヤーナ）の僧、巴特瑪撒巴（パトマサムバ）、吐蕃に來り、其の國俗に適する一種の密教を唱ふ、之を——の祖師となす（喇嘛トハ、無上ノ義ニシテ、高僧ヲ指ス）爾來——の傳播盛なるに從ひ、喇嘛の勢威時に國王を凌ぐ者ありければ、皇紀千五百六十年、朗達爾瑪、吐蕃王となるや、之を抑壓せんとせしに、反りて弑に遇ひ、其の後嗣は皆——を尊信せしかば、喇嘛は益〻其の勢力を增し、皇紀千九百年の頃には、喇嘛扮底達の威令、吐蕃全土に行はる、元の忽必烈吐蕃に入るに及びて、扮底達と和し、其の從子拔思巴を伴ひ還りて之を重用し、後ち蒙古の大汗となるや、拔思巴を帝師に拜し、吐蕃全土を統領せしめたり、

【羅幔】 「ウスギヌ」の「マク」羅幕に同じ、事文類聚に「范仲淹子純仁娶婦將歸、或傳婦以羅爲幔者、公聞之不悅曰、羅綺豈帷幔之物耶、吾家素清儉、安得亂吾家法、若持至吾家、當火於庭」

【嵐】 山氣の蒸し潤へるをいふ、山の「モヤ」謝靈運の詩に「夕嚥嵐氣陰」わが國にて「アラシ」と訓むは、山風の合字にて義異り、

【蘭】 說文に「——ハ香草ナリ」本草に「——ハ一名水香、俗ニ燕尾香ト呼ブ、水ニ煮テ以テ風ヲ療ス、又香水ト名ヅク、——ハ四時常ニ青ク、花黃ニ、春、芳シキ者アリ、春蘭ト爲ス、色深シ、秋芳シキ者アリ秋蘭ト爲ス、色淡シ、小檻中ニ移植シテ座右ニ置ク、花開ク時、滿室盡ク香シ、他ノ花香ト又別ナリ」易に「同心之言、其臭如——」家語に「芝蘭生於深林、不以無人而不芳、君子修德立身、不爲困窮而改節」又曰く「與善人居、如入芝蘭之室、久而不知其芳」文子に「日月欲明、浮雲蓋之、叢蘭修發、秋風敗之」漢武帝秋風辭に「蘭有秀兮菊有芳、懷佳人兮不能忘」花譜に「蘭爲幽客、古樂府に「蘭草自然香、生於大道旁」歲華紀麗に「蘭芽吐玉、柳眼挑金」梁簡文帝の答湘東王書に「暮春美景、風雲韶麗、蘭葉堪把、沂川可浴」

【澠】 爾雅に「——水波也」輪の如き「サザナミ」

【蘭竽】 （南部）を見よ、

【蘭英】 蘭の「ハナブサ」枚乘の七發に「——之酒、酌以滌口」王勃の春思賦に「新年柏葉之樽、上巳——之宴」

【蘭榷】 木蘭にて造りし「カヂ」榷は棹なり（榷音セツ）ノ時ハ弓弩ヲタメ直ス器）楚辭九歌に「桂棹兮——」

【蘭葉】 李白の鸚鵡洲詩に「煙開——香風暖、夾岸桃

花錦浪生」高啓の詩に「——春風罷、昔花幕雨知」

【蘭蘭】 蘭の「ハタケ」蘭畤に同じ、離騷に「既滋蘭之九畹兮、又樹蕙之百畝」

【卵ヲ累ヌルヨリモ危シ】 （危於累卵）枚乘の諫吳王書に「危於累卵、難於上天」（危キコト）を參看せよ、

【纜ヲ解ク】 （解纜）出帆に同じ、纜は船の「トモヅナ」なり、文選に「解纜及流潮、懷舊不能發」「トモヅナ」を解いて、潮に及び、將に去らんとす、その故人を慕ひ、「オモフガタメ」に、卽ち發する能はずとの意、

【卵ヲ見テ時夜ヲ求ム】 （見卵而求時夜）雞の卵を見て夜、時を報じて「ウタハン」ことを求むる義にて太早計に喩ふ、莊子齊物論に「長梧子曰、汝亦太早計、——見卵而求彈炙」彈とは彈丸なり、彈丸をみて未だ「ウチトメヌ」先に、鴞の「アブリモノ」を求むるをいふ、諺に「生レヌサキノムッギサダメ」といふも同意、

【卵ヲ以テ石ニ投ズ】 （以卵投石）至りて「モロキ」物を以て、至りて堅き物にあつれば、直ちに碎くるに喩ふ、荀子の議兵篇に「桀ヲ以テ堯ヲ詐ル、之ヲ譬フルニ、卵ヲ以テ石ニ投ジ、指ヲ以テ沸ヲ撓スガ若シ」とあり、撓は攪（カキマゼル）なり、指にて沸湯をかきまぜれば、必ず「タダルル」をいふ、

【爛架】 「ケンダイ」三才圖會に「陸法言ノ切韻ニ曰ク、曹公、欹架ヲ作ル、臥シテ書ヲ視ル、今ノ——ハ卽チソノ制ナリ、卽チ是レコノ器ハ魏ノ武帝ヨリ起ルナリ」倘書床・隱蔽皆同じ、

【爛柯】 圍碁に「フケル」をいふ、任昉の述異記に「晉ノ樵者王質、木ヲ伐リテ信安郡ノ石室山ニ至ル、童子數人棋シテ歌フヲ見ル、質因リテ之ヲ聽ク、童子質ニ一物ヲ與フ、棗核ノ如シ、質之ヲ含ミテ飢ヲ覺エズ、斧ヲ坐ニ置キテ觀ル、童子謂ヒテ曰ク、何ソ去ラザルト、質起チテ斧ノ柯ヲ視レバ、盡ク爛ス、既ニ歸レバ復タ時ノ人ナシ」とあり、柯は斧の柄なり、爛は「クサル」なり、年代已に久し、歸るに及びて、復た舊時の人あることなしとなり、水經注にもこの事を載す、但王質が童子の彈琴を聽きて斧柯の爛せし由をいふ、圍碁の事と關するなし、

【亂階】 階は一音キ基なり、亂の「モトキ」詩經小雅巧言篇に「無拳無勇、職爲——」階は梯なり、禍亂に至るの階梯たる義、

【蘭艾】 蘭は香草、君子に比す、艾は「ヨモギ」小人に比す、王海に「混雜——、人情恥之」任昉の文に「火炎崑

岡、神嶽崩潰ス——同盡、玉石俱砕」

【爛漫】（ランマン）　燗漫として開く「ミダレヒラク」楊萬里の詩に「——梔子渾如ノ雪」

【闌干】（ランカン）「テスリ」李白の清平調に「解釋春風無限恨、沈香亭北倚ル——ニ」温庭筠の楊柳詩に「晩來更帶龍池雨、半拂ヒニ——チ半入ル樓」欄杆とも書く、また縦横に「ミダル」貌、文選の左思の呉都賦に「集賢紛紜、器用萬端、金銀磊砢、珠琲——」また涙の多く出る貌、白居易の長恨歌に「玉容寂寞淚——」また月または星などの光の鮮かなる貌、古樂府に「月沒參横、北斗——」また韻會に「眼眶亦謂ニ之——ト」

【欄杆】（ランカン）　前條を見よ、

【欄檻】（ランカン）「テスリ」後漢書爰延傳に「昔朱雲、廷ニ折ス——チ」齊書高帝紀に「後宮器物——、以テ銅爲ニ飾者皆改用ス鐵ヲ」庾信の朱雲折檻贊に「身摧ク——テ義烈風雲ニ」

【瀾汗】（ランカン）　水の廣大なる貌、木華の海賦に「洪濤——、萬里無ニ際ヲ」

【鑾和】（ランワ）　天子の車につける鈴、鑾は衡に在り、和は軾に在り、皆黄金にて飾る、周禮大馭に「以——テ爲ス節」

鑾一に鸞に作る、詩經小雅に「和鸞雝雝」和は鸞と應和するに取りて名づく、

【鸞和】（ランワ）　禮記の明堂位の「鸞車」の疏に「鸞車車有ニ——ル——也」前條を見よ、

【嵐氣】（ランキ）　山氣の蒸し「ウルホヘル」をいふ「モヤ」淮南子に「瘴氣多ク晤、——多聲」夏侯湛の山路吟に「冒ニ晨朝ヲ」今入ル大谷ニ道遙迤ス今——清」

【蘭氣】（ランキ）　蘭の香しき氣、呂牧書軸賦に「劉向校書之時、偏ニ——、揚雄草玄之所、獨染芸香ニ張正見の對酒詩に「風移ス——ニ入、月逐ニ桂香ニ來」李德裕の憶茗芽詩に「松風颺ス鼎泛、——入ル甌輕」

【鸞旗】（ランキ）　天子の「ミハタ」鸞旌に同じ、漢書賈延之傳に「——在ル前、屬車在ル後」

【蘭菊】（ランキク）　蘭と菊と、李綱の秋色賦に「惟——之芬芳、與ニ松筠之茂密ニ、春蘭秋菊を參看せよ

【覽揆之辰】（ランキノシン）　誕生日をいふ、離騷に「帝高陽之苗裔兮、朕皇ニ考ヲ曰ニ伯庸ト」攝提貞ニ于孟陬ニ兮、惟庚寅吾以降ル、皇——余于初度ニ兮、肇錫ニ余以ニ嘉名ヲ、名ニ余曰ニ正則ト字ニ余曰ニ靈均ト」

【濫巾】（ランキン）　異の隱者にあらずして隱者を裝ふをいふ、孔稚圭の北山移文に「學ニ通東魯ニ習ニ隱南郭ニ藉ニ吹竽堂ニ——」

に「一幹一花ニシテ香餘リアル者ハ蘭、一幹數花ニシテ香足ラザル者ハ蕙」とあり、芳艸なるを以て賢人君子に喩ふ、離騷に「蘭芷變而不ニ芳兮、荃蕙化而爲ニ茅ト、何昔日之芳草兮、今直爲ニ此蕭艾ト也、豈其有ニ他故ニ兮、莫ニ好修ニ之害ニ也」とあり、蕭艾は小人佞臣に喩ふ、後漢書趙壹傳に「被ニ褐懷ニ金玉ヲ——化爲ニ芻狗ト、安卿與ニ鄭元乘ニ劉坐詩に「蕭肥——瘦、崔語鳳鸞瘠」

【覽古】（ランコ）　詩の題に用ふる語、懷古と同じ、李白の蘇臺——に「舊苑荒臺楊柳新、菱歌清唱不ニ勝ヘ春ニ、只今唯有ニ西江月ノミ曾照ニ吳王宮裡人ヲ」宋史資儉傳に「儉與ニ儀尤爲ニ才俊ニ對ス——ニ皆形ニ諷詠ニ更迭唱和ス、至ニ二百篇ニ」

【亂國】（ランコク）　「ミダル」國、荀子に「有ニ亂君ニ無ニ亂國ニ有ニ治人ニ無ニ治法ニ國と法とは死物なり、君と人とは活物たり故にいふ、

【蘭摧】（ランサイ）　蘭の「クダケタル」をいふ、以て美人又は賢人才子などの死に喩ふ、隋書列女傳に「觀ル夫今之靜女ノ、各勵ニ松筠之操ヲ、甘ニ于玉折ニ——ニ世說に「毛伯成負ニ其才氣ヲ常稱ニ寧爲ニ——玉折ニ不ニ作ニ蕭敷艾榮ニ」

【鸞鶚】（ランサク）　禽經に「紫鳳曰ニ鸞ト」一解に鳳凰の雛を——といふと、

【闌珊】（ランサン）　「スベテ」物の「ナカバ」を過ぎて「チリヂリ」「バラ

ラバラ」となりたるにいふ、李羣玉の九日詩に「絲管——歸客盡、黃昏獨自詠詩迴」また張氏紅蘭の詩に「紅事——綠事新」

【藍杉】「アヰイロ」の衣、滄海に「衫小襦也」圖畫見聞志に「晉吳道士、畫鎭墓衣——一幅、一足、眇一目、腰纏巾、首面髮髮」(藍袍)を參看せよ、

【攔槳】「ハナヤカ」に鮮かなる貌、詩經の唐風に「角枕粲兮、錦衾爛兮」

【蘭舟】木蘭にて作りし舟、許渾の重遊練湖懷舊詩に「西風渺渺月連天、同醉——未十年」——桂楫と連用す、

【蘭秀菊芳】歲華紀麗の注に「漢武帝秋風辭云、秋風起兮白雲飛、草木黃落兮雁南歸、蘭有秀兮菊有芳、懷佳人兮不能忘」

【蘭芷漸ニ漸ス】(蘭芷漸漸)蘭は香草、芷はその根なり、漸は「ヒタス」漸は尿なり、香草の尿中にひたさるるを以て、美質の人の惡習に染まるに喩ふ、荀子の勸學篇に「蘭槐之根是爲芷、其漸之漸、君子不近庶人不服」一解に漸は、米の「トギシル」なりと、從ふべし、

【亂臣十人】亂は治と訓す、周の武王に、天下を治むる臣十人あり、書經泰誓に「予有——」——こ論語泰伯篇に「武王曰、予有——」——馬融の說に十人とは周公旦・召公奭・太公望・畢公・榮公・大顚・閎夭・散宜生・南宮适と文母とをいふと、

【亂臣賊子】邦家を亂し、君父を賊ふ者をいふ、孟子滕文公下篇に「孔子成春秋而——」——懼」

【濫觴】物の原始をいふ、家語の三恕篇に「江始出于岷山、其源可以濫觴、及其至江津也、不舫舟、不避風、則不可以涉」とあるに本づく、濫觴とは、水源の微小なるをいふ、觴は酒器「サカヅキ」をいふ、虞世南の琵琶賦に「强秦創其——、盛漢盡其深致」黃山谷の詩に「岷江初——、入楚乃無低」

【蘭槳】槳は楫の屬「カイ」——は「アララギ」の「カヂ」蘇軾の赤壁賦に「桂棹兮——、擊空明兮泝流光」

【蘭麝ヲ薰ズ】十訓抄第二に見ゆ、蘭麝は、一種の薰香なり、麝の臍の「アタリ」にある香料なり、蘭に芳香あり、故に——といふ、蘭と麝との二物にはあらず、晉書石崇傳に「崇婢妾數十人、皆纔蘭麝、被羅穀」また梁武帝の游女曲に「氛氳蘭麝體芳滑、容光玉耀眉如月」と、白居易の太行路の篇にも「爲君薰衣裳、君聞蘭麝不如香」

【藍綬】「アヰイロ」の印綬なり 急就篇の注に「綬ハ受

ナリ、印環ヲ承受スル所以ナリ、亦之ヲ繫ト謂フ」官人の帶ぶる印の環を受けつなぐ組(ヒモ)を綬といふ、齊巳の送司空學士赴京詩に「——乍稱新學士、白衫初脫舊神仙」

【闌出】闌入の反對にして、妄に出す義、史記汲黯傳に「——財物于邊關」

【闌楯】「テスリ」南史梁蕭正義傳に「廣其路旁施——」

【闌一】闌に棚に作る同じ、阿彌陀經に「七重欄楯」

【欄楯】前條を見よ、

【亂鐘】「ヤタラ」に撞く「ツリガネ」馬戴客行詩に「——斷馬急、殘日半帆紅」

【亂翠】「ミドリ」色の山の「モヤ」なり、白居易の詩に「三十六峰晴雪銷——生」

【濫吹】(南郭——)を見よ、

【爛醉】大醉の義、蘇軾の詩に「應須——答雲烟」

【卵生】孵化して生るるもの、鳥類をいふ、禮記に「胎生者不殰、——者不殖」

【亂世之英雄】後漢書の許劭傳に「曹操微ナリシ時、嘗辟ヲ卑クシ禮ヲ厚クシ己ガ目ヲ爲サンコトヲ求ム、劭ソノ人ヲ鄙ム、曰ク、君ハ清平之姦賊、——ナリト、操大ニ悅ビテ去ル」目とは題目なり、品藻の義、

【蘭皐】(月旦評)を參看せよ、

【蘭橈】橈は「カヂ」博雅に「棹謂之橈」——は「アララギ」の「カヂ」梁簡文帝の採蓮曲に「桂檝——浮碧水、江花玉面兩相似、橈は「タワム」の義のときは音ダウ

【爛然】すべて物の「アザヤカ」なる貌、燦然に同じ、漢書王莽傳に「功德——」

【欄前】「テスリ」の「マヘ」李東陽の奎文閣賦に「初徙倚今——、暫徘徊今戶外」

【亂撾】「ミダレウツ」撾は鼓をうつをいふ、汪元量の句に「鞞鼓——裂巖谷」

【蘭臺】辨官の唐名、此の官の人は御前に近づくを以て、身を清くす、職原抄に「口含雞舌香、手握蘭、故此云握蘭之職也、漢官儀曰、漢尚書郎懷香握蘭、含雞舌香奏事」とあり、後漢書百官志に「——令史六百石」

また楚王の宮殿の名、

【蘭臺ノ風】文選の宋玉の風賦に「楚襄王遊于蘭臺之宮、宋玉・景差侍、有風颯然而至、楚王披襟而當之、曰快哉此風、寡人所與庶人共者邪」李賀の詩に「雨中六月——」

【亂道】(道ヲ亂ル)邪說を唱へて道理を亂るをいふ、

漢書張禹傳に「新學小生、——悞入官、無信用」また詩文の蕪穢なるをいふ、歐陽修の答連職方簡に「——思紹詩一卷、盛以見志閑中可資一噱」

【卵塔】 梵語の卒堵婆なり、文字禪に「白雲之衲、——已成」

【蘭亭】 王羲之の蘭亭集序に

永和九年、歲在癸丑、暮春之初、會于會稽山陰之蘭亭、修禊事也、群賢畢至、少長咸集、此地有崇山峻嶺、茂林修竹、又有清流激湍、映帶左右、引以爲流觴曲水、列坐其次、雖無絲竹管絃之盛、一觴一詠、亦足以暢敘幽情、是日也、天朗氣清、惠風和暢、仰觀宇宙之大、俯察品類之盛、所以游目騁懷、足以極視聽之娯、信可樂也、夫人之相與、俯仰一世、或取諸懷抱、晤言一室之内、或因寄所託、放浪形骸之外、雖趣舍萬殊、靜躁不同、當其欣於所遇、暫得於己、快然自足、曾不知老之將至、及其所之既倦、情隨事遷、感慨係之矣、向之所欣、俛仰之間、已爲陳迹、猶不能不以之興懷、況脩短隨化、終期於盡、古人云、死生亦大矣、豈不痛哉、每覽昔人興感之由、若合一契、未嘗不臨文嗟悼、不能喻之於懷、固知一死生爲虚誕、齊彭殤爲妄作、後之視今、亦猶今之視昔、悲夫、故列敘時人、錄其所述、雖世殊事異、所以興懷、其致一也、後之覽者、亦將有感於斯文」明一統志に「——在山陰縣西南二十五里」

【蘭亭元】 字は玉霖、鹿洲と號す、清の福建漳浦の人、雍正の朝薦を以て召試を得、知縣を授けらる、官に在りて政聲あり、程朱の學に通じ、詩文を善くす、兄廷珍の臺灣の賊朱一貴を討ずるや、蘭元その參謀たり、著すところ鹿洲初集二十卷あり（平臺紀略）を參看せよ、

【蘭亭ノ本】 駿臺雜話「尤物人を移す」に見ゆ、王羲之の蘭亭記の眞本をいふ、この記は晉の穆帝の永和九年の暮春の初に、會稽山陰の蘭亭に會し、禊事を修せし時の景物感懷を述べたる文なり。前の（蘭亭）を見よ、この記の眞本につきては、書言故事に「蘭亭眞本、傳徽之、徽之傳七世孫智永、智永傳弟子辨才、辨才本、貞觀中歸禁中」と見えたり、古今事類全書別集卷二に「唐太宗有大王眞蹟三千六百紙、率以一丈二尺爲軸、寶惜者蘭亭爲最、嘗附耳詔高宗曰、吾千秋萬歲後與吾蘭亭將去、遂以玉匣貯藏昭陵云云」この事書斷にも見ゆ、歐陽修の集古錄目序の沈德潛の評に「蘭亭殉葬、殊爲至情」

【欝岡】 廣雅釋鳥に「——鳳凰屬也」孝經援神經に「德至王屋、則——舞」

【閑田】 蘭の「ハタケ」張協の洛禊賦に「停觴藉渚、稅駕——」蘭畹・南畤・蘭苑・蘭圃皆同じ、

【藍靛】 「アヰゾメ」本草集解に「波斯青、黛亦是外國——花」

【藍田】 縣の名、兩漢は京兆尹に屬す、晉北魏は雍州京兆郡に屬す、今の陝西西安府——縣の西三十清里に在り、南宋南齊のは、雍州華山郡に屬す、按ずるに當に湖北襄陽府の境に在るべし、隋唐以後のは今の——縣治これなり、

また美玉の名、殽梁傳に「此晉國之寶也」の注に「玉有美惡、出處不同、周有——、楚有和氏、宋有結綠、晉有垂棘、各是國之貴物」次條を參看せよ、

【藍田之玉】 藍田山は、玉の産地なり、班固の「西都賦に「陸海珍藏、藍田美玉」

また人の父子を稱譽して、藍田生玉といふ、吳志諸葛恪傳に「恪少有才名、發藥岐嶷、辨論應機、莫與爲對、孫權見而奇之、謂其父瑾曰、藍田生玉、眞不虚也」

また容貌の美なるを藍田出玉といふ、宋書謝莊傳に「莊韶令美容儀、太祖見而異之曰、藍田出玉、豈虚也哉」

【蘭ニ秀デタルアリ】 （蘭秀）を見よ、

【闌入】 闌は妄なり、符傳（シルシ）なくして妄に入るをいふ「ハットノトコロヘイル」漢書成帝紀に「——尚方掖門」唐律に諸——大廟門及山陵兆域門者、徒三年」

【蘭若】 無諍また閑靜處などと翻す、寺または僧庵をいふ、韻會に「浮屠所居、西域謂之——」（阿——）を見よ、

【欄ニ凭ル】 （凭欄）（テスリ）に「モタレヨル」義、李中の句に「月在高樓獨——」また憑欄また倚欄に作る、同じ、

【蘭梅】 蘭と梅と、瑯嬛記に「管夫人性嗜——、下筆精妙、不讓水仙」

【爛敗】 「タダレテ、クサル」晉書に「帳下甘果——、分棄」

【藍袍之】 「アヰイロ」の内衣（ナカギ）廣韻に「袍長襦也」本草に「逸史云唐高祖時鍾馗應舉不第、觸階而死、後明皇夢有小鬼、盜玉笛、一大鬼破帽——、捉鬼啖之、上問之、對曰、臣終南山進士鍾馗也、蒙賜袍帶之葬、誓除天下虐耗之鬼、乃命吳道士圖象傳之天下」

【闌斑】 爛斑また爛漫に同じ、「マダラ」にして色の純ならざる貌、後漢書南蠻傳に「衣裳——、語言侏離」また

蘇軾の月華寺詩に「高巖夜吐金碧氣、曉得異石青爛斑」また柳宗元の詩に「食貧甘荠鹵、被褐謝爛漫」

【爛眸】「テスリ」の「ホトリ」羅隱の柳詩に「一簇青煙鎖玉樓、半垂——半垂溝」

【婪尾】最後の義なり、楊萬里の詩に「破除——暑、領略打頭消」次條を見よ、

【藍尾】最後に飲む酒杯を——酒といふ、藍は婪に通ず、貪るなり、最後は得る所ろ多く、貪婪の義あり、仇池筆記に「蘇鶚云、以酒巡匝爲婪尾、一作——」白居易の歲日家宴詩に「歲盞復推——酒、春盤先勸膠牙餳」

【婪尾春】苟藥の異名、春時百花に後れて開くに由りていふ、群碎錄に「桑維翰云、唐末文人謂苟藥爲——」——盞婪尾酒乃最後之杯、苟藥殿春、故名」

【嫻婦】懶は忘る「モノウシ」と訓す、——は「ジゴトギラヒ」の妻、石林詩話に「槐花黃舉子忙、促織鳴——」

【欄邊】「テスリ」の「ホトリ」辭能の詩に「——清酒落花多」

【鸞鳳雷ニ沖スルハ必ズ羽翼ヲ假ル】鸞鳳沖霄、必假羽翼、鸞や鳳凰が高く天に上るは羽翼の助を假る、以て、天子の尊は良臣の輔に賴るに喩ふ、唐書馬周傳に「帝嘗以飛白書賜周曰、——」——」、股肱之寄、要在忠力」

【瀾漫】「ミダルル」貌、淮南子に「夏桀之時、王閨晦而不明、道——而不修」張協七命に「——猥籍」

【爛漫】分散の貌「チラバル」王延壽魯靈光殿賦に「流離——」また莊子在宥篇に「大德不同、而性命——矣」一解に光り輝く貌、また物の滿ちて溢れんとする狀をいふ、漫を熳に作るは、六朝後に、これを謬れるなり、

【鸞鳴】孫氏瑞應圖に「鸞鳥鳳凰之佐也、鳴中五音、喜則鳴舞」また「鸞識鐘律、鐘律調則鸞舞、以應之」

【籃輿】「アジロノコシ」正字通に「竹篾一名籃、編輿、音以來謂之——」云云、篾輿に同じ、

【蘭輿】正字通に「——卽籃輿」「アジロノコシ」蘭は籃と通用す、

【鑾輿】天子の乘輿をいふ、鑾鈴を備ふ、故にいふ、鑾鈴は、鸞鳥の聲の和するに象る、班固の西都賦に「乘——備法駕」鑾輅に同じ、

【鸞輿】天子の「オノリモノ」班固の西都賦に「乘——、備法駕」一本に鸞を鑾に作る、

【卵翼】養ひ育てて長ぜしむる義、左傳哀十六年に「子西曰、勝如卵、余翼而長之」とあるに本づく、勝は公孫勝、蘇軾の乞誅竄呂惠卿狀に「——之恩」とあり、唐書玄宗紀に「姚崇曰、魏知古微時、臣卵而翼之」

【孌孌】瘠せたる貌、詩經柏舟に「棘人——兮」棘は「スミヤカ」「セマル」

【爛爛トシテ巖下ノ電ノ如シ】目の光るに喩へていふ、爛爛は「キラキラ」と光る貌、晉書の王戎傳に「戎幼穎悟、神彩秀徹、視日不眩、裴楷見目之曰、戎眼爛爛如巖下電」

【蘭陵】西漢、東漢、晉、北魏の縣名（北魏は郡名ニモアリ）今の山東兗州府嶧縣の東五十淸里、明一統志に「——城在常州府城北八十里、萬歲鎭西南」歷朝同名異地あり、詳しくは地理志韻編卷十を見よ、李白の客中行に「——美酒鬱金香、玉椀盛來琥珀光」

【蘭陵王】舞曲の名、一に羅陵王に作る、北齊の——長恭、常に假面を著けて戰ふ、嘗て周の師を金墉城下に擊つ、勇三軍に冠たり、齊人壯なりとしてこの舞を作り、以てその指麾擊刺の容に效ふ、これを——入陣の曲といふ、北齊書蘭陵王孝瓘傳を參看せよ、

【藍縷】敝衣（ヤブレゴロモ）なり、左傳宣十二年に「葦路——以啓山林」また「篳路——以處草莽」孟郊の織婦詩に「如何織紈素、自著——衣」

【襤縷】「ヤブレゴロモ」揚子方言に「南楚凡人貧、衣敝醜弊、謂之——」襤は藍に通ず、前條を見よ、

【蘭露】蘭の「ツユ」陳普弟子淸夜遊賦に「荷風——沐我以芳馨、梧月菊霜、粹我以潔白」蘇軾の茶詩に「香濃奪——、色嫩勝秋菊」

【鸞路】天子の「ミクルマ」路は輅に同じ、禮記月令に「孟春之月、天子乘——駕蒼龍」後漢書輿服志の注に「賀循曰、車必有鸞、而春獨——者、鸞鳳類、而色靑、故以名」春路一也」

【鑾輅】天子の「ミクルマ」呂覽孟春に「乘——」前條に同じ（鑾、和）を參看せよ、

【羅文】文は紋に同じ「ウスギヌノアヤ」李羣玉の詩に「沉水——海燕回」

また硯の異名、蘇軾の萬石君——傳に「中書舍人——入典書籍、助成文治、厥功茂焉云云」

【蠻觜】行列の貌、劉向九歌に「登長陵而四望兮、覽並圍之——」

【羅倫】字は彝正、明の永豐の人、成化二年の進士、翰林修撰より南京供職に遷り、尋て疾を以て職を辭し、帷を下し徒に授け、注經を以て業とすること始と十年、

卒して奉訓大夫左春坊左諭德を贈り、文毅と諡す、學者一峰先生と稱す、著すところ羅一峰集十卷あり、その靈星門記略の一篇は王守仁、稱して識見高明と爲す、簡明目錄に「倫、孤高堅忍、一生矯語ヲ作ル能ハズ、其ノ文剛勁ノ氣、楮墨ニ溢ル、詩モ亦磊砢不凡ナリ、惟古義ヲ過執シ、變通スル所ロ少ク、舊文ヲ墨引スルニ、鎔化ヲ失スル者時時之レアリ、然レドモ其ノ宏旨ヲ害セザルナリ云云」

【羅綴】「ツラネ、ノブル」次條に同じ、左思吳都賦に「難得而覩綴」柳宗元の寄許孟容書に「雖欲秉筆——、神志荒耗」とあり、——は委曲といふが如し、

【羅列】「ツラナリ、ナラブ」韓愈の答竇秀才書に「——而進」

【騾駟】騾は疲に同じ「ラバ」駟は「ウサギウマ」凡庸の人に喩へていふ、丁儀の勵志詩に「恨——之進庭、屏斯驎於溝壑」

書洛陽名園記後　李格非

洛陽處天下之中、挾二殽・函之固一、當二秦・隴之襟喉一、面二趙・魏之走集一、盖四方必爭之地也、天下當レ無レ事則已、有レ事則洛陽必先受レ兵、余故嘗曰、洛陽之盛衰、天下治亂之候也、」方二唐貞觀・開元之閒一公卿貴戚、閒二諸列第於東都一者、號二千有餘邸一、及二其亂離一、繼以二五季之酷一、其池塘竹樹、兵亟蹂蹴、廢而爲二丘墟一、高亭大榭、煙火焚燬、化而爲二灰燼一、與レ唐共滅而俱亡、無二餘處一矣、余故嘗曰、園囿之興廢、洛陽盛衰之候也、」且天下之治亂、候二於洛陽之盛衰一而知、洛陽之盛衰、候二於園囿之興廢一而得、則名園記之作、余豈徒然哉、」嗚呼、公卿大夫、方レ進二於朝一、放二乎一己之私一、自爲レ之、而忘二天下之治忽一、退欲レ享二此得乎、唐之末路是已、

リ

【利】利得なり、論語子罕篇に「子罕言レ利與レ命與レ仁」（一說ニ、士罕言レ利與レ命與レ仁ト讀ム、利ハ衆ノ求メテ惑フ所ロ、故ニ罕ニモ利ヲ言フトキハ、天命ト仁ト共ニ說キタマフ義ナリト）莊子駢拇篇に「小人以レ身殉レ利」また禮記の坊記に「先レ財而後レ禮則民利」の註に「利ハ猶ホ貪ノ如キナリ」史記平原君列傳の贊に「鄙語曰、利令智昏」抱朴子に「不爲利欲動、不爲囑託屈、鷄冠子に「臨利而後可レ以見レ信、臨財而後可レ以見レ仁」また己に都合よき義、漢書高帝紀に「徙二齊楚大族五姓關中一與二利田宅一」註に「利ハ便好ヲイフ」また廣韻に「吉也、宜也」と解す、易の賁卦に「利レ有レ攸レ往」

また利益なり、鹽鐵論に「利不レ從レ天來、不レ從レ地出」淮南子に「興レ利除レ害、伐レ亂禁レ暴則成レ功」史記商君列傳に「利不レ百不レ變レ法、功不レ十不レ易レ器」

また銳なり、堅甲利兵と連用す、漢書鼂錯傳に「兵不レ完利與レ空手同」

【驪】說文に「馬深黑レ也」「クロウマ」禮記に「仲冬之月、天子駕レ鐵——」また驪歌は離別の時に歌ふ歌なり、漢書儒林傳に「王式曰、開二之於師一、客歌二驪駒一、主人歌二客毋一レ盡歸」この注に「其辭云、驪駒在レ門、僕夫具存、驪駒在レ路、僕夫整駕」

【邐迤】斜めに連なる貌、吳質の書に「夫登二東嶽一者然後知二衆山之——一也」また連延と「ツヅク」義、牡牧の阿房宮賦に「鼎鐺玉石、金塊珠礫、棄擲——」

【菱緯ヲ恤ヘズ】（菱不レ恤緯）身を忘れて國を憂ふるをいふ、左傳昭二十四年に「鄭子大叔曰、抑人亦有レ言曰、——、而憂二宗周之隕一、爲レ將及レ焉」と、菱は寡婦（ヤモメ）なり緯は（ヌキ）經（タテ）に錯へて織物となる、寡婦が己の業とする「ヌキイト」の事を恤へずして、周室の隕亡せんことを憂ふるは、其禍の己の身に及ばんことを恐れてなり、寡婦すら此の如し、まして士大夫たるものは國事を憂へざるべからずとの意を寓せり、蒲生君平の著書、不恤緯は、この語に本づきて名づけたるなり、

【留】兩漢・晉・南宋・北魏・隋の縣名、西漢は楚國に屬し、東漢・晉は徐州彭城國に屬し、南宋以後は、彭城郡に屬す、今の江蘇省徐州府沛縣の東南、

【柳暗】 柳の茂りて暗きをいふ、歳華紀麗に「風媛而燕南雁北、日和而——花明」歐陽修の重贈劉原父詩に「新年花發見二回雁一、歸路——藏二嬌鴉一、陸游の詩に「山重水複疑無路、——花明又一村」

【劉安世】 字は器之、元の容城の人、天資穎悟人に絶す、而して心を性理の學に留む、家貧しと雖も、その義に非されば一介も取らず、隱居して敎授す、至元閒、徵されて右贊善大夫を授けられ、卒して翰林學士を贈られ、文靖と諡し、容城郡公に封じ、靜修先生と號す、

【劉禹錫】 唐の詩人なり、柳宗元と同時、進士に擢てられ、博學鴻詞の科に登り、文章を工にす、累官して集賢直學士に至り、出でて蘇州の刺史となる、政の最たるを以て金紫服を賜ひ、太子賓客に遷る、晩年文章を以て自ら適す、白居易、推して詩豪となす、舊唐書に「——字夢得、彭城人、貞元末、王叔文於二東宮一用レ事、後輩務進、多附麗之、禹錫尤爲二叔文一知奬、叔文敗、坐貶二連州刺史一、在レ道、貶二朗州司馬一、元和十年召還、以二詩語涉譏刺一、後出爲二播州刺史一、裴度爲レ言之、乃授二連州刺史一、會昌二年卒、贈二戶部尚書一」禹錫、卒する年七十一、著すところ劉賓客文集三十卷、外集十卷あり、

【柳營】 細柳營の略、將軍の陣屋をいふ、漢書の周勃傳に「文帝ノ後六年ニ匈奴大ニ邊ニ入ル、宗正劉禮ヲ以テ將軍トナシ、霸上ニ軍セシメ、祝茲侯徐厲ヲ將軍トシ、棘門ニ軍セシム、河內ノ守亞夫ヲ以テ將軍トナシ、細柳ニ軍セシム、以テ胡ニ備フ、上自ラ軍ヲ勞ヒ、霸上及ビ棘門ノ軍ニ至ル、直チニ馳セテ入ル、將ヨリ以下騎シテ出入送迎ス、已ニシテ細柳ノ軍ニ之ク、軍ノ士吏甲ヲ被リ、刃ヲ銳クシ、弓弩ヲ彀リテ滿ヲ持ス、天子ノ先驅至ル、入ルヲ得ズ、先驅ノ曰ク、天子且ニ軍門ニ至ラントス、都尉ノ曰ク、軍中ニテハ將軍ノ令ヲ聞キテ、天子ノ詔ヲ聞カズト、頃クアリテ上至ル、又入ルヲ得ズ、是ニ於テ上、使ヲシテ節ヲ持シテ將軍ニ詔シテ曰ク、吾軍ヲ勞ハント欲スト、亞夫迺チ傳言シテ壁門ヲ開カシム、壁門ノ士、車騎ニ請ヒテ曰ク、將軍約スラク、軍中ニテハ驅馳スルヲ得ズト、是ニ於テ天子迺チ轡ヲ按ジ徐行シテ中營ニ至ル、將軍亞夫揖シテ曰ク、介胄ノ士ハ拜セズト、請フ軍禮ヲ以テ見エント、天子爲メニ動キテ容ヲ改メ車ニ式シ、人ヲシテ稱謝セシム、皇帝敬ンデ將軍ヲ勞フト、禮ヲナシテ去ル、既ニ軍門ヲ出ヅ、群臣皆驚ク、文帝曰ク、嗟乎此真ノ將軍ナリ、サキノ霸上、棘門ハ、兒戲ノ如キノミ、其ノ將固ヨリ襲ヒテ虜ニス可キナリ、亞夫ニ至リテハ、得テ犯スベケンヤト、善ト稱スルモノ久之ス」とあるに本づく、亞夫は周勃の次子なり、李廣の賦に「依二檻關一以作レ鎭、拒——而開レ壁」李商隱の詩に「芙蓉王儉府、楊柳亞夫營」

【柳腰】 庾信の和二入日晚景宴昆明池一詩に「上林——細、新豐酒徑多」また美人の腰をいふ、溫庭筠の南歌子詞に「轉略如二波眼一、娉婷似二柳腰一」

【柳葉】 戰國策に「楚有二養由基一者、善射、去——百步而射レ之、百發百中」また眉に喩へていふ、劉禹錫の深春詩に「入眉新——」、馬色醉桃花」次條を見よ、

【柳葉眉】 柳の葉の如き細長き眉、梁元帝の詩に「柳葉生二眉上一、葛長庚の詩に「煙描——」楊維楨の詩に「湖上女兒——」

【柳煙】 柳にこめたる煙陸輔之の詞旨に「都負了燕約鶯期、更閑却——花雨」

【劉悛】 清風朗月ニ玄度ノナキヲ恨ム】 十訓抄第五に見ゆ、晉書列傳に「劉悛字ハ眞長、沛國相人、少清遠、家貧妥如、王導深器レ之、舊注云悛夜在二簡文座一、愀然歎曰、清風朗月、恨無二玄度一とあり、玄度は許詢の字、晉の高士なり、晉書列傳に詳かなり、

【柳陰】 「ヤナギ」の「カゲ」司空圖詩品に「碧桃滿樹、風日水濱、——路曲、流鶯比鄰」楊萬里の閒詠詩に「飛入二——多處一去、數聲只許落花知」

【劉因】 元の容城の人、天資穎悟人に絶す、而して心を性理の學に留む、家貧しと雖も、その義に非されば一介も取らず、隱居して敎授す、至元閒、徵されて右贊善大夫を授けられ、卒して翰林學士を贈られ、文靖と諡し、容城郡公に封じ、靜修先生と號す、

【劉禹錫】 唐の詩人なり、柳宗元と同時、進士に擢てられ、博學鴻詞の科に登り、文章を工にす、累官して集賢直學士に至り、出でて蘇州の刺史となる、政の最たるを以て金紫服を賜ひ、太子賓客に遷る、晩年文章を以て自ら適す、白居易、推して詩豪となす、舊唐書に「——字夢得、彭城人、貞元末、王叔文於二東宮一用レ事、後輩務進、多附麗之、禹錫尤爲二叔文一知奬、叔文敗、坐貶二連州刺史一、在レ道、貶二朗州司馬一、元和十年召還、以二詩語涉譏刺一、後出爲二播州刺史一、裴度爲レ言之、乃授二連州刺史一、會昌二年卒、贈二戶部尚書一」禹錫、卒する年七十一、著すところ劉賓客文集三十卷、外集十卷あり、

【柳營】 細柳營の略、將軍の陣屋をいふ、漢書の周勃傳に「文帝ノ後六年ニ匈奴大ニ邊ニ入ル、宗正劉禮ヲ以

【劉勰】字は司南、唐の江東の人、大中六年の進士、國子博士に官す、古詩を以て時に鳴る(早行)を參看せよ、

【流行】水の流れ去りて定位なきが如きをいふ、國語に「天殃ノ——、國家代ル有」代は更なり、また廣く「ユキワタル」義、孟子公孫丑上篇に「德之——、速ニ於置郵而傳命」また俗に物事の「ハヤル」義にも用ふ、

【劉孝綽】小字は阿士、南北の時の人、七歲能く文を作る、神童の稱あり、辭藻世の宗とする所ろとなる、時にその文を重んじ、一篇を作る毎に朝に成り暮に編し、好事者成誦し、傳寫流聞す、河朔の亭苑の柱壁之を題せざるなし、文集數十萬言時に行はる、兄弟及び群從子姪當時七十人あり、竝に能く文を屬す、近古未だこれあらざるなり、齊の武帝の時祕書丞に累遷す、

【柳下惠】淮南子の注に「展禽之家、有ニ柳樹一、身行ニ惠德一、因號ニ——一曰ニ名」展禽、一名は獲、字は季、魯に仕へて士師と爲る、卒して惠と諡す、孟子曰く「——ハ聖ノ和ナル者ナリ」

【柳下惠道ヲ直クス】論語微子篇に「——爲ニ士師一、三黜、人曰、子未ニ可一レ以去乎、曰、直ニ道而事ニ人一、焉往而不ニ三黜一、枉ニ道而事ニ人一、何必去ニ父母之邦一、士師は獄官なり、刑官を士といひ、その長を師といふ、道を直くして行ひ三たび黜けらるるを以て辱とせず、その人と爲りの和にして介なることを知るべし、

【柳下ニ鍛ス】晉書嵇康傳に「康性絕巧、而好ニ鍛、宅中有ニ一柳樹一、特茂、乃激ニ水圍ニ之、每ニ夏月一居ニ其下一以鍛」

【柳眼】「ヤナギノシンメ」元稹の生春詩に「何處生レ春早、春生——中ニ李商隱の二月二日詩に「花蕚——各無賴、紫蝶黃蜂俱有ニ情」

【隆寒】「ハゲシキ、サムサ」嚴寒に同じ、魏志王粲傳に「夫物速成則疾亡、晩就則善終、朝華之草、夕而零落、松柏之茂——不ニ衰」

【龍眼】熱地に產する果の名、正圓にして六七分、皮に微細紋あり、茶褐色なり、內空くして、正中に一核あり、枇杷の核の如し、その中の肉を——肉といひ、藥用とす、後漢書和帝紀に「舊南海獻ズ——荔枝ニ」

【劉基】字は伯溫、覆謚と號す、明の青田の人、博く經史に通ず、元の進士、後ち官を棄てて、歸隱す、明の初、召されて金陵に至り、時務十八策を陳す、是より太祖を佐けて天下を定む、慷慨にして大節あり、天下の安危を論ずるに、義氣色に形る、帝任ずるに腹心を以てし、常に老先生と呼びて名いはず、曰く、わが張子房なりと、累遷して御史中丞兼弘文館學士を授けられ、誠意伯に封ぜらる、宋濂と竝びに一代の文宗と稱せらる、著す所ろ、郁離子、覆瓿集、寫情集、犂眉公集等あり、(誠意伯文集)を參看せよ、

【流求】柳文の嶺南節度邏軍堂記に見ゆ、卽ち今の琉球なり、

【劉器之】(劉安世)を見よ、

【劉瞻至孝】劉瞻は明の浙江山陰の人、明史に「洪武中父法ニ坐シテ、雲南ニ戍ス、瞻方ニ六歲、家人ニ問フ、雲南ハ何クニアルカト、家人西南ヲ以テ之ヲ指ス、輒チ朝夕之ニ向ヒテ拜ス、年十四、翌然トシテ曰ク、雲南萬里ナリト雖モ、天下豈父ナキノ子アランヤト、身ヲ奮ヒテ往キ、六月ヲ閱シテ、其ノ地ニ抵ル、艱苦萬狀ナリ、父ニ逆旅ニ遇ヒ、相持シテ號慟ス、俄ニシテ父瘋痺ヲ患フ、瞻官ニ告ゲ、身ヲ以テ代ラントス乞フ、國法ニ、邊ヲ戍ル者ハ、必ズ年十六以上ノ嫡長男ニシテ、始メテ代ルコトヲ許スト、時ニ瞻未ダ成丁ナラズ、而シテ伯兄謙ハ先キニ京師ニ死セリ、是ニ於テ、家ニ歸リ、兄ノ子ヲ携ヘテ以テ往ク、兄ノ子モ亦弱クシテ、自立スルコト能ハズ、乃チマタ歸リテ、悉ク其ノ產ヲ鬻ギテ、兄ノ子ニ與ヘ、始メテ其ノ父ヲ奉ジテ以テ還ルコトヲ得タリ、家貧シケレドモ、謹力メテ甘旨ヲ營ミテ以テ養フ、人其ノ孝ヲ稱セリ」

【流金鑠石】暑の烈しきをいふ(金ヲ流シ)を見よ、

【流金焦土】大暑極熱をいふ、莊子の逍遙遊篇に「大旱金石流レ土山焦」

【劉向】字は子政、もとの名は、更生、楚の元王四世の孫、年十二にして父德の任を以て輦郎となる、既に冠して行修飭を以て諫議大夫となる、宣帝名儒俊材を招選するや、向之にあづかり、賦頌凡そ數十篇を獻ず、元帝位に卽きて、散騎宗正給事中となり、諡を以て官を免ぜらる、成帝の朝に復起ちて光祿大夫となる、上しばしば用ひて九卿たらしめんと欲すれども、王氏位に居る者に沮せられて遂に遷らず、列大夫に居ること三十餘年、建平元年卒す、年七十二、唐の貞觀十三年、孔子の廟に從祀す、著すところ列女傳洪範五行傳說苑新序等あり、

【劉向新序】(新序)を見よ、

【榴花】「ザクロノハナ」酉陽雜俎に「衡山祝融峰下法華寺、有ニ石——、春秋皆發、韓愈の——詩に「五月——照ニ眼明一、枝開時見ニ子初一成」

【流光】光陰の移るをいふ、李白の詩に「逝川與ニ——一、

飄忽不相待
また、月光波に「ウッリ」て流るるをいふ、前赤壁賦に「聲空明、兮泝ー」

【柳貫】字は道傳、元の浦江の人、幼にして異質あり、經史百家の書、通ぜざる所ろなし、至正間、江山敎諭より翰林待制兼國史編修に至り、虞集、揭傒斯、黄溍と名を齊うす、人號して儒林の四傑と稱す、文集四十卷、字系一卷あり、

【劉寛】温恕】後漢書に「劉寛人ト爲リ温仁恕愛ナリ、倉卒ノ閒ニ在リト雖未ダ嘗テ疾言遽色セズ、夫人試ニ寛ヲシテ恚ラシメント欲シ、將ニ朝セントシテ裝嚴巳ニ訖ハルヲ伺ヒ、婢ヲシテ肉羹ヲ捧ゲ、翻ヘシテ朝衣ヲ汚サシム、寛神色異ナラズ、乃チ言ヒテ曰ク、羹汝ガ手ヲ爛ラスコトナキカト」

【流血川ヲ成ス】(流血成川)死傷の多きをいふ、戰國策に「居四十餘萬之衆ーーー沸聲如雷」沸聲は悲號の聲なり、また書經武成に「血流漂杵」賈誼の過秦論に「追亡逐北、伏尸百萬、流血漂鹵」とあるも同じ、鹵一に櫓に作る、楯なり、

【劉閎】字は彦和、梁の東莞の人、天監中、東宮通事舍人と爲り、歩兵校尉に遷り、舍人を兼ね、後ち僧と爲り、慧地と名づく、初め文心雕龍五十篇を著し、古今の文體を論じ、定を沈約に取らんと欲するも、自ら達するに由なし、乃ち書を負ひ、約に車前に候ふ、狀貨鬻者の如し、約取りて讀み大に之を重んじ、謂へらく深く文理を得たりと、

【流言】無根の言をいふ、詩經に「流言以對」書經に「流言於國」荀子致士篇に「ーー流說」また大略篇に「流丸止於甌臾ーー止於智者」

【劉炫】字は光伯、隋の河閒景城の人、强記默識、與に儔を爲す莫し、左に方を畫き右に圓を畫き、口誦し、目數へ、耳聽く、五事同じく擧げて遺失あるなし、吏部其の能くする所ろを問ふ、炫自ら狀を爲りて曰く、周禮禮記毛詩尚書公羊左傳孝經論語の孔鄭王何服等の注、凡そ十三家、義精粗ありと雖も、並に講授するに堪へたり、周易儀禮穀梁は功を用ふる差少し、史子文集、嘉言美行、咸心に誦す、天文律曆、微妙を窮覈す、公私の文翰に至りては未だ嘗て手を假らずと、吏部竟に詳試せず、然れども在朝知名の士炫の陳する所ろ謬らずと保明す、是に於て殿內將軍に除せらる、時に牛弘奏請して天下の遺逸の書を求む、炫遂百に餘卷を僞作し、題して連山易、魯史記等と爲し、錄上して官に送り、賞を取りて去る、後、人あり之を訟ふ、赦を經て死を免る、坐して名を除かれ、家に歸り敎授を以て務と爲す、炫性矜伐、當世を輕侮す、執政の醜む所ろと爲る、大業中凍餒して死す、年六十八、論語、孝經、春秋尚書毛詩等の述議、春秋攻昧、五經正名等を著す、竝に當世に行はる、

【隆興】「サカンニ、オコル」後漢書來歙傳に「今陛下聖德ーー」風俗通に「興者、高也、饒也、言其ーー煥炳最高明也」

【柳公權】公綽の弟、唐の華原の人、博く經術に通ず、元和の初の進士、仕へて侍書學士となる、穆宗嘗て筆法を問ふ、對へて曰く「心正則筆正」と、帝その筆諫たるを悟る、文宗の朝、累遷して學士承旨となり太子太保を以て致仕せり、子の公度、攝生を善くす、

【柳骨】柳公權の書の骨法を得たる義、蘇東坡跋范文正公祭曼卿文に「曼卿之筆、顏筋ーー散落人間、實爲神物に

【劉昆】字は桓公、陳留東昏の人、易に深し、子弟を敎授すること五百餘人、王莽位を簒ふや、昆河南の負犢山中に匿る、光武の時、江陵令、弘農太守を歷て、徵されて光祿勳となる、帝召し問うて曰く、前に江陵に在りし時、風を反し火を滅し、後ちに弘農に守たりし時、虎北して河を度れりと聞く、何の德政を行ひて是を致すかと、昆曰く偶然のみと、帝歎じて曰く、長者の言なりと、命じて策に書せしむ、

【流逝】氷解けて流るるなり、楚辭に「ーー紛吾將來下」

【柳絲】柳の枝の「タヲヤカ」なるをいふ、駱賓王の詩に「梅花如雪柳如絲、年去年來不自持」楊萬里の過臨平蓮蕩詩に「想得薰風端午後、荷花世界ーー鄉」汪廣洋の詩に「自起持魚貫ーーニ」

【柳啾】耳の鳴るをいふ、楚辭九歎に「耳ーー而懽啾」

【柳氏家訓】唐の柳玭字ハ直清、公綽ノ孫、晉て家訓を作りその子弟を戒めて曰く「夫壞名災己辱先喪家、其失尤大者五、宜深誌之、其一、自求安逸、靡甘濁泊、苟利於己、不恤人言、其二、不知儒術、不悅古道、憎前經而不恥論當世而解顧、身既寡知、惡人有學、其三、勝己者厭之、佞己者悅之、唯樂戲談、莫思古道、聞人之善嫉之、聞人之惡揚之、浸漬頗僻、銷刻德義、鬻良徒在、暇養何殊、其四、崇好優遊、恥嗜鄙事、以衒杯爲高致、以勤事爲俗流、習之易荒覺已難悔、其五、急於名宦、匿近權要、一資半級、雖或得之、

飛怒羅猶鮮有存者、余見名門右族、莫不由祖先忠孝勤倹以成立之、莫不由子孫頑率奢傲、以覆墜之、成立之難、如升天、覆墜之易、如燎毛、言之痛心爾宜刻骨」

【流人】 浮浪の人をいふ、莊子に「越之——去國句月」

【留心】 (心ヲ留ム)心を或る事物に注ぐをいふ、文子徴明篇に「聖人常從事于無形之外、而不留心於已成之內」次條に同じ、

【留神】 (神ヲ留ム)心を或る事物に注ぐをいふ、留心。留意皆同じ、後漢書郎顗傳に「丁寧再三、——于此」

【流觴曲水】 荊楚歲時記に「三月三日、四民並出水濱、爲——之飲」また王羲之の蘭亭集序に「此地有崇山峻嶺茂林脩竹、又有清流激湍、映帶左右、引以爲——」とあり、晉書束晳傳に「晉ノ武帝尚書郎摯虞ニ問ヒテ曰ク、三日曲水其ノ義何ヲ指ス、答ヘテ曰ク、漢ノ章帝ノ時、平原ノ徐肇三月ノ初ヲ以テ三女ヲ生メリ、三日ニ至リテ俱ニ亡ブ、一村以テ恠トナシ、乃チ相携ヘテ水濱ニ之キテ盥洗ス、遂ニ水ニ因リテ觴ヲ泛ブ、曲水此ニ起レリト、帝イフ、若シ談ズル所ロノ如クバ便チ好事ニアラズト、尚書郎束晳曰ク、中晉昔周公洛邑ニ城キ、流水ニ因リテ酒ヲ泛ブ、故ニ逸詩ニ、羽觴隨波ト、マタ秦ノ昭王三日ヲ以テ河曲ニ置酒ス、金人アリ、水心ノ劍ヲ奉ジテ曰ク、君ヲシテ西夏ヲ制有シテ乃チ諸侯ニ霸タラシメント此ニヨリテ立テテ曲水ト爲スト帝大ニ悅ブ」

【劉焯】 字は士元、隋の新都昌亭の人なり、劉智海の家、素より墳籍多し、焯、劉炫と、之に就きて書を讀む十年出でず、衣食繼がずと雖も晏如たり、遂に儒を以て名を知らる、員外將軍に除す、後ち飛章のために謗せられ、名を除かれ民と爲る、鄉里に優游し、專ら教授著述を以て務と爲す、賈馬王鄭の傳ふる所ろの章句是非する所ろ多し、九章算術、周髀、七曜曆書十餘部、日月を推歩するの經、山海を量度するの術、その根本を窮めざるなし、稽極曆書、五經述義を著し、並に當世に行はる、劉炫、聰明博學、名、焯に亞ぐ、故に時人二劉と號す、論者以爲らく、數百年已來博學通儒、能くその右に出づるものなしと、煬帝の大業六年卒す、年六十七、

【留守】 留守居番なり、史記呂后紀に「呂后年長常——希見ル上ニ」書言故事に「唐制ニ、車駕京ニ在ラザレバ、則チ留守ヲ置ク」

【榴樹】 「ザクロ」安石榴といふ、元稹の詩に「紅艶猶存

——花」

【柳絮】 柳の「ワタ」暮春の頃、亂れ飛ぶこと雪に似たり、驢乘に「柳花下——ト、ハ迴然同ジカラズ、葉間ニ生ジ穗ヲ成シ鵝黃ヲ作ス者ハ花ナリ、花既ニ褪シ、帶ニ就キ實ヲ結ブ、其ノ實ノ熟シテ亂飛スル綿ノ如キ者ハ絮ナリ、古今吟咏往往絮ヲ以テ花ト爲シ、花ヲ以テ絮ト爲シ、素ヨリ分別ナシ、一笑ヲ發スベシ、杜工部ノ詩ニ、雀啄江頭黃柳花ノ句アリ、又生憎——白於綿ノ句アリ、則チ花ト、絮ト同ジカラザル、顯然見ル可シ、又曰ク、獰徑楊花鋪白氈ノ句アリ、又一時鹵莽ニシテ然ルニ非ルヲ得ンヤ」花と絮との別は、この說の如く差別あるは勿論なれども、廣義に解釋するときは、絮はもと花の除なれば、互に通用するも差支なかるべし、本草にも「柳花一名ハ絮」とあり(柳)を參看せよ、また雪の異名とす、下の(柳絮之才)を見よ、

【柳色】 柳の色の青青たるをいふ、王粲の江南春賦に「遠客掩——迷朱雀之航頭——、雛人莫聽烏衣之巷裏鶯聲」劉長卿の詩に「——孤城裏、鶯聲細雨中、楊萬里の行路難に「人生馬耳射東風、——桃花却長久」

【柳絮ノ才】 女子の才藻を譽めていふ、晉の謝安、嘗て諸子姪と內集す、俄にして雪下る、安曰く、白雪の紛紛たるは、何の似る所ろぞと、兄の子郎が曰く、鹽を空中に撒く差擬すべしと、道蘊曰く、未だ柳絮の風に因りて起るに若かずとあるに本づく、兄とは安の兄、謝奕なり、道蘊は奕の女にして王凝之の妻なり、

【流水韻】 樂音の美妙なるを稱す、列子に「伯牙鼓琴志在流水、鍾子期曰、善哉洋洋、兮若江河」また李白の詩に「愧非——一叩入伯牙絃」

【流水腐戸樞蠹ス】 (流水不腐戸樞蠹子華子に持養の道を說きて曰く「流水之不腐、以其運、故也、戸樞之不蠹、以其運、故也」身體を運動すれば健康を保ち得るに喩ふ、呂氏春秋には蠹を螻に作る、

【隆盛】 「サカンナル」義、漢書文三王傳に「漢家——、百姓殷富」

【流歠】 大飲なり、飲むこと流るるが如く、止まるを知らざる義、禮記の曲禮に「勿放飯、勿——」

【隆準龍顏】 史記高祖紀に「漢ノ高祖ハ人ト爲リ——ニシテ——、美鬚髯アリ、左ノ股ニ七十二ノ黑子アリ」隆は高なり、準は鼻梁なり「ハナバシラ」の「タカキ」をいふ、一解に準は頰權(ホホボネ)なりと、

【流涎】 垂涎に同じ、食欲の切なるにいふ(涎ヲ流ス)を見よ、

【流蘇】「フサ」なり、張衡の東京賦に「飛——之騒殺」の註に「——ハ五采ノ毛、之ヲ維ヘテ以テ馬ノ飾ト爲シテ之ヲ垂ル、凡ソ下ニ垂ルルヲ蘇ト爲ス、騒殺ハ垂ルル貌」

【柳宗元】字は子厚、唐の河東の人、進士に第し、博學鴻詞の科に中り、貞元十九年監察御史に拜す、王叔文の黨に坐し、永州司馬に貶せらる、元和十年柳州刺史に徙され、同十四年卒す、年四十七、宗元速進を求め、功業立ろに就るべしと謂ふ、遂に坐し廢せられて、復振はず、因りて自ら山水の閒に放にし、文名一時を蓋ふ、世に韓柳と幷稱す、著すところ柳河東集四十七卷あり、世に傳はる、

【劉宗周】字は起東、明の紹興山陰の人、學は朱子を宗とす、萬曆二十九年の進士、弘光元年、京師陷り諸臣難に殉ずと聞き、食はずして卒す、年六十八、著すところ劉氏人譜・問禮・問學等あり、

【劉宗周ロヲ愼ム】劉氏人譜に「明ノ劉宗周曰ク、古人言ヘルコトアリ、曰ク造物ノ人ヲ生ズル、其ノ耳目ヲ兩ツニシ、其ノ手足ヲ兩ツニシ、而シテ獨其ノ舌ヲ一ツニス、其ノ意人ヲシテ多ク聞キ、多ク見、多ク爲シテ、而シテ言フコトヲ少クセシメント欲スルナリ、其ノ舌ハ、又之ヲ口中ノ深奥ニ置キ、而シテ齒ヲ以テ城ノ如クシ、脣ヲ以テ郭ノ如クシ、鬚ヲ以テ戟ノ如クシテ、以テ之ヲ重圍スルハ、其ノ藏スルコトノ固クシテ、輕シク出サンコトヲ恐ルル者ノ如シ、故ニ聖賢、人ニ敎フルニ、唯言ヲ謹ムヲ以テ急トシ、之ヲ戒飭スル所以ノ者至レリ」

【流俗】「ナミナミ」の世俗の人、また世の「ナラハシ」禮記射義に「不レ從——」

【柳態】柳の容態(スガタ)なり、杜荀鶴の詩に「風前——閒時少雨後花容淡處多」柳容に同じ、

【柳堤】柳の「ツツミ」古今詩話に「梅聖俞曰、若嚴維——春水漫、花塢夕陽遲、則天容時態豈不レ如レ在レ目前ニ陳基の春日邵氏園池詩に「——水暖鴛鴦浴、花徑風酣蛺蝶飛」柳堤に同じ、

【柳塘春水漫】唐の嚴維の酬劉員外見寄と題する詩中の句、前條を見よ、詩は唐詩別裁集卷の十一に出づ、

【劉知幾】唐人、字は子玄、藏器の子、博く羣書を覽、文辭を善くす、進士に擧げられ鳳閣舍人に累遷す、國史を修し、史通內外四十九篇を著す、徐堅敎じて曰く「史氏タル者宜シク此ヲ座右ニ置クベキナリ」と、

【劉珍】後漢の南陽の人、少くして學を好む、永初中、

謁者僕射となる、詔して東觀の五經諸子傳記百家藝術を校定し、及び建武以來の名臣の傳を作らしむ、侍中に遷り宗正に拜し衞尉に轉じて卒す、著すところ誄頌連珠凡そ七篇、又釋名三十篇を撰み、以て萬物の稱號を辨ずといふ、

【流暢】「スラスラ」と通達して滯らざる義、南史に「音辭——暢は通じて鬯に作る、

【隆寵】「テアツキ寵愛をいふ、晉書傅咸傳に「虛忝——」

【流通】貨物の廣く諸方へ輸出せらるること、水の流るる如きをいふ、鹽鐵論に「大農開利、百脈萬物——、而縣官富實」

【柳堤】柳の「ツツミ」羅隱の詩に「江村柳發「堤」謝宗可の鷲梭の詩に「——暗捲絲千尺、花塢橫拋錦萬機」

【隆替】「サカンナル」と、オトロヘル」と、晉書王羲之傳に「觀改之——」

【隆冬】冬の最中をいふ、南史孝義傳に「王虛之庭中楊梅樹——三實」唐太宗御製晉書王羲之傳贊に「獻之雖有父風、殊非新巧、觀其字勢疎瘦如——枯樹」嚴冬に同じ、

【流芳】美名を後世に傳ふる義、晉書の桓溫傳に「既不能流芳後世、不足復遺臭萬載耶」一本に「不」能流芳百世「亦當遺臭萬年」に作る

【流亡】亡命に同じ、禮記の射義に見ゆ、

【流氓】流民に同じ、氓は康熙字典に「按ズルニ氓ト民ト音別義同ジ、宇亡ニ從フ者ハ民散ジ易ク、聚リ難キヲイフ」とあり、

【劉備】字は玄德、涿郡の人、その先は景帝の子、中山靖王勝の後に出づ、大志あり、語言少し、喜怒色にあらはれず、身の長ケ七尺五寸、手は垂るれば膝より下る、願みて自らその耳を見る、江東の關羽、涿郡の張飛、備と相善し、備起るに二人之に從ふ、備遂に天下を三分して帝位に登る、蜀漢の昭烈帝是なり、

【柳玭】字は直清、公綽の孫にして、仲郢の子なり、唐の僖宗の時、御史大夫となる、家訓を述べ以て子孫を戒む(柳氏家訓)を見よ

【劉勉之】字は致中、宋の崇安の人、幼より强學、日に數千言を誦す、鄕擧を以て大學に詣る、時に伊洛の學を禁ず、勉之潛に抄して日に誦す、讌定の楊時に師事し、歸りて艸堂を結び書を讀み、力耕して自ら給す、紹興の閒、召されて至る、秦檜と合はず、卽ち病と謝して歸る、學者白水先生と號す、朱松の遺囑を受け、その子熹

を誦ふること子の如くし、女を以て之に妻す、

【劉夢熊】 宋の衢州の人、淳祐の進士、累遷して右丞相に至る、頗る賈似道を庇ふ、終に左丞相に進む、後ち元に降り事を用ふ、

【劉夢得】 〔劉禹錫〕を見よ、

【流庸】 その故郷を去りて、人の爲めに庸作するをいふ、漢書昭帝紀に「民匿于食」——未還」

【粒粒皆辛苦】 唐の李紳の憫農といふ詩の句、曰く「鋤禾日當午、汗滴禾下土、誰知盤中飧、——」農夫の暑に當り、転耨して、汗禾下の土に滴る、人その粟を食ふことを知りて、農夫の辛苦此の如きを察せざるを歎ぜしなり、

【流浪】 浮浪に同じ、鮑照の詩に「——漸典經三齡」

【流落】 流離零落なり、明皇雜錄に「李白・杜甫・孟浩然、雖有文名俱——不偶」李白の與韓荊州書に「白隴西布衣——楚漢ニ江總の詩に「——今如此」杜甫の詩に「——意無極」

【流覽】 見て通る、禮白岳記に「不敢遲曲、——入二小肆中一午餐」

【劉覽】 劉は陳なり「シキツラネテ」覽るをいふ、通覽なり、淮南子原道訓に——徧照」一解に回覩なりと、

【瀏覽】 瀏は劉に同じ、前條を見よ、

【流離】 詩經邶風旄丘篇に「瑣兮尾兮、——之子」の毛傳に「瑣尾ハ少好ノ貌、——ハ鳥ノ名、少クシテ好ク、長ジテ醜シ」陸璣草木疏に「梟關西謂之——ニ宜ン斷ズ之、倫曰、甚善、我不能自禁、唯當祀鬼神ニ自誓ふた一解に——は其の所を得ずして漂散する義、

た愛るなり、前漢郊祀歌に「關——ニ
また琉璃と通ず、魏略に「大秦國出赤白黑黃青綠縹紺紅紫十種、——ニ

【琉璃】 (——)を見よ、

【瀏瀏】 風の疾く吹く貌、楚辭に「秋風——以蕭蕭」次條に同じ、

【颼颼】 前條に同じ、文選吳都賦に「風之——」

【粒粒皆辛苦】 唐の李紳の憫農といふ詩の句、曰く「鋤禾日當午、汗滴禾下土、誰知盤中飧、——」農夫の暑に當り、転耨して、汗禾下の土に滴る、人その粟を食ふことを知りて、農夫の辛苦此の如きを察せざるを歎ぜしなり、

【瀏亮】 清くして明かなる貌、文選陸機の文賦に「賦體物而——」

【柳綠】 〔柳ハ綠〕を見よ、

【劉伶ガ酒ノ美ヲ知ル】 晉の竺法蘭の「鈴木某が歌」の條に見ゆ、晉の劉伶字は伯倫、沛國の人、容貌甚だ陋、志氣曠放、酒を好むを以て名あり、酒德頌を著す、仕へて建威將軍となる、世說の任誕に「劉伶病酒渴甚、從婦求酒、婦捐酒毀器、涕泣諫曰、君飲太過、非攝生之道、必宜斷之、伶曰、甚善、我不能自禁、唯當祀鬼神ニ自誓

斷之耳、便可具酒肉、婦曰、敬聞命、供酒肉於神前、請伶祝誓、伶跪而祝曰天生劉伶、以酒爲名、一飮一斛、五斗解醒、婦人之言、愼不可聽、便引酒進肉、隗然已醉矣、

【留連】 滯留に同じ、「キツヅケ」業を廢して「ナマケアソブ」音の羊祜の表に「不爾——、必於外虞有關」淮南子本經訓に「愚夫蠢婦、皆有——之心ニ

【流連ノ樂】 遊に耽り「キツヅケ」して家に歸るを忘るるをいふ、孟子梁惠王下に「晏子曰ク、流ニ從ヒテ、下リテ反ルヲ連ト謂フ、流ニ從ヒテ上リテ反ルヲ忘ル、之ヲ流ト謂フ、流ニ從ヒテ上リテ反ルヲ忘ル、之ヲ連ト謂フ」とあり(荒亡)を見よ、

【李登丘】 (李皮)を見よ、

【李衛公】 名は靖、字は藥師、三原の人、初め隋に仕へ後、唐の高祖に從ひて功あり、太宗の時突厥を走らせ、吐谷渾を破る、代國公より衛國公に改封せらる、姿貌魁偉文武の才あり、貞觀二十三年薨ず、年七十九、景武と諡し、形を凌烟に圖す、次條を見よ、

【李衛公問對】 舊本唐李靖撰すと題す、靖衛國公に封ぜらる、此書は、靖が太宗と兵法を問答したる語を集めたるものなり、簡明目錄に「陳師道何薳郎博ハ皆以爲阮逸ノ僞託スル所ト爲ス、然レドモ其ノ攻守ヲ指畫シ、主客ヲ變易スルコト、兵家ノ微意ニ於テ時ニ得ル所ロアリ、故ニ鄭瑗ノ井觀瑣言ニ謂フ、其ノ書、僞ナリト雖モ亦學識謀略アル者ノ手ニ出ヅルナリト」

【李益】 字は君虞、隴西姑臧の人、大曆四年の登第、太子賓客に遷り、禮部尚書を以て致仕す、詩に長じ、李賀と相埒し、一篇成る毎に、樂工爭ひて之を求む、征人早行等の篇に至りては天下皆之を繪圖に施す、集二卷あり、

【梨園】 唐の明皇、俳優の技を學ばしめたる處、由りて轉じて俳優の稱とす、唐書の禮樂志に「明皇既知音律、又酷愛法曲、選坐部伎子弟三百教于——、聲有誤者、帝必覺而正之、號皇帝梨園弟子ニ馬祖常の驪山詩に「可憐繡嶺號春鳥、猶似——弟子歌」

【李延壽】 唐の相州の人、仕へて崇文館學士となる、嘗て父の志を追述し、南北史一百八十篇を作り、之を上つる、又太宗政典を撰ぶ、高宗之を觀て、咨美し、直筆もて帛を賜ひ之を褒す、

【李延年】 漢の中山の人、女弟幸を得て李夫人と號す、延年善く歌ふ、爲めに新聲を變じて協律都尉となる、

【梨園ノ弟子】 俳優をいふ(梨園)を見よ、

【利ヲ見テ義ヲ思フ】（見ル利思ヒ義）論語憲問篇に「ー（レ）ー（ー）ー見ル危授ケ命ヲ、久要不忘平生之言、亦可以爲成人矣」とあり、利益の事あるも、義理を思ひはかり、可なれば取り、不可なれば取らず、すこしも貪欲することなきをいふ、授命とは、生命を惜まずして持して人に授け與ふるをいふ、久要とは、昔より約せし事なり、

【利ヲ牟ル】（牟ル利ヲ貪リ取ル義、牟は蛑なり、苗根を食ふ蟲の名、故に貪り取るの義とす、史記平準書に「富商大賈、無所牟大利」

【利ヲ以テ交ル者ハ、利窮マレバ則チ散ズ】（以ル利交者、利窮則散（窮ヲ以テ）を見よ、

【李賀】字は長吉、昌谷に居る、七歳にして辭章を能くし苦吟す、毎旦出でて弱馬に騎し、小奚奴をして古錦嚢を背にし、後に隨はしめ、得る所ろあればその中に投ず、莫に歸れば、母嚢を探り、書するところ多きを見れば即ち怒りて曰く、是の兒、心を嘔出して乃ち已むのみと、憲宗の朝、協律郎となる、一日朝、緋衣の人赤虬に騎し、一板書を持して、上帝の白玉樓成る、君を召して記を作らしむといふを見、ついて卒す、年二十七、著すところ、李長吉歌詩四巻、外集一巻あり、

【俚歌】「ザイゴウタ」田舎人のうたふ歌、蘇軾の詩に「不惜陽春和ー（ス）ルヲ（ニ）ー（ー）ニ」

【驪歌】送別の時にうたふ歌なり、また客に別るるを驪駒を歌ふともいふ、大戴記に「驪駒ハ逸詩ナリ、客去ラントスル時、之レヲ歌フ」とあり、于志寧の詩に「賓筵未ダ半酣ニ（ー）ー不ル用催ヘ（ス）テ（ル）驪駒ヲ」を見よ、

【利害ヲ知ラズ】（不ル知ラ利害ヲ）物の利となり、害となるを判別する能はざる義、莊子齊物論に「醫缺曰、子ー（レ）ー（ー）ー、則至人固不ル知ラ利害ヲ乎」

【李晦齋】朝鮮人、名は迪、字は復古、性穎悟好みて書を讀む、年十八商山の朴貢に就いて論孟を受け、又松都に至り、牧隱、圃隱、陽村の諸先生に從ひて理學を修む、父母に事へて至孝なり、登第して官門下注書に至る、明の洪武庚午國の將に亡びんとするを知り、辭するに母の老を以てし官を棄てて隱居す、遠近の學徒四集す、學者稱して冶隱先生といふ、

【李沆】字は太初、炳の子、太宗の時の進士、右補闕知制誥となる、上嘗てその風範端凝を稱す、眞宗の時、相に拜するの日、水旱盜賊を取り奏聞して曰く、人主少年當に四方の艱難を知らしむべし、然らざれば則ち意を土木禱祠の事に留めんと、王旦、初め以て細事と爲す、後ち果して驗あり、嘗じて曰く、李文靖は眞の聖人なりと、張詠曰く、吾、人を榜得する最も多し、謹重雅望は一（ー）に如くはなしと、故に宋初大臣の體を得たる者を論ずれば、沆を首稱となす、卒して文靖と諡す、

【李翊】字は習之、隴西成紀の人、文章當時に推さる、進士の第に中り、元和の初、国子博士史館修撰となる、性峭鯁、嘗て宰相李逢吉の過を面折し、出でて廬州の刺史となる、後ち諫議大夫に拜し、卒して文と諡す、著すところ李文公集十八巻あり、唐書一百七十七巻に傳あり、

【李綱】字は伯紀、宋の邵武の人、少くして大志あり、政和の初、進士に擧げられ、徽欽高三朝に仕へ、官宰相に至り忠定と諡す、綱天下の望を負ひ、一身の用舍を以て社稷生民の安危を爲す、嘗て曰く、吾、君に事ふるの道を盡すことを知る、不可なれば則ち進退の節を全うせん、禍患は恤へざるなりと、著すところ、易傳內外論語詳說文章歌詩奏議諸集百餘巻あり、

【履行】實地に履み行ふをいふ、說苑に「始誦之文、今履而行之、是學日益明也」

【蓋降】皇女の降嫁なり、蓋は治なり、裝を治むるをいふ、書經堯典に「ー（ス）ー二女于嬀汭ニ」二女は堯の女、娥皇女英、嬀汭は舜の居る處の名、史記外戚世家に「詩始關雎ー（ハ）ー（ト）ス書美ー（ル）ー（ト）ニ」

【李行簡】字は易從、宋の同州の人、少くして苦學し、石に坐して六經を誦し、常に夜分に至る、寒暑と雖も渝らず、又木葉を聚めて書を學ぶ、筆法遒勁なり、進士に擧げられ登第し、擢てられて龍圖閣待制に至る、眞宗數〻閣に幸し易を講ず、因りて大臣の得否を訪ふ、行簡必ずその所長を稱す、人以て長者となす、仁宗位に卽き、給事中に進む、疾を以て求めて河中府の知となり、虢州に徙る、卒する年七十一、集二十巻あり、行簡端重にして妄に交らず、一介もこれを人に取らず、諸子冠帶するにあらざれば敢て見る莫し、書を聚むる萬巻多くはその自錄なり、人之を書樓といふ

【李格非】字は文叔、宋の濟南の人、進士に擧げられ、累遷して禮部員外郎となる、嘗て洛陽名園記を著して謂ふ、洛陽の盛衰は天下治亂の候なりと、その後、洛陽陷る、世以て知言となす、格非辭章に工なり、嘗て言ふ文は苟も作るべからず、誠著はれざれば工なる能はずと、

【李下ニ冠ヲ正サズ】嫌疑を避くべき戒（瓜田ニ履ヲ）を見よ、

【李漢】字は南紀、少くして韓愈に事へ、古學に通ず、詞を爲する雄蔚、人となり剛毅愈に類す、愈愛重して子を以て之に妻す、進士に第し、左拾遺に遷る、唐敬宗宮室を侈にす、舶賀沈香亭の材を獻ず、帝之を受く、漢諫めて曰く、沈香を以て亭となすは、何ぞ瑤臺瓊室に異らんやと、

【利眼】日の異名、陸機演連珠に「——臨レ雲、不レ能レ垂レ照」

【里門】說文に「閭ハ門ナリ」釋文に「閭ナリ」——は、里門に同じ、鄉里の義に用ふ、後漢書に「順與二光武一同レ——」

【離閒】兄弟族人などの閒を隔てて互に感情を害せしむる義、晉書王豹傳に「——二骨肉一」

【利器】英才に喩ふ、後漢書虞詡傳に「不レ遇二盤根錯節一、何以別二——一乎」又「スグレタル」器量をいふ、韓愈の送二董邵南序一に「慨抱二——一、鬱鬱適二茲土一」また神器の義、潘岳の詩に「虞我國眚、覬我二——一」また權力を利刀に喩へていふ、老子に「民多二——一」

【理氣】朱熹曰く「天地ノ閒、理アリ氣アリ、理ヤハ形而上ノ道ナリ、物ヲ生ズルノ本ナリ、氣ヤハ形而下ノ器ナリ、物ヲ生ズルノ具ナリ、是ヲ以テ人物ノ生ズル、必ズ此ノ理ヲ稟ケ、然ル後ニ性アリ、必ズコノ氣ヲ稟ケ、然ル後ニ形アリ」と、又いふ「太極ハ理ナリ、動靜ハ氣ナリ、氣行ハルレハ則チ理モ亦行ハル、二者常ニ相依リ、未ダ嘗テ相離レザルナリ」

【離宮】常居の宮殿を離れて、別處に置く宮殿をいふ、漢書賈山傳に「起二咸陽一而西至二雍一——三百」

【犂牛ノ喩】太平記卷十九に見ゆ、論語雍也篇に「子謂二仲弓一曰、犂牛之子、騂且角、雖レ欲レ勿レ用、山川其舍諸」と、犂は毛色の駁なるをいふ、騂は赤色なり角とは角の形正しきをいふ、周は赤を尚ぶ、故に犧牲には、赤くして角の正しきを用ふ、以て仲弓の父、行惡しくして賤しきも、子の仲弓の賢なるが如き、必ず世に用ひらるることあるに譬ふ、

【離菊】「マガキ」の下なる菊、白居易の履道新居詩に「——黃金合、窗筠綠玉稠」趙嘏の秋望詩に「紫豔半開——靜、紅衣落盡——淸」（李商隱を見よ、

【李義山】詩集三卷文集八卷、唐の李商隱撰す、その詩綺麗の中、寄託する所ろ多し、宋初の楊億、錢惟演等が西崑體の一派は、實に此に本づく、晩唐に在りて杜牧と並驅す、べし、その駢偶の文は、婉約雅飭、唐人に於

ては別格を爲せり、參考書は

○李義山詩註　三卷補註一卷、淸の朱鶴齡撰

○李義山文集箋註　十卷淸の徐樹穀箋、徐炯註、

○李義山詩文集箋註　二十六卷淸の姚培謙等撰

【李漁】字は笠翁、淸の錢塘の人、一ニ蘭溪ノ人トモイフ、金陵に流寓し、一家言を著し、能く小說を作る、傳奇十種及び芥子園畫傳等の著あり、

【鯉魚】淡水に產する魚「コヒ」孔子家語に「孔子娶二於宋之幵官氏一、一歲而生二伯魚一、魚之生也、魯昭公以二一賜一孔子一榮二君之貺一、故因以名曰レ鯉、而字二伯魚一」神農經に「鯉爲二魚王一、無二大小一、脊旁鱗皆三十有六、鱗上有二小黑點文一、有二赤白黃三種一」

【鯉魚風】陰曆九月の風なり、提要錄に見ゆ、梁簡文帝の艷歌篇に「燈生陽燧火、塵散——」また李賀の詩に「——起二芙蓉老一」

【驪駒】送別の時に歌ふ歌、漢書儒林傳の註に「逸詩云、——在レ門、僕夫具存、——在レ路、僕夫整駕」（驪歌）を見よ、

また驪は純黑色の馬「クロウマ」駒は二歲の馬、また五尺以上六尺以下の馬、

【六彝】彝は說文に「宗廟常器也」と、尊の總名なり、周禮に小宗伯掌二——一之名物一雞彝鳥彝皇彝黃彝虎彝、蜼彝」

【陸游】字は務觀、佃の孫、宋の越州山陰の人、幼にして穎敏なり、十二にして詩文を能す　范成大、蜀に帥たり、游參議官たり、文字を以て交り、禮法に拘せず、人その頽放を譏る、因りて自ら放翁と號す、孃嚴二州に知たり、皆令聞あり、累官して寶章閣待制に至り、渭南伯に封ぜらる、詩集最も多し、蜀に居ること久しく、忘るる能はざるを以て、總てその稿に署して劒南といひ、以て志を見す、嘉定三年卒す、年八十五、劒南集の外に老學庵筆記・入蜀記の著あり、

示兒

死去元知萬事空　但悲不レ見二九州同一、王師北定中原日　家祭無レ忘二告乃翁一、

これ放翁の絕筆なり、忠誠の情、字句の閒に溢る、これその名家たる所以なり、

【六逸】（竹溪——）を見よ、

【六一居士】宋の歐陽修の號、公の行狀に「公晚年自ラ——一號ス、曰ク吾ガ集古錄一千卷、藏書一萬卷、琴一張、棋一局有リ、常ニ酒一壺ヲ置キ、吾ソノ閒ニ老ス、是ヲ六一トナス」歸田錄にも見ゆ、

【六一詩話】　一卷、宋の歐陽修撰す、詩に關する說話を敍す、蓋しこの種の書の嚆矢とす、我が國にては司馬光の續詩話、劉攽の中山詩話と合せ、宋三家詩話と題し、文化十三年刊行せり、

【陸羽ノ茶經】　事文類聚續集卷の十二に「竟陵僧有於水濱得嬰兒者育爲弟子稍長自筮遇蹇之漸繇曰鴻漸于陸羽可用爲儀乃姓陸氏字鴻漸名羽有文學恥一物不盡其妙著茶術最著鴻漸嗜茶著經三篇言茶之原之法之具尤備天下益知飮茶矣」唐書隱逸傳に「陸羽一名疾字季疵」

【陸雲】　晉人字は士龍機の弟、六歲にして能く文を屬す、機と名を齊うす、淸新は機に及ばずと雖も、而かも持論は之に過ぐ、號して二陸といふ、尙書閔鴻見て之を奇として曰く、此の兒若し龍駒に非ざれば、當に是れ鳳雛なるべしと、後ち成都王穎、雲を表して淸河の內史となし、大將軍右司馬に轉ず、機と同じく害に遇ふ、

【陸賈】　楚の人、客を以て漢の高祖に從ひ天下を定む、口辨あり、左右に居り、また常に諸侯に使す、時に中國初めて定る、尉陀南越を平げ、因りて之に王たり、高祖賈をして佗に說かしめ、印を賜ひ侯に封じ臣と稱せしむ、拜して中大夫となす、賈時時前んで詩書を說く、帝慚づる色あり、賈をして秦漢興亡の故を著さしむ、賈凡そ十二篇を著す、一篇を奏する每に、帝未だ嘗て善と稱せざるなし、號して新語といふ、

【陸海】　漢書地理志に「秦ノ地、號シテ——ト稱シ、九洲ノ膏腴ト爲ス」註に「其ノ地高陸ニシテ物產饒ク、海ノ出サザル無キガ如キヲイフ」

【六行】　人の身に修むべき六種の行（六德）を見よ、

【六樂】　周代に存ぜる黃帝以下六代の樂なり、卽ち雲門（黃帝ノ樂）咸池（堯帝ノ樂）大韶（舜帝ノ樂）大夏（夏ノ禹王ノ樂）大濩（殷ノ湯王ノ樂）大武（周ノ武王ノ樂）をいふ、周禮大司徒に「以——防萬民之情而敎之和」また大司樂に「凡——者文之以五聲播之以八音」小學紺珠には咸池を大咸に作る、

【六學】　六ッの學科、國子學太學四門學律學書學算學をいふ、舊唐書職官志に「國子監有——」また六經をいふ、漢書儒林傳に「古之儒者博學——虞六藝之文——者王敎之典籍、先聖所以明天道正人倫致至治之成法也」また敍傳に「獷獷亡秦滅我聖文、漢存其業——析分」

【陸稼書】　（陸隴其）を見よ、

【廖莪之詩】　孝子親を養はんとしても、養ふことを得ざるを悲む詩なり、詩經小雅廖莪篇に「蓼蓼者莪匪莪伊蒿哀哀父母生我劬勞」また「父兮生我母兮鞠我拊我畜我長我育我顧我復我出入腹我欲報之德昊天罔極」廖廖は長大の貌、莪は美菜なり、蒿は賤草なり、宋史宗室傳に「惟吉性至孝每誦詩至廖莪篇泣泗交下宗室推其賢」

【廖莪ノ篇ヲ廢ス】　（廢廖莪之篇）晉書王裒傳に「讀詩至哀哀父母生我劬勞未嘗不三復流涕門人受業者並廢廖莪之篇」

【六合】　初學記に「天地四方之ヲ六合トイヒ、又六極トイフ」易傳序に「還在——之外近在一身之中」史記秦始皇紀に「履至尊而制——顧眞卿の贈裴將軍詩に「大君制——猛將淸九垓」次條を參看せよ、

【六合ヲ以テ家ト爲ス】　（以六合爲家）天地四方を以て家とする義、天下を一統せしにいふ、賈誼の過秦論に「——、殺函爲宮」殺は殺山、函は函谷關、

【六紀】　紀は理なり、大なるものを綱とし、小なるものを紀とす、上下を張理して人道を整齊する所以なり、白虎通に「——者謂諸父兄弟族人諸舅師長朋友也」また曰く「三綱法天地人——法六合（三綱）を參看せよ、

【六氣】　左傳の昭元年に「天有——云云——曰陰陽風雨晦明也分爲四時序爲五節」素問に「寒暑燥濕風雨爲陰陽之——」唐書裴度傳に「夫頤養之道當順適時候則——平和萬壽可保」

【六義】　毛詩の序に「詩有——焉一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌」とあり、賦比興は、辭の上にていふ、すべて見聞したることを、有りの儘に言ふは賦なり、比は譬喩を借りて言ひたきことを述べ、頌はすなり、興は起なり、わが意旨を物を以て言ひ起すなり、雅は正なり、政の有りの儘を正しくいふなり、大小の二あり、政の大事に關するを大雅といひ、小事に關するを小雅といふ、頌は宗廟祭祀に用ふ、人の德を賞贊して作るなり、風は國風なり、風雅頌は、詩の體裁につきていふ、風雅頌共にその詩によりて、賦比興あり、一解に事を歌ふを風といひ、義を布ぶるを賦といひ、類を取るを比といひ、物に感ずるを興といひ、政事を雅といひ、成功を頌といふと、

【六儀】　周禮地官に「保氏養國子以道敎之——一曰祭祀之容二曰賓客之容三曰朝廷之容四曰喪紀之容五曰軍旅之容六曰車馬之容」

また官名、蕃唐皆職官志に「——六人、掌敎九御四德、率其屬以贊后之禮儀」

【陸機】　字は士衡、太司馬抗の子、晉の吳郡の人、身の長七尺、その聲鐘の如し、少くして異才あり、文章世に冠たり、儒術を服膺し、禮にあらざれば動かず、後ち人の爲めに謀せらる、獄じて曰く、華亭の鶴唳復聞くべけんやと、遂に害せらる、時に太安二年、年四十三、著す所ろ陸士衡集十卷あり、

【六宮】　宮中の奥「ムキ」をいふ、周禮内宰に「内宰以陰禮敎——」この鄭註に「皇后正嫉一、燕寢五、是爲——」也、夫人以下分居焉」禮記の昏義にも見ゆ、白樂天の長恨歌に「回眸一笑百媚生、——粉黛無顏色」

【陸九淵】　字は子靜、宋の金谿の人、幼にして穎悟なり、乾道中の進士、嘗ていふ、東海に聖人出づるあらば、この心同じきなり、この理同じきなり、西海南北海に聖人出づるあるも、亦然らざるは莫し、千百世の上、千百世の下、聖人出づるも、この心、この理、亦同じからざるはなき也と、國子正に除し、諸生を敎ふる、家に在るの時に異るなし、鄉に還るに及び、學者輻輳し、講席を開く每に、戸外屨滿つ、自ら象山翁と號す、學者象山先生と稱す、或人九淵に書を著はさんことを勸む、曰く「六經註我、我註六經」と、また曰く「學苟知道、六經皆我註脚」と、九淵嘗て朱熹と鵝湖に會し、學ぶ所ろを論辯し、多く合はず、熹の南康に守たるに及び、九淵之を訪ふ、熹與に白鹿洞に至る、九淵爲めに君子小人義利に喩るの一章を講ず、聽く者泣下るに至る、熹以て切に學者の隱微深痼の病に中ると爲す、光宗の紹熙三年卒す、年五十四、文安と諡す、

【陸九齡】　字は子壽、九韶の弟、宋の乾道の進士、全州の敎授となる、嘗て弟九淵と學を鵝湖に講ず、詩文あり世に傳はる、沒して直祕閣を贈られ、文達と諡す、

【六畜】　牛馬・羊・豕・犬・雞の六の家畜をいふ、左傳に「爲——五性三犧以奉五味」文彦博の土牛賦に「土者五行之本、牛者——之宗」畜音チクの時は蓄に通じ、儲蓄の義とす、

【陸龜蒙】　唐書に「——字ハ魯望、長興ノ人、歌詩及ビ賦ニ工ナリ、松江ノ甫里ニ隱ル、性茶ヲ嗜ム、或ハ時ニ舟ニ上リ、圖書茶竈筆床釣具ヲ齋シテ往來ス、初メ天隨子ト稱シ、後ニ自ラ江湖散人ト號ス、マタ甫里先生ト號ス、高士ヲ以テ召サルレドモ至ラズ、顏蕘、皮日休、羅隱、吳融ト益友タリ、吳興實錄四十卷・松陵集十卷・笠澤叢書三卷を著ス」（丈夫、涙）を見よ、

【六鄉】　周の制度、王畿郊内に在り、小學紺珠に「百里内爲——、外爲六遂」周禮地官に、比（五家）閭（五比）族（四閭）黨（五族）州（五黨）鄉（五州）を——とし、鄰（五家）里（四閭）鄙（五里）縣（五鄙）遂（五縣）を六遂とせり、

【六逆】　六ッの道に逆へる行をいふ、左傳隱三年に「賤妨貴、少陵長、遠間親、新間舊、小加大、淫破義、所謂——也、君義、臣行、父慈、子孝、兄愛、弟敬所謂六順也、去順效逆、所以速禍也云云」加も亦逆ぐなり、淫は度に過ぐるの稱、

【六極】　四方上下をいふ、莊子天運篇に「天有——」六合に同じ、また窮極せる惡事をいふ、書經洪範に「一曰凶短折、二曰疾、三曰憂、四曰貧、五曰惡、六曰弱」

【六軍】　天子の軍をいふ、周禮地官に「五師爲一軍」の註に「二軍萬二千五百人、周制天子——、諸侯大國三軍、次國二軍、小國一軍」とあり、

【六花】　陣法の名、握奇經に「非八陣——所能盡也」また雪の異名、梅堯臣の十五日雪詩に「寒令奪春令、——使百花」（六出）を見よ、

【六科】　士を擧ぐる科目、小學紺珠に「——ハ秀才・明經・進士・明法・明書・明算」また「——ハ文章典麗、節操方正、法理該通、節用愛民、剛方豈弟、智勇絶倫」なほ別解あれども、略す、

【六悔ノ箴】　宋の寇萊公に六悔箴あり、曰く「官行私曲失時悔、富不儉用貧時悔、藝不少學過時悔、見事不學用時悔、醉發狂言醒時悔、安不調攝病時悔」小學紺珠に載す、調攝一に將息に作る、また資鑑には「藝不少學」を「勢不少惜」に作る、

【六卿】　六鄉（一鄉、萬二千五百家）の長をいふ、書經周官の甘誓に「大戰于甘、乃召——」

また周の官制、六官ともいふ、書經周官に「——分職、各率其屬、以倡九牧、阜成兆民」漢書百官公卿表に「夏殷無聞焉、周官則備矣、天官家宰（諸官を總ぶ）地官司徒（敎化農商を掌る）春官宗伯（祭祀典禮を掌る）夏官司馬（軍旅兵馬を掌る）秋官司寇（獄訟刑罰を掌る）冬官司空（水土を掌る）是爲——、各有徒屬職分、用於百事」

また春秋の世、宋國の官制にて——といふは右師・左師・司馬・司徒・司空、後チ武侯ノ名ヲ諱ミテ司城ト改ム）司寇なり、

【六經】　詩・書・易・春秋・禮・樂をいふ、このうち、樂經は秦火に亡びて傳はらず、韓詩外傳に「千擧萬變、其道不窮、——是也」陶潛の飮酒詩に「少年罕人事、游好

在ル——ニ陸游の冬夜讀書詩に「——萬世眼、守ル此可」以老ニ次條を見よ、

【六藝】禮・樂・射・御・書・數をいふ、史記の孔子世家に「弟子三千人、身通ル——ニ者、七十二人」

また六經の意にも用ふ、劉歆の七略に「——略」あり、顏師古の注に「——六經也」史記の伯夷傳に「夫學者載籍極博、猶考信ニ——、詩書雖缺然、虞夏之文可知也」また滑稽傳の敍論に「——於治一也、禮以節人、樂以發和、書以道事、詩以達意、易以神化、春秋以道義」前條を參看せよ、

【六經我ヲ註ス】六經はすべて我が心の理を說明したるものなりとの義、つまり天地萬物の道理は、皆我が心に備はりあるものなれば、その道理を說きたる六經は、卽ち我が心を註解したるに同じきをいふ、宋史に「六經註ル我、我註ニ六經ニ」とあり（陸九淵）を見よ、

【六鷁退飛】鷁は水鳥、退飛するは大風に遇へる爲めなり、左傳僖十六年に「春王正月戊申朔、隕ニ石於宋ニ五、是月——過ニ宋都ニ」徐晉卿の春秋經傳類對賦に「五星隕墜而化ニ石ニ、——而過ニ風ニ」

【六月霜ヲ飛バス】故事成語考に「鄒衍獄ニ下リ六月霜ヲ飛バス」史記列傳に「鄒衍、燕ノ惠王ニ事ヘ忠ヲ盡ス、左右之ヲ譖ス、王之ヲ獄ニ繫グ、天ヲ仰ギ哭ス、盛夏六月、天之ガ爲メニ霜ヲ降ス」

【六月秋】六月ⓐ土用中に於て、清涼にして秋の心地せらるるをいふ、劉克莊の詩に「籠外蒼榕六月秋」また謝宗可の詩に「自有ニ冰霜六月秋ニ」

【六言六蔽】論語陽貨篇に「子曰、由也女聞ニ——ニ乎、對曰、未也、居吾語ニ女ニ、好ニ仁不ニ好學ニ、其蔽也愚、好ニ知不ニ好學ニ、其蔽也蕩、好ニ信不ニ好學ニ、其蔽也賊、好ニ直不ニ好學ニ、其蔽也絞、好ニ勇不ニ好學ニ、其蔽也亂、好ニ剛不ニ好學ニ、其蔽也狂」とあり、夫子子路の失に由りて、六言の美德あれども、學を好まざれば、六蔽あるものぞとて、その蔽を救はんとて仰せられたるなり、蔽とは遮掩なり、物に「サヘギリ掩はるる義、蕩とは徒に、高きをきはめ、廣きをきはめて止まる所ろなきをいふ、賊とは物を傷害するをいふ、絞とは迫切にして「ユルヤカナラズ」繩を絞りたる如きをいふ、

【六工】禮記の曲禮に「天子ノ六工、曰ク土工、金工、石工、木工、獸工、草工」（六材を見よ、

【六功】六種の「デガラ」小學紺珠に「——王功曰ニ勤國功曰ニ功、民功曰ニ庸、事功曰ニ勞、治功曰ニ力、戰功曰ニ多」

【六國】春秋戰國の時に割據せし諸侯の國、齊田姓（姜姓）魏（姬姓）趙（嬴姓）をいふ、秦を加へて七國、また七雄ともいふ、——に宋（子姓）衞（姬姓）中山を加へて九國ともいふ、戰國策に「——從親以擯ニ秦ヲ」宋之問の過ニ函谷關ニ詩に「——兵同ニ合、七雄勢未ニ分」

【六穀】周禮膳夫の「凡王之饋食、用ニ——ニ」の注に「——稌黍・稷・粱・麥・菰、蒲彫胡也」稌は稻なり、

【六材】禮記の曲禮に「天子之六工、曰ク土工・金工・石工・木工・獸工・草工、典ニ制六材ニ」とあり、六材は六工の用ふる所ろの材料をいふ、

【六師】天子の「ミイクサ」六軍に同じ、書經周官に「司馬掌ニ邦政ニ、統ニ——ニ平ニ邦國ニ」宋書文帝紀に「上親ニ率ニ——ニ西征」

【六詩】周禮春官に「太師敎ニ——ニ、曰風、曰賦、曰比、曰興、曰雅、曰頌」漢書禮樂志に「國子者卿大夫之子弟也、皆學ニ誦ニ——ニ六義ニ」を見よ、

【六官】周禮に「大作ニ——ニ以通ニ上下親疎遠近ニ」一曰詞辭、二曰命辭、三曰語辭、四曰會辭、五曰禱辭、六曰誄辭、

【陸贄】字は敬輿、唐の蘇州嘉興の人、十八進士に第し、博學宏辭に中り、翰林學士と爲る、德宗の時、幸に奉天に從ふ、機務倥傯、遠近調發、奏請報下、詔書日に數百、贄初より思を經ざるが若くなるも、成るに及びて皆周盡し、事情衍繹人人曉るべし、旁吏承寫給せず、嘗て帝に白す、今盜天下に徧し、宜しく痛く自ら咎悔し、以て人心を感ずべし、臣をして筆を持して忌む所ろなからしめば、庶くは叛者心を革めんと、帝之に從ふ、故に奉天にて下す所ろの制書、武人悍卒と雖も、感動流涕せざるなし、議者おもへらく興元艱難の功は、爪牙の士の力に由ると雖も蓋贄も亦助ありと、奉天より以來、力を致すこと最も多く、事に隨ひて論諫し、懇到深切、人或は其の太だ過ぎたるを規す、對へて曰く、吾、上は天子に負かず、下は學ぶ所ろに負かず、他を恤ふるに遑あらんやと、同平章事となり、幾くもなくして譖せられ忠州別駕に貶せらる、既に荒遠に放たれ、謗を避けて書を著はさず、地瘴癘に苦む、ただ古今集驗五十篇を爲り鄉人に示すといふ、今翰苑集あり、その奏議を纂錄し、世に行はる、順宗の永貞元年卒す、年五十三（翰苑集）を見よ、

【六獸】周禮庖人の注に「——麋・鹿・熊・麑・野豕・兎」

【陸秀夫】宋の鹽城の人、景定の初の進士、李庭芝の淮南を鎭するや、辟して幕中に置く、宴集毎に尊俎の閒

に坐し、於莊終日未だ嘗て合ふことを希ふあらず、德祐の初、禮部侍郎を以て軍前に使し、和を議して就らず、二王溫州に走る、秀夫追ひて之に從ふ、益王福州に立つ、端明殿學士僉書樞密院事に進む、時に君臣海濱に播越す、朝會每に、秀夫儼然として笏を正して立つ、治朝に在るが如し、王殆す、又衛王を立つ、秀夫を以て左丞相と爲す、至元中崖山破る、秀夫妻子を驅り、先づ海中に入らしめ、尋て王を負ひ、海に赴きて死す、

【陸子靜朱熹ヲ訪フ】 宋史に「朱晦菴南康ノ守タリシトキ、春日ニ、陸子靜往キテ訪フ、晦菴與ニ舟ヲ泛ベテ樂メリ、曰ク、宇宙有リテヨリ以來、已ニ此ノ溪山アリ、還此ノ佳客有リヤ否ヤト、乃チ白鹿洞書院ノ講席ニ登リ、子靜ニ請ヒテ、君子義ニ喩ルノ章ヲ講ゼシム、聽ク者堵ノ如シ、說キ得テ痛快、座中涕ヲ流ス者アルニ至ル、晦菴深ク感動ス、時ニ天氣微冷ナレドモ、汗出デテ扇ヲ揮フ」(陸九淵)を見よ、

【六音】 (三音)を見よ、

【六親和セズシテ孝慈アリ】 (六親不和有孝慈)老子の語、曰く「大道廢有仁義、智慧出有大僞、國家昏亂有忠臣」——二六親とは、父子兄弟夫婦を

いふ、一家六親皆和らげるときは、何れを孝子と見分くべきこと無けれども、六親和せざるときに、始めて孝子を見分くべきなり、例へば舜と閔子騫とを孝子と稱するは、繼母にして六親和せざりしによるが如し、史記管晏傳の注に「正義ニ六親トハ外祖父母一、父母二、姉妹三、妻兄弟之子四、從母之子五、女之子六也、王弼云フ、父母兄弟妻子ナリ」

【六出】 雪の異名、雪に六瓣あり、故にいふ、韓詩外傳に「草木花、多ク五出、雪花獨リ一、其數爲陰也」坤雅に「雪——而成花、蓋三出而成實」張正見の詠雪詩に「九冬飄遠雪、——表豐年」

また梔子花(クチナシ)の異名、酉陽雜俎に「諸花少シ一者、惟梔子花一、陶眞白言、梔子翦花一、刻房七道、其花香芘、相傳、卽西域薝蔔花也」

【六順】 (六逆)を見よ、

【六書】 文字を造る本なり、周禮に「六書者、一曰、象形、二曰指事、三曰會意、四曰假借、五曰諧聲、六曰轉注」漢書藝文志に「周官保氏掌敎國子敎之——、謂象形象事象意象聲轉注假借造字之本也」とあり、象形は物の形象を摸して作る、日月山川等の如し、指事は象形を本として之に點畫を增刪して事物の性質

を見はす、一二三四、上下本末等の如し、會意は意義のすでに文を成せるもの二つ以上を合して意義を見はすもの、武信等の如し、假借はすでに言語音聲ありて未だそれに當る文字なき場合に其の音聲に符合する所ろの文字を借用するをいふ、竹節の節を節操の節に、竹管の管を管轄の管に假借するが如し、諧聲は、兩文を合して一字となし、一半は形質を見はし、一半は音聲を出だすもの、江河等の如し、轉注は、その義轉じて或る意味に注ぎ、遂にその音の轉化するものをいふ、音樂の樂が快樂の樂となり、尺度の度が、忖度の度となるが如し、

また六種の書體をいふ、漢書藝文志に「六體者、古文奇字篆書隸書繆篆蟲書」とあり、古文は孔子壁中の書をいふ、奇字は古文の異體なるもの、篆書は小篆をいひ、隸書は今の楷書にて、繆篆は、その文屈曲繚繞するをいふ、印章等に用ふ、蟲書は蟲鳥の形を爲す、幡信に用ふ(六體)を見よ、

【六遂】 (六鄕)を見よ、

【六性】 六ッの「イケニ(へ)」周禮天官膳夫に「膳用(ニフ)——」この註に「馬牛羊豕犬雞」

【六經】 六經に同じ、後漢書班固傳の註に「——ハ六經ナリ」北史江式傳に「文字者——之宗、王敎之始、前人所以垂(ルルニ)今、今人所以識(ラ)古」元好問の曲阜紀行詩に「天地有至文、——留聖(ムチ)謨」(3)

【陸績(リクセキ)橘ヲ懷ニス】 (陸績懷橘)吳志に「陸績字ハ公紀、康ノ子、年六歲、袁術ニ九江ニ見ユ、術橘ヲ出ス、績三枚ヲ懷ニシ、去ルトキ拜持シテ地ニ墮ス、術曰ク、陸郎、何ゾ乃チ賓客トナリテ橘ヲ懷ニスルヤト、績跪キテ答ヘテ曰ク、歸リテ母ニ遺ラント欲スト、術之ヲ奇トセリ、既ニ長ジテ博學多識星曆算數、該覽セザルナシ、吳ノ孫權ニ仕ヘ、直道ヲ以テ憚ラル、出デテ鬱林ノ太守トナリ、偏將軍ヲ加ヘラル、軍事ナリト雖モ著述ヲ廢セズ」

【陸宣公(リクセンコウ)】 宣公は唐の賢相、陸贄の諡なり(陸贄)を見よ、

【陸宣公奏議(リクセンコウソウギ)】 二十二卷、唐の陸贄撰す(モト翰苑集ト名ヅク)贄の文多く駢句を用ふ、蓋し當時の文體自ら然るなり、然れども眞意篤摯、反覆曲暢して復た排偶の迹を見ざるのみならず、經世の論、濟民の說取るべきもの少からず參考書は、

○陸宣公奏議注 十五卷、宋朝胖撰す、

【六宗(リクソウ)】 六ッの「タフトビ」「マツル」べきもの、書經舜典

に「薤于——」傳に「宗八脅ナリ、脅ビ祭ル所ロノ者、ソノ祀六アリ、四時ナリ、寒暑ナリ、日ナリ、月ナリ、星ナリ、水旱ナリヲ謂フ」一解に——を以て乾坤の六子、水火雷風山澤と爲す(孔光・劉歆等ノ說)また曰く、——は天宗三、日月星辰、地宗三、河海岱なりと(賈逵ノ說)その他異說あれども略す、

【陸遜】 字は伯言、康の從孫、始め吳の孫權に仕ふ、呂蒙、孫權に謂ひて曰く、遜は意思深長にしてその才、重を負ふに堪ふ、終に大に任ずべしと、權乃ち召して偏將軍右都督に拜し、蒙に代り陸口に屯せしむ 功を以て華亭侯に封ぜられ、進みて婁侯に封ぜらる、黃武の初、蜀漢の兵を夷陵に破り、輔國大將軍に拜し、荊州牧を領す、寵遇特に厚く、遂に相に拜す、

【六體】 六書に同じ、周禮に「五曰、六書」注に「書有——、形聲實多」

また書體の名、漢書藝文志に「——者、古文・奇字・篆書・隸書・繆篆・蟲書」小學紺珠には「——書、大篆・小篆・八分・隸書・行書・草書」とあり(六書)を見よ、

【六弢】 弢は韜に同じ、弓衣なり、又劒衣なり、漢書藝文志儒家に「周史——六篇 顏師古の注に「即今之六韜也」とあれども、この六弢は當時別に一書を成したるものにて現存の六韜とは異り、

【六韜】 舊本、周呂望撰すと題す、然れども その文義三代の作に類せず、蓋し莊子の金版六弢の語に因りて附會して僞作せしものならんか、陸德明の莊子釋文に謂ふ、太公の——は文武虎豹龍犬なりと、則ちその僞作は陳隋以前に在るなり(簡明目錄ノ說ニ據ル)

耶律楚材の送王君玉西征詩に「五車書史豈勞力、六弢三略無不通」

【六韜三略】 六韜は、太公望呂尙の兵法なりと傳ふ、文韜、武韜、龍韜、虎韜、豹韜、犬韜、すべて六十篇、韜は藏なり、韜匱(ツツミヲサム)の義なり、三略ハ上中下の三卷に分つ、略とは謀略なり、黃石公の書 張子房に圯橋に授くる者と傳ふれども、恐くは後人の僞作なるべし、

【六韜ノ十四變】 太平記十三に見ゆ、六韜の六卷に「太公曰、夫欲擊 者、當審查敵人十四變、變見則擊之、敵人必敗、武王曰 十四變可得聞乎、太公曰、敵人新集可擊、人馬未食可擊、天時不順可擊、地形未得可擊、奔走可擊、不戒可擊、疲勞可擊、將離士卒可擊、涉長路可擊、濟水可擊、不暇可擊、阻難狹路可擊、亂行可擊、心怖可擊」

【陸探微】 晉の吳の人、常に明帝の左右に在り、盡に六法あり、探微皆備具す、人物故實に妙にして、乘て山水草木を善くす、包前孕後古今獨立の稱あり、子の綏、又佛像人物を善くす、畫聖の稱あり、

【陸沉】 水なくして沈むをいふ、國の亡ぶるにいふ、莊子の則陽篇に「方ニ且、世ト違ヒテ、而シテ心之ト俱ニスルヲ屑シトセズ、是レ——スル者ナリ」とあり、賢人の隱れて俗間に潛み居るにもいふ、

【理窟】 理の聚る所をいふ、晉書張憑傳に「勃窣爲理窟」とあるに本づく、

【六朝】 三國の吳(孫氏)東晉(司馬氏)宋(劉氏)齊(蕭氏)梁(蕭氏)陳(陳氏)の六國、皆建康(建業・金陵・秣陵等ノ名アリ、明ノ南京應天府、今ノ江蘇省江寧府)に都せり、これを——といふ、宋史の張守傳に「建康自——爲帝王都、江流險闊、氣象雄偉」韋莊の臺城詩に「江雨霏霏江草齊、——如夢鳥空啼」(空草寒烟)を參看せよ、

【六典】 典は法なり、經なり、周の制、邦を治むるに六ッの法則あり、治典・教典・禮典・政典・刑典・事典をいふ、詳しくは周禮を見よ、また禮記には、大宰・大宗・大史・大祝・大士・大卜を——といふ、また唐明皇の唐——三十卷あり、唐の律令制度を記せる書なり、

【陸佃】 字は農師、宋の山陰の人、貧居苦學、月光に映じて書を讀む、進士に擢でらる、嘗て經を王安石に受く、而かも新法を以て是となさず、徽宗の時、累遷して尙書左丞となる、著すところ、埤雅・春秋後傳・禮象等の書二百餘卷あり、

【六德】 周禮地官大司徒に「以鄕三物敎萬民而賓興之」一曰、——・知・仁・聖・義・忠・和、二曰六行、孝・友・睦・婣・任・恤(睦は九族に親くするをいひ、婣は外親に親しくするをいひ、任は朋友に信なるをいひ、恤は憂貧を賑すをいふ)三曰、六藝、禮・樂・射・御・書・數、

また小學紺珠には三種の——を擧ぐ、一に曰く「——禮・仁・信・義・勇・智」また曰く「——敬老・慈幼・救疾・恤孤・賑貧・寵・任・失業」また曰く「——柔順・清潔・不妬・儉約・恭謹・勤勞」

【陸德明】 名は元朗、字を以て行はる、唐の吳縣の人、名理を善くす、學を周弘正に受く、大建中嘗て承光殿に入講す、貞觀中國子博士となり、後ち吳縣男に封ぜらる、論撰甚だ多し、太宗その書を悅び、その博辨を嘉し、布帛三百段を以て、その家に賜ふ、著すところ經

典釋文三十卷あり、

【六馬】 天子の車に駕する六頭立の馬、書經の五子之歌に「予臨兆民、凜乎若朽索之馭——」荀子勸學篇に「伯牙鼓琴而——仰秣」六龍に同じ、

【六博】 博は簺に同じ、スゴロクの類、戰國策に「臨淄甚富而實、其民無不——吹竽鼓瑟擊筑彈琴、鬬雞走犬——踢鞠者」史記蘇秦傳の注に「博ハ著ナリ、六碁ヲ行ル、故ニ云フ」陸游の衰甚書感詩に「開卷思千載閑世等」——

【六法】 六種の畫法、圖繪寶鑑に「謝恭云、畫有——一曰氣韻生動、二曰骨法用筆、三曰應物寫形、四曰隨類傳彩、五曰經營位置、六曰傳模移寫、——精論萬古不移」また曰く「顧愷之博學有才氣、丹青亦造其妙、筆法如春蠶吐絲、初見甚平易、且形似時或有失細視之——兼備」

また新論に「水火金木土穀、六府異物而皆有施、規矩權衡準繩——殊形而各有任」

【六飛】 六馬なり、疾きこと飛ぶが如きに取る、漢書袁盎傳に「陛下駕——馳不測山」

【六府】 府は天地の藏にて財用の出づる所、その屬六あり、書經大禹謨に「地平天成、——三事允治」傳に「——水火金木土穀ナリ、三事ハ正德利用厚生ナリ」また六腑に通用す(六腑)を見よ、

【六服】 侯服甸服男服采服衞服蠻服をいふ、一解に蠻服を除きて畿內を加ふ、書經周官に「——羣辟、罔不承德」顏延之の赭白馬賦に「總——以收賢」

【六米】 小學紺珠に「——黍稷稻粱菽大豆」

【六夢】 列子に「夢有六候、奚謂六候、一曰正夢、二曰愕夢、三曰思夢、四曰寤夢、五曰喜夢、六曰懼夢」と、正夢とは平居自ら夢みるなり、愕夢とは、驚きて夢みるをいふ、思夢とは思ふに因りて夢みるをいひ、寤夢とは覺むるとき、之を道きて夢みるをいひ、喜夢とは喜悅に依りて夢みるをいひ、懼夢とは恐るるに依りて夢みるをいふ、周禮春官占夢にも見ゆ、愕を噩、懼を懼に作る、上に「以日月星辰占——之吉凶」とあり、(一夢)を見よ、

【李羣玉】 字は文山、澧陽の人、詩を能くす、大中間裴休、入りて相たり、羣玉を薦む、詔して弘文閣校書郎を授く、——集あり、世に行はる、

【離羣索居】 (羣ヲ離レ)を見よ、

【陸離】 猶ほ參差の如し、衆きをいふ、楚辭に「高——金冠之岌岌兮、長——余佩之——」また光輝散亂の貌とも、美好の貌とも解す、司馬相如の上林賦に「牢落——爛漫遠遷」

【六六鱗】 鯉の異名、續博物志に「鯉魚大小竝三十六鱗」また草木子に「鯉ノ脊中ノ鱗、一道每鱗小黑點アリテ、大小皆三十六鱗ナリ」

【六律】 禮記の樂記に「天下大定、然後正——、和五聲、弦歌詩頌此之謂德音、德音之謂樂」孟子の離婁上篇に「師曠之聰、不以——、不能正五音」(十二律)を見よ、

【陸梁】 亂れ走る貌、揚雄甘泉賦に「飛蒙茸而走——」また「ホシイママ」なる貌、張衡の西京賦に「怪獸——」また史記秦紀の「略取——地、爲桂林」この正義に「嶺南之人多處山陸、其強梁故曰——」

【六呂】 沈一貫經筵賦に「訓六經、談衆史、氣諧八音、鼓中——(十二律)」を見よ、

【六龍】 天子の車に駕する六馬なり、易の乾卦に「時乘——以御天」李白の詩に「——西幸萬人歡」馬八尺以上を龍と爲す、

【六禮】 六種の主なる禮、禮記王制に見ゆ、冠・婚・喪・祭・鄉飲酒・相見をいふ、

また婚姻の六つの禮、納采・問名・納吉・納徵・請期・親迎

是れなり、儀禮士昏禮に見ゆ、秦嘉逅昏詩に「敬茲新昏——不愆」

【陸隴其】 字は稼書、平湖の人、康熙九年の進士、嘉定縣に知たり、落職せし時、民市を罷むること三日、その學一に程朱を準とし、敬に居り理を窮むるを以て本となす、著すところ四書講義困勉錄・讀禮志疑・讀朱隨筆・松陽講義・三魚堂文稿、等あり、康熙三十一年卒す、年六十三、雍正二年孔子の廟廷に從祀せらる、乾隆元年內閣學士兼禮部侍郎を追贈し、清獻と謚せらる、

【李花】 說文に「李ハ果ナリ、木ニ從ヒ、子ノ聲、杼ハ古文ノ李ナリ」西京雜記に「漢武、初メ上林苑ヲ修ス、群臣遠方ヨリ各名花ヲ獻ズ、樹ニ、朱李黃李紫李綠李青李綺李青房李車下李金枝李顏回李合枝李羌李燕李猴李アリ」と、漢武內傳に「李少君、武帝ニ謂フ、滄海ノ棗、大ヤ瓜ノ如ク、鍾山ノ李大ヤ瓶ノ如シ、臣之ヲ食フヨリ以テ、遂ニ奇光ヲ生ズ」本草に「李皮ハ水ヲ以テ煎ジテ、之ヲ含メバ、齒痛ヲ治ス」楊萬里の詩に

李花宜遠更宜繁　惟遠惟繁始足看　莫學江梅作疎影　家風各自一般般

【李華】 唐の贊皇の人、進士博學宏詞の科に中り、吏

部員外郎に至る、嘗て宰相楊國忠の姻婭横暴の狀を按劾す、是に由りて州郡蕭然たり、著すところ含元殿賦、弔古戰場文あり、姪の翰觀倶に文を以て名を知らる、

【梨花】 梨一に黎に作る、爾雅に「梨ハ山樆」魏志文帝詔に「其定御梨大如ル拳、甘若蜜、脆如菱、可以解煩釋渴」南史に「宋張敬小名樆、父劭小名梨、宋文帝戲之曰、樆何如梨、敬對曰、梨是百果之宗、樆何敢比也」淡書に「淮北棠陽河濟之閒、千樹梨、其人與千戶侯等」李白の詩に「——白雪香」蘇軾の詩に「——淡白柳深青、柳絮飛時花滿城、惆悵東欄一株雪、人生看得幾清明」陸游の詩に「粉淡香清　自一家、未容桃李占年華」馬祖常の詩に「香痕憐粉白、酒量惜輕紅(梨ニ主)(五臟ノ)」を參看せよ、

【理會】 省察點檢する義、宋の俗語、呂氏童蒙訓に「後生初學、且須——氣象、氣象好時、百事是當」

【梨花一枝春雨ニ綻ブ】 太平記卷四に見ゆ、白居易の長恨歌に「玉容寂寞淚闌干、————春帶雨」とあるに本づく、美人の愁容に比したるなり、

【六王】 六代の王をいふ詩經小大雅譜に「小雅大雅者周室居西都豐鎬之時詩也」疏に「二雅ハ正ニ文武成アリ、變ニ厲宣幽アリ、——皆居豐鎬ノ地ニ在リ、故ニ豐鎬ノ時ノ詩トイフ」また六國の王、史記秦始皇紀に「——成伏其辜、天下大定」

【李廣】 漢書の列傳に「——ハ隴西成紀ノ人ナリ、世世射法ヲ受ク、武帝ノ時、右北平太守ニ拜ス、匈奴號シテ漢ノ飛將軍トイヒテ之ヲ避ク、景帝ノ時、驍騎將軍トナル、前後匈奴ト大小七十餘戰、屢〻大功アリ、後チ匈奴ヲ擊テ迷ヒテ道ヲ失ス、長史廣ヲ責ム、廣遂ニ自殺ス、百姓之ヲ聞キテ、知ルト知ラザルト、老壯皆爲メニ泣ヲ垂ル」とあり(灞陵ノ)を參看せよ、

【李廣石ヲ以テ虎トナス】 漢書李廣傳に「李廣爲人長猿臂、其善射亦天性、廣出獵、見卧中石、以爲虎、而射之、中石沒矢、視之石也、他日射之、終不能入矣、王充論衡にも「楚雄渠子、出見寢石、以爲伏虎、將去射之、矢沒其衛、或曰養由基見寢石以爲兕也、射之矢飲羽」とあり、

【陸王之學】 宋の陸九淵(象山)と明の王守仁(陽明)との學なり、九淵は朱熹と同時の儒者なり、朱は事物に就きてその理を究む、陸は頓悟を貴ぶ、陽明良知を致すの說は、陸に本づく、故に併せて——と稱す、

【李郭ノ舟】 人品高き人の舟を同じくして乘るをいふ(舟)を見よ、

【李覯】 字は元賓、趙州贊皇の人、李華の從子なり、貞元八年の進士、校書郎を授けらる、年二十九卒す、善く文を屬し、前人時調を沿襲せず、韓愈と相上下す、李元賓文集六卷あり、唐書一百五十六卷に傳あり、

【李敬業】 勣の孫、少くして勣に從ひ征伐す、太僕少卿を經て、英國公を襲ぐ、嗣聖の初、賊に坐して柳州司馬に貶せらる、時に武后中宗を廢し、廬陵王となし、諸武命を擅にして唐の子孫を誅戮す、天下之を憤る、敬業因りて兵を起さんことを謀り、檄を州縣に傳へ、武氏の過惡を疏し廬陵王を天子の位に復せんとす、武后將を遣し擊ちて之を殺す、

【李嶠】 字は巨山、唐の贊皇の人、兒たりし時、人の雙筆を遺ると夢みる、これより文辭大に進む、張說いふ「嶠文如良金美玉、無施不可」と、一時學者法を取る、武后の時、中書令に拜せらる、

【履屐之才】 履屐は微細のものなり、よりて才の微細のことまでも行屆くをいふ、晉書謝玄傳に「雖履屐之閒、亦得其任」

【李謙庵先輩ヲ敬フ】 明史に「李謙庵、弟子ニ誨シテ曰ク、汝ガ輩必ズ當ニ先輩ヲ敬重スベシ、余諸生タリシ時、鄒南皐師ニ謁ス、時ニ座客、鄒先生ノ別號ヲ舉ゲテ語ル者アリ、師曰ク、此ノ人ハ先達ナリ、宜シク先生ノ二字ヲ加フベシ、凡ソ人言語ニ誰讓ナラザル時ハ、心志放恣ニシテ德ニ進ムコト能ハズ、汝ガ輩先輩ヲ敬重セヨ、是レ德ニ入ルノ門ナリト、時ニ余モ亦誤リテ、前ノ邑大夫ノ別號ヲ舉ゲテ語ル、師曰ク、邑大夫ハ父母ノ如シ、吾等ノ祖父、嘗テ其ノ部下ニ在リテ撫育ヲ受ケタリ、然ルニ小子等輩ノ如ク之ヲ稱ス、豈學者ノ言フベキコトナランヤト」

【李元紘】 (南山ハ移スベキモ)を見よ、

【李覯】 字は泰禮、宋の南陽の人、五經に通ず、生徒數百人あり、曾鞏・鄧潤甫皆その高弟なり、文章を爲るに自ら一家を成す、天下その名を知る、沒して潤甫その退居類葬・皇祐續藁竝に後集を上つる、

【利口】 辯口の善き者をいふ、口辯捷給なる者を稱す、論語陽貨篇に「惡——覆邦家者」また東方朔非有先生論に「巧言——、以進其身」史記に「子貢——巧辯」

【李鴻章】 字は漸甫、少荃と號す、道光三年(文政四年)安徽省合肥縣に生る、道光二十七年の進士、累遷して文華殿大學士一等肅毅伯直隸總督となり、北洋大臣

を乗ぬ、光緒二十七年薨ず、年七十九、侯爵を贈らる、

【李公擇】（李常）を見よ、

【李公麟】字は伯時、龍眠居士と號す、宋の舒州の人、熙寧中の進士（一に元祐に作る）、泗州錄事參軍となる、公學を好み博雅にして詩に長ず、多く奇字を識り、夏商以來の鐘鼎彝器皆能く考證し考古圖を爲る、丹青妙絶世に冠たり、王庭堅その風流古人に減ぜずといふ、宋史の傳に「元符三年致仕、既歸老、肆意於龍眠山嶽盤郁雅善、畫自作山莊圖、爲世寶、傳寫人物、尤精」

【理國】管子に「——之道、地德爲首」治國に同じ（鎭國）を見よ、

【離恨】離別の「ウラミ」別恨に同じ、李白の句に「——滿蒼波」

【利根鈍根】利根は利發なる性、鈍根は魯鈍なる性、法華經に「正見邪見、——」

【離坐】連り坐する義、禮記曲禮に「——離立」

【理財】たからを整へ治むる義、易經に「——正辭」

【離騷】楚の屈平の辭賦を輯めたる書名、離は遭なり、騷は憂なり、屈原憂に遭ひて作る、故に名づく（楚辭）を見よ、馮贄の雲仙雜記に「錢芸生、好讀離騷一手不暇掲、忘其肉味、半月如齋」

【履霜ノ戒】霜ふれば、やがて冰の結ぶ時來るをおもふ如く、災の來らざる前に戒めよとの義、左傳に「昭公味于——」とあり、易の坤卦に「履霜堅冰至」とあるに本づく、

【驪山ノ溫泉】三秦記に「秦ノ始皇——ニ至リ、神女ト遊ブ、而シテ其ノ旨ニ忤フ、神女且ッ之ニ唾ス、遂ニ瘡ヲ生ズ、始皇怖レテ謝ス、神女爲メニ溫泉ヲ出シ、而シテ洗除ス、後人因リテ以テ驗ト爲ス」明の楊升庵外集にいふ「東坡詩紀ニ、經ル所ロノ溫泉天下ニ七處アリ、——ヲ以テ最ト爲スト、予ガ見タル所ロハ數十處ニシテ、安寧ヲ最ト爲ス、凡ソ溫泉ノ在ル所、必ズ白礬丹砂硫黄ノ三物、之ガ根ヲ爲シ、乃チ蒸シテ暖流トナルノミ」唐書地理志に「京兆府昭應縣、本新豐、有宮在驪山下、貞觀十八年置、咸亨二年始名溫泉宮（中略）天寶六載、更溫泉曰華淸宮ニ寢宇記に「——即藍田山也」漢書地理志に「——ハ古ノ驪戎國ニ在リ」

【李四】「スモモ」は種ゑて四年に果を結ぶをいふ、坪雅に「諺曰、白頭種桃、又曰、桃三——梅子十二、言桃生三歲便放花、果早、于梅李、故首雖已白、其花子之利可待也」

【李斯】楚の上蔡の人、荀卿に從ひ、帝王の術を學び、西秦王に說く、王以て客卿と爲す、始皇帝を佐け、天下を混一し、丞相に拜す、後ち腰斬せらる（秦ノ——）を參看せよ、

【離思】離別の思、潘岳の詩に「何以銘——」

【李思訓】字は建見、唐の宗室、孝斌の子、好みて山水を畫く、筆格遒勁、草木鳥獸皆ソノ態ヲ窮ム、時ニ第一ニ推ス、金碧輝映一家ノ法ヲ爲ス、後人著色、往往之ヲ宗トス」開元四年卒す、年六十六、

【李士謙ノ陰德】隋書に「李士謙開府參軍タリ、家富ム、粟數千石ヲ出シテ以テ鄉人ニ貸ス、歲ノ歉ナルニ値フ、各欠戶ヲ召ビ、酒ヲ設ケ券ヲ焚キテ其ノ債ヲ索メズ、來春又糧種ヲ出シテ分チテ貧乏ニ給ス、全活スル所ロ甚ダ多シ、或人曰ク、子ノ陰德大ナリト、士謙曰ク、陰德ハ耳鳴ノ如シ、己自ラ之ヲ聞キテ、人知ル者ナシ、今子已ニ知ル、何ゾ陰德ト爲サント、後チ壽百歲ニ至リ、子孫皆顯官トナル」

【李習之】（李翺）を見よ、

【李紳】字は公垂、敬玄の曾孫、唐の詩人、人と爲り短小精悍最も詩に名あり、時に短李と號す、元和の初、翰林學士に擢てらる、李德裕・元稹と同子助數に補し、翰林學士に擢てらる、李德裕・元稹と時を同うす、號して三俊と爲す、官を累ねて同中書門下平章事に至る、

【里仁】論語里仁篇に「子曰、里仁爲美、擇不處仁焉得知」里は仁厚の俗あるを以て美となす、苟も擇んで仁厚の美里に居らざれば何ぞ知とするを得んやとの意、

【履新之慶】新年の「ヨロコビ」唐書の禮樂志に「——與公等同之」

【李常】字は公擇、宋の建昌の人、皇祐間、進士に擧げられ、熙寧中右正言となる、時に王安石方に法を更む、常その不便をいふ、哲宗の時、七事を上言し、御史中丞に拜す、少くして兄弟と書を廬山の白石僧舍に讀む、すべて及第し、抄する所ろの書萬卷を室に留め名づけて李氏山房といふ、蘇軾その仁者の用心たるを歎じて、その事を記す、官兵部尚書に至る、

【李商隱】字は義山、玉溪子と稱す、唐の懷州河内の人、開成二年の進士、累遷して檢校工部員外郎に遷る、詩文瑰邁奇古、尤も律詩に長ず、溫庭筠と名を齊しくし溫李と稱せらる、後世その詩派を號して西崑

體となす、大中十二年卒す、年四十六、著すところの雜纂は、わが邦人にも愛讀せらる（巍山）を參看せよ、

【李將軍】（李廣また（李思訓）を見よ、

【驪珠】千金の價する貴き「タマ」莊子列禦寇篇に「千金之珠、必在九重之淵而驪龍頷下」と、七啓に「綴以驪龍之珠」

【離朱之明】目のよく見ゆるをいふ、離婁の明ともいふ、孟子離婁上篇に「——、公輸子之巧、不以規矩、不能成方員」の註に「離婁ハ古ノ明目ノ者」とあり、莊子駢拇篇に「雖通如離朱非吾所謂明」愼子には「——、察毫末於百步之外、下水尺不能見淺深、非目不明、其勢難（視也）」とあり、三善清行が菅公を誄めし文にも「離朱之眼、不見睫上塵、仲尼之才難知匡中物」

【李嵩】宋の錢塘の人、李從訓の養子、山水人物道釋を畫くに工なり、從訓の遺意を得たり、光寧理三朝の畫院待詔たり、姪永年能くその學を世にす、

【李成】宋の呉の人、五代の末、詩酒を以て公卿の間に遊ぶ、善く山水を摹寫す、酒酣にして筆を落せば煙景萬狀、世傳へて以て寶となす、宋初、衛融、陳州に知たり、その名を聞きて之を召す、成、族を率へて往く、營丘ノ人、成ノ畫タル、造化ニ精通ス、筆盡キテ意在リ、千里ヲ咫尺ニ掃ヒ、萬趣ヲ指下ニ寫ス、峰巒重疊ノ閒、祠墅ヲ露ス、此ヲ最佳ト爲ス、林木稠疎、泉流深淺ニ至リテハ眞景ニ就クガ如シ、思清ク格老ユ、古ニ其ノ人ナシ」宣和畫譜に「——ノ畫ク所ロ、山林澤藪平遠險易、縈帶曲折、飛流危棧、斷橋絕澗、水石風雨晦明、烟雲雪霧ノ狀、一ニ皆ソノ胸中ヲ吐キ、而シテ之ヲ筆下ニ寫ス、凡ソ山水ヲ稱スル者、必ズ成ヲ以テ古今第一トナシ、名イハズシテ李營丘トイフニ至ル」

【李靖】（李衛公）を見よ、

【貍鼏】「タヌキ」と「イタチ」と、莊子に「騏驥驊騮一日而馳千里、捕鼠不如貍狌、言殊技也」

【李青蓮】（李白）を見よ、

【李昭道】唐の畫人、思訓の子、中書舍人・太原府倉曹、直集賢院に官す、山水鳥獸甚だ繁巧智慧多し、時に山水を言ふ者、稱して小李將軍と稱す、畫くところ層樓疊閣、界畫精細、寸人豆馬、鬚眉畢く具る、唐人の畫南北二宗に分つ、北宗は則ち昭道父子是れなり、

【履扇】「クツ」連文釋義に「單底爲履、重底爲舄」

【離析】分裂の義、論語季氏篇に「邦分崩——而不能守也」

酒に酣するを以て卒す、聖朝名畫評に「——字ハ咸熙ノ文類聚に「呂望年七十渭渚ニ釣ル、三日三夜、魚食フ者ナシ、農人トイフ、農人ハ古ノ先賢人ナリ、望ニ謂ヒテ曰ク、子將ニ復タ釣ラントセバ、必ズ其ノ綸ヲ細クシ、其ノ餌ヲ芳クシテ、徐徐トシテ之ヲ投ゼヨ、魚ヲシテ駭カシムルナカレト、望其ノ言ノ如クス、初メ下シテ鮒ヲ得タリ、次ニ鯉ヲ得タリ、腹ヲ割キテ書ヲ得タリ、書ノ文ニ曰ク、呂望齊ニ封ゼラルト、望當ニ貴カルベキヲ知ル」

【利他】他人に利益を與ふる義、淨土論に「應知由自利故則能利他非是不能自利而能利他也」

【李太白集】三十卷、唐の李白撰す、その詩、杜甫と竝稱して古今詩家の一大宗と爲す（李白）を參看せよ、參考書は、

○分類補註李太白集　三十卷、宋の楊齊賢註、元の蕭士贇刪補、

○李太白詩集註　三十六卷、清の王琦撰、

【李唐】唐朝をいふ、唐の高祖、姓は李、名は淵、故に——といふ、猶ほ嬴秦、劉漢などといふが如し、

また宋の畫人の名、圖繪寶鑑に「——字ハ晞古、河陽三城ノ人、徽宗ノ朝、畫院ニ入ル、高宗雅ヨリ之ヲ愛シ、晉テ長夏江寺ノ卷上ニ題シテイフ、——可比唐李思

訓ニ」ト」盡史寇傳に「年八十、山水人物ヲ善クス、筆意凡ナラズ、尤モ牛ニ工ニシテ詩ヲ能クス」

【履道】（道ヲ履ム）易の履卦九二に「——坦坦、幽人貞吉」

また地名、唐書白居易傳に「東都所居——里、云云」またその詩に「歸來——宅、下馬入柴扉」

【履端】正月元日なり、左傳の文公元年に「先王ノ時ヲ正スヤ、端ヲ始ニ履ミ、正ヲ中ニ舉グ、餘ヲ終ニ歸ス、端ヲ始ニ履メバ、序則チ愆ラズ、正ヲ中ニ舉グレバ、民則チ惑ハズ、餘ヲ終ニ歸スレバ事則チ悖ラズ」書言故事に「元日人ヲ賀スルヲ履端ノ慶トイフ」註に「端ハ始ナリ」

【履長之賀】韓鄂の歲華紀麗の註に「冬至ハ律、黄鐘ニ中リ、ソノ管、最モ長シ、故ニ——アリ」曹植の冬至獻襪履表に「亞歲迎祥、——納慶」

【立言】言論の不朽に傳はるもの、左傳襄公二十四年に見ゆ（三不朽）を見よ、

【律詩】五言——は、略して五律といふ、五言八句より成る、一二の句を起聯といひ（發句マタ發端ナドノ名モアリ）三四の句を頷聯（マタ前聯トイフ）五六の句を頸聯（マタ後聯トイフ）七八の句を尾聯（マタ落句トイフ）といふ、頷聯と頸聯とは必ず對句を用ふるを法とす、七言律詩は略して七律ともいふ、七言八句より成る、句の名目、竝に對句を用ふる法は五律に同じ、文體明辨に「按ズルニ——ハ梁陳ヨリ以下、聲律對偶ノ詩ナリ、蓋シ鄭風ニ靚閑既多、受侮不少ノ句アリ、其ノ爲對已ニ工ナリ、堯典ニ聲依永律和聲ノ語アリテヨリ其ノ律ヲ爲スコト已ニ甚シ、梁陳ノ諸家漸ク儷句多シ、古詩ノ名アリト雖モ、實ハ律體ニ墮ッ、唐興リテ沈宋ノ流、研練精切ニシテ聲勢ニ穩順ス、號シテ——ト爲ス、其ノ後、寖ク盛ナリ、古詩ノ高遠ニ及バズト雖モ、對偶ノ音律モ、亦文章ニ缺クベカラザルモノナリ」

【立身】（身ヲ立ツ）己の德を成立する義、孝經に「立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也」

【崔嵬】山の高大にして峻しき貌、司馬相如の子虛賦に「隆崇——」

【立春】二十四氣の一、陰暦正月節、陽暦二月三日頃、即ち冬の終りて春に初めてなりたる季節、史記に「——四時之卒始也」

【立錐ノ地無シ】（無立錐之地）「キリ」を立てる程の少しの地もなしとの義、史記留侯世家に「秦滅ニ六國後」、

使ス——ニ——ニ說苑の正諫篇に「舜無——有天下ニ漢書食貨志に「貧者——ニ——ニ——以也立ヲ假に作る、荀子儒效篇に「大儒無置錐之地、而王公不能與之爭名」莊子盜跖篇に「堯舜有天下、子孫無置錐之地ニ」

【立雪】（雪ニ程門ニ）を見よ、

【立部ノ袖】太平記四の卷に見ゆ、唐の代の伶人に、立部と坐部との二あり、白氏文集第三に「立部伎有等級、堂上者坐、堂下者立、堂上坐部笙歌清、堂下立部笛鼓鳴云云」

【立命】（命ヲ立ツ）天の賦する所ろを全うし、人爲を以て之を害せざるをいふ、孟子盡心上篇に「殀壽不貳、修身以俟之、所以立——也」殀壽は命の短長なり、貳は疑なり、

【栗里】晉の陶潛の住せし地名、梁昭明太子の陶靖節傳に見ゆ、また王裕の自建昌州還經行廬山下記に「過醉石觀、即陶靖節故居——也、地屬星子縣而星子在晉爲彭澤縣、觀已廢、惟有大石亙澗中、石上隱然有人臥形、相傳靖節醉、即臥此石上也」方澗の澗明詩に「青山——宅、白髮義熙年」

【律呂】律は陽に屬し、呂は陰に屬す（十二律）を見よ、

【栗烈】寒氣の「キビシキ」なり、詩經豳風に「一之日觱發、二之日——」薛暄の雪賦に「維月之孟陽兮、氣——而嚴凝」

【李廸】字は復古、宋の濮州鄄城の人、少くして柳開に從ひ古文を爲ることを學ぶ、開曰く、公は輔器なりと、進士に擧げられ第一たり、資政殿大學士同平章事に遷る、章獻太后朝に臨む時に當り、色を正して危言す、時に賢相と稱す、太子太傅を以て致仕す、卒して司空侍中を贈られ、文定と諡す、仁宗その墓碑に篆して遺直といふ、

【李迪】宋の河陽の人、宣和畫院成忠郎、紹興畫院副使となり金帶を賜ふ、花鳥竹石を善くし、頗る生意あり、山水小景を作り、亦能く火を畫けり、

また（李晦齋）を見よ、

【李適】唐の萬年の人、初めて猗氏尉に調せられ、三敎珠英を修するに與り、戶部員外郎に遷る、景龍の初、修文館學士に擢てられ、工部侍郎に至りて卒す、

【李適之】唐の京兆の人、資友を雅好し、飮酒一斗亂れず、天寶元年、牛仙客に代りて左相となる、李林甫計を以て之を去る、故に適之の詩に云ふあり「避賢初罷相、樂聖且銜盃」

【李杜】後漢の李固と杜喬と、後漢書李固杜喬傳贊に「——司職、朋心合力、致主文宣、抗情伊稷、また杜密と李膺と、同書杜密傳に「黨事既起、免歸本郡、與李膺俱坐、而名行相次、故時人亦稱——焉」また唐の李白と杜甫と、唐書杜甫傳に「少與李白齊名、時號——」

【狸奴】貓の異名、羅大經の貓詩に「陋室偏遭黠鼠欺、——雖小策勳奇」事史に「宋徽宗畜——衒魚圖」

【李侗】字は愿中、宋の南劒州劒浦の人、延平に住す、羅從彥に從學し、世故を謝絕すること四十年に餘る、飲食或は充たざるも、怡然として自得す、沙縣の鄧迪嘗てその冰壺秋月の如く瑩徹瑕なしと稱す、朱熹これに師事す、世に延平先生と號す、隆興元年卒す、年七十一、文靖と諡す、延平問答及び語錄あり、世に行はる、子の友直、信甫皆進士に擧げらる、信甫仕へて監察御史に至る、持立するを以て朝に容れられず、出でて衢州に知たり、

【李東陽】字は賓之、明の茶陵の人、四歲にして神童に擧げられ、天順八年進士に擧げられ、累遷して少師兼吏部尚書に至り、正德十一年卒す、年六十八、大師を贈り、文正と諡す、東陽慧悟夙成、文章贍逸、能く臺閣體(永樂宣德ノ際ニ流行セシ詩風)の弊を矯めて唐宋の舊に復せしむるを得たり、著すところ懷麓堂集一百卷あり、

【李杜韓柳】李白と杜甫とは詩に長じ韓愈と柳宗元とは文に長ず、この四人は共に唐代文學者の傑出せるもの、

【李杜沈溺】大家の終を全くせざるを稱していふ、杜甫未陽に客たり、一日江上を過ぎ、舟中に酒を飲めり、是の夕水の暴漲せるを以て、爲めに漂泛し去られ、其の屍の行く所を知らず、また李白は宮錦袍を著け、采石江中に遊ぶ、志素より自得して、旁に人なきが如くなりしが、沈醉して水中に入り、月を捉へんとして死せり、

【李杜文章在、光燄萬丈長】李白と杜甫との文詞のすぐれたるを稱していふ、臨漢隱居詩話に「元稹作李杜優劣論、先杜而後李、韓退之以爲不然、詩曰、——不知群兒愚、那用故謗傷、蚍蜉撼大樹、可笑不自量、爲徵之發也」と、この韓詩は調張籍と題し、唐詩別裁卷の四にも出せり、全文はそれに就きて見よ、

【利ニ放リテ行ヘバ怨多シ】(放於利而行多怨)放は依なり「ヨリソフ」義、論語里仁篇に見ゆ、孔子の語、利は人の同じく欲する所ろなれば己獨り專にすべからず、故に利欲によりて事を行ふときは人必ず害を蒙ることありて、己を怨むもの多からん、かくては己の利も長く保つこと能はざるべし、これを戒めよとの意、

【利ニ因リ便ニ乘ズ】(因利乘便)便利なる土地の形勢に從ひて國を定むる義、史記始皇紀に「——宰制天下、分裂河山」

【利ノ在ル所ロハ皆賁諸ト爲ル】(利之所在皆爲賁諸)賁諸の在るところに趨くには、如何なる人も、孟賁、專諸の如き勇士となり、毫も畏れ避くる所ろなきをいふ、韓非子に「鯨似蛇、蠶似蠋、人見蛇則驚駭、見蠋則毛起、漁者持鯨、婦人拾蠶、——」

【李梅】「スモモ」と「ウメ」と、鹽鐵論に「——多實者、來年爲之衰」

【李白】字は太白、青蓮と號す、唐の隴西成紀の人、或は曰く、山東の人、或は曰く蜀の人と、母、長庚星を夢みて生む、因りて名づく、少くして逸才あり、志氣豪放、飄然として超世の志あり、天寶の初、長安に至り、賀知章を見る、知章その文を見て歎じて曰く、子は謫仙人なりと、玄宗召し見て食を賜ひ、親ら爲めに羹を調す、詔あり翰林に供奉せしむ、白猶ほ酒徒と市に飲む、帝白を官にせんと欲す、楊貴妃之を沮止す、白自ら親近の爲めに容れられざるを知り、懇に山に還らんことを求む、帝金を賜ひて放還す、寶應元年卒す、年六十二、李太白集三十卷あり、文宗の時詔して李白の歌詩、裴旻の劒舞、張旭の草書を以て三絕と爲すといふ、左に白の傑作一首を錄す、

蜀道難

噫嘘嚱危乎高哉蜀道之難、難於上青天、蠶叢及魚鳧、開國何茫然、爾來四萬八千歲、不與秦塞通人煙、西當太白有鳥道、可以橫絕峨嵋巓、地崩山摧壯士死、然後天梯石棧相勾連、上有橫河斷海之浮雲、下有衝波逆折之回川、黃鶴之飛尚不能過、猿猱欲度愁攀緣、青泥何盤盤、百步九折縈岩巒、捫參歷井仰脅息、以手拍膺坐長嘆、問君西遊何當還、畏途巉岩不可攀、但見悲鳥號古木、雄飛雌從繞林閒、又聞子規啼夜月愁空山、蜀道之難、難於上青天、使人聽此凋朱顏、連峯去天不盈尺、枯松倒掛倚絕

壁、飛湍瀑流爭喧豗、砯崖轉石萬壑雷、其險也如此、嗟爾遠道之人、胡爲乎來哉、劍閣崢嶸而崔嵬、一夫當關萬夫莫開、所守或匪親、化爲狼與豺、朝避猛虎夕避長蛇、磨牙吮血殺人如麻、錦城雖云樂、不如早還家、蜀道之難、難於上青天、側身西望長咨嗟、

按ずるに、この詩、蜀道の險岨艱難を論じ、興を托して世道人心の危險を譏りしなり、揚雄の蜀王本紀に「蜀王ノ先、蠶叢ト名ヅク、蠶叢ノ子ニ柏濩アリ、柏濩ノ後ニ魚鳧氏アリ」と西方は正に太白星の分野に當る、烏道あり至りて狹く至りて高し、昔蜀中路の秦に入るべきなし、秦の惠王蜀に五丁力士ありと聞き、乃ち鐵を以て牛を作り、その牛、金を糞すと詐稱す、蜀侯五丁壯士をして山を開き路を作り牛を取らしむ、後ち五丁死し、蜀は秦の爲めに滅ぼさる、左太沖の蜀都賦に「緣以劒閣、鉅以石門、一夫守隘、萬夫莫當」と、成都記に「府城呼ビテ錦官城トナス、江山明麗錯雜シテ錦ノ如キヲ以テナリ」と、また李花の白きを一一といふ、蘇頲の詩に「桃紅一一花參差」高宇の春日田園雜興詞に「桃紅一一新秧綠、間著東風總不知」

【履薄】「薄冰ヲ履ム」の略、後漢書楊終傳に「君位地尊重、四海所望、豈可不臨深一一以爲至戒、潛岳西征賦に「心戰慄以驚悚、如臨深而一一」（薄冰ヲ）を見よ、

【李伯時】名は公麟、龍眠山に歸老し、龍眠居士と號す、古を好み、博學詩に長ず、宋の有名なる畫家、山水佛畫を善くし、山水は李思訓に似て佛畫は吳道子に近し、鐵網珊瑚に畫評あり（李公麟）を見よ、

【李白天ニ問フ】（李白問天）搔首集に「李白、華山ノ落雁峯ニ上リテ曰ク、此ノ山最モ高シ、呼吸ノ氣、想フニ帝座ニ通ゼン、謝朓ガ人ヲ攜カスノ句ヲ携ヘ來リ、首ヲ搔イテ青天ニ問ハザルヲ恨ムト」

【李攀龍】字は于鱗、滄溟と號す、明の歷城の人なり、九歲にして孤、家又貧なり、自ら奮ひて學を勤む、嘉靖二十三年の進士、性侃直にして依阿を屑しとせず、刑部主事となり、累遷して河南按察使に至り、隆慶四年卒す、年五十七、著すところ滄溟集あり、其の詩聲調を主とす、擬する所ろの樂府、或は古書の數字を更めて己が作となす、文は則ち詰牙戢口、讀むもの篇を終ふる能はず、攀龍かつて王世貞・謝榛・宋臣・梁有譽と詩社を結び、相和して古文辭を唱へ、五子と稱す、後ち徐中

行・吳國倫二人入るに及び、改めて七子と稱す、

【離披】「ハナレ」開く義、杜甫の詩に「露翻雞雨打、開拆漸一一」李商隱の詩に「人世本來多聚散、紅藥何事亦一一」また花、雲などの「キラキラ」と「ホノメク」をいふ、

【李百藥】字は重規、德林の子、唐の定州安平の人、七歲にして、文を能くす、奇童と號せらる、後ち文行天下の爲めに推重せらる、時に士を裂きて子弟功臣に與へんと議す、百藥封建論を上りて密に之を止む、累官して宗正卿に至る、好んで後進を奬薦し、祿賜多く親族に分與せり、貞觀二十二年卒す、年八十四、

【履冰】（薄冰ヲ）を見よ、

【嫠婦】「ヤモメ」寡婦に同じ、前赤壁賦に「泣孤舟之一一ニ」左傳昭二十四年に「嫠不恤其緯而憂宗周之危ニ」

【笠檐】「カブリガサ」の「ヒサシ」陸龜蒙の句に「一一蓑衣有殘雨ニ」

【李夫人】後唐の畫人、もと西蜀の名家なれども、世系を詳かにせず、郭崇韜、蜀を伐つを以て之を得たり、夫人崇韜の武弁なるを以て常に鬱悒して樂まず、月夕南軒に獨坐す、竹影婆娑たり、意に隨ひて窓楮の上に寫す、明日之を視るに生意具に足る、善く文を屬し書に工なり、

また明人、姓は范氏、名は道坤、東平州の人、倪迂の山水に倣ひ、清淑の氣を鍾む、亦竹石花卉を作る、北方畫を學ぶは李夫人より始る、

また（漢ノ李夫人）を見よ、

【李文靖】（李沆）を見よ、

【利病】利害に同じ、司馬光の諫院題名記に「天下之政、四海之衆、得失一一孝于一官使言之」清の顧炎武の撰せし「天下郡國一一書百二十卷」あり、

【離別】人と「ワカルル」なり、說文に「遠クワカルルヲ離トイヒ、近キヲ別トイフ」古詩に「攜酒唱離歌、逸詩に「歌一一駒、一一駒在門、僕夫具存、一一駒在路、僕夫整裝俟」（丈夫涙）を參看せよ、

【李夢陽】字は獻吉、明の慶陽の人、父に從ひ大梁に寓す、年十八、鄉試に擧げられ第一たり、弘治七年の進士、戶部主事より郎中を歷、後ち江西提學副使に遷さる、肯て往かず、嘉靖八年卒す、年五十八、著すところ空同集六十三卷あり、夢陽人となり氣高く節挺、孤立峻視少しも屈下する能はず、故に再び奇禍に罹り坎壞その身を終る、天啓中に景文と謚せらる、因にいふ李

東陽に嗣ぎて明代詩運の盛を致したる者を七子の徒とす、七子とは、一一一何・景明・徐禎卿・邊貢・康海・王九思・王廷相をいふ、この中李何二子を魁とし、徐邊二子之に次ぐ、故にまた四傑の目あり、明史に「明ノ一一一、江西ノ提學タリシトキ、中丞俞諫兵ヲ督シテ賊ヲ平グ、諸監司皆長跪シテ以テ見ユ、夢陽獨リ否ズ、諫怪ミ問ヒテ曰ク、足下ハ何ノ官ゾト、夢陽曰ク、公ハ天子ノ詔ヲ奉ジテ諸軍ヲ督シ、吾ハ天子ノ詔ヲ奉ジテ諸生ヲ督スト、語畢リテ遂ニ出ヅ、是ヲ以テ夢陽ガ名天下ニ高シ」

【李牧】　趙の將となり代の雁門に居り、匈奴に備ふ、匈奴入寇する毎に、避けて戰はざる者數歲、匈奴以て怯と爲す、趙王怒りて他人をして之に代らしむ、匈奴と戰ひ、屢〻利を失す、また牧を請ふ、牧門を杜ぢて出でず、趙王之を強ふ、牧曰く王復た臣を用ひんと欲せば、臣前の如くし、乃ち敢て命を奉ぜんと、王之を許す、牧至るや一に舊約束の如く、士日に賞賜を得て用ひられず、皆一戰を願ふ、是に於て匈奴と戰ひ大に之を破る、功を以て武安君に封ぜらる、秦王政之を患へ、反間を放ちて、牧の將に反せんと欲するを言はしむ、趙王他將をして之に代らしむ、牧命を受けず、王之を殺す、秦遂に王翦をして趙を伐たしめ、大に之を破り、邯鄲を陷れ、趙王遷を虜にす、

【李北海】　（李邕）を見よ、

【李渤】　字は濬之、唐の洛陽の人、志を學に刻し、廬山に隱る、久之にして少室に徙る、元和の初、李巽・韋況・韋を交へて之を薦む、詔して右拾遺を以て召す、謝して拜せず、洛陽令韓愈書を遺りて曰く「朝廷士引頸東望、若景星鳳凰爭先覩爲快」と、後ち著作郎を以て召さる、渤孤操自ら持し、苟も合はず、屢〻直言するを以て斥けらるるも、その節を變ぜず、人之を尚ぶ、穆政の惡む所となり、病を謝して東都に歸る、宋にまた同名の人あり、樂昌の人、嘉祐の初、進士となる、

【李密】　字は令伯、晉の犍爲武陽の人、父早く亡す、母更めて人に適く、祖母劉氏に養はる、武帝徵して太子洗馬となす、詔書屢〻下る、密陳情表を上りて辭す（陳情表）を參看せよ、

また唐に同姓名の人あり、字は元邃、遼東の人、微なりし時、一黃牛に乘り、被るに蒲鞯を以てし漢書一帙を角上に掛け、行〻且つ讀む、楊素之を奇とす、才文武を兼ね、邢國公に封ぜらる、

【隣】　孔叢子に孔子の獲麟歌といふもの出づ、曰く、唐虞世兮麟鳳遊、今非其時來何求、麟兮麟兮我心憂、（麒麟）を參看せよ、

【淪猗】　「サザナミ」水波なり、詩經魏風伐檀に「河水清且ー一」漣猗に同じ、猗は漪に作る、同じ、

【綸音】　天子の「ミコトノリ」貢奎の敬亭山詩に「增秩視重典、ー一播明庭」（綸言）を見よ、

【霖雨】　爾雅に「雨三日已上ナルヲ霖トイフ」

【林蘊ノ磨頸】　死に至るまで、その節操を變ぜざるをいふ、唐書の儒學傳に「林蘊字ハ夢復、泉州ノ人ナリ、西川ノ節度使韋皐、其ノ賢ヲ聞キ、召シテ推官トナセリ時ニ劉闢叛ヲ謀ル、蘊之ヲ喩スニ順逆ヲ以テセシニ、闢怒リテ蘊ヲ捉ヘ、枷ヲ加ヘテ獄ニ投ゼリ、將ニ刑ニ就カシメントスル時、闢潛カニ其ノ刀ヲ取ルモノニ告ゲテ曰ク、劍ヲ抽キテ其ノ頸ヲ磨シ、脅カシテ吾ニ臨服セシムベシト、刑ヲ加フルモノ其ノ言ノ如クス、蘊聲ヲ勵マシテ曰ク、殺サバ速カニ殺セ、我ガ頸何ゾ劍ヲ研グ砥石ナランヤト、闢己ニ與セザルコトヲ知リ、遂ニ其ノ死ヲ宥セリ」

【林雲銘】　字は西仲、清の福建侯官の人（一ニ閩縣ノ人ニ作ル）順治戊戌の進士、徽州府通判に官す、撝奎樓集古文析義等の著あり、

【輪廻】　流轉ー一ともいふ、佛經の語、人の生死、善惡の應報、事物の興亡など絕えず移り變りて休まず、車輪の廻轉して始終なきが如しとの意、心地觀經に「有情ー一生二六道一猶如二車輪一无二始終一或爲二父母一爲二男女一生生世世互有レ恩」

【林樾】　「ハヤシ」の「コカゲ」玉篇に「楚謂二兩木交一陰之下一曰レ樾」とあり、王勃の句に「落レ披ー一ー一」

【隣ヲ買フ】　（買隣）書言故事の「擇隣曰ー一」の注に「南史ニ、宋ノ季雅、南康市宅ヲ罷メテ、呂僧彌ニ隣ス、僧彌宅ヲ買ヒシ價ヲ問フ、答ヘテ曰ク、一千一百萬ト、僧彌ソノ貴キヲ怪ム、曰ク、百萬ハ宅ヲ買ヒ、千萬ハ隣ヲ買フト」（隣ヲトス）を見よ、

【輪ヲ斲ル】　（斲輪）を見よ、

【綸ヲ垂ル】　（垂綸）魚を釣るをいふ、綸は「ツリイト」なり、世說に「王弘之ノ性、魚ヲ釣ルヲ好ム、上庾江ニ一處アリ、三石頭ト名ヅク、弘之常ニ綸ヲ此ニ垂ル」

【隣ヲトス】　（卜隣）美き隣を擇ぶなり、左傳昭三年に「非宅是卜、惟隣是卜」杜甫の詩に「李邕求識レ面、王翰願卜レ鄰」（隣ヲ買フ）を見よ、

【臨海】晉南宋南齊の揚州——郡——縣、唐の江南道台州——縣、今の浙江台州府——縣治これなり、

【臨幸】天子の「ミユキ」して或る場所に臨みたまふ義、唐書儒學傳に「數——觀稼穡」

【麟閣】麒麟閣の略稱、李白の塞下曲に「功成盡——」

獨有霍嫖姚（麒麟閣）を見よ、

【麟角】極めて希に有る者に喩ふ、北史文苑傳に「學者如牛毛、成者如——」學に志す者は、牛の毛程多きも、成業するものは、麒麟の角の如く少きをいふ、

【麟角ヨリ稀ナリ】太平記卷三十九に見ゆ、極めて稀なるをいふ、前條を見よ、

【林閒酒ヲ暖メテ紅葉ヲ燒ク】唐の白樂天の送王十八歸山寄題仙遊寺といふ律詩中の句にて、白氏文集十四に出づ、曰く

曾於太白峰前住、數到仙遊寺裏來、黑水澄時潭底出、白雲破處洞門開、林閒暖酒燒紅葉、石上題詩掃綠苔、惆悵舊遊無復到、菊花時節憶君廻、

【臨沂】西漢の東海郡——縣、東漢の徐州琅邪國——縣、今の山東沂州府蘭山縣の北五十清里、

【林希逸】字は竹溪、鬳齋と號す、宋の福清の人、端平乙未の進士、第四人たり、初め平海軍節度推官となり、清白を以て稱せらる、累遷して中書舍人に至る、詩書盡を善くす、著すところ、易講・春秋傳・老莊列口義・考工記解・竹溪稿等の書あり、世に行はる、

【輪囷離奇】屈曲盤戻の貌「マガリクネリタル」をいふ、漢書の鄒陽傳に「蟠木根柢、————而爲萬乘器者、何則以左右先爲之容也」萬乘器は、天子の車輿の類をいふ、爲之容とは、彫刻して飾を加ふるをいふ（先容）を參看せよ、

【輪奐】屋宇の高くして、華やかなるをいふ、禮記の檀弓に「晉獻文子成室、晉大夫發焉、張老曰、美哉輪焉、美哉奐焉、歌於斯、哭於斯、聚國族於斯、文子曰、武也得歌於斯、哭於斯、國族於斯、是全要領以從先大夫於九原也、北面再拜稽首、君子謂之善頌善禱」とある註に「大夫發ストハ、諸大夫禮ヲ發シ、往イテ賀スルナリ、輪ハ輪囷高大ナリ、奐ハ奐爛衆多ナリ、歌ハ祭祀ニ樂ヲナスナリ、哭ハ死喪哭泣ナリ、國族ヲ聚ムトハ、國賓ヲ燕集シ、宗族ヲ聚會スルナリ、頌ハ其ノ事ヲ美メテ其ノ福ヲ祝ス、禱ハ以テ禍ヲ免ルルコトヲ祈ルナリ、張老ノ言ハ、頌ニ善シ、武子ノ答フル所ロハ禱ニ善キナリ、疏ニ曰ク、頌ハ頸ナリ、鄭注ニ曰ク、要領ヲ全ウストハ、刑誅ヲ免ルルナリ」と、類書纂要に「輪ハ以テ其ノ周圍ヲ美メ、奐ハ以テ其ノ散明ヲ美ム」

【麟經】春秋の異稱獲麟（ロクリン）を見よ、

【臨月】「ウミヅキ」通鑑宋明紀に「少府劉朦妾孕——」註に「將ニ產セントスルノ月ヲ——トイフ」

【綸言】天子の言なり、禮記の緇衣篇に「子曰、王言如絲其出如綸、王言如綸其出如綍とあるに出づ、綸は綬なり、綍は棺を引く大索なり、王者の言、固と細きこと絲の如きも、之を出して下に達するときは、その太きこと綸の如し、又細きこと綸の如きも、下に達するときは、太きこと綍の如しといへる義、淮南子にも「上言若絲、絲下言若綸」とあり、君上の言は絲の如く細きも、臣下の之を稱道するは綸の如く太しといふ義にして、禮記の語と同意、儲光羲の祭風伯壇詩に「聖主御寒苛、——命使臣」

【綸言汗ノ如シ】（綸言如汗）綸言は王言なり、天子の言は、一たび口より出づればまた反ざること出でたる汗の再び體内に入ることなきが如しとなり、文心雕龍に「其出如絲、不反若汗」また漢書劉向傳に「出令如出汗、汗出而不反者也、出而反之、是反汗也」前條を見よ、

【臨江】兩漢以後元に至る縣名、今の四川忠州治、また南宋・南齊の南兗州海陵郡の——縣は、今の江蘇通州如皐縣の南、

また唐の嶺南道武安州——縣は、今の安南國交州府の地、

また宋の江南西路——軍は今の江西——府清江縣治なり、

【臨邛】兩漢・晉・南宋・南齊・隋・唐・宋の縣名、今の四川邛州治、

【臨濟】東漢・晉・南宋の青州樂安國の縣名、今の山東青州府高苑縣の西北、北魏・隋・唐の——縣は、今の山東濟南府章邱縣の西北二十清里、

また唐の高僧、名は義玄、曹州南華の人、姓は邢、黃檗に師事して深く造詣するところあり、鄉に還りて城南の——院に住す、咸通七年四月十日寂す、勅して慧照禪師と諡す、當時の緇徒之を仰尊す、その唱ふる所ろを——宗と稱す、

【淪喪】淪は沒なり、滅亡の義、書經微子に「今殷其——」

【林慙澗愧】北山移文に「其林慙無盡、澗愧不歇」とあ

るに本づく、孔德璋が周彦倫の僞行を「ソシリ」て、其のかつて隱棲せし林や澗に慙愧をおほせて、その實は彦倫を「ハヅカシメタル」なり（北山移文）を見よ、

【臨淄】 西漢の齊郡——縣、東漢音の青州齊國——縣、今の山東青州府——縣治、淄一に菑に作る、

【齔史】 孔子春秋を筆削し、筆を獲麟に絶ちたまふ、故に春秋を——といふ、佩文韻府文部の元稹易家有歸藏判に「穆姜過艮足徵——之文、尼父得坤亦驗齔歟之首」

【臨深】 至——危と襲臨深淵」の略（薄冰また履薄）を見よ、

【輪人】 「クルマダイク」戰國策に見ゆ

【廩人】 米倉の番人、周禮地官の序官に見ゆ、

【嗈嗈】 山の「キリギシ」の「ソバダツ」貌、文選の魏都賦に見ゆ、

【臨春結綺】 華美を極めたる二つの閣の名、南史に「陳後主於光昭殿前建結綺臨春望仙三閣」とあり、皆沉檀香木を以てその彩麗を極め、張麗華及び龔孔二妃と之に居る、陳の後主は、かく土木を好み酒色に耽りしによりて國亡びぬ 宋濂の閱江樓記に「彼——非不華云云」とあるは、閱江樓の——と異なる所以をあらはして明の太祖の德を頌せしなり、

【林鐘】 六月の律の名、よりて六月の異稱とす（十二律）を見よ、

【客裔】 「ヤブサカ」「シハシ」漢書に「性實——」慳裔に同じ、

【林處士】 （林逋）を見よ、

【廩稍】 「フテマイ」官より少しづつ分ち給する食料、儀禮聘禮の「惟稍受之」の註に「稍ハ廩食ナリ」疏に「其ノ稍稍ニ之ヲ給スルヲ以テ、故ニ米廩ヲ謂ヒテ稍トス」宋濂の送東陽馬生序に「今諸生學於太學、縣官日有——之供」

【臨川】 晉隋の郡名、揚州に屬す、今の江西撫州府——縣の西に當る、唐宋元明の縣名、今の臨川縣治に同じ、

【凜然】 威嚴を備ふる意「リリシキ」貌、楊惲の書に「——皆有節概」

【林薮】 「ハヤシ」「ヤブ」轉じて物の多く「アツマルトコロ」淵藪に同じ、文選の典引に「仁義之——」

【廩粟】 「クラ」の「モミ」宋史眞宗紀に「民飢、貸以——」

【輪タリ彈タリ化ト往來ス】 （爲輪爲彈與化往來）謝

枋得の卻聘書の句なり、下に「蟲臂鼠肝隨天付予」とあり、莊子の大宗師篇に「化予之右臂以爲彈、予因以求時夜、化予之尻以爲輪、以神爲馬、予因而乘之（中略）又將奚以汝適、以汝爲鼠肝乎、以汝爲蟲臂乎」とあるに本づく、言ふ心は唯天の付予する所ろに隨ひ、わが身を處し、人と相較せざるなり、

【臨池】 後漢の張芝、字は伯英、池に臨みて書を學ぶ、池水盡く黑し、よりて習字の義に用ふ、王羲之の與人書に「張芝——學書、池水盡黑」韋仲將、芝を稱して草聖となす、

【鱗蟲】 魚、蛇の如く鱗ある動物をいふ、法華經科註に「龍者是——之長」

【林中疾風多シ】 鹽鐵論に「林中多疾風、富貴多諛言」

【林中ニ薪ヲ賣ラズ】 林には薪多し、故に賣ることをせざるなり、以て物は需用ある所に用ふべしとの義、淮南子齊俗訓に「林中不貿薪、湖上不鬻魚、所有餘也」

【輪蹄】 車輪馬蹄なり、車馬の義、杜牧の贈別詩に「眼前迴送不停休、相續——似水流」

【臨洮】 兩漢音隋の縣名、今の甘肅鞏昌府岷州治、晉以前は隴西郡に屬し、隋は——郡に屬す、

【隣笛ノ聲】 己の嘗て住みし舊宅を過ぎて隣人の笛を吹くを聞きて感舊の情に堪へざりし故事、文選の晉の向秀の思舊賦序に「余少與嵇康呂安居止接近、其人並有不羈之才、然嵇志遠而疎、呂心曠而放、其後各以事見法、嵇博綜技藝、於絲竹特妙、臨當就命、顧視日影、索琴而彈之、余逝將西邁、經其舊廬、于時日薄虞淵、寒冰凄然、鄰人有吹笛者、發聲寥亮、追思疇昔遊宴之好、感音而嘆、故作賦云」この故事により亡友を懷ふを「山陽聞笛」といふ、山陽は秀の舊居の在りし地なり、詳しくは晉書列傳十九を見よ、

【輪番】 「カハルガハル」に務に服するを、遼史に「每日——千人」

【林霏】 霏は氛なり、——は林に立つ「モヤ」歐陽修の醉翁亭記に見ゆ、

【臨風】 風に臨む、謝莊の賦に「——歎今將焉歌」

【林深ケレバ鳥棲ム】 （林深鳥棲）貞觀政要に「林深則鳥棲、水廣則魚游、仁義積則物自歸之」とあり、言ふこころは、林深く茂るときは、鳥集まりて棲み、水廣く大なるときは魚多く生ず、人仁義を積み畜ふるとを

さは、萬物招かずして自ら歸し趣くに喩ふ、

【臨平】 西漢の鉅鹿郡——縣、今の直隸正定府晉州の東南、

【林逋】 宋史に「——字ハ君復、宋ノ錢塘ノ人、少クシテ孤ナリ、志ヲ刻シテ學ヲ爲ス、性恬淡古ヲ好ミ、榮利ニ趨ラズ、終ニ臨ミ詩ヲ爲リ、茂陵他日求遺稿、猶喜ブ無封禪書ノ句アリ、仁宗謚ヲ和靖先生ト賜ヒ、歸スルニ粟帛ヲ以テス、西湖ニ居ルコト二十年、足未ダ嘗テ城市ヲ履マズ、逋娶ラズ、子ナシ」盡史竒傳に「——給事ヲ善クシ、マタ行草書ヲ善クス詩ヲ爲ル、孤峭澹泊自ラ稿ヲ錄セズ」（梅妻鶴子）を見よ、

【臨摹】 手本を見て「マネテウツス」柳貫の句に「伸紙——筆鋒走」

【麟鳳】 麒麟と鳳凰と、以て「スグレタル」人物に喩ふ、元史の同恕傳に「自京遷家居十三年、縉紳望之若景星——、鄉里稱爲先生而不名」姓」

【麟鳳龜龍】 （四靈）を見よ、

【林莽】 草木の深く茂れるをいふ、揚雄の長楊賦に「羅千乘于——、列萬騎于山隅」

【臨命終時】 臨終に同じ、人の將に死せんとする時「イマハこまた末期、阿彌陀經に「——阿彌陀佛與諸聖衆、現在其前」

【麟兮】 詩經周南麟之趾に「于嗟——」孔子麟ノ歌に「唐虞世兮、麟鳳遊、今非其時、來何求、麟兮麟兮我心憂」

また黃庭堅の麟趾贊に「麟有趾而不踶、仁哉麟哉、有定而不抵、仁哉麟哉、有角而不觸、仁哉麟哉」

【李夢陽】 （李夢陽）を見よ、

【庾庾】 「クラ」廩は米藏、庾は倉の屋なきもの、史記文帝紀の「發倉庾」の註に「在邑曰倉、在野曰庾」史記平準書に「漢興、七十餘年之閒、國家無事、非遇水旱之災、民則人給家足、都鄙——皆滿、而府庫餘貨財」

【輪輿】 輪は輪人、輿は輿人、車工をいふ、孟子滕文公下篇に「子何尊梓匠——而輕爲仁義者哉」

【琳琅】 玉の「キヨラカ」に和撃つ聲をいふ、楚辭九歌に「撫長劒兮玉琭璆鳴兮——」

また——は一種の美玉、

また文詞の「スグレタル」に喩ふ、文心雕龍に「陳思以公子之豪下筆琳琅、體貌英逸、故俊才雲蒸」柳宗元の答貢士沈起書に「覽所著文宏博中正富我以琳琅瑾瑜之寶」

【淋離】 長き貌、楚辭に「劒——而縱橫」また大いなる貌、揚雄の校獵賦に「——廓落」

【鄰里鄉黨】 鄰は隣に同じ、連文釋義に「五家爲鄰、五鄰爲里」また「萬二千五百家爲鄉、五百家爲黨」論語雍也篇に「——————」

【鄰鄰】 多くの車の聚さ「キシル」聲、詩經秦風車鄰篇に「有車——、有馬白顚」毛傳に「——ハ衆車ノ聲ナリ」通じて轔に作る、

【粼粼】 水清くして石見るる貌、詩經唐風揚之水篇に「揚之水、白石——」傳に「湍激ノ貌、亦磷ニ作ル」次條を參看せよ、

【磷磷】 粼粼に通ず、水の石閒を流るる貌、また玉石の「カガヤク」貌にも用ふ、宋之問の詩に「卷雲山皺皺碎石水——」また道潛の詩に「塔泉液石齒照眼光——」

【轔轔】 車の遠く聲、鄰鄰に同じ、新論に「衞靈公與夫人一夜坐、聞車聲——至闕而止、過闕復有聲」この事、列女傳にも出づ、

【凜冽】 寒氣の「キビシキ」をいふ、李白の賦に「嚴冬慘切、寒氣——」

【亮陰】 天子喪に在るの稱、書經の說命の上に「王宅憂——三祀、既免喪其惟弗言」の註に「亮亦諒ニ作ル、陰ハ古、闇ニ作ル、喪服四制ヲ按ズルニ、高宗諒陰三年」鄭玄の註に「諒ハ古梁ニ作ル、楣ウツバリ之ヲ梁ト謂フ、闇ハ廬ヲイフナリ、卽チ倚廬ノ廬ナリ、宅憂ニ亮陰トハ、言フココロハ憂ニ梁闇ニ宅ルナリ」次條を見よ、

【諒闇】 天子喪に在るの稱、禮記の喪服四制に「書曰、高宗——三年、不言、善之也、高宗者武丁、武丁者殷之賢王也、繼世卽位、而慈良於雲、當此之時、殷衰而復興、禮廢而復起、故善之、善之故載之書中而高之、故謂之高宗」と、漢書の元后傳に「陛下卽位思慕諒闇」の顏師古の註には「商書ニイフ、高宗諒闇、諒ハ信ナリ、闇ハ默ナリ、言フココロハ、父ノ喪ニ居テ、信默シテ、三年言ハザルナリ」と、前條を見よ、

【良醫】 「ヨキクスシ」左傳定十三年に「齊高彊曰、三折肱知爲——」荀子に「——之門多病人」檗括之側多枉木」檗括は邪曲を正す器なり（三ケ所）を見よ、

尙書大傳には「子貢對東郭子思曰、檗括之旁多枉木、——之門多疾人」とあり、以て不肖の人は賢人の敎育を待つに喩ふ、

【扯移】 通鑑綱目集覽に「——トハ、罪ヲ得テ遠ク斥

ケラルル者、赦ニ遇ヘバ則チ——セラレ、徒リテ近地ニ居ルヲ謂フ」この解、日知錄にも見ゆ、移は徙なり　唐朝人の用語、唐詩選に、李白の見京兆韋參軍——東陽」の詩あり、

【兩曜】　日月をいふ、李白の詩に「浮雲隔——」

【糧ヲ絕ツ】　（絕）糧米を絕ちて食はざる義、論語衞靈公篇に「在陳——」、從者病、莫能興」

【梁ヲ繞ル】　（繞梁）歌聲の美妙なるを稱していふ（餘音）を見よ、

【兎隕】　「シャウジ」訓蒙字會に「竹障俗稱——」

【梁栱】　梁は「ウツバリ」棟を負ひて屋宇を支ふる材、栱は「タルキ」方形なるを栱といひ、圓形なるを椽といふ、韓愈の新修滕王閣記に「棟橈——、板檻之腐黑撓折者」

【兩漢】　前漢（西漢）後漢（東漢）をいふ、北史袁翻傳に「——聲於西北、魏晉備在東南」

【良貴】　本然に善く貴き者をいふ、孟子告子上篇に「人之所貴者、非——也、趙孟之所貴趙孟能賤之」

【兩儀】　天地なり、また陰陽をいふ、易の繫辭傳に「易有太極、是生——」舊唐書樂章に「經緯——文化洽、削平方域ニ武功成」

【良驥ノ足ヲ絆シテ、責ムルニ千里ノ任ヲ以テス】　（絆良驥之足而責以千里之任）賢者を束縛して、その才を伸ばさしめんとするは、無理なる注文なるに喩ふ、文選の吳季重の答東阿王書に「今處此而求大功、猶絆良驥之足而責以千里之任」の註に「良馬ノ足ヲ絆サバ、何ヲ以テカ千里ノ道ヲ行カン」とあり、

【兩脚書廚】　齊の陸澄、學極めて博し、而るに易を讀みて、文義を解せず、王儉曰く、陸公は書廚（ホンバコ）なりと、今人書を讀むこと多くして用ふること能はざるものを——といふは之に本づくと陔餘叢考卷四十三に見ゆ、

【良禽ハ木ヲ相テ棲ム】　三國志の蜀志に「良禽相木而棲、賢臣擇主而事」とあり、良禽は、雜木に止まらざる如く、賢者も身を立て、名を顯はさんと欲すれば、賢主を擇びて事ふ、然らざれば、却りて身を害し名を失ふに至る（鳥ハ則チ）を參看せよ、

【良金美玉】　文章のすぐれて妙なるに喩ふ（李嶠）を見よ、

【良玉】　「ヨキタマ」揚子に「——不雕、美言不文」この前に「兩雄相たたかふに喩ふ、戰國策に「——小者必死、大者必傷」

【梁鴻】　字は伯鸞（孟光また（梁ヲ擧ゲ）を見よ、

【良工苦心】　名人が技藝に對する用心の深切なるをいふ、杜甫の詩に「更覺良工用心苦」

【良工ハ人ニ示スニ樸ヲ以スセズ】　（良工不示人以樸）後漢書馬援傳に見ゆ、技藝の名人は必ずその物を仕上げざる內、之を人に示すことなし、これその名を重んずるためなり、

【良賈ハ深ク藏メテ虛シキガ若クス】　（良賈深藏若虛）善き「アキウド」は、その貨（タカラ）を藏めて、店頭に出し示さず、以て君子は盛德あるも、見かけは愚人の如くなるに喩ふ、史記老子傳に「吾聞——君子盛德、容貌若愚　去子之驕氣與多欲、態色與淫志、是皆無益於子之身」大戴禮曾子制言篇にも見ゆ、

【兩造】　爭訟者なり、原告被告の兩者なり、造は至るの義、兩爭者皆至るの意なり、書經の呂刑に「兩造具備」とあり、周禮に「以兩造聽民訟」

【兩造具備】　原告と、被告との詞證皆具備する義、書

前に曰く「大ナル哉堯ノ人、言ノ至レルヤ、之ヲ開ケバ廓然トシテ四海ノ內ヲ見、之ヲ閉ヅレバ寂然トシテ胸臆ノ內ヲ見ズ」とあり、

【兩句三年得、一吟雙淚流】　唐の賈島の自逃詩なり、下に「知音如不賞、歸臥故人秋」とあり、これは「獨行潭樹影、數息池邊身」といふ一聯を、三年もかかりて得たり、かく苦心を經て「ヤット」考へつきたるなれば我ながら、一吟して雙淚の流るるを知らずとなり、古人の詩を作る苟もせざること此の如し、

【兩君】　兩國の君なり、論語八佾に「邦君爲——之好有反坫」管氏亦有反坫」荀子勸學篇に「事——者不容」

【良月】　陰暦十月をいふ、左傳莊十六年に「使以十月入、曰良月也、就盈數焉」とあり、數は一に始り十に終る、故に盈數を——といふ、

【兩臉】　臉は目の下、頰の上の處、李洞の贈鷹鍊師詩に「——酒醺紅杏妒、半脅酥嫩白雲饒」

【兩虎相鬪ノ】　兩雄相爭ふ（兩虎爭ノ）

【梁鴻】　字は伯鸞、小者必死、大者必傷」

【良工苦心】　名人が技藝に對する用心の深切なるをいふ、杜甫の詩に「更覺良工用心苦」

【良工ハ人ニ示スニ樸ヲ以スセズ】　（良工不示人以樸）後漢書馬援傳に見ゆ、技藝の名人は必ずその物を仕上げざる內、之を人に示すことなし、これその名を重んずるためなり、

【良賈ハ深ク藏メテ虛シキガ若クス】　（良賈深藏若虛）善き「アキウド」は、その貨（タカラ）を藏めて、店頭に出し示さず、以て君子は盛德あるも、見かけは愚人の如くなるに喩ふ、史記老子傳に「吾聞——君子盛德、容貌若愚　去子之驕氣與多欲、態色與淫志、是皆無益於子之身」大戴禮曾子制言篇にも見ゆ、

【兩造】　爭訟者なり、原告被告の兩者なり、造は至るの義、兩爭者皆至るの意なり、書經の呂刑に「兩造具備」とあり、周禮に「以兩造聽民訟」

【兩造具備】　原告と、被告との詞證皆具備する義、書

經の呂刑に「——師聽五辭に註に「師ハ衆ナリ、五辭トハ、五刑ニカカルノ辭ナリ」

【良死】「ヨキシニザマ」天命を全うして死する義、通鑑梁武紀に「彭城王勰妃李氏曰、高肇枉理殺人、天道有靈、不得——」

【涼陰】「スズシキ」風、潘岳の懷縣詩に「——自遠集、輕襟隨風吹」謝朓の詩に「珍簟清夏室、輕扇動——」陸游の詩に「虛堂雨過生——」

【糧食】「カテ」また兵糧（ヘウラウ）漢書食貨志に見ゆ、後漢書吳漢傳に「諸郡甲卒、俱坐發——」

【涼州】唐の隴右道に屬す、今の甘肅涼州府武威縣治これなり、

また樂曲の名、容齋隨筆に「今樂府所傳大曲、皆出北虜、而以州名者五、伊涼熙石渭也」唐以後涼を誤りて梁と爲すは非なり、この樂もと西涼府より來りしによりて涼州といふ、

涼州詞　唐　王翰

葡萄美酒夜光杯、欲飲琵琶馬上催、醉臥沙上君莫笑、古來征戰幾人回、

【領袖】衆人の主位に立ちて儀表となること衣の——あるが如し、衣の領と袖とは、人の目に付く所ろなり、故に人の儀則となるに喩ふ、晉書魏舒傳に「文帝深器重之、每朝會罷、目送之曰、魏舒堂堂人之——也」成語考に「晉裴秀八歲能屬文、人語曰、後進——有裴秀二秀字は季彥、河東聞喜の人、

【良人】儀禮の註に「婦人夫ヲ稱シテ——トイフ」詩經唐風綢繆篇に「今夕何夕見此——」また孟子離婁下篇に「其妻告其妾曰、——出、則必餍酒肉而後反」

【良心】本然の善心なり、孟子告子上篇に「雖存乎人者、豈無仁義之心哉、所以放其——者、亦猶斧斤之於木也、旦旦而伐之、可以爲美乎」

【良辰美景】良き時節と、ウツクシキ」景色と、文選の謝靈運の擬魏太子鄴中集詩序に「天下——、賞心樂事、四者難并」北齊書段榮傳に「——、未嘗虛棄」

【良匠】「ヨキ」大工、淮南子に「——不能斲金、巧冶不能鑠木、金之勢不可斲、而木之性不可鑠也」鑠は銷トカスになり、

【良將】「ヨキタイシヤウ」賈誼過秦論に「——之統軍也、恕己治人、推恩施恩、十力日新」淮南子に「——之用兵、常以積德擊積怨、以積愛擊積悖、何故而不勝」抱朴子に「——剛則法天、可望不可干、

柔則象淵、可觀不可人、去如收電、可見不可留、留如山岳、可瞻不可動」

【糧餫】糧食をいふ「カテ」漢書食貨志に「男子力耕、不足——、女子紡績、不足衣服」

【梁上ノ君子】盜賊の異稱なり、後漢書陳寔傳に「太丘ノ長ニ除ス、德ヲ修メテ清靜、百姓以テ安シ、時ニ歲荒ル、盜アリテ夜其ノ室ニ入リ、梁上ニ止マル、寔陰カニ見ル、子孫ヲ呼ビ、色ヲ正シ、之ニ訓ヘテ曰ク、夫レ人自ラ勉メザルベカラズ、不善ノ人、未ダ必ズシモ本ト惡ナラズ、習ヒテ以テ性ト成リ、遂ニ此ニ至ル、梁上ノ君子是レナリト、盜大ニ慙キ、自ラ地ニ投ジ稽顙シテ罪ニ歸ス、寔曰ク君ガ狀貌ヲ視ルニ、惡人ニ似ズ、當ニ貧困ニ由ルベシト、絹二匹ヲ遺ラシム、是ヨリ一縣盜ナシ、後チ累命セラルルモ起タズ、家ニ卒ス、海內赴ク者三萬餘人、衰麻ヲ服スル者數百人、文範先生トヲ諡ス」（陳寔）を見よ、

【靈愍山】耆闍崛山の譯語、略しては靈山ともいふ、衆の形、愍に似たるによりて——といふ、佛この山にて八箇年を費して法華經を說けりといふ、

【兩手ノ汗ヲ握ル】（兩把ノ）を見よ、

【梁書】五十六卷、唐の太宗の貞觀三年、姚思廉勅を奉じて撰す、本紀六卷、列傳五十卷に分つ、志表なし、思廉は梁の史官姚察の子なり、篇末に「陳ノ吏部尚書姚察」と題せるもの凡そ二十有六、蓋し此の書その父の遺藁に因りて成りたればなり、梁陳二書、古文を用ひて事を敍す、頗る六朝四六の弊を脫せり、

【兩制】書言故事に「宋、翰林學士謂之內制、中書舍人知制誥、謂之外制」內制は制誥の文を掌り、外制は軍國の政令を掌る、宋史竇儼傳に「兄弟同日拜命、分居——時人榮之」

【兩舌】「ニマイジタ」「ウソヲツク」兩者の閒に立ち相互を離間せしむる言をいふ、十惡の一、四十二章經に「——惡口·妄言·綺語」

【兩全】兩ながら全き義、晉書周處傳に「忠孝之道、安得——乎」韓愈の送汴州監軍俱文珍詩に「誰言臣子道、忠孝——難」

【粮道】糧は糧に同じ、次條を見よ、

【糧道】「ヘウロウ」を送る道、史記の蘇秦傳に「韓絕其——」南史張興世傳に「遏其——」賊飢」倫道·糧道皆同じ、

【兩端】議論の二極端をいふ、中庸に「執其——用其中於民」注に「過ト不及トナリ」論語子罕に「有

鄙夫間於我、空空如也、我叩其一一而竭焉」疏に「一一ハ終始ナリ」

【兩端ヲ持ス】（持兩端）二心を抱くをいふ、史記鄭世家に「晉聞楚之伐鄭發兵救鄭其來一一一故遲」

【兩端ヲ叩ク】論語子罕篇に見ゆ（其ノ兩端）を見よ、

【諒足ラズシテ談餘リアリ】（諒不足而談有餘）漢書の杜鄴傳の贊に「可謂諒不足而談有餘者」とあり、諒は信（マコト）なり、

【良知】學ばずして知る所ろのもの、孟子盡心上篇に「人之所不學而知者一也」

【掠治】「ムチウツ」て罪を治むる義、漢書に「下獄一一」

【掠笞】「ムチウツ」なり、笞掠とも用ふ、史記張儀傳に「楚相亡璧、門下意張儀、共執一一數百、不服乃釋之」

【梁塵ヲ動カス】（動梁塵）歌聲の善さを稱す（聲梁塵）を見よ、

【兩杖鼓】「カッコ」通典に「羯鼓正如漆桶、兩頭俱擊、以出羯中、故號羯鼓、亦謂之一一一文獻通考に「羯鼓中世俗、亦謂之一一一」

【良知良能】良とは、天然自然の善をいふ、人の思慮せずして知るを、良知といひ、學ばずして能くするを良能といふ、孟子盡心上篇に「人之所不學而能者其良能也、所不慮而知者其良知也」

【良圖】善き謀をいふ、左傳に「敢不一一」また左思の詠史の詩に「夢想騁一一」

【梁棟】「ウツバリ」「ムナギ」轉じて重任に勝ふる材器をいふ、魏書陸俟等傳に「爲時一一（棟梁ノ）を見よ

【兩豆耳ヲ塞グモ雷霆ヲ聞カズ】（一葉目ヲ）を見よ、

【兩得】一事を爲して兩益を得る義、晉書東晳傳に「一舉一一、外實內寬」唐書段平仲傳贊に「聖王屈己從諫、君臣一一其美、知道之本歟」（一舉一一）を參看せよ、

【涼德】涼は薄なり、薄德をいふ、左傳莊三十二年に「虢多一一」

【兩都賦】漢の班固の西都賦（長安）東都賦（洛陽）を合稱す、文選に載せたり、晉書左思傳に「班固兩都、理勝其辭、張衡二京、文過其意」

【梁肉】美味をいふ、梁は粟の「スグレテ」美なるものなり、列子に「衣則衣錦食則一一、居則連櫳出則結駟」とあり、史記の孟嘗君傳に「孟嘗君曰、文聞將門必有將、相門必有相、今君後宮、曼一綺穀而士不得短褐一僕妾餘一一」而士不厭糟糠」

【良二千石】良き太守をいふ（二千石）を見よ、

【量入爲出】（入ルヲ量ッテ）を見よ、

【良農】「ヨキ、ヒヤクシャウ」荀子に「一一不爲水旱」輟耕」

【梁ノ孝王ハ郤枚トキコエシ二人ノ臣云云】十訓抄第五に見ゆ、前漢書列傳に「梁孝王、文帝子也、招四方豪傑、山東游士、莫不至、齊人羊勝、公孫詭、鄒陽之屬皆游梁云云」とあり、詳くは同書を見よ、鄒陽は齊人、枚乘字は叔、淮陰の人、共に文學を以て名あり、その作る所ろは文選に出てたり、二人は初め吳王濞に事へしが、後去りて孝王に從ふ、西京雜記に「梁孝王、好營宮室苑囿之樂、作曜華之宮、築兎園、日與宮人賓客、弋釣其中」と見えたり、また漢書列傳に「孝王大治宮室、爲複道、自宮連屬於平臺三十餘里」註に「平臺ハ大梁ノ東北ニ在リ、離宮ナリ」

【梁ノ惠王】魏侯罃なり、大梁に都し僭して王と稱し、諡して惠といふ、史記に「惠王三十五年、卑禮厚幣、以招賢者、而孟軻至梁」とあり、梁惠王、孟子に利國を問ふこと、孟子の巻首に見ゆ、

【兩髽】幼者の髮を剪りて、眉の邊まで垂れたるを髽といふ「タレガミ」古はこれを以て子の親に事ふる飾儀とせしといふ、詩經鄘風柏舟に「髧彼一一、實維我儀」傳に「髧ハ一一ノ貌」王建の宋氏五女詩に「素髮垂一一」「短窄古時衣」

【涼棚暑ヲ避ク】（涼棚避暑）開元遺事に「長安ノ富人、暑伏中ニ至ル每ニ、各林亭內ニ於テ、盡柱ヲ植テ、錦ヲ以テ結ビテ涼棚ヲ爲リ、坐具ヲ設ケ、名姝ヲ召シ閒坐シ、遞ニ避暑ノ會ヲ爲ス」

【梁伯鸞】（梁鴻）を見よ、

【兩把ノ汗ヲ握ル】（握兩把汗）兩手に「アセ」を「ニギル」「アブナキ」場合に「オソレキヅカフ」にいふ、姜南投甕雜筆に「今世人旁觀人涉險而濟者、輒曰爲爾捻兩把汗、按元史憲宗召趙璧問曰、天下何如而治、對曰、請先誅近侍之尤不善者、憲宗不悅、璧退、世祖曰、秀才汝渾身都是膽耶、吾亦爲汝握兩手汗」也」

【兩眉】兩方の「マユ」漢書の「天庭地關列斧斤」の注に「一一ノ閒ヲ天庭ト爲ス」王惲の小園卽事に「深院日長須細履、也勝愁坐一一攲」雙眉に同じ、

【良弼】良き輔佐の臣をいふ、書經の說命に「帝夢賚予一一」

【兩髻】兩方の「ビン」髻は髮に同じ、陶潛の責子詩に

「白髪被ㇾ——ㇾ肌膚不ㇾ復實ㇾ白居易の晩春酤ㇾ酒詩に「百花落如ㇾ雪、——垂作ㇾ絲」

【兩府】 治平類纂に「中書省與樞密院ㇾ爲ㇾ——ㇾ君臣政要に凡、文事は中書に出で、武事は樞密に出づ」

【兩部ノ鼓吹】 南史孔珪傳に「孔稚珪、字ハ德璋、會稽山陰ノ人、齊ノ明帝ノ時、南郡ノ太守トナル、珪、風韻清疎、文詠ヲ好ミ、酒ヲ飲ムコト七八斗、世務ヲ樂マズ、居宅盛ニ山水ヲ營ミ、几ニ憑リテ獨酌ス、傍ラ雜事ナシ、門庭ノ內、草萊翦ラズ、中ニ蛙鳴アリ、或人之ニ問ヒテ曰ク陳蕃タラント欲スルカト（陳蕃庭宇蕪穢人之を問ふ、答へていふ、大丈夫當に天下を掃除すべし、安ぞ一室を事とせんと）珪曰ク、我此ヲ以テ兩部ノ鼓吹ニ當ツ、何ゾ必ズシモ蕃ニ效ハン（樂に坐部立部あり故に兩部といふ）王晏嘗テ鼓吹ヲ鳴ラシテ之ヲ候ス、群蛙ノ鳴クヲ聞キテ曰ク、此レ殊ニ人耳ニ聒シト、珪曰ク、我鼓吹ヲ聽クニ殆ド此ノ蛙鳴ニ及バズト、晏慙色アリ」蘇軾の詩に「已遣ㇾ亂蛙ㇾ成ㇾ兩部、更邀ㇾ明月ㇾ作ㇾ三人ㇾ

作盆池養ㇾ科斗數十ㇾ戲作　宋　陸　游

小小盆池不ㇾ畜ㇾ魚、題ㇾ詩聊記破ㇾ苔初、未ㇾ聽ㇾ兩部鼓吹樂、且看一篇科斗書

【良平】 漢の高祖の謀臣、張良と陳平とをいふ、共に智略に長ぜし人、蘇軾の潮州韓文公廟碑に「——失ㇾ其智ㇾ二」

【梁甫】 東漢の侯國、兗州泰山郡に屬す、今の山東泰安府泰安縣の南六十清里、また泰山の「ソバ」の山名、白虎通封禪の注に見ゆ、

【梁甫ノ吟】 甫一に父に作る、諸葛亮の詩なり、曰く

步出ㇾ齊城門ㇾ、遙望ㇾ蕩陰里ㇾ、里中有ㇾ三墳ㇾ、纍纍正相似ㇾ、問是誰家塚ㇾ、田疆古冶氏、力能排ㇾ南山ㇾ、文能絕ㇾ地理ㇾ、一朝被ㇾ讒言ㇾ、二桃殺ㇾ三士ㇾ、誰能爲ㇾ此謀ㇾ、相國齊晏子、

齊の景公、勇士陳開疆、顧冶子、公孫捷一本ニ公孫接・田開疆・古冶子ニ作ル）三人あり、晏嬰曰く、大王三桃を摘み、自らその一を食ひ、各〻功を說かしめ高き者に一顆づつを賜へと、陳顧二人之を食ふ、公孫自刎す而して陳顧慙を懷き、亦從ひて刎ぬ、諸葛孔明步して三墳を見、この詩を作りて之を嘆ぜしなり（二桃三士）を參看せよ、

【良夜】 深夜なり、後漢書祭遵傳に「帝（光武帝）遵ㇾ營ㇾ勞ㇾ士卒ㇾ、——乃罷」

また「ヨキ夜の義、蘇軾の後赤壁賦に「月白風清如ㇾ此

——ㇾ何ㇾ」

【良冶】 巧みなる鍛冶なり、禮記の學記に「——之子、必學ㇾ爲ㇾ裘、良弓之子、必學ㇾ爲ㇾ箕」（箕裘ノ）を見よ、

【良藥ハ口ニ苦シ】 說苑正諫篇に「孔子曰、良藥苦於口ㇾ二利ㇾ於病ㇾ二とあり、以て忠言は耳に逆へども、行に利あるに比す、この語、孔子家語にも見ゆ、下に「忠言逆耳利ㇾ於行ㇾ二とあり、

【兩用】 兩ながら併せ用ふる義、戰國策に「宣王謂ㇾ樓緩ㇾ曰、吾欲ㇾ——ㇾ公仲公叔、其可ㇾ乎」

【兩立セズ】 （不ㇾ兩立二兩者の勢、並び立つこと能はざる義、戰國策に「楚強、則秦弱、楚弱、則秦強、此其勢——ㇾ二

【利益】 「タメニナルコト」法華經に「恒求ㇾ善事ㇾ——一切ㇾ二益は漢音エキ

【略約】 獨木橋をいふ、約ハ廣韻ニ「木ヲ橫ヘテ水ヲ渡ルナリ」蘇軾の詩に「——橫ㇾ秋水ㇾ二

【略賣】 人を「カドハカシ」賣る、漢書外戚傳に「家貧、爲ㇾ人ㇾ——ㇾ二

【龍樹】 菩薩の名、馬鳴菩薩の弟子迦毘摩羅尊者に從ひて修道す、法苑珠林に「有ㇾ一大士ㇾ名曰ㇾ——ㇾ天聰奇悟、事不ㇾ再問ㇾ建ㇾ立法幢ㇾ摧ㇾ伏異道ㇾ託ㇾ生南天竺國ㇾ出ㇾ梵志種ㇾ二隋書經籍志に「——菩薩和香法一卷」あり、

【龍涎】 香の名、香譜に「——于ㇾ香品ㇾ最貴ㇾ出ㇾ大食國海傍ㇾ多亦不ㇾ過ㇾ數兩ㇾ二上品曰ㇾ泛水、次曰ㇾ滲沙ㇾ二

【龍腦】 香の名、本草に「——香南番諸國皆有ㇾ之、乃深山窮谷中、千年老杉樹、其枝幹不ㇾ曾損動ㇾ者、則有ㇾ香、若損動ㇾ則氣洩無ㇾ腦」また支那より舶載し來りて藥品となす——は樟腦を精煉せしものなりといふ、

【蔆】 菱に一に菱に作る、その實の外皮に兩角ある「ヒシ」菱は音キ四角若くは三角ある「ヒシ」共に水草、根は水底にありて、葉は水面に叢生す、形平たく蝶の翅の如し、夏、小白花を開く、秋、實熟すれば黑く、仁白くして食ふべし、呂氏春秋に「夏食ㇾ——ㇾ冬食ㇾ橡栗ㇾ二

【菱】 前條を見よ、

【李邕】 字は泰和、善の子、唐の廣陵江都の人、早く名あり、義を重んじ士を愛す、李嶠の薦によりて左拾遺に拜す、玄宗の初、御史中丞となり、出されて北海の太守となる、時に李北海と稱す、邕の文章書翰皆人に過ぐ、李林甫その盛名を疾みて之を害す、卒する年七十、時に天寶六年なり、著すところ李北海集あり、

【李膺】 字は元禮、後漢の潁川襄城の人、孝廉に擧げられ、青州の刺史に至る、守令風を聞き印綬を解きて

去る、後ち司隷校尉となる、その容接を被るあれば、名づけて登龍門と爲す、後ち黨錮に坐して官を免せらる、

【陵夷】 陵は丘陵、夷は平なり、すべて事の始は盛にして終は衰へ、その頽替オトロフルすること丘陵の漸くに平かなるが如きに喩ふ、漢書成帝紀に「帝王之道、日以ーース」と、晉書儒林傳に「昔周德既ニ衰、諸侯力政、禮經廢缺、雅頌ーー」陵遲に同じ、

【稜威】 神靈の威をいふ、威稜に同じ、南史梁武帝紀に「ーー直指、勢踰風電ニ」李白の大獵賦に「稜威耀乎雷霆ニ稜一音ロウ

【凌雲觀】 三國史に「魏文帝立ーーー誤、先釘ス榜ヲ、乃以テ範盛ス韋誕ヲ輜軿ニ引上ス之、去地二十五丈、既下、鬚髮皓然」とあり、卓氏藻林にも「魏曹丕築凌雲臺在洛陽孟津ニ臺上樓觀極テ其精巧ナリ」とあり、十訓抄第九に「凌雲の忽ち雪をけづる頭に變しける」とあるはこれを斥す、韋誕字は仲將、太僕端の子、文辭を善くし、最も書法に工なり、魏に仕へて光祿大夫に至る、

【陵雲之志】 高く世外に超脱する志をいふ、漢書の揚雄傳に「標標有ーーーーニまた天資遺事に「張象科ニ登リテ華陰ノ縣ト爲ル、而シテ守令ノ爲メニ抑ヘラル、嘆ジテ曰ク丈夫雲ヲ陵ギ世ヲ蓋フノ志アリテ、下位ニ拘セラレ、身ヲ矮屋ノ下ニ立テ、人ヲシテ頭ヲ擡グルヲ得ザラシムルガ如シト、乃チ官ヲ棄テテ去ル」とあり、陵は凌と通ず、

【菱葉】 「ヒシ」の葉、劉孝威の釣竿詩に「鉤利斷ス尊絲、帆擧牽ーーニ儲光羲の采菱詞に「濁水ーー肥、清水ーー鮮」

【陵園】 「ミササギ」晉書郗鑒傳に「登起ーーニ功役甚衆」

【陵園ノ配妾】 月ニ徘徊セシ松ノ扉ノ中】 十訓抄第一に見ゆ、晉の武帝の宮人美男の聞高かりし潘岳(字ハ安仁)に通ぜしとの事によりて陵園の墓守に配せられたるを陵園の配妾といふ、白氏文集四に「陵園妾憐幽閉也」の古詩に「陵園妾、顏色如花命如葉、命如葉薄將奈何、一奉寢宮年月多、中署山宮一閉無開日、此身未死不令出、松門到曉月徘徊、柏城盡日風蕭瑟、松門柏城幽閉深、聞蟬聽燕感光陰、眼看菊蕊重陽淚、手把梨花寒食心、云云」

【凌煙閣ノ勳臣】 貞治通鑑の、唐の太宗貞觀十七年に「功臣ヲ凌煙閣ニ圖畫ス」とあり、勳臣は長孫無忌、趙郡王李孝恭、杜如晦、魏徵、房玄齡、高士廉、尉遲敬德、李靖、段志玄、蕭瑀、張弼、劉弘基、屈突通、柴紹、殷開山、侯君集、長孫順德、唐儉、張公謹、程知節、虞世南、劉政會、李勣、秦叔寶の二十四人なり、

【龍興リテ雲ヲ致ス】 聖天子の賢臣を用ふるに喩ふ、王褒の聖主得賢臣頌に「世必有聖智之君、而後有賢明之臣、故虎嘯而風冽、龍興而致雲」(雲ハ龍ニ)を參看せよ、

【龍ヲ視ル猶ホ螾蜓ノ如シ】 (視龍猶螾蜓)ニ淮南子に「禹南省方濟于江、黃龍負舟、舟中之人、五色無主、禹乃熙笑而稱曰、我受命于天、竭力而勞萬民、生寄也、死歸也、何足以滑和ーーーーー、顏色不變、龍乃低耳掉尾而逃」この事、呂氏春秋知分にも載すれども、ーーーーの句なし、

【龍ヲ攀ヂ鳳ニ附ク】 (攀龍附鳳)(龍鱗ニ)を見よ、

【凌煙】 人を「シノギて、其の上に立たんとする義、宋書恩倖傳に「悪籍世寶用相ーー」

【菱歌】 「ヒシ」を采る者の「フナウタ」李德裕の靈泉賦に「聽ーーーー而夜起」李白の蘇臺覽古に「舊苑荒臺楊柳新、ーー清唱不勝春」

【菱荷】 「ヒシ」と「ハチス」と、宋史河渠志に「種植スーーニ

【菱芰】 「ヒシ」と「アザミ」と、芰は一名「ハナジュンサイ」池澤に生ず、葉は水面に浮び、根は水底に生ず、莖細く、葉の形專菜の如くにして稍闊く、一方に缺ありて、面綠に背紫なり、夏五瓣の黃花を開く、詩經周南關雎篇に「參差荇菜」とあるは是れなり、一名は接余、晁補之の跋林逋鷰士書に「ーー魚鳥可樂」

【龍顏】 天子の御顏を稱す、史記高祖紀に「高祖爲人ト隆準而ーー」とあるに本づく、

【龍顏ヲ探ル】 (探龍頷)危險を犯すに喩ふ、莊子列禦冠篇に「千金之珠必在九重之淵而驪龍頷下、子能得ル珠者、必遭其睡也、使驪龍而寤之、子尚奚微之有哉」

【菱芰】 「ヒシ」蓮文釋義に「兩角者菱、四角者芰」列子に「夏日則食ーーニ」晉の采蓮童曲に「西湖采ーーニ菱は蔆に同じ、

【龍旂】 交龍を畫く旗なり、旂は倚なり、龍旗に同じ、兩龍依倚するあるなり、禮記に「ーー九旒天子之旌也」

【龍旗】 天子の「ハタ」前條に同じ、滕彥將旗銘に「ーー所指、八表澄清」

【龍駒鳳雛】 兒童の俊秀なるものを稱す、晉書の陸雲傳に「雲六歲能ク文ヲ屬ス、兄ノ機ト名ヲ齊クス、文章、

機ニ及バズト雖モ、而モ持論ハ之ニ過ギタリ、二陸ト號ス、幼時呉尚書閎鴻、見テ之ヲ奇トシテ曰ク、此ノ兒若シ龍駒ニアラズンバ、當ニ是レ鳳雛ナルベシト」年幼なるが故に雛駒といふ、

【菱花】「ヒシ」の花、史記司馬相如傳に「外發芙蓉菱華、內隱鉅石白沙」三柳軒雜識に「——爲水客」

また鏡の異名、飛燕外傳に「七尺——鏡一奩」駱賓王の王昭君詩に「古鏡——暗、愁眉柳葉翠」楊達の明妃怨に「匣中縱有——鏡、羞向單于照舊顏」

【龍光】龍光に同じ、詩經小雅蓼蕭篇に「既見君子、爲龍爲光」の註に「龍龍也、爲龍爲光喜其德」之詞也」

また風采の美にも用ふ、後漢書高彪傳に「彪造馬融曰、承服風問、從來有年、故不待介者、而謁見大君子之門、蒸一見——以敍腹心之願」

【轂鞠】車の大いに輳くをいふ、王褒の洞簫賦に「其武聲則若雷霆——」

【龍華下生三會ノ曉】太平記卷十二に見ゆ、祖庭事苑七に「龍華樹也、其樹有華、華形如龍、故名龍華」彌勒下世經に曰、當來彌勒於此樹下、說法度人、而有三會、初會先度釋迦所未度者、次度其餘、凡六十八億人、第二會六十六億、第三會六十四億、故曰龍華三會ノ曉

【陵戶】「ミササギ」を守る家、唐書禮樂志に見ゆ（陵墓）を參看せよ、

【龍虎】易乾卦の文言に「雲從龍、風從虎、聖人作而萬物覩」史記項羽本紀に「范增說項羽曰、沛公入關、其志不在小、吾令人望其氣、皆爲——、成五采、此天子氣也、急擊勿失」

應璩の與尚書諸郎書に「以——之姿遭風雲之會」

【利用厚生】利用とは、工の器を作り、商の貨を運する類をいひ、厚生とは、帛を衣、肉を食ひ、飢ゑず寒えざる類をいふ、書經大禹謨に「正德——、——惟和」

【陵谷處ヲ易フ】（陵谷易處）高下位を易へ、魯卓序を失ふに喩ふ、漢書劉向傳に「——、列星失行」また詩經に「高岸爲谷、深谷爲陵」とあるも、同じ、

【陵谷之變】世事の變遷するをいふ、晉書に「杜預好武、聲則若雷霆——」後世名碑云、高岸爲谷、深谷爲陵、刻石爲二碑、紀其勳績、一沈萬山之下、一立峴山之上、曰焉知此後不爲陵谷乎」元寂の詩に「但見衣冠成古丘、不見江河變陵谷」前條を見よ、

【龍骨車】「ミヅグルマ」二才圖會に「翻車ハ今ノ人、——トイフ」陌車・水車皆同じ、陸游の春晩卽事に「——鳴水入塘、雨來猶可望豐穰」

【龍虎榜】名士の同時に及第して揭示せられしをいふ、榜は試驗に及第せし者の姓名を揭示する義、牓に同じ、唐書歐陽詹傳に「與韓愈・李觀・李絳・崔羣・王涯・馮宿・聯第、皆天下選、時稱——」

【龍山帽落ツ】（孟嘉）を見よ、

【龍子】蜥蜴の一名「トカゲ」

【龍舟】天子の「ミフネ」隋書食貨志に「煬帝造——」

【陵寢】「ミササギ」宋史樂志に「孫皓先封烏程侯、卽改葬和於烏程西山、號曰明陵、置園邑二百家於烏程、立——陵園に同じ、

【龍車】天子の「ミクルマ」金史に「道路儀衛、紅羅傘一——」龍輿・龍翔に同じ、

【龍驤虎視】驤は擧なり、遠なり、龍の擧るが如く、虎の視るが如く、威勢の盛なるをいふ、蜀志諸葛亮傳に「亮之素志、進欲——、苞括四海」漢書韓彭敍傳に「雲起龍驤、化爲侯王」

【龍種】周雅に「馬八尺ナルヲ龍トナス」——は、駿駒をいふ、

また賢子の譬にも用ふ、襄陽記に「龐德公子奧、字世

文、晉太康中爲驃騎太守、去官歸鄉、居白沙里、鄉人宗敬之、相語曰、我家池中——歸矣」杜甫の哀王孫詩に「高帝子孫盡隆準、——自與常人殊」

【龍鍾・潦倒】癈老をいふ、反切の語なり、湘素雜記に「古語ニ二聲合シテ一字ト爲ル者アリ、不可ヲ叵トナシ、何不ヲ盍トナスガ如シ、西域二合ノ音ニ從フ、切字ノ元ナリ、龍鍾潦倒ノ、正ニ二合ノ音ナルガ如シ、龍鍾ノ切ハ癈ノ字、潦倒ノ切ハ老ノ字、老羸癈疾、卽チ龍鍾潦倒ヲ以テ之ニ目クル者正ニ此ノ義ナリ」（潦倒）を參看せよ、

【龍生日】陰暦五月十三日をいふ（竹酔日）を見よ、

【凌霄花】和名「ノウゼンカヅラ」古名「ノセウ」蔓生して樹にまとひ、高きに「ノボル」葉は對生して藤の葉に似て粗き鋸齒あり、夏の末に枝を出すこと一尺許、兩對して花開く、形「アサガホ」の花の如く、本は筒にて、末は圓瓣五出し、內は赭黃にして外は淡黃なり、二名は苕、詩經小雅に「苕之華、芸其黃矣」とあり、釋艸譜に「一名紫葳一名陵苕一名女葳一名茈萳一名武威一名陵一名鬼目、處處皆有、多生山中、人家園圃亦栽之、野生者蔓延數尺、得木而上、卽高數丈云云三柳軒雜識に「——ヲ勢客ト爲ス」花史に「富鄭公園中、

——無因附」而特起、歳久成大樹、高數尋、朱弁曰、是非草木中豪傑乎、所謂不待文王而興者也」陸游の詩に「高花風墮赤玉盞、老蕚烟濕蒼龍鱗」。

【龍潛】 潛龍に同じ、天子未だ位を践まざる時の稱、易の乾卦に「初九潛龍勿用」任昉書に「臣早奉——」。

【龍泉太阿】 龍泉太阿は、共に古の名劍の名なり、越絶書に「楚王召風湖子、令之呉越見歐冶子干將使之爲鐵劍三枚、一曰龍泉、二曰太阿、三曰上市」また回機活法に「晉ノ雷煥初メ呉ノ未ダ滅ビザルヤ、斗牛ノ閒、常ニ紫氣アリ、張華、雷煥ニ問フ、煥曰ク、寶劍ノ精、上天ニ徹スルノミト、華卽チ煥ヲ補シ、豐城令ト爲ス、煥獄屋ノ基ヲ掘リ、一石函ヲ得タリ、中ニ寶劍二有リ、刻題シテ、一ヲ龍泉トイヒ、一ヲ太阿トイフ、是ノタ、斗牛ノ閒、氣復タ見エス、煥南昌ノ西山下ノ土ヲ以テ之ヲ拭フ、光芒始發ス、使ヲ遣ハシ、一ヲ送リ華ニ與ヘ、一ヲ留メ自ラ佩ブ、華曰ク、此レ干將ナリ、莫邪復タ至ル可シヤ否ヤ、然リト雖モ、天神物ヲ生ズル、終ニ當ニ合スベキノミト、華誅セラルルニ及ビ、劍ノ所在ヲ失ス、煥卒ス、子華、劍ヲ持シ行キ、延平津ヲ經、劍忽チ腰閒ヨリ躍リ出デテ水ニ墮ツ、人ヲシテ水ニ沒シ之ヲ取ラシム、但タ兩龍蟠縈シ、文章アルヲ見ル、須臾ニシテ光彩水ヲ照シ、波浪驚キ、沸ク、華嘆ジテ曰ク、先君化去ノ言ト、張公終合ノ論ト、此レ其レ驗アリシ乎ト」

【龍孫】 筍の異名、釋贊寧筍譜に「俗呼筍爲——」陸游の詩に「萬林無數長——」また竹の一種東齋紀事に「辰州有一種小竹曰——竹生山谷閒、高不盈尺細如鉄」

また駿馬を稱してもいふ、

【龍蛇】 易の繫辭傳に「——之蟄以存身也」韓非子に「愼子曰、飛龍乘雲、騰蛇遊霧、雲罷霧霽、而——與螾蝘同矣、則失其所乘也」(深山大澤)を參看せよ、また佛經にて、龍を聖者に喩へ、蛇を凡夫に喩ふ、佛印語錄に「凡聖同居、——混雜」

【龍韜】 六韜に「一曰文韜、二曰武韜、三曰——、四曰、虎韜、五曰豹韜、六曰犬韜」轉じて兵書または兵法の義とす、李泌の句に「良弓摧折久、誰識是——」鄭俠の送周如京詩に「——虎略何處藏、却向吟筆呈鋒鉅」

【龍團】 上品の茶をいふ、成語考に「——、雀舌盡是香茗」の註に「茶ノ品ハ、龍鳳團ヨリ貴キハナシ、餅上ニ、龍鳳紋ヲ印スルヲイフ、供御ノ者、金ヲ以テ龍鳳ヲ粧ス、餅毎ニ重サ一斤ナリ、慶曆ノ閒、禁君謨蔡襄造ル、ソノ品精絶、之ヲ使ト爲リ、始メテ小片龍茶ヲ造ル、ソノ品精絶、之ヲ小——トイフ、二十餅毎ニ重サ一斤値金一兩」大觀茶論に「本朝之興、歳修建溪之貢、——鳳餅、名冠天下」

【陵遲】 陵は丘なり、山阪の次第に漫く下り低くなる義、淮南子に「河逶迤故能遠、山——故能高」荀子の宥坐篇に「三尺之岸、而虚車不能登也、百仞之山、任負車登焉、何則陵遲故也」とあり、轉じて事の漸漸に衰退するをいふ、毛詩の序に「禮義——」

【陵替】 下、上を陵ぎて、上の威權廢替するをいふ、左傳に「下——上——能無亂乎」梁武帝の令公卿入陳時政詔に「晉氏——虚誕爲風」また陵夷に同じく、丘陵頽替の義にも解く、

【龍頭鷁首】 龍は水を得て靈活し、鷁は風を得て疾飛す、故に舳先に龍頭又は鷁首を彫りて飾とす、淮南子本經訓に「龍舟鷁首、浮吹以娯」とありて、高誘の注に「鷁ハ水鳥ナリ、ソノ象ヲ畫キテ船首ニ著ケ、以テ水患ヲ禦グ」

【龍頭蛇尾】 始は盛にして、終は衰ふる義、傳燈錄卷二十一に「可惜龍頭翻成蛇尾」

【陵ニ襄ル】 (襄陵)襄は上なり、水の陵上に「ノボル」をいふ、書經堯典に「湯湯洪水方割、蕩蕩懷山——」

【龍ノ雲ヲ得ダルガ如シ】 書言故事に「乘勢變化、——」

【龍ノ雲ヲ得タルガ如シ】 書言故事に「乘勢變化、——」

曰、蛟龍得雲雨、とあり、三國志の呉志に「周瑜曰、劉備非久屈爲人用者、恐蛟龍得雲雨、終非池中物也」とあるに本づく、

【龍馬】 「スグレタルウマ」漢書百官公卿表に「大僕屬官有——令丞」尚書中候に「帝堯卽政、——銜甲赤文綠色」李白の白馬篇に「——花雪毛、金鞍五陵豪」周禮に「馬八尺以上爲龍」

【陵暴】 「シノギ、アバレル」易解の「初六无咎」の疏に「否結既釋之後、剛强者、不復——尹文子に「刑者所以威不服、亦所以生——賞者所以勸忠能、亦所以生鄙爭」

【龍伯高】 名は述、京兆の人、仙都の長となる、馬援嘗て、その兄の子を戒めて曰く、——ハ敦厚周愼ニシテ口ニ擇言ナク、謙約節儉廉公ニシテ威アリ、吾之ヲ愛シ之ヲ重ンズ、願クハ汝ガ曹ノ之ニ效ハンコトヲ、伯高ニ效ヒテ得ザルモ、猶ホ謹飭ノ士トナラン、所謂鵠ヲ刻ミテ成ラザルモ尚ホ鶩ニ類スル者ナリト」

【龍伯公ガ力】 太平記卷七に見ゆ、山海經に「東海之外、大荒之中、有大人之國、河圖王板曰、從崑崙以北

九萬里、得龍伯之國、人長四十丈、生萬八千歲、始死云云」また列子湯問篇に「龍伯之國、有大人、舉足不盈數步、而暨五山之所、一釣連六鼇、合負而趣其國」

【龍蝀】 豪傑の士の野に潛み居るに喩ふ、魏志杜襲傳の字面、李白の鄰中贈王大詩に「恥學郢琢人」

【龍蝀虎踞】 地形の要害險固なるをいふ、六朝事迹に「諸葛亮論金陵地形」曰、鍾阜龍蝀、石城虎踞、眞帝王之宅」この語寰宇記にも見ゆ、

【龍蝀鳳逸之士】 非凡のすありて未だその志を伸ぶるを得ざる士をいふ、李白の與韓荊州書に「——、皆欲收名定價於君侯」

【龍飛】 天子の卽位をいふ、易の乾卦に「九五飛龍在天、利見大人」

【龍飛鳳舞】 山形の、スグレテ靈異なるに喩ふ、吳越備志に「郭璞撰臨安志」云、天目山前兩乳長、——到錢塘、海門山起橫爲案、五百年生異姓王、至是果驗」蘇軾の表忠觀碑に「天目之山、若水出焉、——萃于臨安」

【陵侮】 「シノギアナドル」晉書齊王攸傳に「子藹性强暴、使酒、數——弟回、回以兄故容之」北史柳述傳に「楊素方貴重、朝廷莫不憚慴、述每——之、數於上前云云」また列子湯問篇に「龍伯之國、有大人、擧足不盈數步、而暨五山之所、一釣連六鼇、合負而趣其國」

【菱米】 「ヒシ」の實を米に代へて食ふによりていふ、南史魚弘傳に「道中乏食、緣路采菱作——飯」本草に「菱葉浮水上、花黃白色、花落而實生、有角皮而紫色者、謂之浮菱、食之尤美、江淮人暴其實、以爲米代糧」

【陵廟】 天子の「オタマヤ」後漢書陳忠傳に「河閒託叔父之屬、清河有——之尊」

【龍標】 唐の縣の名、江南道敍州に屬す、今の湖南沅州府黔陽縣治、李白の聞王昌齡左遷——尉遙有此寄に「楊花落盡子規啼、聞道——過五溪」

【陵墓】 天子の「ミササギ」宋史禮志に「詔、先代帝王歲在祀典、或廟貌猶在、久廢牲牢、或——雖存、不禁樵采、其太昊炎帝黃帝高辛唐堯虞舜夏禹成湯周文王武王漢高帝光武唐高祖太宗各置守陵五戶、歲春秋祠以太牢」

杜甫の諸將詩に「漢朝——對南山」

【龍凰】 人品の高きに喩ふ、南史王僧虔傳に「王家門中傑者——劣猶虎豹」

【龍鳳團】 茶の最上品なるもの、書言故事に「茶之品、莫貴於——」八餅重一斤、慶歷閒蔡君謨、爲福建運使、始造小片龍茶、其品絕精、謂之小龍團、凡二十餅重一斤、直金一兩、每南郊致齋中書樞密各賜一餅、宮人往往緩金其上、貴重如此」

【龍鳳之姿】 姿容の「スグレテ」貴さなり、唐書太宗紀に「太宗生四歲、有智生見之曰、——、天日之表、必能濟世安民」晉書裴秀傳に「人以爲龍章鳳姿天質自然」

【龍逢比干】 關龍逢は、夏の桀王の臣、比干は殷の紂王の臣、皆忠諫を以て殺さる、漢書朱雲傳に「朱雲攀殿檻檻折、雲呼曰、臣得下從——遊於地下、足矣」

【龍眠居士】 (李伯時)を見よ、

【龍門】 一名河津、禹が河水を整通せし處、廣さ八十歩ありといふ、禹貢に「導河積石至于——」隋書地理志に「——ハ河東郡ニ屬ス」三秦記に「江海魚集——下、登者化龍、不登者、點額暴鰓」白樂天の題元少尹集詩に「——原上土、埋骨不埋名」の句あり(登——)を參看せよ、

【龍門三級】 太平記卷十四に見ゆ、鈔に「龍門ハ黃河ノ水ノ下ル所ロノロナリ、絳州ノ龍門縣ニ在リ、水險ニシテ通ゼズ、魚鼈ノ屬、能ク上ルコトナシ、江海ノ魚、龍門ノ下ニ集ル者數千、上ルコトヲ得ズ、上レバ卽チ龍トナルトイフ、三級トハ、瀑布三層トナリテアルナリ」

【龍門扶風】 漢書に「司馬遷居龍門」後漢書に「班固扶風人」佩文韻府風字の條に「後世良史ヲ言フモノ、——ヲ推ス」良史を言ふもの司馬遷の史記と班固の漢書とを推すといふ義、

【龍陽】 魏王の幸臣の名、戰國策に「魏王與——君共船而釣、——君得十餘魚而涕下、王曰、何爲、曰、臣爲所得魚也、臣之始得魚也、臣甚喜、後得又益大、今臣直欲棄——而得爲王拂枕席、四海之內美人亦甚多矣、聞臣之得幸於王也、必褰裳而趨大王、臣亦猶臣前之所得魚也、臣亦將棄——矣、安能無涕出乎、魏王於是布令於四境之內曰、有敢言美人者族」後世以て孌童の稱とす、孌童とは、カゲマ」男色を賣る者をいふ、猶ほ辟陽侯審食其が、呂后に嬖せられたるを以て女主の嬖臣を辟陽といふが如し、

【綾羅】 「アヤ」「ウスギヌ」宋史食貨志に「東川湖南——絁七萬匹」張華の輕薄篇に「童僕餘粱肉、婢妾羅——」

【龍鱗】 松の幹に喩ふ、王維の訪呂逸人詩に「閉戶

著書多、歳月、種ル松皆老作ー一ニ次條を參看せよ、

【龍鱗ニ攀デ、鳳翼ニ附ク】（攀龍鱗附鳳翼ニ）龍鳳は天子に比す、英主に附隨して功業を立つる義なり、後漢書耿純傳に「諸將詩ヘ即ち位ニ不レ聽、耿純進曰、天下士大夫捐レ親戚、棄ー土壤、從ー大王於矢石之閒ー者、固望ー一ー一ー一ー一ー以成ー其所ー志耳」大王は光武帝をいふ、また漢書敍傳に「攀龍附鳳、並乘ー天衢ニ杜甫の詩に「攀龍附鳳勞莫ー當、天下盡化爲ー侯王ー」この語また聖人に從ひてその德を成さんと冀ふにもいふ、法言淵騫篇に「或曰、淵騫曷不ー寢、曰ー一ー一ー一ー、棄以揚之、勃勃乎其不可及乎」淵は顏淵、騫は閔子騫、並に孔門の高足なり、

【棧ー稭】寒氣の「ハダ」に「シミトホル」をいふ、文選の蕪城賦に「ー一霜氣、蕭蕭風威」すべて「カドカドシキ」狀にいふ、氣骨ー一の如し、

【陵ー轢】「シノギ、キシル」義、史記の孔子世家に「楚ノ靈王兵彊、ー一中國ヲ」次條を見よ、

【轢ー轢】踏踐輕蔑するをいふ、轢或は陵に作る、陵ぎ侵すなり、漢書淮夫傳に「ー一宗室、侵ー犯骨肉ヲ」前條を見よ、

【閭閻】二字皆里中の門なり、閭閻なき賤しき里人をいふ、史記の李斯傳に「斯以ー一ー歷ー諸侯ー入ー事ー秦ー隋書高祖紀に「ー一秀異之士、鄉曲博雅之儒、言足ー以佐ー時、行足ー以勵ー俗」

【呂希哲】字は原明、公著の子、少くして孫復・石介・胡瑗に從ひて學ぶ、また二程張載に從ひて游ぶ、聞見益ー廣く、躬行實踐を務む、元祐中崇政殿說書となり、人主を勸導するに正心誠意を以て本と爲す、徽宗の時、曹相邢三州に歷知たり、人となり樂易にして至行あり、遠近皆師として之を尊ぶ、榮陽公に封ぜらる、

【膸句】上の語を傳へて下に告ぐるを膸と爲し、下の語を傳へて上に告ぐるを句と爲す、史記叔孫通傳に「大行設ー九賓ー一傳ー」と九賓とは、公侯伯子男・孤・卿・大夫・士をいふ、膸ニ音ロ

【綠漪】綠の「サザナミ」張率詠躍魚ニ應詔に「戲ー鱗隱ー繁藻、頻首承ー一碧漪ニ同じ、

【綠衣黃裏】貴賤所を易ふる義、詩經邶風綠衣篇に「綠兮衣兮、ー一ー一、心之憂ー矣、曷維其已」とあり、綠は蒼、黃に勝つの閒色、黃は中央土の正色なり、閒色は賤きも衣と爲り、正色は貴きも裏と爲る、皆其の所を失ふ、以て賤妾の尊顯にして、嫡妻の幽微なるに比す、綠衣黃裳も亦同じ、上を衣とし、下を裳とす、衣は正

色にして、裳は閒色なるべきに、今之に反す、また楚辭に「反表以爲ー裏兮、顚裳以爲ー衣」とあるも、亦貴賤所を易ふるの義、

【綠衣使者】鸜鵒（アウム）の異名、天寶遺事に「長安ノ豪民楊崇義ノ妻劉氏隣舍ノ兒李弁ト私通シ、同ジク謀リテ崇義ヲ害シ井中ニ埋ム、劉氏官府ニ訴フ、縣官所ー居ニ詣リテ檢校ス、架上ノ鸜鵒忽然トシテ曰ク、家主ヲ殺シシ者ハ李弁ナリト、遂ニ執ヘテ實ヲ得タリ、明皇鸜鵒ヲ封ジテー一ー一ー一ー爲ス」

【綠筠】「ミドリノタケ」筠はもと竹の青皮をいふ、轉じて竹の義とす、綠竹に同じ、白居易の詩に「廣砌羅紅藥、疎窗陰ー一ニ紅藥は芍藥なり、

【綠陰】「ミドリ」の「カゲ」白居易の詩に「步ー月怜ー清景、眠ー松愛ー一ー一ニ來鴉の病起詩に「春初一臥到ー秋深ー不見紅芳興ー一ー一ニ

【綠陰幽草勝ー花時】夏初綠陰の幽趣は、春日百花の「ミダレ」開く時に勝るをいふ、王安石の初夏卽事に石梁茅屋在ー溪碕ー、流水濺濺度ー兩陂ー、晴日煖風生ー麥氣ー、ー一ー一ー一ー一ー一ー

【綠芋】「サトイモ」沈約の竹園詩に「紫茄紛ー烟嫩、ー一ー參差ー王維の田家詩に「夕雨紅榴拆、新秋ー一肥」

【綠雲】「ミドリノクモ」李白の古風に「仙人ー一上、自道ー安期名」

また美人の黑髮に喩ふ、杜牧の阿房宮賦に「ー一擾ー擾ー梳曉鬢ー也」

【綠葉成陰子滿ー枝ニ滿ツ】（綠葉成陰子滿枝）麗情集に「杜牧湖州ニ遊ブ、刺史崔君ハ、素ヨリ厚ウスル所ロノ者ナリ、悉ク名姝ヲ致ス、殊ニ意ニ愜ハズ、牧曰ク願クハ水嬉ヲ張リ、人ヲシテ畢ク觀シメヨ、牧當ニ閉行シテ目ヲ寓スベシト、使君其ノ言ノ如クス、觀ル者堵ノ如シ、忽チ老姥アリ、碧髻ノ女ヲ引ク、年十餘歲、眞ノ國色ナリ（中略）牧曰ク、且ツ卽チ納レズ、當ニ後期ヲ爲スベシ、吾十年ノ後、此ノ郡ヲ爲メン、若シ來ラザレバ卽チ他ニ適グニ從カヘト、因リテ重幣ヲ以テ之ヲ結ブ、後テ十四年ニシテ郡ニ至ル、約スル所ロノ姝、已ニ人ニ從フ、三年ニシテ二子ヲ生メリ、之ヲ召サシム、母曰ク向ニ十年ヲ約シテ來ラズ、而シテ後チ之ヲ嫁ス、已ニ三年ナリト、牧首ヲ俛シテ曰ク、其ノ辭直ナリ、之ヲ强フルハ不祥ナリト、乃チ之ヲ遣ル、恨別ノ詩ヲ爲リテ曰ク、自是尋春去較遲、不レ須惆悵怨ー芳時ー、狂風吹盡深紅色、ー一ー一ー一ー一ー」

【力行】實行を力むる義、力は勉なり、史記儒林傳に

「爲治者不在多言、願——何如耳」魯の申公の言、

【綠眼】「ミドリノマナコ」岑參の胡笳歌送顏眞卿使赴河隴に「君不聞胡笳聲最悲、紫髯——胡人吹」

【綠蟻】「ヨキサケ」の異名、謝朓の在郡臥病詩に「嘉魚聊可薦、——方獨持」白居易の詩に「——新醅酒、紅泥小火爐」

【虜獲】連文釋義に「生得曰虜、斬首曰獲」

【綠鬢】「ミドリノ、ワゲ」鬢は總髮なり、白居易の閨婦の詩に「斜憑繡牀愁不動、紅綃帶緩——低」

【綠溪】「ミドリノタニ」岑參の詩に「瓜田傍——」

【綠蓑衣】「アヲキ、ミノ」にて、漁者の服をいふ、書言故事に「唐張志和詩、西塞山邊白鷺飛、桃林流水鱖魚肥、青箬笠綠蓑衣、斜風細雨不須歸」蒴一に箬に作る、韋莊の桐廬縣作に「白羽鳥飛殘子瀨、綠蓑人釣季鷹魚」

【力士】勇力ある人、韓非子に「少室周者、古之貞廉潔愼者也、爲趙襄王——」

【騄駬】周の穆王の名馬、轉じて駿馬の義とす、史記の趙世家に見ゆ、蘇軾の詩に「瘦馬識——、枯桐得雲和一斲一に耳に作る、史記秦本紀に見ゆ、

【力士石敢當】姓源珠璣に「五代劉智遠爲晉祖押衙、潞王從珂反、愍帝出奔過于衛州、智遠遣——袖鐵槌待、晉祖與愍帝議事、智遠擁入、石敢當格鬪而死、智遠誅殺帝左右、因燒傳國璽、石敢當生平逢凶化吉、禦侮防危、後人故凡橋路衝要之處、必以石刻其形、書其姓字、以捍民居」この說によれば五代の時の力士の名とす、されども異說あり（石敢當を見よ、

【力人】力ある人、左傳に「秦之——也」

【綠酒】「ヨキサケ」陶潛の詩に「清歌散新聲、——開芳顏」梁武帝の碧玉歌に「碧玉奉金杯、——助花色」

【綠綬】綠色の印綬（綬ハ官人ノ帶ブル印ノ環ヲ承ケ繫グ「ヒモ」漢官儀に「二千石以上銀印——、亦曰艾綬」

【綠樹】「ミドリノキ」王勃の益州淨惠寺碑に「飛泉瀑溜、蕩滌崩崖、——玄藤、網羅丘壑」許渾の閒居孟夏即事詩に「——蔭青苔、柴門臨水開」

【綠珠】梁氏の女、晉の石崇の愛妾、晉書石崇傳に詳かなり、庾信の春賦に「——捧琴至、文君送酒來」

【綠珠井】劉恂の嶺表錄異記に「——在白州雙角山下、昔梁氏之女有容貌、石季倫爲交阯採訪使、以眞珠三斛買之、梁氏之居、舊井存焉、耆老云、汲此井者、誕女必多美麗」

【綠水】「ミドリノミヅ」阮修上巳會詩に「澄澄——、瀉清非波」劉長卿の酬李侍御詩に「——瀟湘闊、青山鄂杜深」

【力政】武力を以て政を爲し、相攻伐するなり、漢書五行志に「天子弱、諸侯力政」とあり、また禮記に「五十不從——」とあるは力役の義なり、

【綠鬢】「ミドリノコケ」古今注に「菩或紫、或青、一名員蒘一名——」梁元帝の詠細草詩に「依稀若青苔」

【綠窓】貧女の住家をいふ（紅樓）を見よ、また綠色にて塗りたる「マド」にて、貧富に關せず、婦女の室の窓をいふ、李商隱の詩に「秦人昔富家、——明妙旨」

【綠窗前ニ滿チテ草除カズ】（綠滿窗前草不除）朱熹の詩の句（四時讀書）を參看せよ、

十八史略に「周惇頤茂叔、雅有高趣、牕前草不除、曰、與自家意思一般」また劉氏人譜に「明道先生窗前草茂、或勸之芟、明道曰、不可、欲觀造化生意」とあるに本づく、

【綠發】「ミドリノカミ」曹植の洛神賦に「迫而察之、灼若芙蕖出——」

【綠酷】「ヨキサケ」酷は、廣韻に「酒未ダ漉サザルナリ」韓翃の詩に「鴨下玉盤紅縷細、酒開金甕——濃」また水の綠色に喩ふ、楊萬里の詩に「一夜鳴春雨、諸灘漲綠」

【綠蛾】「ヨキサケ」の異名、謝朓の在郡臥病詩に「嘉魚聊可薦、——方獨持」白居易の詩に「——新醅酒、紅泥小火爐」

【綠鬢】「ミドリノ、ワゲ」鬢は總髮なり、白居易の閨婦の詩に「斜憑繡牀愁不動、紅綃帶緩——低」

【綠溪】「ミドリノタニ」岑參の詩に「瓜田傍——」

【綠蓑衣】「アヲキ、ミノ」にて、漁者の服をいふ、書言故事に「唐張志和詩、西塞山邊白鷺飛、桃林流水鱖魚肥、青箬笠綠蓑衣、斜風細雨不須歸」蒴一に箬に作る、韋莊の桐廬縣作に「白羽鳥飛殘子瀨、綠蓑人釣季鷹魚」

【綠樹】「ミドリノキ」王勃の益州淨惠寺碑に「飛泉瀑溜、蕩滌崩崖、——玄藤、網羅丘壑」許渾の閒居孟夏即事詩に「——蔭青苔、柴門臨水開」

【綠珠】梁氏の女、晉の石崇の愛妾、晉書石崇傳に詳かなり、庾信の春賦に「——捧琴至、文君送酒來」

【綠珠井】劉恂の嶺表錄異記に「——在白州雙角山下、昔梁氏之女有容貌、石季倫爲交阯採訪使、以眞珠三斛買之、梁氏之居、舊井存焉、耆老云、汲此井者、誕女必多美麗」

【綠水】「ミドリノミヅ」阮修上巳會詩に「澄澄——、瀉清非波」劉長卿の酬李侍御詩に「——瀟湘闊、青山鄂杜深」

【力政】武力を以て政を爲し、相攻伐するなり、漢書五行志に「天子弱、諸侯力政」とあり、また禮記に「五十不從——」とあるは力役の義なり、

【綠鬢】「ミドリノコケ」古今注に「菩或紫、或青、一名員蒘一名——」梁元帝の詠細草詩に「依稀若青苔」

【綠窓】貧女の住家をいふ（紅樓）を見よ、また綠色にて塗りたる「マド」にて、貧富に關せず、婦女の室の窓をいふ、李商隱の詩に「秦人昔富家、——明妙旨」

【綠窗前ニ滿チテ草除カズ】（綠滿窗前草不除）朱熹の詩の句（四時讀書）を參看せよ、

十八史略に「周惇頤茂叔、雅有高趣、牕前草不除、曰、與自家意思一般」また劉氏人譜に「明道先生窗前草茂、或勸之芟、明道曰、不可、欲觀造化生意」とあるに本づく、

【綠發】「ミドリノカミ」曹植の洛神賦に「迫而察之、灼若芙蕖出——」

【綠酷】「ヨキサケ」酷は、廣韻に「酒未ダ漉サザルナリ」韓翃の詩に「鴨下玉盤紅縷細、酒開金甕——濃」また水の綠色に喩ふ、楊萬里の詩に「一夜鳴春雨、諸灘漲綠」

【綠蟻】「ヨキサケ」の異名、謝朓の在郡臥病詩に「嘉魚聊可薦、——方獨持」白居易の詩に「——新醅酒、紅泥小火爐」

【綠鬢】「ミドリノ、ワゲ」鬢は總髮なり、白居易の閨婦の詩に「斜憑繡牀愁不動、紅綃帶緩——低」

【綠溪】「ミドリノタニ」岑參の詩に「瓜田傍——」

【綠蓑衣】「アヲキ、ミノ」にて、漁者の服をいふ、書言故事に「唐張志和詩、西塞山邊白鷺飛、桃林流水鱖魚肥、青箬笠綠蓑衣、斜風細雨不須歸」蒴一に箬に作る、韋莊の桐廬縣作に「白羽鳥飛殘子瀨、綠蓑人釣季鷹魚」

【力士】勇力ある人、韓非子に「少室周者、古之貞廉潔愼者也、爲趙襄王——」

【騄駬】周の穆王の名馬、轉じて駿馬の義とす、史記の趙世家に見ゆ、蘇軾の詩に「瘦馬識——、枯桐得雲和一斲一に耳に作る、史記秦本紀に見ゆ、

【力士石敢當】姓源珠璣に「五代劉智遠爲晉祖押衙、潞王從珂反、愍帝出奔過于衛州、智遠遣——袖鐵槌待、晉祖與愍帝議事、智遠擁入、石敢當格鬪而死、智遠誅殺帝左右、因燒傳國璽、石敢當生平逢凶化吉、禦侮防危、後人故凡橋路衝要之處、必以石刻其形、書其姓字、以捍民居」この說によれば五代の時の力士の名とす、されども異說あり（石敢當を見よ、

【力人】力ある人、左傳に「秦之——也」

【綠酒】「ヨキサケ」陶潛の詩に「清歌散新聲、——開芳顏」梁武帝の碧玉歌に「碧玉奉金杯、——助花色」

【綠綬】綠色の印綬（綬ハ官人ノ帶ブル印ノ環ヲ承ケ繫グ「ヒモ」漢官儀に「二千石以上銀印——、亦曰艾綬」

【綠樹】「ミドリノキ」王勃の益州淨惠寺碑に「飛泉瀑溜、蕩滌崩崖、——玄藤、網羅丘壑」許渾の閒居孟夏即事詩に「——蔭青苔、柴門臨水開」

【綠珠】梁氏の女、晉の石崇の愛妾、晉書石崇傳に詳かなり、庾信の春賦に「——捧琴至、文君送酒來」

【綠珠井】劉恂の嶺表錄異記に「——在白州雙角山下、昔梁氏之女有容貌、石季倫爲交阯採訪使、以眞珠三斛買之、梁氏之居、舊井存焉、耆老云、汲此井者、誕女必多美麗」

【綠水】「ミドリノミヅ」阮修上巳會詩に「澄澄——、瀉清非波」劉長卿の酬李侍御詩に「——瀟湘闊、青山鄂杜深」

【力政】武力を以て政を爲し、相攻伐するなり、漢書五行志に「天子弱、諸侯力政」とあり、また禮記に「五十不從——」とあるは力役の義なり、

【綠鬢】「ミドリノコケ」古今注に「菩或紫、或青、一名員蒘一名——」梁元帝の詠細草詩に「依稀若青苔」

【綠窓】貧女の住家をいふ（紅樓）を見よ、また綠色にて塗りたる「マド」にて、貧富に關せず、婦女の室の窓をいふ、李商隱の詩に「秦人昔富家、——明妙旨」

【綠窗前ニ滿チテ草除カズ】（綠滿窗前草不除）朱熹の詩の句（四時讀書）を參看せよ、

十八史略に「周惇頤茂叔、雅有高趣、牕前草不除、曰、與自家意思一般」また劉氏人譜に「明道先生窗前草茂、或勸之芟、明道曰、不可、欲觀造化生意」とあるに本づく、

——に

【綠髮】 李白の古風に「中有——翁、拔」雲臥松雪」熊皎の贈香尊師詩に「——童顏羽服輕、天台王屋幾經行」

【綠鬢】 「ミドリノウキクサ」「カタバミモ」青蘋に同じ、楚辭に「——齊業兮白芷生」白居易の池上清晨詩に「池幽——合、霜潔白蓮香」

【綠毛】 龜の一種「ミノガメ」蜀州志に「本州西河井產龜、甲上有——」「——如海苔」

また身に——の生ずる仙をいふ、皮日休の詩に「劉根昔成道、玆塢四百年、毵毵被其體、號爲——仙」

【綠茗】 「ヨキチヤ」朱慶餘の詩に「——香醒酒、寒燈靜照人」

【綠杨】 「ミドリノヤナギ」王融の古意詩に「巫山綵雲沒、沚上——稀」崔橹の詩に「——如髮雨如煙」

【綠野堂】 唐の裴度の別莊の名、舊唐書裴度傳に「度以年及懸車、王綱版蕩」不復以出處爲意、東都立第於集賢里、築山穿池、竹木叢萃、有風亭水榭梯橋架閣、島嶼迴環、極都城之勝概、又於午橋創別墅、花木萬株、中起涼臺、暑館、名曰——」引甘水貫其中、酾引脈分、映帶左右、度視事之隙、與詩人白居易劉禹錫酬宴終日、高歌放言、以詩酒琴書自樂、當時名士皆從之游」

【綠蘿】 「ミドリノツタ」郭璞の遊仙詩に「——結高林、蒙籠蓋一山」

また山の名、洞天福地記に「——山在武陵縣」

【綠林】 盜賊の異稱、漢書王莽傳に「南郡張霸、江夏羊牧、王匡等起雲杜——」號曰下江之兵」後漢書劉聖公傳に「諸ノ亡命、綠林山中ニ聚リ藏ル」とあり、通俗編に「劉元傳ノ注ニ謂フ、——ハ地名、荊州當陽縣ニ在リ、李涉ニ「——豪客夜知聞」ノ句アリテヨリ後人竟ニ此ノ輩ヲ稱シテ——ト爲ス」

【綠醽】 美酒をいふ、左思吳都賦に「飛——輕軒而酌——」一方「雙轡而賦珍羞」次條に同じ、

【醁醽】 美酒（ヨキサケ）なり、歲華紀麗に「——瀲灩於蓍杯」注に「晉咸康四年十二月丙子正旦、會百寮、增賜醁醽酒人二升」醽一に醽に作る同じ、醁醽ともいふ、

【呂刑】 書經の周書の篇名、呂侯、周の穆王の司寇たり、贖刑の法を作る、之を——といふ、呂は姓、甫國の侯たり、故に一に甫刑ともいふ、

【閭巷】 「マチナカ」閭は里門、巷は曲りて せまき「マチ」

「——之士、欲砥行立名者、非附青雲之士、安能施于後世哉」

【旅次】 「タビノヤドリ」易の旅卦に「六二、旅即次」とあり、杜甫の句に「——秋」二十六卷、一に呂覽ともいふ、秦の呂不韋撰すと題す、實は其の賓客中智略の士の集むる所ろなり、凡そ十二紀八覽六論に大別す、細分すれば一百六十篇となる、不韋の人物は道ふに足らざれども、この書雜言を裒合し、大抵儒書に據るもの十の八九、參するに道家墨家の理に近き者を以てするもの十の一二、諸子に較ぶれば頗る醇となす、高誘の註亦多く古義を明にせり（呂不韋）を參看せよ、

【旅進旅退】 旅は衆なり、衆と共に進退する義、禮記の樂記に「今夫古樂、進旅退旅」註に「旅ハ猶ホ俱ノ如シ」王禹偁の侍講院記に「有無毀無譽、——、竊位而苟祿、備員而全身者」亦無所取焉」

【呂尙】 史記の周紀に「——ト云フ者アリ、東海上ノ人、窮困シテ年老イ、漁釣シテ周ニ至ル、西伯（文王）將ニ獵セントス、之ヲトスルニ、曰ク、龍ニアラズ、彪ニアラズ、熊ニアラズ、羆ニアラズ、獲ル所ロハ霸王ノ輔ナラント、果シテ——ニ渭水ノ陽ニ遇フ、與ニ語リテ大ニ悅ビテ曰ク、吾ガ先君太公ヨリシテ曰ク、當ニ聖人ノ周ニ適クアルベシ、周因リテ以テ興ラント、子ハ眞ニ是カ、吾ガ太公、子ヲ望ムコト久シト、故ニ太公望ト號シ、載セテ與ニ俱ニ歸リ、立テテ師トナス、之ヲ師尙父トイフ」とあり、十訓抄第二に「——が周文の車の右に乘りし、卽ち世を治むる器たりき」とあるはこの事をいふ、渭水は渭州渭源縣烏鼠山に出で、同州馮翊縣に至り河に入る、陽とは水北なり、

【呂祖謙】 字は伯恭、東萊の六世の孫、祖の好問、高宗に隨ひて南渡し、仕へて尙書右丞に至り、居を金華にトす、祖謙早く高第に擢でられ著作郎直祕閣に歷官し道を婺に倡へ、一代の宗師たり、東萊と號す、著すところ左氏博議、大事記、文集等竝に世に行はる、淳熙八年卒す、年四十五、成と謚す、

【呂大臨】 字は與叔、大忠の弟、程頤に學ぶ、謝良佐、游酢、楊時と程門に在りて四先生と號す、六經に通じ、尤も禮に邃し、著すところ克己銘諸篇あり、元祐中祕書正字となる、

【呂東萊】 東萊博議の著者呂祖謙を見よ、

【閭丘式】 （式閭式は、車前の橫木、敬する所ろあれば、俯して式に憑る、これより轉じて式を以て敬の義

とす、閭は里門なり、その人の里門を過ぐるとき、敬禮を施すをいふ、書經武成に「式商容閭ニ」

【閭ニ倚リテ望ム】（倚閭而望）戰國策に「王孫賈年十五、事閔王、王出走、失王之處、其母曰、女朝出而晚來、則吾倚門而望、女暮出而不還、則吾倚閭而望、今事王、王出走、女不知其處、女倘何歸」とあり、閭は里門なり、家を出でて里門に倚りて、子の歸るを望み待つ義、

【呂不韋】陽翟の人、秦の莊襄王元年丞相となり、文信侯に封ぜらる、士を致して、食客三千人に至る、不韋乃ち客をして聞くところを著さしめ、十二紀八覽六論と爲す、名づけて呂氏春秋といふ、以爲らく天地萬物古今の事を備ふと、千金を市に懸け一字を增損する者には之を與へんと、始皇十年相國を免ぜられ、蜀に徙されて自殺す、

【呂本中】字は居仁、公著の曾孫にして、好問の子なり、宋の宣和六年樞密院編修官となる、紹興六年、特に進士出身を賜ふ、累官中書舍人兼侍講に至る、本中、性清約、詩詞に工なり、かつて曰く「大抵後生ノ學ヲ爲スニハ、先ヅ須ラク學ヲ爲ス所以ノ者ハ、何事ナルカヲ理會スベシ、一行、一住、一語、一默、須ラク盡ク道理ニ合ハンコトヲ要スベシ」と、秦檜のために黜けらる、卒して文清と諡す、著すところ師友淵源錄・春秋解・童蒙訓等の書あり、

【呂蒙正】字は聖功、宋の河南の人、太宗の時進士第一に擧げらる、三たび相位に居り、許國公に封ぜらる、子の行簡、龍圖閣直學士に至る、劉氏人譜に「呂蒙正初メテ參知政事トナリテ、朝堂ニ入ル、朝士籠內ニ在リテ之ヲ指シテ曰ク、此ノ小子モ亦參政カト蒙正聞カザル爲シテ之ヲ過グ、同列怒リテ蒙正ヲ詬ル者ノ官位姓名ヲ詰ラントス、蒙正遽ニ之ヲ止ム、朝罷ンデ同列猶ホ不平ナリ、皆究メ問ハザルヲ悔ユ、蒙正曰ク然ラズ、一タビ其ノ姓名ヲ知ルトキハ、終身忘ルルコト能ハズ、固ヨリ之ヲ知ルコトナキニ如カズト、咸其ノ大量ニ服セリ」

【閭門】里門なり、漢書于定國傳に「始定國父于公、其ー壞、父老方共治之、于公謂曰、少高大ー、令容ニ駟馬高蓋車ー、我治ー獄多ー陰德、未ー嘗有ー所冤、子孫必有ー興者、至ー定國ー爲ー丞相ー、永爲御史大夫ー封ー侯傳ー世云ー」

【呂覽】（呂氏春秋）を見よ、

【閭里】「マチナカ」史記袁盎傳に「與ー一浮沈ー里門ー」

閭といふ、

【呂梁】莊子に「ー一懸水三十仞、流沫九十里」水經の注に「呂縣對ー泗水ー、泗水之上有ー石梁焉、故曰ー一ー」懸濟瀾滸、實爲ー泗險ー」また金の山東西路徐州呂梁鎭は、今の江蘇徐州府銅山縣の東南六十清里、

【膂力】說文に「膂ハ脊骨ナリ」玉篇に「古與ー呂同ー」書經君牙に「作ー股肱心膂ー」ーーは「セボネノチカラ」

【離落】人心の「ソムキサルコト」離畔に同じ、國語の吳語に「民人ーー」

【離落】「マガキ」柳宗元の田家詩に「ーー隔ー煙火ー農談四鄰夕」劉禹錫の深泰詩に「菜園ーー短、遙見ー桔槔ー斜」

【理亂】治亂に同じ、唐人高宗の諱を避け、治の字、皆易へて理と爲す、韓愈の送ー李愿歸ー盤谷ー序に「ーー不知、黜陟不ー聞ー」抱朴子に「量ーー以卷舒ー、審ー去就ー以保ー身者知ー人也」

【離離】秀でて垂るる貌、詩經王風黍離篇に「彼黍ーー」また小雅漸漸篇に「其桐其椅、其實ーー」また裂けみだるる貌、楚辭に「曾哀愁ー心ーー兮」また親まざる貌、荀子の非相に「ーー然」

【李良年】字は武曾、秋錦と號す、詩文は朱竹垞と名を齊うし、朱李と稱せらる、また尺牘に工なり、秋錦山房集あり、

【李陵】字は少卿、廣の從子、初め臨沅令となる、邑人之を思慕す、後ち匈奴と戰ひ、矢盡きて降る、司馬遷以て國士の風あり、古名將と雖も之に過ぎずとなす、

【李陵悲】胡曾の詩に「塞北草生蘇武泣、隴西雲起ー一ー」

【驪龍頷下ノ珠】止觀に「明月神珠、在ー九重淵內ー驪龍頷下ニ（驪珠）を見よ、

【李龍眠】（李伯時）を見よ、

【李令伯】（陳情ノ表）を見よ、

【履歷】由緒（ユキショ）の義、また來歷の意、封氏聞見錄に「朝廷百司諮ー、皆有ー壁記ー、原ー其作意ー、蓋欲ー著ー前政ーー、發ー將來健羨ー也」

【離婁之明】離婁は古（或ハイフ黃帝ノ時ノ人）の目のよく見ゆる人の名（離ー朱之明）を見よ、

累

【誄】 死者の生前の功徳を稱述するなり、またその文詞をいふ、劉熙の釋名に「誄ハ累ナリ、ソノ事ヲ累列シテ之ヲ稱スルナリ」左傳哀公十六年に「夏四月、己丑孔丘卒、哀公誄之曰、昊天不弔、不愁遺一老、云云」文體明辨に「周官誄ヲ諡ンデ以テ諡ヲ定ム、蓋シ古ノ誄ハ本諡ヲ定ムルガ爲メニシテ、今ノ誄ハ唯哀ヲ寫スルガ爲メナリ貴賤長幼ヲ論ゼズ、其ノ體ハ先ヅ世系行業ヲ述ベテ末ニ哀傷ノ意ヲ寓ス、所謂傳ノ體ニシテ始ヲ榮ニシ、終ヲ哀ニスルナリ」

【壘】 隣壁の事をつかさどる官名、後漢書に「時有長人巨無霸、長一丈、大十圍、以爲——」

【累葉】 葉は代なり、世代の義、——は累代に同じ、後漢書耿弇傳に「耿氏——以功名自終」

【類】 絕ナ倫ヲ離ル (絕類離倫)「ナカマ」より特に優れるをいふ、韓愈の進學解に「——、優入聖域」

【壘ヲ廢ス】 (廢壘)を見よ、

【類ヲ以テ聚ル】 (以類聚)善惡各〻その類を以てあつまる義、易の繫辭上傳に「方以類聚、物以群分」方とは事情の向ふところをいふ、

【累葉】 「アヤフキ」に喩ふ、累卵に同じ、劉向說苑に「晉靈公作九層臺、荀息曰、臣能累十二博棊、加九卵其上、公曰、危哉、息曰、復有危於此者、九層之臺、三年不成、國用空虛、社稷將亡也、靈公卽壞其臺」

【壘塊】 胸中の不平をいふ、世說に「晉阮籍胸中——、故須酒以澆之」

【涙痕】 「ナミダ」の「アト」李白の怨情詩に「美人捲珠簾、深坐嚬蛾眉、但見——濕、不知心恨誰」

【類聚】 類似せる者を一つに聚むるなり(類ヲ以テを見よ、

【纍臣】 囚繫せらるる者なり左傳僖三十三年に「不以——、——」

【涙珠】 美人の「ナミダ」に喩ふ、黃滔の閨怨の詩に「——流盡玉顏衰」

【累世ノ通家】 (通家)を見よ、

【縲紲】 縲は黑き索(ナハ)なり、紲は「ツナグ」なり、縲に同じ、古は獄中にて黑索を以て罪人をつなげり、故に囚獄の義とす、論語公冶長篇に「雖在——之中、非其罪也」

【累重】 妻子財產をいふ、漢書匈奴傳に「悉遠其——於余吾水北」

【累帝】 累は「カサナル」義、——は世世の天子をいふ、列聖に同じ、晉書赫連載記に「長安——舊都」

【累德】 善行のさまたげとなる義にて、惡しき行をいふ、莊子に「惡欲喜怒哀樂六者——也」また善き行をかさぬる義、史記に「西伯積善、——」

【累卵之危】 卵をかさねたる如く、危きをいふ、司馬相如の喩巴蜀檄に「去——、就永安之計、豈不美與(危キコト累卵)を參看せよ、

【羸縲】 羸憊(ツカレヨワル)して意を失ふ貌、禮記の玉藻に「喪容——」

また連り繫がるる貌、禮記の樂記に「——乎端如貫珠」漢書石顯傳に「印何——、綬若若耶」陸游の南門散策詩に「野蔓不知名、丹實何——」

【纍纍】 (纍纍若)喪家之狗)纍纍は志を得ざる貌、喪家は新に人を喪ひ、家人哀み荒みて、犬に飮食を與へず、故に纍纍然と、志を得ざるなり、史記孔子世家に「東門有人、其顙似堯、其項類皐陶、其肩類子產、然自腰以下、不及禹三寸、——」

【縷解】 細かに分解する義、唐古今注序に「凡歷代之史百代之書、聾鎪析鉄、冰渙——」韓愈の貞曜先生墓誌に「其爲詩劇目鉥心、刀迴——、云云」縷析に同じ、

【屢空】 (屢空)空シ貧しくして「タビタビ」家財の空乏になる義、論語先進篇に「子曰、回也其庶乎、——」庶は近きなり、道に近く、殆ど道と一となるの意、

【鏤山】 山を鑿ちて路を通ずる義、漢書司馬相如傳に「鏤靈山」

【僂指】 僂は一音ロウ屈なり、指を折り「カガメ」て數ふるなり、荀子儒效に「雖有聖人之智、未能——也」

【盧遮那】 毘——の略、毘は徧なり、遮一に舍に作る、梵語、光明徧照の義、卽ち大日如來をいふ、徧一切處とも譯す、卽ち煩惱の體淨く、衆德悉く備り、身土相稱ひ、一切處に徧きこと日光の照さざる處なきが如き義、

【縷述】 「コマカ」に陳述する義、宋史天文志に「——而申言之」

【留守】 (留守)を見よ、

【縷析】 細かに「ワケル」王諲杜礎賦の字面、

【縷切】 「サシミ」などを細かに「キル」潘岳の西征賦に「華魴躍鱗素鱒揚鬐、雍人——、鸞刀若飛」

【流轉】 人の生死、事物の興亡等斷えず轉變して休まざるをいふ、輪廻と通用す、華嚴經に「一切衆生界、——生死海ニ

【縷冰】 冰は碎け易く、融け易し、冰に縷むるは徒に勞して功なきに喩ふ、鹽鐵論に「內無其質、而外學其文、若畫脂鏤冰、徒費日工耳」

【流布】 水の流れ布く如く、普く「ユキワタル」法華經に「五百歲中、廣宣——」

【流浪】 浮浪に同じ「プラプラスル」鮑照の詩に「——漸冉經三齡」

【流離】 (琉璃)を見よ、

【琉璃】 玉の類、七寶の一、漢書西域傳に、流離に作る、晉書王濟傳に「性豪侈、帝嘗幸其宅、供饌甚豐、悉貯——器中」魏略に「大秦國多赤白黑綠黃青紺縹紅紫十種——」權德輿の石帆山靈泉記に「淨如醍醐、瑩若——」杜陽雜編に「德宗時、吳明國貢蠻蜂蜜、其蜜色碧、貯白玉椀、表裏如碧琉璃、食之長壽」李涉の詩に「水似晴天天似水、兩重星點碧琉璃」孟郊の詩に「忽驚紅琉璃、千艷萬艷開」白居易の詩に「雙瓶白琉璃

類句 野客叢書

唐人詩句、有採取前人之意、亦有偶然暗合者、如李白詩、河陽花作縣、秋浦玉爲人、武元衡詩、河陽縣裏玉人閒、姚合詩、文字當酒杯、賈島詩、燈下雨華卷、悲愁當酒杯、許渾詩、百年便作千年計、李後主詩、人生不滿百、剛作千年盡、柳子厚詩、欸乃一聲山水綠、張文昌詩、離琴一聲罷、山水有餘韻、姚合詩、買石得花饒、王建詩、買石得雲饒、王維詩、琪樹瑤臺丹陛、諸光羲詩、琪樹瑤臺文陛、杜牧之詩、乞酒緩愁腸、武元衡詩、欸酒換離愁、劉叉詩、侍兒能勸酒、武客解彈琴、玉無功詩、老要能勸酒、少子解彈琴、杜子美詩、試吟青玉案、衣染紫羅囊、劉夢得詩、學堂背玉案、綠服紫羅囊、孟東野詩、種秫耕白水、貢冰斫青山、許渾詩、雨中耕白水、雲外斷青山、此類甚多、

【禮】 人の履み行ふべき、外形上の秩序、品節をいふ、說文に「一ハ履ナリ、神ニ事ヘ福ヲ致ス所以ナリ」釋名に「一ハ體ナリ、其ノ事體ヲ得ルナリ」五禮は吉・凶・軍・賓・嘉をいふ、呂氏春秋に「禮煩則不莊、業繁則無功」史記の自序に「禮禁未然之前、法施已然之後」論語八佾篇に「禮與其奢也寧儉、喪與其易也寧戚」淮南子に「禮者所以救淫也、樂者所以救憂也」また曰く「禮豐不足以效愛、而誠心可以懷遠」鹽鐵論に「禮義立則耕者讓於野、禮義壞則君子爭於朝」禮は古文なり、

【令愛】 人の女を稱していふ、剪燈新話に「今則謹携——」(同此歸寧(愛玉)を參看せよ、

【禮豈我ガ爲メニ設ケンヤ】 (禮豈爲我設邪)禮法は、我輩のために設けたるにあらずとて、禮を輕んじていへるなり、晉書阮籍傳に「籍嫂嘗歸寧、籍相見與別、或譏之、籍曰、——」(白眼)を見よ、

【靈囿】 文王の臺を靈臺といふ、その臺下の囿を——といふ、詩經靈臺篇に「經始靈臺、經之營之、庶民攻之、不日成之、經始勿亟、庶民子來、王在——、麀鹿攸伏、麀鹿濯濯、白鳥鶴鶴、云云」

【令尹】 周代に於ける、楚の國の卿相の「トナヘ」尹は正なり、論語に「——子文」

【零雨】 零は落なり、徐雨をいふ、詩經豳風に「零雨其濛」濛は微雨なり、

【靈雨】 降るべき時に降る善き雨なり、詩經の鄘風定之方中篇に「——既零」

【嶺雲】 「タウゲノクモ」柳宗元の詩に「凝情江月落、屬思——飛」

【靈曜】 日の異名、陸機の演連珠に「——朝覲、稱物納照」

【靈液】 露をいふ、張彥勝賦に「露者天地之——」

【黎ヲ杖ツク】 (杖藜)黎は「アカザ」葉は茹とし、莖は杖とす、卽ち「アカザ」の杖をつく義、史記留侯世家の注に「黃石公鬚眉皆白シ、丹藜ヲ杖ツキ、赤烏ヲ履ム」杜甫の詩に「明日看雲還——」

【領ヲ引ク】 (引領)首を延ばして遙に望む、切に希望する事ある義、孟子梁惠王下に「天下之民、皆——而望之矣」領は「ウナジ」「クビ」

【醴ヲ設ク】（設醴賓客を待遇するに厚く意を用ふる義、漢書楚元王交傳に「元王敬禮申公等、穆生不嗜酒、元王每置酒常爲穆生設醴」醴は甘酒なり、

【醴ヲ以テ海ヲ測ル】（以醴測海見る所の極めて淺薄なるに喩ふ、醴は瓠瓢なり、漢書東方朔傳に見ゆ、文選の註には「醴ハ蚌蛤ナリ」と、一解に、蚌の殼なりと、管ヲ以テ天ヲ窺フ）を見よ、

【厲階】階は梯なり、「ハシゴ」厲は怨なり、怨を招く階梯をいふ、詩經大雅桑柔篇に「誰生——、至今爲梗」梗は病なり、また禍端の義、詩經大雅瞻卬篇に「婦有長舌、維——之——」

【藜羹】「アカザ」の「アツモノ」粗食をいふ、韓愈の詩に「——尙如此、肉食安可嘗」蘇軾の初秋寄子由詩に「——對書史、揮汗與子同」

【厲鶚】字は太鴻、樊榭と號す、清の錢塘の人、康熙五十九年の舉人、乾隆元年博學鴻詞に舉げらる、最も詩に長ず、幽僻孤潔一家を成す、著すところ樊榭山房集あり、乾隆十七年卒す、年六十二、

【禮樂】禮は行を制して身を修めしむる所以のもの、樂は、心を和らげしむる所以のものなり、孝經に「移風易俗莫善於樂、安上治民莫善於禮」禮記の樂記に「樂者天地之和也、禮者天地之序也、和故百物皆化、序故群物皆別」

【禮勝テバ則チ離ル】（禮勝則離禮記に「樂者爲同、禮者爲異、同則相親、異則相敬、樂勝則流、——」と、註に「流トハ、合行シテ敬セザルヲイヒ、離ハ、析居シテ和セザルヲイフ」

【令甲】法令の首章、漢書宣帝詔に「——死者不可復生」注に「令ニ先後アリ、故ニ——令乙、令丙トイフ、今ノ第一第二第三篇ノ如シ」因りて廣く政令の義とす、宋史の楊時傳に「凡元祐之政事、著在——」

【令儀】成儀の善きをいふ、詩經に「豈弟君子、莫不——」

【黎祁】豈は愷に同じ、

【黎祁】豆腐の異名、陸游の詩に「枕盤堆連展、洗鼏煮——」自注に「連展淮人以名麥餌、——蜀人以名豆腐」

【冷、肌ニ透ル】（冷透肌）冷氣が肌に透るをいふ、司馬光の中秋の詩に「烏皮几穩風侵簟、白玉樓高——」

【厲禁】「キビシク、サシトメル」嚴禁に同じ、周禮の司禮の字面

【囹圄】牢獄なり、爾雅に「囹ハ領ナリ、圄ハ禦ナリ、囚徒ヲ領錄シテ、禁禦スルナリ」とあり、風俗通に「夏ニハ夏臺トイヒ、商ニハ羑里トイヒ、周ニハ囹圄トイフ」

【囹圄空生ズ】（草囹圄ニ）を見よ、

【囹圄空シ】罪を犯す者なきをいふ、管子に「倉廩實而——、賢人進而姦民退」王褒の頌に「周公躬吐握之勞故有囹圄空之隆」

【藜蕘】黎は「アカザ」蕘は豆の葉、粗食をいふ、漢書司馬遷傳に「糲粢之食、——之羹」淮南子に「粢糲粢之飯、——之羹」阮籍の詠懷詩に「甘彼——食、樂是蓬蒿廬」

【冷官】卑き職をいふ、杜甫の贈鄭廣文」詩に「諸公衮衮登臺省、廣文先生官獨冷」また張籍の詩に「年長身多病、獨宜——作——」

【伶官】樂官なり、新五代史記に「——傳」あり（伶人）を見よ、

【令兄】己の兄をいふ、後世は人の兄を稱す、詩經小雅角弓篇に「此令兄弟、綽綽有餘裕」令は善なり、

【厲揭】水を涉るをいふ、衣を以て水を涉るを厲といひ、衣を褰げて涉るを揭といふ、詩經の衞風匏有苦葉篇に「深則厲、淺則揭」論語憲問篇に「鄙哉硜硜乎、莫己知也、斯已而矣、深則厲淺則揭」とあるは、世の中を渡るは、水を渡るに、深くば褌子（フンドシ）の如く、淺くば衣を攝げて涉り、而るに孔子は變通を知らずとて、荷蕢隱者の之を譏りたるなり、

【黎元】庶民をいふ、史記文帝紀の注に「古ハ人ヲ謂ヒテ善人トイフ、善ニヨリテ元トナス、故ニ——トイフ」一解に「黎ハ黑ナリ、元ハ首ナリ、黔首ト同ジ」と、漢書郊祀志に「大路所歷、——不知」潛夫論に「天之立君、蓋以誅暴除害利——也」

【黎獻】獻は賢なり、——は、庶民中の賢き者をいふ、書經益稷に「萬邦——、共惟帝臣」

【黎元資】人民どもの賴みとする「タカラ」舊唐書李火傳に「江南水鄉、採捕爲業、魚鼈之利、——所資」

【鴒原之情】兄弟の情愛をいふ（鶺鴒原ニ）を見よ、

【冷齋夜話】十卷、宋の釋惠洪（字ハ覺範、筠州ノ人）撰す、この書已の見聞せし所ろを雜記す、就中詩話十中八九に居る、和版あり、

【麗藻】美しき文を稱す、文選の陸機の文賦序に「嘉——之彬彬」

また書名、明の鄧百拙の原選、金石絲竹匏土革木に分ちて典故詞藻を類記す、安永三年の和版あり、

【令子】頴書纂要に「人ノ子ヲ稱シテ——トイヒ、又

令岡・令郎トモイフ」「ゴシンク」

【荔子】 荔枝の實なり、韓愈の羅池廟碑に「——丹兮蕉黃」蘇軾の新年作に「——幾時熟、花頭今已繁」次條を見よ、

【荔枝】 熱帶地方の喬木に生ずる果、素乾して舶來す、形小さき雞卵の如く外皮に初生の松毬の如き皺あり、色赤し、皮の厚さ肉核共に龍眼に似たり、廣志に「——樹高五六丈、大如桂樹、綠葉蓬蓬、冬夏榮茂、青華朱實、大如鷄子、核黃黑似熟蓮子、實白如肪、甘而多汁、似安石榴云云」本草經に「——通神益氣、多食亦不傷人」後漢書章帝紀に「南海獻龍眼——十里一置、五里一候、奔騰阻險、死者繼路」唐書貴妃楊氏傳に「貴妃嗜ニ生レ、——ヲ好ム、南海ノ——ハ蜀ニ勝レリ、必ズ之ヲ生致セント欲ス、乃チ驛傳ヲ置キ、馳驟スルコト七日夜、京ニ至ル、人馬俱ニ路ニ斃ル百姓之ヲ苦ム」蔡襄に——譜あり、蘇軾の詩に、

羅浮山下四時春、盧橘楊梅次第新、日啖——三百顆、不妨長作嶺南人、

【麗辭】 「ウルハシキ」「コトバ」皇甫謐の三都賦序に「引而申之、故文必極美、觸類而長之、故辭必盡麗」

【靈時】 「マツリノニハ」時は止なり、神靈の依り止まるところなり、司馬相如の句に「遊彼——」

【靈芝】 菌の一種、山中樹下石閒に生ず、松茸に似て莖の色、紫赤にして光あり、蓋の面は黑褐に、背は淺褐微白にして刻なし、蓋多く竝びかさなりて雲の如くなるなり、莖に枝あるもあり、皆堅くして食ふべからず、和名「サイハイダケ」「マンネンダケ」說文に「芝ハ神草」古瑞命記に「王者慈仁則芝草生」班固の——歌に「因露寢兮産——象二德一兮應瑞圖、延壽命兮光二此都一」古今注に「——一名壽濕、一名希夷」金芝・紫芝・絳芝・玉芝・神芝・華芝・祥芝・瑞芝等と連用す、拾遺の(紫芝)を參看せよ、

【糲粢】 糲音ラツ(糲粢)を見よ、

【伶人】 左傳成九年の註に「黃帝ノ世、伶倫音樂ヲ造ル、故ニ樂官ヲ伶人伶官ト稱ス」晉書戴逵傳に「逵對使者、破レ琴曰、戴安道不レ爲二王門伶人一」

【厲人】 厲は醜惡なり「キハメテ、ミニクキ」人、莊子天地篇に「厲之人、夜半生二其子一、遽取レ火而視レ之、汲汲然唯恐二其似一己也」

【麗人】 美人をいふ、杜甫の麗人行に「三月三日天氣新、長安水邊多——」

【靈辰】 人日をいふ、正月七日の節句、人は萬物の靈なればいふ、李嶠の詩に「三陽徧應節、七日最——」

【靈車】 「ヒツギ」を載せたる車、文公家禮に「——至レ墓、輀車・喪車皆同じ、

【嶺上】 「タウゲ」の上、陶弘景の詩に「山中何所レ有、——多二白雲一」

【醴酒】 「アマザケ」「ヒトヨザケ」說文に「——ハ一宿シテ熟スル也」禮記に「始レ飲レ酒者、先レ飲二——一」蘇軾の詩に「穆生貴二——一、先見我不レ如」

【醴酒設ケズ】 (醴酒不レ設)人を待遇するの禮貌、衰ふるをいふ、漢書楚元王世家に「初メ楚ノ元王申公等ヲ敬禮ス、穆生酒ヲ嗜マズ、元王置酒スル每ニ、常ニ爲メニ醴ヲ設ク、王戊位ニ卽クニ及ビ、常ニ設ク、後チ設クルコトヲ忘ル、穆生退キテ曰ク、以テ逝クベシ、醴酒設ケズ王ノ意怠ル」(醴ヲ設ク)を見よ、

【隸書】 楷書をいふ、漢書藝文志に「秦時、始造二——一、起二於官獄多事一、苟趣二省易一施二之於徒隸一也」王海に「唐ノ六典ノ書學ノ注ニ、字體六アリ、五ニ曰ク、——、典籍表奏公私ノ文書ニ用フルトコロ、庾肩吾曰ク、——ハ今ノ正書ナリ、張懷瓘イフ、——ハ秦ノ程邈造ル、字皆眞正、亦眞書トイフ、唐ヨリ以前、皆楷字ヲ謂ヒテ——トナス、歐陽修ノ集古錄、誤リテ八分ヲ以テ——トナス」と、我が國にても、この誤を承けて——は卽ち楷書たることを知らざるもの少からず、

【隸卒】 書斷に「秦ノ下邽ノ人程邈、字ハ元岑始メ縣ノ獄吏トナリ、罪ヲ始皇ニ得テ雲陽ノ獄中ニ幽繫セラル、思ヲ覃スルコト十年ニシテ小篆ヲ易ヘテ——三千字ヲ爲リ、之ヲ奏ス、始皇用テ御史トナス」

【令色】 論語學而篇に見ゆ(巧言——)を見よ、

【飯水】 「カメノミヅ」史記高祖紀に「秦ハ勝之國、帶二河山之險一、縣隔千里、持戟百萬、秦得二百二一焉、地勢便利、其以兵下一於諸侯一譬猶二高屋之上一建二瓴一——也」

【醴水ノ交】 醴は、甘酒なり、一宿して成る者なり、濃厚なれども、飽き易し、君子の交は、水の如く淡けれども、久しくかはることなきに喩ふ、禮記の表記に「君子之接如レ水、小人之交如レ醴、君子淡以成、小人甘以壞」莊子山木篇に「君子之交、淡若レ水、小人之交、甘若レ醴、君子淡以親、小人甘以絕、彼無レ故以合者、則無レ故以離」

【禮數】 名位に相應する所ろの禮儀をいふ、左傳に「名位不同、禮亦異數」また易の節卦に「君子以制二數度一議二德行一」とある疏に「數度ハ、尊卑禮命ノ多少ヲイフ」唐書裴耀卿傳に「李林甫嗤曰、班爵與レ公同而——異ナス、歐陽修ノ集古錄、誤リテ八分ヲ以テ——ト

何也」また韓愈の桃源圖詩に「爭持酒食來相餽、――不同榕狙異」

【令正】人の妻を稱す、類書纂要に「人ノ妻ヲ稱シテ、尊閫トイヒ、又――令尊・尊正・相正トモイフ」

【笭箵】釣に用ふる「チイサキカゴ」字彙に「――ハ小籠ナリ、大唐新語ニ漁具スベテ――トイフ」唐書元結傳に「能帶――ニ皮日休の――詩に「朝空――去、暮實――歸」

【冷笑】冷は冷遇の冷なり「アザワラヒ」南史齊樂預傳に「人笑祐公、至今齒冷」とあるは、久しく口を開いて笑ひ、齒の冷かなるを覺ゆる義、

【靨𪏭】遠を望み敵を「ウカガフ」ために門上にたてたる高樓を𪏭といふ、莊子徐無鬼篇に見ゆ、史記の陳涉世家の註に「樓一ニ譙ト名ヅク、故ニ美麗ノ樓ヲ謂ヒテ――トナス」と「ヤグラ」をいふ、白帖に「魏武有――樓」釋名に「魏ニ――アリ、越ニ飛翼アリ、漢ニ井幹アリ、云云」

【礪石】「トイシ」の一種「アラト」山海經中山經に「陰山多――ニ」

【泠然】清らかなる貌にも「ヒヤヤカナル」貌にも用ふ、水又は風の聲に用ふ、轉じて輕妙の義とす、莊子逍遙遊に「列子御レ風而行――善也」晉書裴綽傳に「善ノ言玄理、音詞清暢――若琴瑟ニ泠泠ニ同じ、

【醴泉】「アマザケ」の如き味する泉をいふ、禮記の禮運に「故天降甘露、地出――ニ」錦字箋に「朝廷清明ナレバ――出ヅ、漢ノ宣帝三年ノ詔ニイフ、――流滂、枯槁榮茂ト、光武ノ時――京師ニ出ヅ、飲ム者痼疾皆愈ユ」六帖に「――ハ美泉ナリ、水ノ精ナリ（中略）黃帝ノ時、――ヲ以テ漿トナス、堯ノ時、德茂ンニ清平ナレバ――出ヅ、夏后ノ時、俊乂官ニ在レバ、――出ヅ」漢書王莽傳に「甘露從天下、――自地出」白虎通の封禪に「――美泉也、狀若醴酒、可以養老也」

【鑫測】淺見の義（鑫ヲ以テ）を見よ、

【靈臺】精神の「アリドコロ」靈府に同じ、莊子庚桑楚篇に「不可レ內於――ニ」また文王の臺をいふ、詩經大雅靈臺篇に「經始――」「經之營之」とあるは、民が文王の靈德を樂みて稱せしなり、また廣く天子の臺をいふ、左傳に「衞侯爲――于藉圃」服虔の注に「天子ニ――トイヒ、諸侯ニ觀臺トイフ」

また天文雲氣などを望む臺の名、後漢書馬融傳の注に「――望氣之臺也」

【麗澤ノ契】文學道義を以て交るをいふ、易の兌卦の象傳に「麗澤兌、君子以朋友講習」麗澤とは相附麗し、交り相浸潤滋益するの象あり、故にいふ、麗一音リ

【靈鼉之鼓】「スグレタル」鼉、鼉は鱷に同じ、蜥蜴に似て長丈餘、鎧の如き甲あり、鰐の類なり、その革にて張りたる太鼓をいふ、李斯の諫逐客書に「建ニ翠鳳之旗ヲ樹――ニ」

【靈蛇ノ珠ヲ握ル】（握靈蛇之珠こすぐれたる文才を有するに喩ふ、靈蛇之珠は隋侯之珠の一名なり（隋侯ノ）

【荔丹】荔枝の子の丹きをいふ、蘇軾の潮州韓文公廟碑に「於粲――與蕉黃」（荔子）を見よ、

【獰旦】史記の南越傳に「――城中皆降伏波」註に「獰ハ黑ナリ、天未ダ明ケズシテ尙ホ黑キナリ」獰一に黎に作る、

【冷暖自ラ知ル】（冷暖自知）言說を用ひずして自ら心に知るをいふ、傳燈錄に「今蒙指授入處、如人飮水冷暖自知」

【戾蟲】虎の異名、戰國策の秦策に「虎者――」戾は「ムサボリ」て暴惡なる義、

【令長】令は長」連文釋義に「漢法、縣萬戶以上爲令、以下爲長」

【黎杖】「アカザノツエ」漢書劉向傳に「有老人黃衣植青――、叩閤而進」王維の詩に「悠然策――、歸向桃花源」

【黎杖韋帶】「アカザノツエ」「ヲシカハノオビ」儉素なる「サマ」にいふ、陳書の宣帝紀に「湯禹爲君、――――」

【苓通】苓は零に同じ、猪糞なり「ツマラヌ」賤むべきものに喩ふ、王安石の詩に「人閒榮願付――ニ」

【令弟】己の弟をいふ、後世は人の弟を稱す、謝靈運の酬從弟惠連詩に「末路値令弟、開顏披心胸」（令兄）を見よ、

【伶仃】一に跉趴、また伶仃に作る、獨行の貌、また失志の貌、零丁に同じ、

【零丁】志を失ひ「オチブルル」貌、晉書李密傳に「――孤苦、至於成立」伶仃に作る同じ、伶仃は獨り「オチブレテアル」貌、柳貫の詩に「萬里滄江雲一去、欲將孤影寄伶仃」

【零糶】米の「コウリ」說文に「糶ハ出穀ナリ」閻書に「凡遇凶年、減價――」

【禮ト云ヒ禮ト云フモ玉帛ヲ云ハンヤ】（禮云禮云玉帛云乎哉）論語陽貨篇、孔子の語、下に「樂云樂云、鐘鼓云乎哉」とあり、玉や幣帛やは、相見の時に、敬意を表する禮物とはすれども、そは禮の末なり、禮の本は先方の人を敬ふといふ心、是れなりとの意、

【令德】「ヨキ德なり、令は善なり、詩經小雅湛露篇に「顯允君子、莫不令德」

【禮ノ用ハ和ヲ貴シト爲ス】（禮之用、和爲貴）論語學而篇、有子の語、下に「先王之道、斯爲美、小大由之」禮儀作法の用（ハタラキ）は和（從容トシテ迫ラザル義）をたふとぶ、心を抑へて「キウクツ」にすること勿れとの意、

【零賣】「コウリ」「キリウリ」晁氏客語に「荊公托人賣金、一一了銖兩不足甚怒、元澤云、銖銖而較之、至兩必差、遂解」零糶は米の「コウリ」零賣は「コガヒ」

【令望】善き人望なり（令聞）を見よ、

【禮貌】禮容もて人を敬ふなり、孟子の告子下篇に「一一未衰、言弗行也、則去之」趙註に「禮ハ之ニ接スルニ禮ヲ以テスルナリ、貌ハ顏色和順ニシテ賢ヲ樂ムノ容アルナリ」

【領ハ蝤蠐ノ如シ】（領如蝤蠐）美人の「ウナジ」の美くしきに喩ふ、蝤蠐は木の中に生ずる蟲、潔くして白きもの（膚凝脂）を見よ、

【禮ハ其ノ奢ランヨリハ寧ロ儉セヨ】（禮與其奢也寧儉）禮は過不及なく中を得たるを貴ぶことなれども、本末を分つときは奢は文にして末なり、儉は質にして本なり、されば奢靡にして、唯その文に馳せんよりは寧ろ儉朴にして唯その質に從ふに若かずとの義、論語八佾篇孔子の語、魯人林放が禮の本を問ひたるに答へたまひたるにて、下に「喪與其易也寧戚」とあり、

【禮貿】通鑑の注に「唐ニ一院アリ、凡ソ胡客入朝スル、宴ヲ此ニ設ク、元和九年一一院ヲ長興里ノ北ニ置ク」と、一一院は鴻臚寺に屬す、韓愈の論佛骨表に「一一一設」

【靈府】精神の宅なり「タマシヒ」の「アルトコロ」莊子德充符に「不可入於一一靈臺に同じ、

【禮部員外郎】六典に「一一一一ハ、從六品上、尙書侍郎ニ貳シ、其ノ儀制ヲ擧ゲ而シテ其ノ名數ヲ辨ズルコトヲ掌ル」とあり、

【麗風】西北の風、淮南子の墜形訓の注に見ゆ、

【令聞】善き譽なり、詩の大雅卷阿篇に「一一令望」令望は威儀の望みて法るべきなり、次條を參看せよ、

【令聞令望必ズ此ノ山ト俱ニ傳ハラン】晉書の羊祜傳に「祜樂山水、每ニ風景必造峴山置酒言詠、嘗慨然歎息顧謂鄒湛等曰、自有宇宙便有此山、由來賢達勝士、登此遠望、如我與卿者多矣、皆湮滅無聞、使人悲傷、湛曰、公德冠四海、道嗣前哲、令聞令望必與此山俱傳、至若湛輩、乃當如公言耳」

【伶俜】行くこと正しからざる貌、玲瓏に作る、同じ、一解に、流落の貌とも解けり、文選の潘岳の寡婦賦に「少伶俜而偏孤兮」

【靈廟】「オタマヤ」續高僧傳に「勅起一一於扶南臨淄之地ニ」また宰堵婆の一名、西域記に「浮圖此翻方墳亦翻圓塚亦翻高顯義飜一一」

【翎毛】翎は羽なり、鳥をいふ、毛は獸なり、畫譜に「崔白畫ニ工ナリ、敗荷鳧雁ヲ以テ名ヲ得タリト雖モ、然レドモ猶ホ花竹一一ニ精シ」

【黎民】黎は黑なり、民の首皆黑し、故にいふ、庶民に同じ、書經堯典に「一一於變時雍」

【令名】「ヨキホマレ」令聞に同じ、孝經に「身不離於一一」

【黎明】史記の呂后紀の字面、註に「徐廣曰ク、黎ハ猶ホ比ノ如シ、將ニ明ケントスルノ時ナリ」黎旦に同じ、黎一に黎に作る、次條を見よ、

【黎明】黎は黑なり、黑と明と交り、明けんと欲して未だ明けざる意、昧爽に同じ、成語考に「一一昧爽皆將曙之時也」と、爽は明なり、

【羚羊】羊の一種、カモシカ、その角に圓くめぐれる蹙文あり、埤雅に「一一似羊而大角」とあり、麤羊に同じ、

【隸也力メズ】（隸也不力）奴隸どもが君國の爲めに力を盡さずといふ義、文天祥の正氣歌に「隸也實不力」林西仲いふ「一一一ノ四字、乃チ楚公子徵服出亡スルトキ、其僕之ヲ罵ルノ詞、借リテ以テ轄スル所ロノ將士肯テ力戰セズ、己ノ執ヘラルルコトヲ致スヲ罵ル」

【禮容】禮儀正しき容貌、史記に「孔子爲兒嬉戲常陳俎豆習一一」

【令郎】人の子を稱していふ（令子）を見よ、

【玲瑯】「キヨラカナル」玉の聲、劉子翬の聽彈琴歌に「一一一鼓萬象春、鐵面霜髯不枯槁」

【零落】楚辭の離騷に「惟草木之一一」令の註に「一一

ハ皆隕おつる)ナリ、草ニ零トイヒ、木ニ落トイフ」轉じて人の「オチブレタル」にいふ、管子に「五穀以削、士民ー」白居易の琵琶行に「門前ー鞍馬稀」【醴酪】「アマミアルサケ」禮記の祭義に「躬親未以事、天地山川社稷先古、以爲ー齊盛」また乳汁を煮てつくりたる漿ノミモノをいふ、

【伶俐】「リコウモノ」康熙字典に「今方言、謂黠慧曰ー俐品字箋に「人之快便者曰伶利」

【零陵】雨漢・晉の縣名、荊州ニ屬ス)今の廣西桂林府全州の西南七十八清里、また郡名、今の湖南永州府ー縣の北二清里、

【醽醁】美酒なり、抱朴子に「寒泉旨於ー醽醁」を參看せよ、

【泠泠】清涼の貌、古樂府に「山溜何ーー」一解に水の聲なりと、陸機の文賦に「音ーー而盈耳」一解に音聲なりと、泠然に同じ、莊子逍遙遊に「御風而行、泠然善也」泠然は輕妙の貌、一解に風の聲なりと、要するに水聲音聲風聲すべて清らかなる聲を狀する語、

【蠑螈】(蠑螈)を見よ、

【零露】「ツユ」の「オリル」義、詩經野有蔓草篇に「ーー溥今」

【玲瓏】金玉の聲なり、班固の東都賦に「和鑾ーー」また陸游の詩に「詩和ーー韻」また「竝簷幽鳥語ーー」とあり、又明かなる貌にも用ふ、李白の詩に「却下水精簾、ーー望秋月」白居易の詩に「樓閣ーー五雲起」また柳宗元の詩に「橘柚ーー透夕陽」

【僚友】「オナジツトメナカマ」禮記曲禮に「ーー稱其弟」

【了解】明らかに「サトル」(了了)を見よ、

【料簡】「ハカリ」撰ぶ義、張湛の列子序に「ーー世所希有者」

【蓼花】「タデ」の花、溫庭筠の東歸有懷詩に「鷺眠芰葉折、魚靜蓼花平ーー」垂」黃庭の江村詩に「十分秋色無人管、半屬蘆花半ーー」朱德潤の沙湖晚歸詩に「櫓聲蹋去浪痕淺、搖動一灘紅ーー」

【寥廓】虛空をいふ「ホガラカ」にして大なること、楚辭遠遊に「下峻嶸而無地兮、上ーー而無天」又司馬相如の難蜀父老文に「猶鵬鵬已翔乎ーー之宇」而羅者猶視乎藪澤」

【燎原ノ火】惡の長じ易きは、火の原野を「ヤク」如く「ハゲシキ」に喩ふ、左傳隱六年に「商書曰、惡之易也、如火之燎于原不可ー鄭還」(火ノ原ニ)を見よ、

【遼史】百十六卷、元の順帝の時、托克托等撰す、本紀三十卷、志三十三卷、表八卷、列傳四十五卷あり、遼の制、國人の著作隣境に傳ふるを得ず、故に五京の兵燹に史書蕩然として存ずるなし、故に此書を撰するにあたりて史料に乏しく、頗る疎略に失す、附する所ろの國語解一卷は、古人音義の意に仿ふ、その例甚だ善しと雖も、譌舛亦多し、遼史拾遺二十四卷、清の厲鶚撰す、參考すべし、

【聊爾】博雅に「聊ハ苟且也」とあり「カリソメ」晉書阮籍傳に「聊復爾耳」

【麥穗】「タデノハナ」穗狀を成す、故にいふ、韋莊の詩に「來時楚岸楊花白、去日齊堤ーー紅」(麥花)を見よ、

【麥蟲ハ苦ヲ知ラズ】(麥蟲不知苦)「たで食ふ蟲もすきずき」といふ諺は、これに本づく、鶴林玉露に「冰蠶不知寒、火鼠不知熱、麥蟲不知苦、蜘蛛不知臭」王僧孺の初夜文に「麥蟲習苦、桂蠹嘉甘」王粲七哀詩に「ーーーーー去來勿與諮」白居易の自詠の詩に「何異食麥蟲、不知苦是苦」

【遼東】雨漢の郡名、東漢ノ幽州ニ屬ス、晉の平州ーー國、今の盛京省奉天府遼陽州の北七十清里、

【遼東ノ豕】「ミダリ」に自ら奇異なりとして誇るも、他人より之を見れば、凡庸たるを免れざるに喩ふ、後漢書の朱浮傳に「漁陽ノ太守彭寵、自ラ功ヲ負ミ滿ツルコト能ハズ、幽州ノ牧朱浮、書ヲ與ヘテ曰ク、伯通自ラ伐リテ以爲ラク、功天下ニ高シト、往時遼東ニ豕アリ、子ヲ生ム、白頭ナリ、異トシテ之ヲ獻ゼントシ、行キテ河東ニ至ル、群豕ノ皆白キヲ見テ、慙ヲ懷キテ還リヌ、若シ子ノ功ヲ以テ朝廷ニ論ゼバ、則チ遼東ノ豕ナラント」伯通は彭寵の字、

【僚ノ丸ニ於ケル】(宜僚ノ丸)を見よ、

【遼來遼來】小兒の啼を止むるにいふ、わが國にて「レロレロ」といふはこの語の轉か、蒙求に「魏志ニ、張遼字ハ文遠、雁門馬邑ノ人、武力人ニ過ギ、數〻戰功アリ、前將軍ニ累轉ス、舊注ニ曰ク、江東ノ小兒啼クトキ、之ヲ怖シテーーーー止マザル者ナシ」

【寥落】空しく靜かにして、見る所ろの希なるをいふ、謝朓の詩に「曉星正ーー」

【料理】事を「ハカリ、ヲサムル」義、處理に同じ、晉書王徽之傳に「當相ーーこまた周旋して相謀るをいふ、世說に「汝若爲選官、當好ーー此人」

【了了】慧なり、曉解なり、一一分明なる義、後漢書孔融傳に「融年十二隨父詣洛陽、時大ー未

必奇ニ
また明白なる義、世説に「鍾士季目王安豊阿戎ニ——人ヲ解ス人意ニ」

【遼遼】遼は遠なり、遠き貌、楚辞に「山修遠ニシテ其レ——タリ」

【遼陽】今 西漢の遼東郡——縣、東漢の幽州玄菟郡——縣、遼の東京道——府——縣、金の東京路——府——縣、元の——省——路——縣は今の盛京奉天府——州治なり、晉、北魏の幷州樂平郡——縣は今の山西遼州の北三清里の地、

【歷階】階段を「ノボル」に、一階毎に兩足を集むべきに「イソギノボル」故に「シカセザル」義、穀梁傳定十年に「孔子——而上」註に「踰越シテ上ル ナリ」と、王肅曰く「階ニ登ルニ足ヲ聚メザル ナリ」と、史記平原君傳にも「毛遂按劍——而上」

【曆象】曆は數を紀する所以の書、象は天を觀る所以の器なり、曆象は卽ち曆を推し、象を觀るをいふ、書經堯典に「——日月星辰、敬ンデ人時ニ時は耕穫の候をいふ、また日月星辰の稱とす、易の革卦に「——謂ヒ日月星辰ニ也」

【棣棣】和名クヌギ 櫪に同じ、莊子に不材の木とす、水經注に「若邪溪上、有ニ——ニ、謝靈運、與ニ從弟惠遠」常遊之、作聯句ニ題ス刻樹側ニ」(櫟 櫟)を見よ、

【歷代地理志韻編今釋】二十卷、清の李兆洛(字ハ申耆、江蘇武進ノ人、嘉慶十年ノ進士)撰す、この書は漢書・續漢書・晉書・宋書以下元史・明史に至る地理志中の地名を韻にて排列し、小注を下し、時代の前後を以て次を爲しその所屬の州郡を詳にし、現今の某地たることを示せり、

【郦道元】涿郡の人、北魏に仕へて御史中尉となり、法を執る清刻、時のために忌まる、遂に遣はして關右大使となす、平生學を好み、奇書を歷覽し、水經の注四十卷を作る、北史に傳あり(水經)を參看せよ、

【櫟樗】無用の材、以て才の劣れるに喩ふ、司馬光の洛中耆英會の詩に「自愧——非ス遠器ニ」(櫟櫪)を見よ、

【櫪馬籠禽】世事に拘束せらるるに喩ふ、唐詩に「櫪馬苦ミ跲踢ヲ、籠禽念ヒ遐征ニ」遐征とは遠く飛び行くをいふ、

【歷覽】「ヘメグリ」見る義、謝靈運の詩に「江南倦ミ——江北曠シ周旋」後漢書明帝紀に「——館邑ニ會郡縣吏ニ」

【歷歷】一一分明なる義、李白の詩に「分明ナリ楚漢事、——王霸道」

【列缺】楚辭に「上至ル——ニ——ヲ」の註に「列缺ハ天際ノ電照ナリ」また司馬相如の賦に「貫ク倒景之——ニ揚雄の賦に「霹靂——、吐ク火施ス鞭」の註に「——ハ電ナリ」

【列子】八卷、道家の書、周の列禦寇の撰と傳ふ、然れども後世の竄入多く、記事も亦雜駁なり、されば列子の人物に就きても、有無を疑ふ者あり、簡明目錄に「書中禦寇以後ノ事アリ、故ニ柳宗元ノ列子辨ニ其ノ後人ノ增竄ヲ經タリトイヒ、高似孫ノ子略ニ、遂ニ以テ莊周ノ寓言トナシ、竝ニ其ノ人無シトナス、然レ𪜈爾雅ノ疏ニ、尸子ノ廣澤篇ヲ引クニ據レバ、當日實ニ列子アルヲ知ル、特書ハ門人ノ追記セシ所ロタルノミ、晉ノ張湛ノ註スル所ロ、具サニ名理アリ、亦向郭ノ莊子ノ註ニ肩隨スベシ」列子の說、略ボ老子と同じ、唐の玄宗列子を稱して冲虛眞人といひ、宋の眞宗、至德の二字を加へて、この書を冲虛至德眞經と稱す、

【烈士】義烈の行ある士なり、史記伯夷列傳に「貪夫狥ヒ財ニ——殉ヒ名ニ、夸者死ス權ニ、衆庶馮ム生ヲ」——は伯夷を斥す、

【列聖】

【列女傳】前朝の諸帝をいふ(先帝)を看よ、七卷、漢の劉向の撰なり、これを古——人——」孔子亦——」

【獵師】「カリウド」酉陽雜俎に「——數日 方獲」白居

【列缺】

【列子】

【烈士】

【烈風】

【烈烈】

【獵較】

【獵師】

易の詩に「鄙語不可棄、吾聞諸——」

【蹤等】 蹤一音ラフ踰越なり、順序を「トビコエル」禮記の學記に「學不——」——也」

【猟獵】 動く貌、鮑照の詩に「——晩風遒」

【漣漪】 風、水上を行きて文を成すをいふ、猗は水波なり、初學記に「水波如錦文曰漪」一に猗に作る、詩經の魏風伐檀に「河水清且——」王維の詩に「青翠漾——」趙孟頫の詩に「萬柳堂前數畝池、平鋪雲錦蓋——」

【簾帷】 「スダレヌノ」帷は幃に同じ、祖詠の秋日聞百舌鳥詩に「秋天聞好鳥、驚起出——」劉禹錫の詩に「雨餘獨坐巷——」便得詩人喜鵲詩」

【連引】 連及と同義、史記陳豨傳に「多——豨」

【棣鋭】 よく「ネリ」て「スルドキ」兵士、吳子に「此五者一人之——也、有此三千人、內出可以潰圍、外出可以居城矣」

【蓮葉】 「ハチスノハ」史記龜策傳に「余至江南、觀其行事、問其長老云龜千歲乃游——之上」宋書樂志に「江南可采蓮、——何田田」張籍の春別曲に「長江春水綠堪染、——出水大如錢」

【漱瀡】 水溢るる貌、また水動く貌、木華の海賦に「波淡——浮天無岸」瀡は瀡の俗字、

【攣踠】 手足の曲りて伸ぶること能はざる病、柳宗元の捕蛇者說に見ゆ、

【禁ヲ同ジクスルコトヲ辭ス】 (同箝)を見よ、

【連枷】 「カラサヲ」麥稻などの穗を打つ具「マヒギネともいふ、三才圖會に「釋名曰、架加也、加杖於柄頭以擸穗而出穀也」枷一に耞に作る、輪棒また稻耞ともいふ、

【連衡】 衡一に橫に作る、韓魏趙燕楚齊の六國共に秦に服從するをいふ(合從)を見よ、史記蘇秦傳に「蘇秦說趙肅侯曰、六國爲一幷力西鄉而攻秦、秦必破矣、衡人者皆欲割諸侯之地以予秦」秦衡人とは——を唱ふる人をいふ、

【廉悍】 心「イサギヨクシテ、ツヨシ」韓愈の句に「俊傑——」

【奩具】 嫁入道具をいふ、類書纂要に見ゆ、奩籠に同じ(聰奩)を參看せよ、

【練句】 詩文の句をねる義(練字)を見よ、

【聯句】 聯は一に連に作る、二人以上集り甲一句を作れば乙一句をつぎ、丙又一句をつぎて一篇をなすもの、わが連歌は、この——に本づきたるならん、白居

易の詩に「秋燈夜寫連句詩」また二句づつ作る例もあり、舊唐書の柳公權傳に「文帝夏日學士——ス、帝曰ク、人皆苦炎熱、我愛夏日長ト、公權續ギテ曰ク、薰風自南來、殿閣生微涼」

【簾隅】 簾は稜なり、隅は角なり、角には必ず稜あり、故に——といふ、猶ほ方正といふが如し、禮記の儒行に「砥礪——」とあるは、切磋琢磨の意を求め、守る所ろあり、方を刓りて圓と爲さざるなり、南史宋武帝紀に「帝雄傑有大度、不事——小節」角立ちたる行爲をいふ、

【棟花】 「アフチ」の花、樹の高さ丈餘、葉の形は南天に似て「キザミ」あり、また「ツヤ」あり、夏日長き穗をなして五瓣の淡紫花あつまり開く、大さ錢の如し、一名「センダン」苦楝とも書く、林呉熙の道中詩に「遠水平蒹葉、春風足——」

【蓮華】 「ハチスノハナ」華は花に同じ、南史の齊東昏侯紀に「鑿金爲——、以帖地、令潘妃行其上、曰此步步生——也」大寶積經に「猶如——生於汚泥、行無瑕損」梁元帝の采蓮曲に「——亂臉色、荷葉雜衣香」(荷花)を見よ、

【籠外】 「スダレ」の「ソト」陳奇猷の楚宮詞に「不堪深殿裏、——欲黃昏」

【簾幌】 「スダレ」と「タレギヌ」と、幌は「トバリ」帷幔なり、張漸朗月行に「朗月照——、清夜有餘姿」

【楝花風】 歲時記に「江南梅花風最先、——最後、凡二十四番花信風」何夢桂の詩に「白首相逢歎暮年」——後草連」天」(二十四番)を見よ、

【蓮花六郎ニ似タリ】 舊唐書楊再思傳に「張昌宗以姿貌見寵倖、再思又諛之曰、人言六郎面似蓮花、再思以爲蓮花似六郎、非六郎似蓮花也、其傾巧取媚也如此」

【漱溪先生】 (周敦頤)を見よ、

【連鷄ハ俱ニ棲ニ止マル能ハズ】 (連鷄不能俱止於棲)連は細にて繁くをいふ、棲は鷄の「トヤ」なり、繁きたる鷄は、一の塒に棲む能はず、以て群雄並び立つ能はざるに喩ふ、戰國策に「諸侯不可一、猶連鷄之不能俱止於棲、亦明矣」

【連翹】 和名「イタチハゼ」灌木、高さ丈餘、幹細く直上す、春四瓣の黃花を開く、枯梗の花に似て小し、花落ちて葉を生ず、形橢にして尖り鋸齒あり、三葉或は五葉節に對して生ず、實熟して黃なり、二ツに裂く、藥用とす、一種藤本(ツルダチ)のものあり、枝長く垂る、花

あれども實を結ぶこと稀なり、多く庭際に植う、連翹・連喬皆同じ、

【廉潔】「ムサボラズ」して心の「イサギヨキ」をいふ、南史郭祖深傳に「——者、自進無途、貪苛者、取入多徑」廉者は自ら衒ひて沽ることを求めず、故に自ら進むに途なし、貪者は百方之を得んとつとむ、故に取り入る「コミチ」多しとなり、

【蓮華峯】華山記に「華山頂上有——、山有千葉蓮花、服之羽化」

【蓮蛾】蓮蕊に同じ、進まざる貌、楚辭に「驟——以驕蹇」また長く「ワダカマル」貌、揚雄の甘泉賦に「蛟龍——于東厓兮」次條を見よ、

【蓮蕊】蕊蓮に同じ、難みて進まざる義、また困頓の貌、揚雄解嘲に「孟子雖——、猶爲萬乘師」

【蓮花漏】翻譯名義集に「廬山遠公門有僧懇要者、患山中無刻漏、乃於水上立十二葉芙蓉、因波輪以定十二時、晷景無差今曰遠公——是也」(蓮漏)を參看せよ、

【聯互】連りわたる義、唐書に「第舍——」互は亘と異り、亘は音セン求むる義一音クワン桓に同じ、

【簾鉤】「スダレカケ」陳慥問月樓賦に「忽窺月之飛來、傍欄角兮窺——」杜甫の落日詩に「落月在——、溪邊春事幽」

【輦轂】天子の車輿をいふ、故に天子の居る所ろの都を輦轂の下といひ、略しては輦轂といひ、また輦下、轂下などともいふ、司馬遷報任安書に「僕賴先人緒業、得待罪——下、二十餘年矣」また晉書劉毅傳に「毅獨遭聖明、不離——」また漢書王尊傳に「賊數百人在毅下」

【連坐】「マキゾヘ」史記商君傳に「令民爲什伍而相收司——」

【蓮座】蓮華座ともいふ、佛像の座の蓮華の形を作りたるもの、華嚴經に「一切諸佛世界悉見如來坐蓮華寶師子之座」王勃の觀心寺跡寺詩に「——神容儼、松崖聖跡餘」

【廉察】廉は明かに視察する義、後漢書魯恭傳に「親往廉之」とあり、後世の廉訪使の廉に同じ、

【連山】山の連りたるをいふ、

また夏の易をいふ、今は亡びて傳はらず、周禮春官に「掌三易之法、一曰——、二曰歸藏、三曰周易」

【連枝】兄弟をいふ、兄弟は木の枝を連ねて本を同じくするが如し、卓氏藻林に「連枝會ハ、兄弟ノ燕スルヲイフナリ、唐詩ニ、東樓喜奉連枝會」千文字の「同氣——」の註に「同ジク父母ノ氣ヲ受クル「、樹ノ枝アリテ相連リテ生ズルガ如シ」文選に「斷腸憶——」

【廉士】慾少くして「イサギヨキ、サブラヒ」孟子に「陳仲子豈不誠——」說苑に「——不辱名、信士不惰行」

【練士】兵士を訓へて「ネル」をいふ、道德指歸論に「選將——」

【練字】詩文の文字を善くねる義、葛常之詩話に「作「詩在于——」如老杜飛星過水白、落月動沙虛、是練中閒一字、地坼江帆穩、天清木葉聞、是練末後一字」珊瑚鉤詩話に「詩以意爲主、又須篇中練句、句中——、乃爲工」

【攣子】一乳兩子なり「フタゴ」戰國策に「夫——之相似、者惟其母知之而已、夫利害之相似者、唯智者知之而已」孿一音サン孿に作る、同じ、

【練絲ニ悲ム】(悲練絲)百合「ネリイト」を見て悲む、阮籍の詩に「楊朱泣岐路、墨子——」(墨子絲ニ)を見よ、

【練習】「ネリナラフ」晉書に「——兵馬」

【蓮社】釋氏要覽に「昔晉ノ慧遠法師、廬門ノ人、廬山ノ虎溪ノ東林寺ニ住ス、賢士劉遺民・宗炳・雷次宗・張野張詮周續之等ヲ招キテ會ヲ爲シ、西方ノ淨業ヲ修ス、彼ノ院ニ、多ク白蓮ヲ植ウ、又彌陀佛國ハ蓮華ヲ以テ、九品ノ次第ヲ分チ人ニ接ス、故ニ——ト稱ス、コノ社ヲ嘉スル人、名利淤泥ノ爲メニ汚サレズ、喩ヘバ蓮華ノ如シ、故ニ之ヲ名ヅク云云」白虎通に「王者所以有社何、爲天下求福報士人非土不食、土廣不可遍敬故封土以立社、今釋家結募緇白、建法祈福求生、淨土淨土廣多、遍求則心亂、乃確指安養淨土、爲棲神之所、故名——淨社爾」(白蓮社)ヲ參看せよ、

【輦車】「テグルマ」漢書淮南厲王傳に「以——四十乘反谷口」師古の註に「——ハ人輓キ行キテ以テ兵器ヲ載スルナリ」

【廉讓】心が清くして欲すくなく、己をおきて人に讓るをいふ、潛夫論に「世人之論也、靡不貴——而賤財利焉、及其行也、多釋廉而甘利」

【連城ノ璧】成語考に「惠王之珠、光能照乘、和氏之璧、價重連城」とあり、史記に「魏惠王曰、寡人有徑寸之珠照車前後各十二乘者十枚云云」(和氏ノ璧)を見よ、

【連珠】　餅句を對比し、連綴して諷諭假托を主とする一種の文體なり、文選演連珠の注に「所謂――者與于漢章之世、班固・賈逵・傅毅三子受詔作之（中略）合于古詩諷興之義、欲使、歷歷如貫珠易看而可悦、故謂之――」詳しくは文體明辨を見よ、

【聯珠詩格】　二十卷、元の干濟撰し、蔡正孫補ふ、この書、錄する所ろ唐宋人の七言絕句にして、四句全對格より、用後身字格に至る、凡て三百二十餘格に分ち錄せり、足利氏の中葉以後五山僧侶の閒に行はれて今に至る、和版あり、精選唐宋千家――二十卷（朝鮮徐居仁注）參考すべし、

【連署】　二人以上の者が姓名を連ね書く義、俗にいふ連名なり、通鑑唐憲宗紀に「自今奏――事、必取崔群――然後進之」

【連如】　涙の「サメザメ」と滴る貌、易經の屯卦上六に「泣血――」

【連帥】　周の時、十國連合せる所ろの長なり、禮記の王制に「十國以爲連、連有帥」唐の節度使觀察使は、古の――に似たり、故に韓文に往往この稱を用ひたり、

【連逮】　逮は「オヨブ」なり、連及して俱に捕へらるるをいふ、史記秦紀に「以罪過――――少近官三郎」三郎は中郎・外郎・散郎、

【戀著】　戀ひ慕ふ情の執著する義、阿欲經に「女色者、世閒之枷樸、凡夫――不能自拔」

【連筒】　「カケヒ」三才圖會に「――ハ竹ヲ以テ水ヲ通ズルナリ、云云」筧・槻・架槽皆同じ、

【練若】　寺院の異名、僧伽籃若の轉なりといふ、祖庭事苑に「――亦云蘭若」

【簾頗】　史記の本傳に「簾頗者、趙之良將也」簾頗年七十餘にして善く戰ふ、同書に「一飯二斗米、肉十斤、被甲上馬以示尚可用」とあり、

【連蔕】　蔕は屋棟の瓦「イラカ」――は多くの「ムナガハラ」の連なるをいふ、蜀都賦に「比屋――」

【簾箔】　「スダレ」箔もまた簾なり、三輔黄圖に「未央宮漸臺西、有桂宮、中有光明殿、皆金玉珠璣爲――」

【簾幕】　「スダレ」と「マク」と、白居易の晉池上舊亭詩に「向暖窗戸開、迎寒――合」劉禹錫の深春詩に「盡堂――外、來去燕飛斜」

【連府】　大臣の「ヤシキ」を稱していふ、南史に「王儉庚果之ヲ以テ長史トナス、蕭緬儉ニ書ヲ與ヘテ曰ク、盛府元僚實ニ其ノ選ヲ難ンズ、庚景行綠水ニ泛ビ、芙蓉をいふ、史記秦紀に「以罪過――――少近官三郎」三郎は中郎・外郎・散郎、

【戀著】　戀ひ慕ふ情の執著する義、阿欲經に「女色者、世閒之枷樸、凡夫――不能自拔」

【連筒】　「カケヒ」三才圖會に「――ハ竹ヲ以テ水ヲ通ズルナリ、云云」筧・槻・架槽皆同じ、

【練若】　寺院の異名、僧伽籃若の轉なりといふ、祖庭事苑に「――亦云蘭若」

【簾頗】　史記の本傳に「簾頗者、趙之良將也」簾頗年七十餘にして善く戰ふ、同書に「一飯二斗米、肉十斤、被甲上馬以示尚可用」とあり、

【連蔕】　蔕は屋棟の瓦「イラカ」――は多くの「ムナガハラ」の連なるをいふ、蜀都賦に「比屋――」

【簾箔】　「スダレ」箔もまた簾なり、三輔黄圖に「未央宮漸臺西、有桂宮、中有光明殿、皆金玉珠璣爲――」

【簾幕】　「スダレ」と「マク」と、白居易の晉池上舊亭詩に「向暖窗戸開、迎寒――合」劉禹錫の深春詩に「盡堂――外、來去燕飛斜」

【連府】　大臣の「ヤシキ」を稱していふ、南史に「王儉庚果之ヲ以テ長史トナス、蕭緬儉ニ書ヲ與ヘテ曰ク、盛府元僚實ニ其ノ選ヲ難ンズ、庚景行綠水ニ泛ビ、芙蓉

ニ依ル、何ゾ其レ麗ナルヤト、時人俊ノ府ヲ稱シテ蓮花池トイフ」盧綸の送從叔程歸西川幕詩に「群鶴棲――諸戎羿柳營」

【廉問】　廉は察治なり、尋問して、事情を察するをいふ、史記秦紀に「吾使人――或爲妖言以亂黔首」

【廉平】　廉は心潔くして貪らざるなり、平は公平にして私なきなり、史記の吳起傳に「吳起善用兵、――盡得士心」

【連袂】　「タモト」をつらぬる、唐書睿宗紀に「正月上元日、夜上皇御安福門觀燈、出內人――――踏歌」

【棣萼】　兵を棣る、崔禹錫の送張說巡邊詩に「――宜雨洗、臥鼓候風涼」

【連璧】　書言故事に「二客同ジク至ル者ヲ――賓臨トイフ、晉ノ潘岳、夏侯湛ト、並ニ姿容ニ美ニ、且ツ友トシ善シ、行止スル每ニ與ヲ同ジクシ茵ヲ接ス、京都之ヲ――トイフ」と、茵は褥なり、詳しくは晉書の夏侯湛傳を見よ、

【連篇累牘】　多くの文章をいふ、成語考に「――――總謂多文」の註に「隋ノ李諤上書シテ云フ――――、不出月露之形、積案盈箱盡是風雲之狀」この語もと隋書李諤傳に出づ、宋史選擧志に「寸晷之下、惟務貪

【連歩】　美人の歩するをいふ、孔平仲の觀舞詩に「雲鬟應節低、――隨歌轉」（金蓮ノ）を見よ、

【戀慈】　「コヒシタフ」涅槃經に「追思――悲感號泣」

【連峰】　連れる峯、孫統の蘭亭集詩に「時禽吟長澗、萬籟吹――」

【蓮峰】　蓮華峰の略、華山志に「華山頂上有蓮華峰、山有千葉蓮花、服之羽化」李白の詩に「黄山四千仞、三十二――」

【連綿】　長く「ツヅク」貌、莊子大宗師の注に「――長貌」

【濂洛關閩ノ學】　周茂叔及び二程子張橫渠、朱晦庵の學をいふ、周子は濂溪の人、二程子は洛陽、張子は關中、朱子は閩中の人なればなり、駿齋雜話の「異說まちまち」の條に「鄒魯の學とて濂洛にたがふべからず」（鄒魯ノ）を參看せよ、

【濂洛風雅】　六卷、元の金履祥撰す、濂溪は周茂叔、洛は程明道の住せし地なれば、その學派を濂洛といふ、この書は濂洛學派に屬する人（周子程子ヨリ王柏・王侃ニ至ル四十八人）の詩を輯めて國風及び雅に擬す、故に風雅といふ、

別に清の張伯行の編せし――九巻あり、周子二程子・邵子・張子・游酢・尹焞・楊時・羅仲素・李侗・朱子・張栻・真徳秀・許衡・薛瑄・胡居仁・羅洪先十七家の詩を収む、二書共に和版あり、

【連理ノ御契】 太平記巻四に見ゆ、捜神記に「宋ノ大夫憑ノ妻何氏美ナリ、宋ノ康王之ヲ奪フ、憑王ヲ怨ム、王之ヲ囚フ、因リテ自殺ス、妻王ト青陵臺ニ登リ、自ラ投ジテ死ス、王怒リテ之ヲ埋ム、二塚相對ス、宿ヲ經テ木アリ、二塚ノ上ニ生ズ、根交リ枝連ル」と、白樂天の、長恨歌に「在」天願作」比翼鳥、在」地願爲」連理枝」唐の明皇が貴妃と誓ひたる辭なり、

【連連】 涙の「ナガレクダル」說、詩經の衛風氓篇に「泣涕――」

【蓮漏】 三才圖會に「有二古制――、今制――一圖一」(蓮花漏)を參看せよ、

【簾櫳】 「スダレ」と「マド」櫳は欞に同じ、小を窓と曰ひ、閤を櫳といふ、謝惠連の詩に「升月照――」張泌の詞に「燕飛愁語隔――」

【連漏】 三才圖會に「有二古制――、今制――一圖一」(蓮花漏)を參看せよ、

【簾櫳】 「スダレ」と「マド」櫳は欞に同じ、小を窓と曰ひ、閤を櫳といふ、謝惠連の詩に「升月照――」張泌の詞に「燕飛愁語隔――」

禮賢五條

周公大聖、以貴下」賤、吐哺握髮、懼二於失」人(抱朴子)

越石父賢在二縲紲中一、晏子解二左驂一贖之、卽レ入レ門、久之越石父請レ絕、曰、君子、屈於不レ知レ己、而信二於知一己、知己而無レ禮、固不レ如二在一縲紲之中一、晏子於是延入爲二上賓一(史記晏嬰傳)

當陽人、折レ節下レ士、門無二留客一、時人皆稱而附レ之(後漢書皇甫嵩傳)

昔攷二古人用レ兵成敗之跡一、著二酌古論一、郡守周葵得レ之相與論難、奇レ之曰、他日國士也、請爲二上客一(宋史陳亮傳)

陳仲弓爲二豫章大守一、至便問二徐孺子所一レ在、欲二先君之一、主簿白、羣情欲レ府君先入レ廨、陳曰、武王式商容之閭、席不レ暇レ煖、吾之禮賢豈有二荷不可一(劉蕡廢世既)

【艫】 字彙に「船ヲ進ムル所以、槳ニ似テ長シ」集韻に「通ジテ楯、檣ニ作ル」

【樓】 說文に「重屋ナリ」「タカドノ」吳融の詩に「園密花飛易、樓深月到遲」張蠙の宿山寺詩に「鐘定遙聞水、樓高別見星」

【隴】 西漢天水郡一縣、今の甘肅秦州清水縣の北、唐・五代・宋・元・明の州名、今の陝西鳳翔府隴州治、

【櫳】 「オホマド」小を窓といひ、閤を一といふ、通じて欞に作る、房櫳は「ヘヤ」の「マド」班倢伃の賦に「房櫳虛兮風泠泠」雕一・廔一・朱一・翡翠一等の語あり、

【漏甕ヲ奉ゲ爨釜ニ沃グ】 (奉漏甕沃爨釜)底の漏る水「ガメ」を以て、やけたる釜にそそぐに「グヅグヅスル」ときは、皆甕の水漏れ盡くるなり、故に之を用ふること、急速ならざれば、其の効なきに喩ふ、戰國策に「救趙之務、宜若――一一一一」

【隴ヲ得テマタ蜀ヲ望ム】 (得隴復望蜀)利を「ムサボリ」て、足ることを知らざるをいふ、三國志の魏志に「司馬懿曹操ニ言ヒテ曰ク、今漢中ニ克チ、益州震動ス、兵ヲ進メテ之ニ臨マバ、勢必ス瓦解セン、操曰ク、人足ルコトナキニ苦シム、既ニ隴ヲ得テ復タ蜀ヲ望ムト」後漢書岑彭傳には「人苦不レ知レ足、既平隴復望蜀」とあり、

【漏屋】 雨の「モル」「アバラヤ」荀子儒效篇に「彼大儒者、雖隱於窮閭――、無置錐之地、而王公不能與之爭名」

【樓ヲ下ル時】 (下樓時)李白の醉起作に「阿誰扶下馬、不省――」

【弄ヲ好マズ】 (不好弄)晉書故事に「兒不喜戲曰――」――」左傳僖九年に「夷吾弱――」」とあり、弱は、幼小にして力なき義、弄は戲なり、

【隴ヲ平ゲ蜀ヲ望ム】 (平隴望蜀)前の(隴ヲ得)を見よ、

【樓下】 「タカドノ、ノシタ」後漢書王恂傳に「殺妾家十餘口、埋在――」杜甫の越王樓歌に「――長江百丈清、山頭落日半輪明」

【弄吭】 鳥の囀ずるをいふ、文選の左思の蜀都賦に「雲飛水宿、――清渠」弄一に哢に作る、

【蓼蒿】 「ヨモギ」蓼は蒿の屬(シロヨモギ)本草に「白蒿」

とあり、野菜譜に「——春采苗葉熟食」蘇軾の惠崇春江晩景詩に「——滿地蘆芽短、是正河豚欲上時」

【樓角】「タカドノ、ノカド」杜甫の詩に「——臨風迴、城陰滯水昏」

【樓閣】「タカドノ」後漢書呂強傳に「今外戚四姓貴倖之家、及中官公族無功德者、造起館舍、凡有萬數相接、丹青素堊雕刻之飾不可單言」遊樓記に「——高下、軒窗掩映」姚合の題山寺詩に「千重山嶂裏、——影參差」

【螻蟻】「ケラ」と「アリ」と、賈誼の弔屈原賦に「橫江湖之鱏鯨兮、固將制於——」以て微力の人に喩ふ、

【籠禽】「カゴノトリ」籠鳥に同じ、身の束縛せられたるに喩ふ、韋應物の逸劉評事詩に「——羨歸翼、遠守懷交親」白居易の歲暮詠懷詩に「七年囚閉作——、但願開籠便入林」

【樓居】「タカドノ」に住居する義、史記孝武紀に「公孫卿曰、仙人可見、仙人好——、於是上令長安則作蜚廉桂觀、甘泉則作益壽延壽觀、使卿持節設具而候神人」

【聾聵】左傳僖二十六年に「耳五聲ノ和ヲ聽カザルヲ聾トイフ」と、また國語の晉語に「——不可使聽」の註に「生ナガラニシテ聾ナルヲ聵トイフ」

【弄瓦之喜】女子を生みたる喜をいふ、詩經小雅斯干篇に「乃生女子、載寢之地、載衣之裼、載弄之瓦」裼は襁なり、瓦は紡塼なり、孔あり緒を通す、之を玩弄せしむるは、その事とする所ろを習はしむるなり、

【樓觀】「タカドノ」「モノミ」禮記月令に「仲夏之月、可以居高明」この註に「高明謂——也」白居易の寄王質夫詩に「——水潺潺、龍潭花漠漠」

【樓月】「タカドノ」の月、白居易の新秋喜涼詩に「——織織早、波風裊裊新」

【螻蛄】土に住む一種の蟲、短き翅と四足とあり、雄は鳴き、又飛べども、雌は腹大きく、羽小にして飛ぶこと能はず、爾雅の疏に「一名天螻一名碩鼠」和名「ケラ」中華古今注に「——有五能、而不成一技術」

【陋巷】「イブセキ」「チマタ」をいふ、論語雍也篇に「賢哉回也、一簞食、一瓢飲在——、人不堪其憂、回也不改其樂、賢哉回也」

【漏刻】「ミヅドケイ」刻漏ともいふ、古時を測る器、銅壺あり、漏壺といふ、蓋に孔あり、箭を挿し立つ、漏箭といふ、箭の幹に四十八の刻みあり、是れ漏刻なり、さて他壺より水漏り滴りて入り、其の水の溜るに隨ひて箭次第に上りて、刻み見はる、一晝夜四十八刻にして、一時を四刻とす、一時の初刻を一點と呼び、以下次第に二點三點など呼ぶ、或はこれを「ヒトツ」「フタツ」「ミツ」ともいふ、例へば寅の一點「子の二點」「子一ツ」「丑三ツ」の如し、別に夜漏あり、一夜を戌亥子丑寅の五更とし、一更を五刻、また五點とす、鼓を擊つに九(易ノ陽數)に始まり、時毎に相倍して擊つ、後世子午の時を、九ツといひ、丑未を八ツ、寅申を七ツ、卯酉を六ツ、辰戌を五ツ、巳亥を四ツといふは、九を相倍し、二九十八、三九二十七なるを、各十位を捨てて、其の餘を擊つに因るといふ、潛確類書に「梁刻漏經ニ漢制冬至晝漏四十五刻、冬至之後日長、九日加一刻、以至夏至、晝漏六十五刻、夏至之後日短、九日減一刻、或秦之遺法、漢代施用云云」また刻漏經にいふ「軒轅(黃帝)ノ時ニ始リ、夏商ノ代ニ宜ブ、周ニ至リテ摯壺氏コレヲツカサドル」と、また古今原始には、黃帝の時、車區といふ人——を創むとあり、

【隴山】隴州の西北に在り、卽ち天水大阪なり、その阪九回す、秦州記に「隴山東西百八十里、山東人行役升此而顧、則莫不悲思」

【弄姿】(姿ヲ弄ス)容姿を飾りて媚を呈するをいふ、後漢書李固傳に「胡粉飾貌、搔頭——」

【陋室銘】唐の劉禹錫の——に「山不在高、有仙則名、水不在深、有龍則靈、斯是陋室、惟吾德馨、苔痕上階綠、草色入簾青、談笑有鴻儒、往來無白丁、可以調素琴、閱金經、無絲竹之亂耳、無案牘之勞形、南陽諸葛廬、西蜀子雲亭、孔子云、何陋之有」

唐書崔沔傳に「沔儉約自持、祿廩隨散宗族、不治居宅、嘗作——以見志」

【樓車】車上に望櫓を設け敵城を下瞰するもの、左傳宣十五年に「登諸——、使呼宋人而告之」南史の侯景傳に「設百尺——」

【樓上】「タカドノノウヘ」史記晉世家に「從——觀而笑之」韋莊の長安春詩に「家家——如花人、千枝萬枝紅豔新」

【弄璋之喜】男子を生みたる喜をいふ、詩經小雅斯干篇に「乃生男子、載寢之牀、載衣之裳、載弄之璋」璋は半圭なり、その德を尙び、臣たるの職を示すなり、また識林に「姜度誕子、李林甫作手書慶之曰、聞有弄璋之喜、客視之掩口」とあるは、璋字をあやまり寫したるを笑ふなり、

【漏箭】「ロウコク」の矢、杜詩に「五夜漏聲催曉箭」(漏刻)を見よ、

【樓船】「ヤカタブネ」漢武帝の秋風の辭に「泛——今度汾河」類書纂要に「大船上ニ樓ヲ施スヲ、號シテ——トイフ」樓航ともいふ、

【樓前】「タカドノノマヘ」薛稷の春日登樓望野詩に「野外煙初合、——花正飛」元稹の連昌宮詞に「樓上——盡珠翠、炫轉熒煌照天地」

【樓臺】「タカドノ」「ウテナ」史記天官書に「海旁蜃氣象——廣野氣成宮闕」元亭涉筆に「一寸——蜂窠也」鄭谷曲江の詩に「——在煙杪、鷗鷺下沙中」

【龍斷】岡龍の、斷ち「キリシ」如くに、聳えて高き處なり、孟子の公孫丑下篇に「賤丈夫アリ、必ズ龍斷ヲ求メテ、而シテ之ニ登リ、以テ左右ニ望ミテ而シテ市ノ利ヲ罔ミス」とあり、龍は壟に通ず、これより獨り市の利を專占するに用ふ、書言故事に「利ヲ網スルノ人ヲ言ヒテ、——ノ徒ト曰フ」とあり、

【樓中】「タカドノノナカ」羅隱の早秋詩に「雨過晩涼生、——枕簟清」

【籠鳥雲ヲ戀フ】(籠鳥戀雲)身を束縛せらるる者の自由を得んと欲するに喩ふ、劉冠子に「籠中之鳥、空窺不出」蘇軾の詩に「鳥囚不忘飛、馬繫常念馳」

【籠鳥水萍】身束縛せられ「アチラ・コチラ」と「サマヨヘル」に喩ふ、鶴林玉露に「或ヒト問フ杜陵ガ詩ニイフ、日月籠中鳥、乾坤水上萍、トハ何ゾヤ、余曰ク此レ自ラ歎ズルノ詞ノミ、蓋シ拘束セラレテ以テ日月ヲ度ル、鳥ノ籠中ニ在ルガ若シ、乾坤ノ閒ニ漂泛スルコト、萍ノ水上ニ浮ベルガ若シ、本ト是レ淒涼ノ意ヲ形容シテ、乃チ翻リテ壯麗ノ語ト作ル、云云」

【漏斗】「ジャウゴ」三才圖會に「——鈞升皆出入、懼伯之器也、升用以挹、斗用以注、不知始於何時」疑起自近代」漏鉢・酒漏・注碗皆同じ、

【樓ニ登リ清嘯ス】(登樓清嘯)晉書の劉琨傳に「嘗爲胡騎所圍數重、城中窘迫無計、琨乃乘月——、——、賊聞之皆悽然長歎」

【樓ニ上リテ空ク望ム往來ノ船】(上樓空望往來船)白樂天の春江と題する詩中の句、曰く、

炎涼昏曉苦推遷、　不覺忠州已二年、閉閣只聽朝暮鼓、——、鶯聲誘引來花下、艸色勾留坐水邊、唯有春江看未厭、縈沙遶石綠潺湲、

【攏撚】「トリヒネル」指にて「ヒネル」義、白居易の琵琶行に「攏撚撥撚復挑」とあり、李群玉の句に「煩君玉指輕——」

【樓煩】史記項羽本紀に「項王令壯士出挑戰、漢有善騎射者——、楚挑戰三合、——輒射殺之、項王大怒、乃自被甲持戟挑戰、——欲射之、項王瞋目叱之、——目不敢視、手不敢發、遂走還入壁、不敢復出、漢王使人閒問之、乃項王也、漢王大慙」

【鏤簡】文身に同じ、肌膚を刺して、丹青を浸するをいふ、文選の左思の魏都賦に「或——而鑽髮」鏤一音ル「エル」「チリバム」

【瞽盲】「ツンボ」と「メクラ」と、莊子に「豈惟形骸有——哉、夫知亦有之」心の瞽盲なる者あるをいふ、

【瘻病】瘻は「クビノハルル」病、一說に、久しく癒えざる創なりと、病は惡瘡「カッタキ」の類、柳宗元の捕蛇者說に見ゆ、

【籠絡】その「ナカマ」に入り込む義、宋史胡安國傳に「中丞許翰曰、蔡京得政、士大夫無不受其——、超然遠畏不爲所汚、如安國者實鮮」

また樹木などの深く茂りて「マキック」義、曹組艮嶽賦に「珍叢幽芳古木——長藤蔽虧、高低相屬」

【樓蘭】漢書西域傳に「鄯善國、本名樓蘭王治扜泥城、去陽關千六百里」梁昭明太子七契に「——面縛而革音」鄭愔の塞外詩に「漢家征戍客、年歲在——、亡王昌齡從軍行に「黃沙百戰穿金甲、未破——終不還」

【樓櫓】「ヤグラ」櫓は玉篇に「城上守禦望樓」とあり、上に覆屋なき「モノミヤグラ」後漢書公孫瓚傳に「——千里」

【瓏瓏】金玉の聲、玲瓏に同じ、孔翁歸の詩に「雷聲聽隱隱車徹絕——」また明かなる貌、梅堯臣の詩に「荷葉垂——」(玲瓏)を見よ、

【露營】「ノヂン」をする、晉書顧榮傳に「——野次」とあり、

【魯衛之政兄弟也】論語子路篇、孔子の語、魯の國の先祖は周公旦、衛の先祖は康叔なり、康叔は能く周公の教を受けたる人なり、故にその政は兄弟の如く能く相似たりとの意、

【魯衛毛聃】四國の名、韓愈の毛穎傳に見ゆ、左傳僖二十四年に「管蔡郕霍——部雍曹滕畢原酆郇文之昭也」と、この十六國は皆文王の子なりとの義、文王は世次に於て穆たり、故にその子は昭たるなり、

【爐煙】「ロノケムリ」白居易の詩に「——凝瞬氣酒色

【駑鶩黄】「サギ」と「カモメ」と、韓維の登城樓詩に「樓上清風簾箔靜、田閒白水——輕」

【櫓ヲ搖カス】（搖櫓）船の櫓を推し進む、通鑑漢紀に「呂蒙至尋陽、盡伏其精兵艫艣中、使白衣——」

【鹵ヲ漂ハス】（漂鹵激戰して流血盾（タテ）を「タダヨハス」鹵は櫓に通ず、大盾なり、漢書項籍傳に「流血——レー」（漂杵）を參看せよ、

【露氣】「ツユケ」杜甫の翫月詩に「夜深——清、江月滿江城」

【露葵】蓴菜の一名、顏氏家訓に「蔡朗父諱蓴、遂呼蓴菜爲——」また露を帶びたる葵なり、葵は說文に「菜ナリ」爾雅翼に「葵ハ百菜ノ王、味尤モ甘滑」宋玉諷賦に「爲臣煮——之羹」

【盧橘】枇杷の異名、三都賦に「夏果則有——楊梅」閩粵の閒にては、枇杷を呼びて——となす、白居易の詩に「江果嘗——、山歌聽竹枝」范成大の三月十六日石湖書事詩に「——梅子黃、櫻桃桑椹紫」（枇杷）を見よ、

【鱸魚】和名「スズキ」明一統志に「——出松江府者獨四腮、隋煬帝謂金壘玉膾、東南佳味」載復古の詩に「功名未必勝——」

【鱸魚膾】「スズキ」の「ナマス」晉の張翰が鱸膾を思ひ、官を辭して歸鄉せし事、晉書張翰傳に出づ（張翰蓴ヲ）を見よ、

李白の秋下荊門に「霜落荊門江樹空、布帆無恙挂秋風、此行不爲——、自愛名山入剡中」

【魯魚ノ謬】文字の誤りをいふ、事文類聚に「張揖曰ク、亥ト豕ト、涇ト渭ト分ツナシ、魯ト魚ト、淄ト澠ト辨ズルナシト、マタ云フ、簡帙磨滅、以陶爲陰、以魚爲魯」抱朴子にも「諺ニイフ書三寫、魯爲魚虛爲虎」

【臚句】（——）を見よ、

【祿位】俸祿と爵位と、周禮の冢宰に「以八則治都鄙、四曰、——以馭其士」

【鹿ヲ逐フ者ハ兎ヲ顧ミズ】（逐鹿者不顧兎）（逐鹿）を九鹿ヲ逐フ者）を見よ、

【祿ヲ干ム】（干祿）仕へて俸米を求むるをいふ、干は「コチラ」から進み出て求むる義、論語爲政篇に「子張學——」また天佑を求むる義にも用ふ、詩經大雅旱麓篇に「豈悌君子、——不回」

【勒花】（花ヲ勒ス）寒氣が花を止めて開かしめざるをいふ、勒は抑なり「寒勒牡丹」などと用ふ、

【六根清淨】六根は、眼耳鼻舌身意なり、この六根の欲なく清きをいふ、智度論に「——善欲心生」

【祿山凰翔ニ亡ブ】（祿山亡凰翔）太平記の序に見ゆ、安祿山は、唐の玄宗の寵臣、後、遂に叛きて兵を擧げ、東京洛陽を陷れ、僭して大燕皇帝と號す、顏眞卿等義兵を興して之を討つ、かくて祿山は子の安慶緒に弑せらる、自立せしより僅に一年にて亡ぶ、鳳翔は陝西省に在り即ち扶風郡の地、

【祿賜】「ロク」と「クダサレモノ」と、漢書食貨志に「租稅——皆以布帛及穀、使百姓一壹意農桑」吳志嚴畯傳に「畯不善——、皆散之親戚知故、家常不充」

【六十左右】六十歲バカリ左右は前後の義、左傳僖四年の杜註に「——時、子在十歲」

【六十四卦】伏羲氏、易の八卦を作り、周の文王廣めて——となす、曰く「乾・坤・屯・蒙・需・訟・師・比・小畜・履・泰・否・同人・大有・謙・豫・隨・蠱・臨・觀・噬嗑・賁・剝・復・無妄・大畜・頤・大過・坎・離・咸・恒・遯・大壯・晉・明夷・家人・睽・蹇・解・損・益・夬・姤・萃・升・困・井・革・鼎・震・艮・漸・歸妹・豐・旅・巽・兌・渙・節・中孚・小過・既濟・未濟」

【鹿車】小車（ヲグルマ）をいふ、後漢書趙憙傳に「泥塗婦——載以——」註に「窄小ニシテ載スルニ一鹿ヲ以テス」

【祿俸】「ロク」と「クラキ」と、禮記に「王者之制——、公侯伯子男凡五等」

【漉酒巾】晉書陶潛傳に「酒熟スル毎ニ、頭上ノ角巾ヲ取リテ酒ヲ漉シ、畢リテ復之ヲ著ク」漉は濾なり、

【鹿茸】藥艸の名、本草に「——ハ味甘溫ニシテ毒ナシ」また和名「フクロヅノ」にこの字を充て用ふ、袋角は夏月鹿の角落ちて更に新角の生ぜしものをいふ、

【六道】六趣に同じ、佛敎の語、天上・人閒・修羅・地獄・餓鬼・畜生道をいふ、翻譯名義集に「三世猶若環旋、——喩如輪轉」

【六道錢】死者冥土の旅費に充つる意なり、釋書鈔註に「喪家埋錢於壙中、以爲充死者之用、支那昏寓錢也」

【六塵】佛經の語、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根より「イロイロ」の煩惱を「ヒキ」起して心を汚すをいふ、卽ち色・聲・香・味・觸・法を——といふ、金剛經註に「於此——起」憎惡心」昭明太子の詩に「庶茲枉八倒、冀此遣——」

【勒住】止むる義、范成大の詩に「隔年寒力凍芳塵、——東風寂寞濱」

【鹿ノ死スル音ヲ擇バズ】（鹿死不擇音）鹿の聲は美に

して愛すべきも、困迫して死に瀕する時は、復た美音を擇ぶに暇あらず、以て人の危急に迫りし時は、惡聲を出だすに喩ふ、左傳文十七年に「——レ——レ——レ、小國事二大國一也、德則夫人也、不レ德則其鹿也、鋋而走、險、急、何能擇」鋋は疾く走る貌、一解に、音は茱萸する所ろの處なり、古字聲同じきを以て假借するなりと、莊子に「歌死不レ擇レ音、氣息茀然」と茀然は、强くして盛なるなり、

【六腑】大腸・小腸・膀胱・三焦・膀胱をいふ、漢醫の說なり、腑府同じ、李德裕の故人寄レ茶詩に「——睡神去、數朝詩思清」

【勒兵】(兵ヲ勒ス)を見よ、

【六味】苦・酸・甘・辛・鹹・淡なり、大藏法數に「凡調二和飮食之味一、各有レ所レ宜、无レ出レ此之六種一云云」

【鹿鳴之宴】州縣より擧げられて京師に貢せらるる者を送る宴會をいふ、類書纂要に「郡邑新擧人ヲ宴スルヲ、——トナス」とあり、詩經小雅鹿鳴篇に「呦呦鹿鳴、食二野之芩一、我有二嘉賓一、鼓レ琴和レ瑟、且湛、我有レ旨酒、以燕樂嘉賓之心」この註に「呦呦ハ、聲ノ和ゲルナリ、芩ハ草ノ名、此レ賓客ヲ燕饗スルノ詩ナリ」(燕禮にも亦用ふ、工(ガクニン)鹿鳴、四牡、皇皇者華を歌ふと、卽ち此をいふなり、また饗飮酒にも用ふ)唐書選擧志に「每歲仲冬州縣監擧二其成者一送レ之尙書省一、而擧選不レ繇二館學一者、謂二之鄕貢一、皆懷レ牒自列二于州縣一試、已長吏以二鄕飮酒禮一、會二屬僚一設二賓主一、陳二俎豆一、備二管絃一、牲用レ少牢一、歌二鹿鳴之詩一、因與二耆艾一敍二少長一焉」

【六喩】諸法の常なきに喩ふ、金剛經にいふ「一切有爲法、如二夢幻泡影一、如レ露亦如レ電、應レ作二如レ是觀一」この六の喩を說きたる故に六喩經ともいふ、

【六欲】(五塵)を見よ、

【露花】「ツユ」に「ウルホヘル」花、張說の詩に「——香欲レ醉時鳥囀二餘音一」

【露華】「ツユ」の美なるを華に喩へていふ、李白の清平調に「雲想二衣裳一花想レ容、春風拂レ檻——濃」

【露臥】「ノジユク」露宿に同じ、後漢書祭祀志注に「——水飮、無二一人蹉跌一無二一人疾病一」

【爐火】「ロノヒ」齊書褚澄傳に「重茵累褥、牀下設二——一呂中孚の雪詩に「——已殘燈未レ盡、一罷疎竹白蕭蕭」

【鱸膾】(鱸魚ノ)を見よ、

【碌碌】次條を見よ、

【錄錄】史記の平原君傳に「毛遂曰公等——、所謂因人成レ事者也」の註に「說文ニ云フ、——ハ隨從ノ貌ナリ」と、碌碌に作る同じ、南史鮑照傳に「大丈夫豈蘊二智能一碌碌與二燕雀一相隨一乎」また一解に凡庸をいふと、亦通ず、

【轆轤】車の聲なり、集韻に「車軌道、謂レ之——」元好問の詩に「白沙漫漫車——」轤轆に同じ、

【六六鱗】鯉の異名(鯉魚)を見よ、

【露結】「ツユガムスボレル」左傳の「始殺而嘗」の疏に「七月有二白露一、八月——、九月乃成レ霜」千字文に「——爲レ霜」

【露見】明かに「アラハス」なり、漢書王嘉傳に「不レ敢——」また隱れたることの見はるる義にも用ふ、

【盧胡】大に笑ふなり、後漢書應劭傳に「掩レ口——而笑」字典に「一ニ胡盧ニ作ル」(胡盧)を見よ、

【魯國】周・兩漢の國名、豫州に在り、また東漢の縣名、晉・南宋・北魏の郡縣名、今の山東兗州府曲阜縣治これなり、その他歷朝同名異地あり、地理志韻編卷十三に詳かなり、

【露坐】屋外に「サラサレテスワル」後漢書周擧傳に「天子親自——德陽殿東廂請レ雨」獨異志に「荀奉倩出——」

【盧山】江西省に在り、廬山記に「東南有二香爐山一、孤峯秀起、遊氣籠レ其上一則瞀氣若二香烟一」李白の詩に「——東南五老峯、青天削出金芙蓉」次條を見よ、

【盧山ノ詩】南史に「何思澄爲二遊二廬山一詩一、沈約見レ之自以爲レ弗レ逮、約郊居新搆二閣齋一、因命二工書人一題レ此詩於壁一」

【盧山眞面目】廬山の眞成の形態をいふ、轉じて物の眞情をいふ、蘇軾の題二東林壁一詩に「橫看成レ嶺側成レ峯、遠近高低各不レ同、不レ識——、只緣身在二此山中一」

【盧山ノ瀑】六帖に「周ノ威王ノ時、匡裕生レナガラニシテ神靈、此ノ山ニ廬ス、世ニ廬君ト稱ス、故ニ其ノ山ニ名ヅク、岷流ニ背キ、彭蠡ニ面シ、根盤數百里、東南ニ香鑪峰アリ、西南ニ石門山アリ、其ノ狀雙闕ニ似タリ、壁立千仞、瀑布懸ル」李白の廬山瀑布の詩に「日照二香鑪一生二紫烟一、遙看瀑布掛二長川一、飛流直下三千尺、疑是銀河落二九天一」史記の河渠書贊に「余南登——、觀二禹疏一九江一」後漢書の郡國志の注に「——ハ尋陽縣ノ南ニ在リ」

【露次】「ノヂン」南史康絢傳に「命二諸軍一撤レ營——以待レ之」後漢書獻帝紀にも見ゆ、また露營・野營に同じ

【蘆稭】「シラサギ」圖繪寶鑑に「裴遼善——拜牛」林逋の詩に「蒼茫沙嘴——眠、片水無痕浸碧天」

【鷺鷥】水鳥、色黑く喙は曲りて鉤の如し「ミヅカキ」廣く、善く氷に入りて魚を捕ふるによりて烏鬼ともいふ、一名水老鴉、また慈老人、和名「ウ」「シマツドリ」鬢州圖經に「——捕魚」陸游の秋興詩に「道心已熟機心盡、寄語——莫苦猜」

【鷺洲】明一統志に「——書院、在吉安府白鷺洲上、宋淳祐間、知吉州江萬里建、延歐陽守道以教俊秀、守道作記」

【路寢】天子諸侯の正殿をいふ、路は大なり、君の所在、故に大の義に取る、公羊傳に「薨于——」(路寢何、正寢也)(路馬)を參看せよ

【露刃】「ヌキミ」元紀綱目に「燕帖木兒率其黨十七人、兵皆——」

【廬舍】住屋なり、遠文釋義に「在」野曰廬、市居曰舍」

【露珠】「ツユ」を「タマ」に喩へていふ、王涯の秋思詩に「一夜清風蕺未起、——翻盡滿池荷」劉威の早春詩に「冰消泉脈動、日暖——睛」

【魯酒】魯國の酒、次條の故事によりて薄き酒の義、莊子の胠篋篇に「魯酒薄——而邯鄲圍」

【魯酒薄クシテ邯鄲圍マル】思ひがけ無き禍を被るをいふ、淮南子に「楚諸侯ヲ會ス、魯趙俱ニ酒ヲ獻ズ、酒吏趙ヲ怒ル、乃チ魯ノ薄酒ヲ以テ、趙ノ厚酒ニ易ヘテ之ヲ奏ム、楚王趙ノ酒薄キヲ以テ、遂ニ邯鄲ヲ圍ム」と、邯鄲は趙の都なり、莊子の胠篋篇に「魯酒薄——而邯鄲圍、聖人生而大盜起」と、轉じて薄酒を魯酒といふ、

【魯肅】字は子敬、東城の人、家、財に富む、周瑜嘗て往いて之を見、且つ資糧を求む、肅米兩囷あり、囷毎に三千斛あり、乃ち一囷を指して之に與ふ、後ち吳に事へて戰功を累ね、橫江將軍となる、肅人と爲り、方嚴、軍陣に在りと雖も、手に卷を釋かず、

【露宿】「ノジュク」後漢書王渙傳に「境內清夷、商人——於道」

【廬錐】「アシ」の芽の初めて出でたるをいふ、その形錐に似たるよりいふ、唐の元稹の寄樂天詩に「冰消田地——短、春入柳條——柳眼低」

【橙聲】船を行る「ロ」の聲、白居易の河亭晴望詩に「晴虹橋影出、秋雁——來」雁の聲を橙聲に喩へていへり、

【廬生之夢】(邯鄲ノ)を見よ、

【廬照鄰】字は昇之、唐の幽州范陽の人、高宗の時、王

物楊炯・駱賓王と文章を以て名を齊す、天下號して四傑となす、風疾を病み、その苦に耐へず、自ら潁水に投じて死す、著すところ盧昇之集七卷あり、

【露葦】黑なき「ウテナ」(中人)を見よ、

【魯仲連】(東海ノ)波を見よ、

【蔗狄】「アシ」と「ヲギ」と、何れも水邊に生じて形も相似たり、白居易の浦中夜泊に「暗上江隄還獨立、水風稍氣夜稜稜、同看深浦停舟處、——花中一點燈」

【露電】人生の「ハカナキ」に喩ふ、金剛經偈に「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、當作如是觀」陸游の感事詩に「若悟死生均一——、未應富貴勝漁樵」

【盧仝】唐の濟源の人、玉川子と號す、學を好みて博覽、詩に工なり、嘗て月蝕の詩をつくり元和の逆黨を譏る、韓愈その工を稱せり、性茶を好む、謝孟諫議名ハ簡惠茶歌あり曰く、

日高丈五睡正濃、軍將扣門驚周公、口傳諫議送書信、白絹斜封三道印、開緘宛見諫議面、首閱月團三百片、聞道新年入山裏、蟄蟲驚動春風起、天子須嘗陽羨茶、百草不敢先開花、仁風暗結珠蓓蕾、先春抽出黃金芽、摘鮮焙芳旋封裹、至精至好且不奢、至尊之餘合王公、何事便到山人家、柴門反關無俗客、紗帽籠頭自煎喫、碧雲引風吹不斷、白花浮光凝碗面、一碗喉吻潤、二碗破孤悶、三碗搜枯腸、惟有文字五千卷、四碗發輕汗、平生不平事、盡向毛孔散、五碗肌骨清、六碗通仙靈、七碗喫不得也、唯覺兩腋習習清風生、蓬萊山在何處、玉川子乘此清風欲歸去、山上群仙司下土、地位清高隔風雨、安得知百萬億蒼生命墮顚崖受辛苦、便從諫議問蒼生、到頭合得蘇息否、

【壚ニ當ル】(當壚酒肆を守るをいふ、酒を賣る處、土を累ねて壚とし、以て酒甕を居く、四邊隆起し、其の一面高く、形、鍛爐の如し、故に壚と名づく、漢書司馬相如傳に「盡賣車騎、買酒舍、乃令文君——」李白の詩に「胡姬貌如花、——レー笑春風」

【路馬】路は大なり、君の車馬をいふ、左傳桓二年の「大路越席」の疏に「路ノ訓ハ大ナリ、君ノ在ル所、大ヲ以テ號トナス、門ヲ路門トイヒ、寢ヲ路寢トイヒ、車ヲ路車トイフ」禮記に「下公門、式——」

【騅背】「ウサギウマ、ノセナカ」北夢瑣言に「鄭綮云、詩思在灞橋風雪中驢子背上」

【魯般ノ雲梯】（錢神論）を見よ、

【露版】「カチイクサ」の「カキアゲ」通鑑齊紀に「上ル馬ニ能撃ル城ヲ、下ル馬作ス——ヲ、唯傅修期耳」注に「——ハ撻ヲ獲タルノ狀ヲ書シ、——上聞ス、天下ヲシテ悉ク之ヲ知ラシムルナリ」（露布）を見よ、

【露盤】承——ノ略、曹植の承——頌に「固若ク——、長存永貴」王逢の宮中行樂詩に「——迎ル月早、宮漏出ル花遲シ」

【魯般ガ雲梯】太平記「千劒破城軍事」の條に引けり、淮南子に「楚欲攻ント宋、墨子聞而憫之、見ル楚王曰、臣見ル大王之必傷義而不得ン宋、王曰公輸天下巧士、作ル爲雲梯之械、設ケ以攻ント宋、宋易爲ン守ラ、公輸般設ケ攻ント宋之械、墨子設ケ守ル宋之備、九攻而墨子九却ク之、弗ル能ハ入、乃偃ル兵不ル攻公輸魯般也」とあり、雲梯とは梯の高ぐして雲中に入るをいふ、この故事墨子にも「公輸般爲リ雲梯ヲ將ント以攻ント宋、墨子聞之、見般、以帶爲城、以牒爲械、般九設機變、墨九距之、般之械盡、墨之守有餘」とあり、

【魯般之巧】「サイク」の「スグレタル」に用ふ、孟子離婁上篇に「離婁之明、公輸子之巧、不ル以規矩ヲ、不能成方員」の註に「公輸子名ハ班、魯ノ巧人ナリ」とあり、淮南子にも「魯般以木爲鳶而飛之」と見ゆ、前條を見よ、

【盧跗】扁鵲と俞跗と、共に古の良醫、左思蜀都賦に「神農是嘗——是料」注に「扁鵲ハ盧人、跗ハ俞跗ナリ」

【露布】文體の名なり、文體明辨に「按ズルニ、——ハ軍中檄ヲ奏スルノ辭ナリ、辭ヲ帛ニ書シテ、コレヲ漆竿ノ上ニ建ツ、劉勰ノ所謂「露布板不ル封、布諸視聽ニ」ト、此レ其ノ義ナリ、任昉イフ、漢ノ賈弘、馬超ノ爲メニ曹操ヲ伐チ、——ヲ作ルト、而シテ世說ニ亦イフ、桓溫北征シテ、袁宏ヲシテ馬ニ倚リテ——ヲ撰セシムト、則チ——ノ作、魏晉ニ始マル」品字箋に「——ハ撻書ノ名」蘇軾の詩に「——朝馳玉關塞、撻書夜奏甘泉宮」露版に同じ、

【鹵簿】天子の行列をいふ、類書纂要に「車駕行ケバ羽儀鹵簿ヲ導ク、之ヲ——トイフ、中丞制史皆——アリ、羽儀トハ天子ノ車前、羽ヲ負ヒテ侍衞スルナリ、胡三省曰ク、導從ノ次第ヲ——トイフ」事物紀原に「鹵ハ大楯ナリ、敵ヲ扞グ所以、部伍ノ次、皆之ガ簿儀ヲ著ク、其ノ五兵獨リ楯ヲ以テ名ト爲ス者ハ、道ヲ行クノ時、甲楯外ニ居リ、餘兵內ニ在リ、故ニ但ダ——トイフ」五禮精義に「鹵ハ大盾ナリ、大盾ヲ以テ一部ノ人ヲ領ス、故ニ——ト名ヅク」

【鹵莽滅裂】鹵莽は、粗畧にして、心を用ひざるなり、滅裂は、輕易にして分破するなり、書言故事に「作ル事不精曰ク——ト」とあり、莊子の則陽篇に、長梧封人、問フ子牢ニ曰、君爲ル政焉勿ス鹵莽ニ、治ル民焉勿ス滅裂ニ、昔、予爲ル禾、耕ス而鹵莽ス之ヲ、則其實亦鹵莽ニ、而報予ニ、芸リ而滅裂ス之ヲ、其實亦滅裂ニ、而報予ニ」とあり、藝林伐山に「鹵ハ剛鹵ノ地、莽ハ草莽ノ地ナリ、其ノ剛鹵ヲ治メズ、其ノ草莽ヲ芟ラズ、是ヲ鹵莽ノ耕トイフ」

【露眠】「ソト」にて眠る、冷齋夜話に「愚範詩ニ——不ル管牛羊踐、我是鍾山無事僧」

【論】文の一體なり、文體明辨に「按ズルニ字書ニ云フ、論ハ議ナリ、劉勰云フ、論ハ倫ナリ、群言ヲ彌綸シテ、一理ヲ研ク者ナリ、論ノ名ヲ立ツルハ、論語ニ始マル、六韜二論ノ若キハ乃チ後人ノ追題カト、今分チテ八品トス、一ニ曰ク理論、二ニ曰ク政論、三ニ曰ク經論、四ニ曰ク史論、五ニ曰ク文論、六ニ曰ク諷論、七ニ曰ク、寓論、八ニ曰ク設論、ソノ題或ハ某論トイヒ、或ハ論某ト曰フハ、則チ各作者ノ之ニ命ズルニ隨フ、異義ナシ」

また佛教にて、佛の說を經といひ、菩薩の說を論といふ、

【論衡】三十卷（八十五篇）漢の王充撰す、充字は中任、會稽上虞の人なり、其の自記に曰く「辭ニ在リテ據功曹ト爲リ、都尉府ニ在リ、太守ニ在リテ亦功曹ト爲リ、元和三年（孝章帝）家ヲ揚州ニ移シ丹陽九江廬江ニ辟サレ、入リテ治中ト爲ル、章和二年、州ヲ罷メテ家居ス」と、其の世に在る坎坷不遇の態以て見るべし、後漢書の本傳に曰く「充嘗テ班彪ニ師事シ、博覽ニシテ章句ヲ守ラズ、家貧シクシテ書ナシ、嘗ニ雒陽ノ市肆ニ游ビ、賣ル所ロノ書ヲ閱シ、一見シテ輒チ能ク誦憶ス、遂ニ博ク衆流百家ノ言ニ通ゼリ、充論說ヲ好ミ、始メハ詭異ナルガ如ク、終ニ理實アリ、俗儒ハ文ヲ守リテ多ク其ノ眞ヲ失フト爲シ、乃チ門ヲ閉デ思ヲ潛メ、戶牖墻壁ニ各刀筆ヲ置キ、論衡八十五篇二十餘萬言ヲ著ス、物類ノ同異ヲ釋キ時俗ノ嫌疑ヲ正シ、百氏ノ浮虛ヲ訂シ、九流ノ拘誕ヲ詰ル」と、此れ其の書の大略なり、篇末に自記の一篇あり、充が著書の大旨を言ふこと太だ詳かなり、其の言に曰く「充ガ書ハ俗ニ違詭ス」又曰く「充仕途不遇ニシテ、徒ニ書ヲ著ハシテ自ラ紀ス」と其の發憤激伉の言たる、以て見るべし、其の篇卷の太だ多く、文辭の繁縟なるは、自記に

曰く「充ガ書、世用ト爲ル者ハ百篇モ害ナシ、用ヲ爲サザル者ハ一章モ補ナシ、皆用ヲ爲サバ、卽チ多キ者ヲ上ト爲ス、世人ハ一卷ナシ、吾ハ百篇アリ」と、又曰く「書ノ文重ナルト雖モ、論ズル所ロ百種、古ニ太公望、近クハ蔡仲舒、書篇ヲ作ル百有餘、吾ガ書ハ亦纔ニ百ヲ出ヅ而ルヲ太ダ多シトスルカ」と、この文に據れば、原書本と百餘篇あり、八十五篇なるは、已に其の舊に非ず、大氐充が人と爲りは剛愎にして自ら是とし、偏隘にして自ら肆なる、其の意に中らざれば、聖賢も亦彈擊して忌憚するなきに至る、

充の本傳に曰く「充論衡ヲ作ル、中土未ダ傳フル者アラズ、蔡邕吳ニ入リ始メテ之ヲ得テ以テ譚助ト爲ス(高氏引ク所ロノ袁崧ノ後漢書)王朗蔡邕ニ詣リ搜求シテ隱處ニ至レバ、果シテ論衡ヲ得、數卷ヲ抱持シテ將ニ去ラントス、邕曰ク惟、我ト爾ト共ニセン、廣クスルコト勿レト、朗其書ヲ得テ許下ニ還ルニ及ビテ、時人其ノ才進ムト稱ス、或ハ曰ク、異人ヲ見ザレバ異書ヲ得ルナラント、之ヲ問ヘバ果シテ論衡ノ益アリ是ニ緣リテ四方ニ流傳セリ」と、是の書の一時學者の貴重する所ろと爲りしを想ひ見るべし、されども是の書の辯論は、多くは無用に屬し、人に補益ある者

鮮し、但祿命に係る數言は、人をして警發せしむるに足る者あり、蓋し坎坷不遇の際に自得する所ろありて發せしが爲めか、

【論語】 漢書の藝文志に「論語ハ孔子ガ弟子時人ニ應答シ、及ビ弟子相トモニ言フトコロノ語ヲ錄シタルナリ、當時弟子各記スル所ロアリ、夫子旣ニ卒シ、門人相トモニ輯メテ論撰ス、故ニ之ヲ——トイフ」と、四書に列するは宋の朱熹の集註にして、十三經に列するは魏の何晏の集解にして、宋の邢昺の疏なり、別に皇侃の疏あり、彼に伏して我に傳存したり(魯論)を參看せよ、參考書は、

○論語集解　十卷、魏の何晏等註、
○論語義疏　十卷、梁の皇侃疏、
○論語正義　二十卷、宋邢昺疏、
○論語集註　十卷、朱熹撰す、
○論語古義　十卷、伊藤維楨撰す、
○論語古義標註　四卷、伊藤長胤撰す、
○論語徵　十卷、荻生茂卿撰す、
○論語欄外書　四卷、佐藤坦撰す、
○論語集說　六卷、安井衡撰す、

【論篤】 言論の篤實なるをいふ、論語先進篇に「子曰、——是與、君子者乎、色莊者乎」色莊とは外面は莊嚴なる君子の如く見ゆれども、內にその實なき者をいふ、人の言語の篤實なるを見て、容易に之に許與して、彼は有德者なり、君子なりと思ふときは鑒定を誤ることあるものなり、故に其の人果して眞の君子なりや、或は色莊の徒なりやと、その心と行事とに就きて、子細に觀察すべしとの意、

【論列】 事の是非を、ツラネ論ずる、司馬遷の報任安書に「仰首一一是非」

【魯陽】 兩漢の縣名(南陽郡ニ屬ス)晉の荊州——國、北魏の廣州——郡、今の河南汝州魯山縣治これなり、

【魯陽日ヲ揭ク】 (魯陽揭日)淮南子に「魯陽公韓ト難ヲ構ヘ、戰酣ニシテ方ニ暮レントス、戈ヲ援キテ之ヲ揭ク、日之ガ爲メニ反ヘルコト三舍」揭一に麾に作る、

【盧綸】 字は允言、唐の河中の人、德宗の時、韋渠牟その才を表し、召し見る、帝作るところあれば、卽和せしむ、綸、吉中孚・韓翃・錢起・司空曙・苗發・崔峒・耿湋・夏侯審・李端と皆詩を能くし名を齊うす、太曆十才子と號す、四子を生む、皆文學ありて進士に第せり、

【盧陵】 兩漢の縣名(豫章郡)今の江西吉安府——縣の西、また晉以後隋に至るまでの郡名(隋ハ縣名ニモアリ)今の吉安府吉水縣の東北三十淸里、また唐宋以後の縣名、今の吉安府——縣治これなり、歐陽修・文天祥等の生地、

【魯論】 論語の異稱、論語は秦火の後、齊論・古論・——の三種の異本を生ぜり、——は二十篇魯人の傳ふるところ、齊論は二十二篇、齊人の傳ふるところ、古論二十一篇は景帝の時、魯の共王が孔子の舊宅を壞ちて得たるもの(蝌蚪ノ古文ニテ記ス、故ニ古論トイフ)その後齊論・古論は亡伏して傳はらず、今の論語は卽ち魯論なれども、これ亦古書の眞面目を存せず、宋の宇文虛中の時習齋詩に「未厭平生習氣濃、更將餘事訓兒童」——二萬三千字、悟入從初一句中に(論語)を參看せよ、

【鹵掠】 鹵は虜に同じ、略奪するをいふ、漢書高祖紀に「所過毋得——」

ワ

【倭】 古昔、筑紫の一部を、支那人の稱せし名、ヤマト、漢書地理志に「樂浪海中有ㇾ倭人、分爲ㇾ百餘國」師古の註に「一ハ帶方ノ東南大海中ニ在リ、山島ニ依リテ、國ヲ爲ス云云」

【歪】 「ユガム」字彙に「不正也」とあり、不正ニ字を合せてつくれる俗字、

【淮陰】 西漢の臨淮郡——縣、東漢の徐州下邳國——縣、晉の徐州廣陵郡——縣、唐の淮南道楚州——縣、今の江蘇淮安府清河縣の東南五里に在り、史記——侯傳に「——侯韓信者——人也」溫庭筠の贈ㇾ少年ㇾ詩に「酒酣夜別——市、月照高樓一曲歌」

【矮屋】 「ヤネノ、ヒクキイヘ」また己の家を謙してもいふ、楊萬里の句に「——炎天不ㇾ可ㇾ居」

【淮海】 書經禹貢に「——惟揚州」の傳に「北據ㇾ淮、南距ㇾ海」

【根閫底楔】 根は戸樞「クルル」閫は門中の橛、扉は戸牡「トザシ」楔は門の兩旁の木、一名は根「ホコダチ」

【矮子看戲】 劇場にて「セイ」の低き者が、長大なる人の背後に在りて戲を看るを得ず、唯、前なる人の批評を聞きて之に雷同するをいふ、人の見識なきに喩ふ「ヤジウマ」矮人觀場ともいふ、朱子語類に「如——ーー相似、見ㇾ人道ㇾ好、他也道ㇾ好」

【矮人】 「セイヒク」漢書田儋傳に「——不ㇾ忘ㇾ起、盲者不ㇾ忘ㇾ視」一に矮子ともいふ、

【淮水】 水の名、水經に「——出ㇾ南陽平氏縣胎簪山、東北過桐柏山」釋名に「淮圍也、圍繞揚州分界、東至於海ㇾ也」劉禹錫の石頭城詩に「——東邊舊時月、夜深還過ㇾ女墻ㇾ來」

【淮南】 晉北魏隋の郡名、揚州に屬す、今の安徽鳳陽府壽州治これなり、南宋南齊の郡名、今の安徽太平府當塗縣の南三十八清里に當る、韋應物の聞ㇾ雁詩に「——秋雨夜、高齋聞ㇾ雁來」

また豆腐の異名、山堂肆考に「淮南王安始磨ㇾ豆爲ㇾ乳脂、名曰ㇾ豆腐、自是爲ㇾ豆腐異稱」

【和韻】 他の作りし詩に賡和して作るをいふ、次韻、用韻、依韻の三體あり、次韻は原韻のままに和して先後易ふることなきなり、用韻は原韻を用ふるも、先後に拘泥せざるなり、依韻は原作と同韻中に在る文字を用ひ、必ずしも原韻の字を用ひざるなり、また用韻、依韻の二を合せて和韻といひ、以て次韻に對する說もあり、和韻は唐の白居易と元稹との唱和より盛行するに至れり、珊瑚鉤詩話に「前人未ㇾ始——、自ㇾ元白爲ㇾ二浙觀察、往來皆ㇾ郵筒ㇾ相唱和、始依ㇾ韻而多至ㇾ千言、篇章甚富」

【淮陽】 西漢の國名、隋の郡名、今の河南陳州府淮寧縣治これなり、また南宋北魏（東楚州）の郡名、隋の縣名徐州下邳郡（今の江蘇淮安府清河縣の西南、また北魏の郡縣名（睢州）なるは當に今の安徽鳳陽府の境に在りたるなるべし、また宋の京東東路——軍は今の江蘇徐州府邳州の東三清里、

【煨栗】 火中に入れて「ヤキタル」栗、また栗をやく義、張澄の句に「火爐——話ㇾ親情」

【賄賂】 賄は正音クワイ非義の贈物をいふ、左傳に「亂獄滋ㇾ豐、——並行」南史陳張貴妃傳に「閹宦之徒、內外交結、轉相引進、——公行」

【王安石】 字は介甫、半山と號す宋の撫州臨川の人、文を作るに筆を動かし飛ぶが如し、既に成れば、見る者皆その精妙に服す、議論高奇能く辨博を以てその說を濟す、慨然として矯世變俗の志あり、神宗之を信任し、用ひて參政とし、その建議せし所ろの新法を行はしむ、尋で相となり、荊國公に封ぜらる、政を執ること六年、怨議紛起して皆新法を咎む、安石自ら安んぜずして引き去る、元祐元年卒す、年六十八、太傅を贈られ文と謚す、著す所ろ周禮新義・毛詩義・臨川集等あり、

【王安石ノ新法】 宋は遼及び西夏に毎年多額の歲幣を贈りしと、國初以來功臣を優待せしとにより、財政困難を極めしかば、王安石、まづ國庫を充實し、而る後強硬なる對外政策を取らんとて、左の新法を創む、

甲、富國策
- 三、市易法　物品を官に購買し、若くは抑留して貴價を待ち、以て賣却し、利を收むるの法、
- 二、募役法　人民に相當の稅を納めしめて、服役の義務を免じ、政府は別に無職の民を募りて役に充つ、
- 一、青苗法　抑苗の時期に政府より資金を百姓に貸し、秋熟に至りて、資金に二割もしくは三割の利子を添へて還納せしむ、

は官物と交換し、また商人に資金を貸與して規定の利子を納めしむ、

四、方田均稅法

方千歩の地を一歩となし、地の肥瘠を檢して五等となし、稅數を均足するなり、

乙、强兵策

五、保甲法

一種の民兵制度にして、十家を保とし、五百家を都保とし、都保に正副二人を置き、其の部下の保丁をして、弓箭を貯へ、武藝を講習せしむ、

六、保馬法

保丁に、官の馬を貸與し、其の病死するときは、相當の辨償をなさしむ、

【王維】 字は摩詰、唐の太原の人、九歳にして辭を屬することを知り草隷に工に、畫を善くす、開元九年進士第一に擢かる、尚書右丞に遷る、その別墅輞川に在り、詩を賦し、自ら樂む、乾元二年卒す、年六十一、その詩神韻を主とし、措辭も亦苟もせず、論者之を妙品上乘とす、畫も亦逸趣多く、山水平遠、雲勢石色、皆天機の到る所ろにして、學びて能すべきにあらず、東坡維の詩畫を評して「詩中有畫、畫中有詩」といへり、名畫錄に「維輞川ノ圖ヲ畫ク、山谷鬱盤、雲水飛動、意塵外ニ出デ怪筆端ニ生ズ、秦太虛云フ、予病アリ、高符仲、輞川ノ圖ヲ携ヘ予ニ示ス、予之ヲ閱シテ恍トシテ輞川ニ入ルガ如ク、數日ニシテ病愈ユト」

【王徽】 字は子充、明の義烏の人、幼にして秀爽奇敏なり、黄溍に師事す、洪武の初、江西儒學提舉司校理を授けられ、起居注向知南康府事に遷る、召されて元史を修し、總裁官となる、書成りて翰林待制兼國史編修に擢でらる、洪武五年使を雲南に奉じ、梁王把都の爲めに害せらる、年五十二、その遺文、華川集・玉堂雜著等あり、正統閒翰林學士を追贈し、忠文と諡せらる、

【王右軍】 晉の王羲之をいふ(王羲之)(二王)を見よ、

【王右丞】 (王維)を見よ、

【王獻定】 字は于一、彰石と號す、清の江西南昌の人、明の太僕卿止敬の子、貢生たり、詩古文詞を以て自負す、書を善くし、李北海の筆法を得たり、亂に遭ひ廣陵に居り、西湖に客死す、四照堂集あり、

【王育】 晉の京兆の人、少くして孤貧なり、人の爲めに羊を牧す、小學を過ぐる毎に必ず欷歔流涕す、暇あれば、卽ち地を折りて書を學ぶ、一日忘れて羊を亡ふ、羊主之を責むること甚し、育將に身を勞し以て償はんとす、同郡の許子章聞きて之を嘉し、育に代りて羊を償ひ、その衣食を給し、その子と同じく學ばしむ、遂に博く經史に通ず、後に武陽令と爲る、政を爲すこと清約なり、幷州督護に遷り、破虜將軍に累官す、

【王偉時弊ヲ論ズ】 明史に「漳州ノ通判王偉、上書シテ曰ク、人君德ヲ修ムルニアリ、忠厚ヲ以テ心トシ、寬大ヲ以テ政ヲスルナリ、昔、周家忠厚ナリ、故ニ八百年ノ基ヲ垂ル、漢室寬大ナリ、故ニ四百年ノ業ヲ開ク、蓋シ上天、物ヲ生ズルヲ以テ心トシ、春夏長養シテ秋冬收藏ス、其ノ開雷電霜雪、時アリテ薄擊肅殺ス、然レドモ皆暫クニシテ常ナラズ、モシ雷電霜雪ヲシテ時ニ有ラザルコトナカラシメバ、上天生物ノ心息マン、臣願クハ陛下天ノ道ニ法ランコトヲト、帝之ヲ嘉納ス、時ニ殿廷ヲ尚ブ、故ニ偉以テ言ヲ爲シシナリ」

【王禹偁敏慧】 王禹偁字は元之、鉅野の人なり、宋の太宗の朝進士に擧げられ、翰林學士に累遷す、著すところ文集五十餘卷あり、劉氏人譜に「王禹偁生レテ敏慧ナリ、七歳ニシテ文ヲ能クス、父ハ本ト磨家ナリ、畢文簡公州ノ從事タリシトキ、禹偁父ニ代リテ甕ヲ轆シテ庭下ニ立テリ、文簡方ニ諸子ニ命ジテ句ヲ屬セシム、イフ鸚鵡能言爭似鳳ト、禹偁聲ヲ抗ゲテ曰ク、蜘蛛雖巧不如蠶ト、文簡嘆ジテ曰ク、經綸ノ才ナリト、留メテ子弟ト與ニ學ヲ講ゼシム、一日、磨ノ詩ヲ作ラシム、禹偁思ハズシテ對ヘテ曰ク、但存心裡正、何愁眼下遲、得人輕借力、便是轉身時ト、文簡聞キテ大ニ之ヲ奇ナリトシ、遂ニ加フルニ衣冠ヲ以テシ呼ビテ小友ト爲セリ、太平興國八年、進士ト爲リ、後チニ知制誥ニ擢デラレ、竟ニ內相ト爲レリ」

【王衍】 晉書の一一傳に「衍盛才美貌アリ、明悟神ノ如シ、自ラ子貢ニ比シ、空言ヲ喜ミ、惟老莊ヲ談ズルヲ事ト爲スノミ」(聖尾)を見よ、

【汪琬】 字は、苕文、鈍翁と號す、長洲の人、晩に堯峯に居り、因りて自ら號とす、順治十二年の進士、戶部主事に官す、康熙十八年鴻博に擧げられ、編修を授けらる詩は王新城と名を齊うす、時に汪王と稱す、文は經史に根柢し、清朝三家の一たり、康熙二十二年卒す、年六十五、鈍翁前後類稿・堯峯文鈔等の著あり、

【往ヲ彰カニシテ、來ヲ察ス】 (彰往而察來)既往の事跡を顯彰し、將來の得失を明察するをいふ、易の繫辭

の語

【王應麟】（ワウオウリン）字は伯厚、宋の鄞縣の人　九歳にして六經に通じ學問該博、文を作るに敏捷なり、淳祐の初めの進士、翰林學士禮部尚書となる、元の元貞二年卒す、年七十四、著す所ろ漢制考・困學紀聞・地理考・四書考異・易經考異・詩經考異・玉海・三字經・小學紺珠等あり、

【往ヲ告ゲテ來ヲ知ル】（ワウヲツゲテライヲシル）（告諸往而知來）往とは既にいふ所ろの者をいひ、來とは未だ言はざる所ろの者をいふ、卽ち一を告げて二を知るの謂なり、論語學而篇に「告諸往而知來者」また淮南子に「聖人察其所以往、則知其所以來者」とあるも、略相似たり、

【往ヲ觀テ以テ來ヲ知ル】（ワウヲクワンテモツテライヲシル）（觀往以知來）過去の事を觀察して、未來の事を推知するをいふ、列子に「聖人見出以知入」

【王勃】（ワウボツ）字は大用、唐の河中の人、昭宗の大順の初の進士、仕へて尚書禮部員外郎に至る、自ら守素先生と稱す、司空圖・鄭谷と詩友たり、詩六卷あり、

【枉駕】（ワウガ）（勃ヲ枉グ）「ノリモノ」を枉げて來り臨むといふ義、枉屈に同じ、三國志蜀志諸葛亮傳に「徐庶謂先主曰、諸葛孔明臥龍也、此人可就見、而不可屈致、將軍宜枉駕顧之」

【王磐】（ワウガウ）（明ノ王磐）を見よ、

【橫行】（ワウカウ）「ホシイママナル」行を爲すをいふ、史記の伯夷傳に「盜跖暴黨數千人、橫行天下」漢書季布傳に「臣願得十萬衆、橫行匈奴中」また橫は一に衡に作る、孟子梁惠王下篇に「一人衡行於天下、武王恥之」

【橫行介士】（ワウカウカイシ）盤の異名、事類全書に「師ヲ出シ砦ヲ下スノ際、忽チ盤ヲ見レバ、則チ呼ンデ——トナシ、櫂ヲ以テ衆ヲ安ンズ」

【王翰】（ワウカン）字は子羽、唐の晉陽の人、進士の第に擢でられ、昌樂尉に調せらる、張說の政を輔くる、召して正字と爲す、開元中、道州の司馬に貶せられて卒す、集十卷あり、

【皇侃】（ワウガン）南北朝の時、吳郡の人、少くして學を好み、三禮・孝經・論語に明かなり、梁に仕へて國子助敎となり、禮記講疏五十卷を撰す、書成り、詔して祕閣に付す、召して壽光殿に入り、禮記を說かしむ、武帝之を善しとし、員外散騎侍郎を加ふ、

【王畿】（ワウキ）王都に近き地をいふ、周禮に「職方氏辨ス九服之邦國、方千里曰王畿」

【王弼】（ワウヒツ）字は石谷、耕煙と號し、また烏目山人と號す、晩に淸暉老人と稱す、淸の常熟の人、山水を畫き一代

の大家たり、惲南田と名を齊うす、世に惲王と稱す、

【橫議】（ワウギ）「ホシイママ」に政事を論議するなり、孟子滕文公下に「聖王不作、諸侯放恣、處士橫議」

【王季友】（ワウキイウ）唐の豐城の人、博く羣書を極む、貞元の進士、文甚高古なり、仕へて御史中丞となる、杜甫の詩に「丈夫正色動引經、豐城季子——、羣書萬卷常暗誦、孝經一通看在手、豫章太守高帝孫、引爲賓客敬顏久」

【王徽之】（ワウキシ）（王子猷）を見よ

【王羲之】（ワウギシ）晉書に「——字逸少、年十三、嘗謁周顗、顗異之、時重牛心炙、坐客未嚼、顗先割啗羲之、於是知名、及長辨贍以骨鯁稱、尤善隸書、爲古今之冠、爲右將軍會稽內史」有七子、知名者五人、玄之・凝之・徽之・操之・獻之、獻之字子敬、工草隸、善丹靑、七八歳學書、羲之密從後擲其筆、不得、歎曰、此兒後當復有大名、以選尚新安公主、拜中書令」

【橫逆】（ワウギヤク）「ホシイママ」にして理に順はざるをいふ、孟子離婁下に「有人於此、其待我以——、則君子必自反也」自反とは自ら反省するをいふ、

【王紱】（ワウフツ）字は孝伯、少くして美譽あり、淸操人に過ぐ、自ら才地の高華を負ひ、恒に宰輔の望あり、嘗ていふ名士は必ずしも奇才を須ひず、但常に無事にして痛飮し酒熱して讀むを得しめば便ち名士と稱すべしと、著作郎と爲る、數して曰く、仕へて宰相と爲らずんば志何ぞ騁するに足らんと、晉書に「——美姿容、人多悅之、或目之曰、瀟灑如春月之柳」

【王瓜】（ワウクワ）「カラスウリ」春、舊根より生ず、蔓長じて線稜あり、葉と共に深綠にして黑みあり、葉は互生し、圓くして厚く三五尖をなし、鋸齒ありて毛刺あり、夏の半に白花を開く、後ちに瓜を結ぶ、小鷄卵の如く熟すれば朱紅色となる、一名は栝樓、淮南子時則訓に「——生」

【橫禍】（ワウクワ）「ハカラザル」慘禍をいふ、淮南子詮言訓に「內修極而——至者天也、非人也」

【汪濊】（ワウクワイ）「ユタカ」に多くあるをいふ、漢書禮樂志に「澤——輯萬國」輯は和なり、一解に深廣の貌、濊一音ワイ

【王化之基】　王者の教化の根本をいふ、詩經の大序に「周南召南、正始之道、ーーーー」盧照隣の詩に「萬國淳風王化基」

【王珪】　字は叔玠、唐の太原祁縣の人、太宗の時、諫議大夫と爲る、忠直敢言す、上嘗て謂ふ、卿識鑑精通、又談論を善くす、玄齡以下の數子と就若ぞと、對へて曰く孜孜として國に報じ知りて言はざるなきは、臣、房玄齡に如かず、才文武を兼ね、入りては相、出でては將たるは、臣、李靖に如かず、敢奏詳明出納惟れ允なるは、臣、溫彥博に如かず、煩に居て劇を治め、衆務畢く擧るは、臣、戴胄に如かず、君の堯舜の如くならざるを恥ぢ、諫諍を以て己が任と爲すは、臣、魏徵に如かず、濁を激し清を揚ぐるに至りては、臣、數子に於て亦微長ありと、爲を郡王に進め禮部尚書に拜し、魏王の師を兼ねしむ、卒して吏部尚書を贈られ、懿と謚す、子敬公主に尚す、詳しくは唐書の本傳を見よ、十訓抄第十に「唐の太宗の臣、ーー申して曰く云云」とあるは貞觀政要の崇儒學篇に「王珪曰、人臣若無學業、不能識前言往行、豈堪大任云云」とあるを引きたるなり、宋の時、またーーあり、慶歷中の進士、その文、典麗にして西漢の風あり、尚書左僕射兼門下侍郎に累遷し、卒して太師を贈られ、文恭と謚す、

【王建】　字は仲初、唐の潁州の人、大曆十年の進士、大和中陝州司馬となる、韓愈張籍と同時にして、尤も相友とし善し、工に樂府歌行を作る、王司馬詩集十卷あり、

【王言絲ノ如シ】　(綸言)を見よ、

【王獻之】　義之の子にて、徽之の弟なり、高邁不羈、閉居終日と雖も、容止怠らず、太元中、中書令に至る(二王)を參看せよ、

【王元章】　(王冕)を見よ、

【王彥章】　(王鐵槍)を見よ、

【枉顧】　類書纂要に「謝人訪及、曰蒙ーーこととあり、註に「少者、長者ニ謁スルハ、理順ナリ、長者少者ヲ顧ルハ、理逆ナリ、尊者ノ顧眄ヲ枉屈スルヲイフ」漢書淮南王傳に「子高乃幸左顧」の注に「左顧ハ猶ホーーノ如シ」とあり、古は長者右に居り、少者左に居る、故に長者、少者を顧るを左顧といふ、

【王侯將相寧ロ種アランヤ】　王侯將相になる人は、別に種類あるにあらず、匹夫にても、志さへあれば、かかる地位にもなることを得べしとの義、史記の陳涉世家に「壯士不レ死即已、死即擧大名耳、王侯將相寧有レ種乎」

【王侯六人】　身分の高き人をいふ、史記老聃傳に「自ーーー、不能器之」

【王侯ニ事ヘズ、其ノ事ヲ高尚ニス】　(不事王侯、高尚其事)易の蠱卦の上九の語、隱居して志を高くし世事の煩を受けざるをいふ、

【黃金卿ガ身ヲ周飾ス】　(黃金周飾卿身)元史孫元皃傳に「大德七年秋入朝、帝親諭之曰、卿鎭北邊、累建大功、雖以ーーーーーー猶不足以報卿意」

【黃金ノ術】　駿臺雜話の「壬子試筆の詞」に見ゆ、神仙金丹の術をいふ、通鑑卷の二十漢武帝紀に「樂成侯丁義、鬲方士欒大云云、與文成將軍、同師(中略)臣之師曰、黃金可レ成、而河決可レ塞、不死之藥可レ得、仙人可レ致也云云」とあり、また史記封禪書に「丹砂可レ化爲黃金、黃金成以爲飮食器、則益レ壽」とあり、

【黃金滿籯ヲ遺スハ、一經ニ如カズ】　(子ニ黃金)を見よ、

【橫草之功】　跋涉の勞といふが如し、草の中を行けば、草をして偃臥せしむ、故にいふ、漢書終軍傳に「無ーーーー、得列宿衛食祿」

【橫槊】　南史梁桓祖傳に「曹操曹丕、上レ馬ーレーー、下馬談論」槊は「ホコ」消に同じ、長サ一丈八尺ある「ナガキホコ」(槊ヲ橫ヘ)を見よ、

【王佐之才】　王者の輔佐たるに足る才をいふ、漢書の董仲舒傳の贊に、「劉向、稱董仲舒有ーーーー、雖伊呂已以加レ伊尹、呂尚なり、成語考に「孔明有ーーーー、管隱草廬之中」

【王粲】　字は仲宣、三國の時の魏の人、夔の子、暢の孫、博物多識、問ひて知らざるなし、蔡邕その才略を奇とす、粲の門に在りと聞き則ち屨を倒にして之を迎ふ、後ち魏に仕へ、累官して侍中に至る、曹植の與楊脩書に「今世作者、可略而言、昔仲宣獨步於漢南、(荊州なり)孔璋(陳琳の字)鷹揚於河朔、偉長(徐幹の字)擅名於青土(禹貢の青州)公幹(劉楨の字)振藻於海隅(幹は東平寧陽の人、齊に邊す、故に海隅といふ)德璉(應瑒の字)發迹於大魏、足下高視於上京、當此之時、人人自謂握靈蛇之珠(隋侯の珠の一名)家家自謂抱荊山之玉也」

【橫死】　不正の死をいふ、南史陸襲傳に「襲爲鄱陽內史、枉直無レ濫、人歌曰、人無ーーー賴陸君」

【王子猷】　名は徽之、羲之の子、性放達、官を棄てて東に歸り、會稽の山陰に居る、晉書の列傳に「子猷嘗居山陰、夜雪初霽、月色清朗、獨酌酒、詠左思招隱詩、忽憶戴逵、逵時在剡縣、便夜乘小船詣之、經宿方至、

造門不前而反、人問其故、曰、本乘輿而行、輿盡而反、何必見安道邪」とあり（安道ハ戴逵ノ字、剡縣ハ會稽ニ在リ）子猷性竹を愛す、嘗て空宅中に寄居す、便ち竹を種ゑしめて曰く「何ソ一日モ此君ナカルベケンヤト」官黄門侍郎に至る、

【王充】 後漢書に「一一字ハ仲任、會稽上虞ノ人ナリ、班彪ニ師事ス、家貧ニシテ書ナシ、常ニ洛陽ノ市肆ニ遊ビ、賣ル所ロノ書ヲ閲シ、一見輒チ誦憶ス、遂ニ衆流百家ノ言ニ博通シ、郡ニ仕ヘテ功曹ト爲ル、充論説ヲ好ム、始ハ詭異ナル若シ、終ニ理實アリ、以爲ラク、俗儒文ヲ守リテ多ク其ノ眞ヲ失フト、乃チ門ヲ閉ヂ思ヲ潛メ慶弔ノ礎ヲ絶チ、戸牖牆壁、各刀筆ヲ置キ、論衡八十五篇ヲ著シ、物類ノ同異ヲ釋キ、時俗ノ嫌疑ヲ正ス、刺史辟シテ從事ト爲シ、治中ニ轉ズ、自ラ免シテ家ニ還ル、肅宗詔シテ公車ニ徴ス、行カズ、永元中卒す（論衡）を見よ、

【王十朋】 字は龜齡、宋の樂清の人、幼にして穎悟日に數千言を誦す、紹興中廷對忠鯁なりしかば、高宗親しく擢いて第一と爲す、太子詹事に至り、龍圖閣學士を以て致仕す、卒して忠文と諡せらる、朱熹嘗て之を稱して曰く、光明正大磊磊落落君子人なりと、子二人皆

爲學にして自立す、聞詩は光州に知たり、明禮は常州に知たり、

【王士禎】 清朝の詩人、字は貽上、阮亭また漁洋と號す、山東新城の人、順治乙未の進士、官は刑部尚書に至る、康熙五十年卒す、年七十八、詩を以て海内に鳴ること五十餘年、一代の大宗たり、乾隆中特旨を以て文簡と諡せらる、その詩神韻を以て主となす、嘗て唐賢三昧集を編してその意を示せり、著すところ、帶經堂集漁洋三十六種等あり、精華錄を參看せよ、

【王詵】 宋史に「一一字ハ晉卿、太原ノ人、詩ヲ能クシ、書ヲ善クス、英宗ノ女、蜀國公主ニ尚シ、利州防禦使タリ」（王詵）を見よ、

【王晉卿】

【王愼中】 字は道思、晉江の人なり、明の嘉靖五年の進士、戸部主事となり、尋いで禮部祠祭司に改めらる、時に四方の名士、唐順之陳束李開先等みな部曹にあり、愼中相與に講習し、學大に進む、後ち驗封郎中に進み幾ばくもなくして讒にあひ、爲めに貶せらる、久うして山東提學僉事に擢んでられ、河南參政侍郎に進む、後ちまた、大に用ひられんとせしが、大學士夏言先の疾ひ所ろとなり落職す、愼中、文を爲るに、初め秦漢を

主とす後ちその非を悟りて歐曾を宗となす、唐順之と名を齊うし、世に稱して王唐といふ、愼中初め遵巖居士と號し、後ち南江と號す、嘉靖三十八年卒す、年五十一、詳くは明史文苑傳を見よ、

【王事靡盬】（王事靡盬）盬は音コ堅牢ならざる義、王事は堅固ならざるべからず、故に王事に鞅掌して暇なきをいふ、詩經唐風に「一一一一、不能執一一、不遑將父」將は養なり、

【王者】 帝王をいふ、史記酈生陸賈列傳に「一一以民人爲天、民人以食爲天」この語もと管子に見ゆ、また爾雅に對して王道（仁德ヲ以テ民ヲ治ムル道）を行ふ君をいふ、下の（王者ノ）を見よ、

【横斜】 「ナナメ」林逋の梅の詩に「疎影一一水清淺暗香浮動月黄昏」

【往者諫ム可カラズ】 過去の事は、すでに諫めても止められぬ義（來者猶ホ）を見よ、

【王城】 天子の都城をいふ、周禮匠人職に「匠人營國、方九里、旁三門、國中九經九緯、經塗九軌、左祖右社、面朝後市」——は四方に三門あり、合せて十二門なり、國中とは城内なり、皇城の中をいふ、宮城をいふにあらず、南北の道を經といひ、東西を緯といふ、一門毎に三筋の道あり、是を九經九緯といふ、

【王祥】 字は休徵、晉の臨沂の人、性至孝、繼母に事へて極めて恭謹なり、母生魚を欲す、天寒くして冰凍す、祥冰を剖きて之を求む、冰忽ち解けて雙鯉を得たり、嘗て徐州の別駕となり、兵を率ゐて寇を討つ、州郡清淨、政化大に行はる、晉初、太保に拜し、公爵に進む、

【往生】 佛經の語、淨土宗にて彌陀如來の願力によりて極樂界に化生するをいふ、淨土論に「普共諸衆生一一安樂國」

【王昌齡ガ宮詞】 駿臺雜話「詩文の評品」の條に見ゆ、昌齡字は少伯、唐の京兆の人、開元十五年の進士、詩に工にして殊に宮詞を善くす、集六卷あり、左にその宮詞二首を示す、長信宮秋詞に、

眞成薄命久尋思、夢見君王覺後疑、火照西宮知夜飲、分明複道奉恩時、

また春宮曲に、

昨夜風開露井桃、未央前殿月輪高、平陽歌舞新承寵、雜外春寒賜錦袍、

【王者香】 蘭の異名、佩文韻府に「琴操云、孔子自衛反、魯、幽谷中見蕤蘭獨茂、歎曰、蘭當爲王者香、今乃與

衆草一爲伍、乃止車援桴鼓之、託辭於香蘭云」

【王籍林】（王潮）を見よ、

【王者ノ師】帝王の師範たるをいふ、孟子に「有王者起、必來取法、是爲——也」また漢書張良傳に「老父一編ノ書ヲ出シテ曰ク、之ヲ讀マバ則チ王者ノ師トナラント」

【王湖】字は翛林、虚舟と號す、金壇の人、康熙壬辰の進士、吏部員外郎に官す、書は歐陽率更の室に入る、篆書は、李斯を法とし、一代の作手たり、古碑刻を鑒定すること最も精し、著すところ竹雲題跋あり、

【王謐】朗の子、三國の時魏に仕へ、官、崇文觀祭酒に至る、景初の閒、宮室盛んに興る、上疏して極諫し、出されて廣平の太守となる、徵され還りて散騎常侍光祿勳に遷りて卒す、景侯と諡せらる、著す所ろ諸經傳註あり、

【王叔明】（王蒙）を見よ、

【王守仁】（王陽明）を見よ、

【王春之月】正月をいふ、春秋の書法に「春王正月」とあるに本づく、

【王昭】宋の河南の人、進士に登り、また賢良方正の科に中り資政殿學士、知陝州を歷て同平章事に至る、方嚴簡重大臣の體あり、卒して中書令を贈り、文康と諡す、集四十卷あり、また嘗て冊府元龜を修するに與る、

【王承】晉書列傳四十五に「——字ハ安期、汝南ノ內史澹ノ子、東海ノ太守ト爲ル、政清靜ヲ尚ビ、細察ヲ爲サズ、小吏池中ノ魚ヲ盜ム者アリ、綱紀、之ヲ推（ぎんみする）ス、承曰ク、文王ノ囿ハ、衆ト之ヲ共ニス、池魚何ゾ惜ムニ足ランヤト、夜ヲ犯ス者（夜行の禁を犯すをいふ）アリ、吏ノ爲メニ拘セラル、承其ノ故ヲ問フ、答ヘテ曰ク、師ニ從ヒテ書ヲ受ケ、晏エズ日暮ルト、承曰ク、寧越（呂氏春秋に見ゆ、古の苦學せし人）ヲ鞭撻シ以テ威名ヲ立ツルハ、政化ノ本ニ非ズト、吏ヲシテ送リテ家ニ歸ラシム、其ノ從容寬恕此ノ若シ、江ヲ渡リ、元帝ノ鎭東府ノ從事中郎ト爲リ、甚ダ優禮セラル、承少クシテ重譽アリ、而シテ誠ヲ推シ物ニ接ス、衆咸親愛ス、名臣王導・衞玠・周顗・庾亮ノ徒、皆其ノ下ニ出ヅ、中興第一タリ」

【横政】法度に「シタガハザル」暴政をいふ、孟子萬章下篇に「——之所出、横民所止、不忍居也」

【王世貞】字は元美、鳳洲また弇州山人と號す、明の太倉の人、穎悟、書、目を過ぐれば忘れず、嘉靖二十六年の進士、累遷して南京兵部侍郎に至る、萬曆十八年家

に卒す、年六十五、李攀龍と共に文を作るに秦漢以上を主とし、つとめて摸擬剽襲を事とす、世に之を李王の古文辭と稱す、拾遺の（弇州山人）を參看せよ、

【王昭君】漢の元帝の竟寧元年に呼韓邪單于來朝し、漢に壻たらんことを求む、帝後宮の女多くして悉く見る能はざるを以て、畫工毛延壽をして宮女の容貌を畫きて進めしめ、その中にて醜なる者を遣らんとす、宮女爭ひて毛延壽に賂をおくり、己の像を美しく畫かしむ、然るに王昭君（名ハ嬙、齊國王穰ノ女）は天成の美人なりしを以て賂をおくらざりしによりて醜く畫かれたれば、遂に匈奴に嫁することとなれり、宮を出づるに臨み、帝一見して絶世の美人たるを知り、悔ゆれども、信を匈奴に失はんことをおそれて、之を賜ひぬ、昭君匈奴に在り、帝を怨みて怨思の歌を作る、後ち藥を飲みて死す、胡地の草色皆黄なり、唯昭君墓上の草、獨り青しといふ、事は西京雜記に見ゆ、白氏文集に「昭君怨」の詩あり、參看せよ、また（明妃）を見よ、

【王紱】明の人、字は無功、通の弟、隋の大業中、孝悌廉潔に擧げられ、祕書正字を授けらる、鄉に還り黍を種ゑ藥を詩き、酒を釀して自ら供す、自ら東皐子と號す、武德の初、門下省に待詔せしむ、官、酒を給すること日に三升、或人問ふ待詔何をか樂しきと、答へて曰く、良醞樂むべしと、侍中陳叔達之を聞きて、日に一斗を給す、時に斗酒學士と稱す、飲むと五斗に至るも亂れず、五斗先生傳及び醉鄉記を著す、貞觀中隋書を撰す、

【横截】「ヨコサマ」に斷ち切ること、晉書に「以鐵鎖——之」

【横説竪説】縦横自在に說くをいふ、事苑に「——」

猶未知向上關捩子」

【王詵】（——）を見よ、

【汪然】水の廣く深さが如く、奥深き貌、淮南子俶眞訓に「——平靜、寂然清澄」また「サカン」に湧を流す貌、柳宗元の捕蛇者說に「——流湧」

【王素】字は仲儀、宋の仁宗、御筆親しく四諫官を除す、素はその一人なり、工部尚書を以て致仕す（獨擊鬮）を見よ、

【王孫】王者の子孫の義、抱朴子に「——公子、優游貴樂、目倦于玄黄、耳疲乎鄭衞、鼻鑿蘭麝、口爽于膏粱」また廣く貴公子の義とす、漢書韓信傳に「大丈夫不能自食、吾哀——進食云云」蘇林の註に「——ハ猶ホ公子トイフガ如シ」

【王導】 字は茂弘、覧の孫、少くして風鑒あり、識量清遠なり、晉の元帝琅琊王たりし時、導と素より相親み善し、帝下邳に鎮するに及び、導を以て安東司馬と爲す、軍謀密策知りて爲ざるなし、後ち東遷して官を累ねて太傅に至り、始興公に封ぜらる、兄敦反す、大義を以て之を滅す、出入將相となり、力を戮せて王室を佐く、晉の中興、導の功を多しと爲す、初め帝の卽位するや、百官陪列す、導に命じて御牀に升りて坐せしむ、導固辭して曰く、若し太陽下りて萬物と同くせば、蒼生何に由りて照を仰がんと、帝乃ち止む、

【王輔】 字は紫銓、天南逐叟と號す、清の吳郡長洲の人、上海に住す、明治十一年、わが國に來遊し、扶桑遊記三卷を著す、別に普法戰記、海陬雜誌、瀛瞬雜誌等の著あり、

【横長】 横物にて、細長き圖をいふ、芥子園畫傳に、その批式あり、參看せよ、

【王適】 字は里隅、唐の幽州の人、初め陳子昂の感遇ノ詩を見て、乃ち交を陳に請ふ、集二十卷あり、

【王鐵槍】 五代史死節傳に「梁ノ王彥章、字ハ子明、鄆州壽張ノ人、驍勇絕倫ナリ、能ク跳足ニテ棘ヲ履ミ行クコト百步ス、戰フ每ニ二鐵槍ヲ用フ、皆重サ百斤、一ハ鞍中ニ置キ、一ハ手ニ在リ、騎シテ馳突ス、奮疾飛ブガ如ク、向フ所ロ前ナシ、軍中王鐵槍ト號ス、彥章ハ武人書ヲ知ラズ、嘗テ俚語ヲツクリテ曰ク、豹死留皮、人死留名ト、ソノ忠義蓋シ天性ナリ、唐ノ將ノ爲メニ擒ニセラルルニ及ビ、莊宗多方之ヲ諭シ降ラシメントスレドモ、屈セズシテ殺サル」

【王通】 字は仲淹、隋の河東龍門の人、幼にして篤學、慨然として蒼生を濟ふの志あり、長安に至り太平十二策を奏す、用ひられず、退いて河汾に居り敎授す、古に倣ひて經を作り、又中說(文中子トモイフ)を著し、以て論語に擬す、大業の初、徵せらるれども起たず、大業十三年卒す、年三十四、門人謚して文中子といふ、

【王ノ儉スル所ロニ敵ス】 (敵儉)を見よ

【王霸】 王道と霸道と、王道とは仁義の道を以て國を治むるをいひ、霸道とは武力を以て民を服し、表面に仁義をよそほへども、內實は己の利益を謀るをいふ、孟子公孫丑上篇に「以レ力假レ仁者霸、霸必有二大國一、以レ德行レ仁者王、王不レ待レ大、湯以二七十里一、文王以二百里一」

【王裒】 字は偉元、儀の子、裒少くして志操あり、父の非命を痛み、隱居して敎授す、累りに辟さるれども就かず、墓側に廬して旦夕拜跪し、柏を攀ぢて悲號し、涕淚樹に著き、樹之が爲めに枯る、母存ずる日雷を畏る、母沒せし後ち、雷する每に、輒ち墓に至りて曰く、裒此に在りと、詩を讀みて「哀哀父母、生我劬勞」といふに至り、未だ嘗て三復流涕せずんばあらず、門人爲めに廢疾の篤を廢す、家貧しくして躬耕し、口を計りて田し、身を度りて蠶す、或は助け遺る者あれば、皆受けず、司馬氏魏を簒ふに及びて哀終身西向して坐せず、以て晉に臣たらざるを示す、詳しくは晉書列傳五十八を見よ、

【王弼】 字は輔嗣、晉の山陽の人、少くして老子の說を好み、通辨にして能く言ふ、時に裴徽吏部郎たり、何晏吏部尙書たり、皆之を奇とし、乃ち弼を以て臺郎に補す、曹爽に謁す、爽左右を屛け、與に道を論じて時を移す、弼、鍾會と善し、會その高致に服す、嘗て曰く、聖人の人より茂んなる者は神明なり、人に同じき者は五情なり、神明茂んなり、故に能く沖和を體して以て無に通ず、五情同じ、故に哀樂の以て物に應ずるなきこと能はずと、周易及び老子に注す、

【王父】 祖父をいふ爾雅の釋親に「父ノ考ヲ王父ト爲シ、父ノ妣ヲ王母ト爲ス、王父ノ考ヲ曾祖王父ト爲ス、王父ノ考ヲ、高祖王父ト爲シ、曾祖王父ノ妣ヲ、高祖王母ト爲ス」また「母ノ考ヲ、外王父ト爲シ、母ノ妣ヲ外王母ト爲シ、母ノ王考ヲ外曾王父ト爲シ、母ノ王妣ヲ、外曾王母ト爲ス」註に「王トハ王者ノ如ク之ヲ尊ブ」とあり、

【横分】 身首分れ離るるをいふ、漢書梅福傳に「雖伏二質一一一臣之願也」質は鎭なり「キリダイ」

【王文成公全書】 三十八卷、明の王守仁撰す、凡そ語錄三卷、文錄五卷、別錄十卷、外集七卷、續編六卷、附するに年譜五卷、世德記二卷を以てす、初の語錄三卷は傳習錄にして、朱子晩年定論を附す、門人徐愛の輯むるところ、文錄以下は陽明の歿後、門人德洪等の編ずるところ、守仁の學、陸象山に出で、知行合一の說を唱ふ、一再傳して猖狂橫決、流弊少なからずと雖も、守仁に在りては確然自得の處あり、亦確然自立の處あり、その文博大昌明、詩も亦秀逸なり、文成は陽明の諡なり(王陽明)を參看せよ、

【王冕】 元の諸暨の人、宋濂の潛溪集に「科擧ノ業ヲ棄テ去リ、舟ヲ買ヒ東吳ニ下リ大江ヲ渡リ、淮楚ニ入リ、名山川ヲ歷覽シ、北燕都ニ游ブ、既ニシテ越ニ歸リ、妻子ヲ携ヘテ九里山ニ隱ル、豈梅ヲ

王父ノ妣ヲ、曾祖王母ト爲ス、曾祖王父ノ考ヲ、高祖王父ト爲シ、曾祖王父ノ妣ヲ、高祖王母ト爲ス」また「母ノ考ヲ、外——ト爲シ、母ノ妣ヲ外王母ト爲シ、母ノ王考ヲ外曾王父ト爲シ、母ノ王妣ヲ、外曾王母ト爲ス」註に「王トハ王者ノ如ク之ヲ尊ブ」とあり、

【横分】 身首分れ離るるをいふ、漢書梅福傳に「雖伏二質一一一臣之願也」質は鎭なり「キリダイ」

【王文成公全書】 三十八卷、明の王守仁撰す、凡そ語錄三卷、文錄五卷、別錄十卷、外集七卷、續編六卷、附するに年譜五卷、世德記二卷を以てす、初の語錄三卷は傳習錄にして、朱子晩年定論を附す、門人徐愛の輯むるところ、文錄以下は陽明の歿後、門人德洪等の編ずるところ、守仁の學、陸象山に出で、知行合一の說を唱ふ、一再傳して猖狂橫決、流弊少なからずと雖も、守仁に在りては確然自得の處あり、亦確然自立の處あり、その文博大昌明、詩も亦秀逸なり、文成は陽明の諡なり(王陽明)を參看せよ、

【王冕】 元の諸暨の人、宋濂の潛溪集に「科擧ノ業ヲ棄テ去リ、舟ヲ買ヒ東吳ニ下リ大江ヲ渡リ、淮楚ニ入リ、名山川ヲ歷覽シ、北燕都ニ游ブ、既ニシテ越ニ歸リ、妻子ヲ携ヘテ九里山ニ隱ル、豈梅ヲ

善クス、楊補之ニ減ゼズ、求ムル者肩背相望ム、縉幅ノ短長ヲ以テ米ヲ得ルノ差ヲ爲ス、人之ヲ譏ル、曰ク吾是ニ籍リテ以テ口體ヲ養フ、豈好ンデ人家ノ爲メニ畫師ト作ランヤト、皇帝婺州ヲ取リ、將ニ越ヲ攻メントス、物色シテ晃ヲ得、幕府ニ寘キ、授クルニ諸議參軍ヲ以テス」

【王母】 祖母なり（王父）を見よ、

【王鳳洲】（王世貞）を見よ、

【王勃】 字は子安、唐の絳州龍門の人、隋末の大儒王通の孫なり、六歲にして文辭を善くし、九歲にして顏師古の駐せし漢書を讀みてその疵瑕を摘發せしといふ、その虢州參軍に補せらるるや、才を負ひて驕傲なりしかば、忽ち僚吏に嫉惡せられ死罪に處せられんとせしが、幸に赦されて名を除かる、父の禍時は坐せられて交阯令に左遷せらる、勃上元二年の秋、往いて父を省せんとし、道洪州に出で、閻都督のために、滕王閣序を作る、舟洋海に入るや、水に墜ちて死す、年二十九、その文を作るに、先づ墨數升を磨したる後に、酣飲して被を引き面を覆ひて臥し、寤むるに及びて直ちに筆を下し篇を成し、一字を易へず、時人之を服藥といふ、蓄す所ろの詩文甚だ多く、尤も詩賦に工なり、

傷炯・盧照隣・駱賓王と併稱して初唐の四傑といふ、而して勃はその冠たり、

【王猛】 字は景略、晉の人、華山に隱居し、佐世の念を懷く、桓溫關に入る、猛褐袍を衣て之に見え、虱を捫り自若としして當世の事を談ず、旁ら人なきが如し、溫之を異とす、後ち尚書右丞となる、

【王鳴盛】 字は鳳喈、禮堂と號し、また西莊と號し、晩に西沚と稱す、江蘇嘉定の人、乾隆甲戌、第二人に及第す、官內閣學士に至り、禮部侍郎を乘ね、光祿寺卿に改めらる、嘉慶二年卒す、年七十八、尚書後案三十卷を撰す、專ら鄭注を宗とし、亡逸せし者は、馬融・王肅の注を采りて之を補ふ、また十七史商榷百卷・蛾術編百卷を撰す、詩文亦名を負ふ、耕養齋集・西沚居士集あり、

【王蒙】 元の畫人、聽雨樓諸賢記に「——字ハ叔明、吳興ノ人、黃鶴山樵ト號ス、趙松雪ノ外孫ナリ、素ヨリ畫ヲ好ミ外氏ノ法ヲ得タリ、然レドモ妍ヲ時ニ求メズ、タダ筆墨ヲ假リテ以テソノ天機ノ妙ヲ寓スルノミ、文章ヲ爲ルニ矩度ヲ尙バズ、頃刻ニシテ數千言就ルベシ」畫史會要に「——ノ山水、巨然ヲ師トシ、甚ダ用墨ノ法ヲ得タリ秀潤喜ブベク亦人物ヲ善クス」ま

た都穆の鐵網珊瑚にその畫評あり、また淵鑑類函三百二十七に、娛古錄を引きて曰く「倪迂畫、可ㇾ稱ニ逸品ニ、元之能者雖多、然率承ニ宋法ニ、稍加ニ簡散ニ耳、吳仲圭、大有ニ神氣ニ、黃子久、特妙ニ風格ニ、王叔明奄有ニ前規ニ、而三家未ㇾ洗ニ縱橫習氣ニ、獨雲林古澹天然、米癡後一人而已」とあり、倪迂は卽ち倪雲林なり、澹確叢書に「元ノ趙孟頫、字ハ子昂、松雪ト號ス、吳鎭字ハ仲圭、梅花道人ト號ス、黃公望字ハ子久、大癡ト號ス、又一峯道人ト號ス、王蒙字ハ叔明、黃鶴山樵ト號ス、皆ヲ以テ世ニ名アリ、元ノ四大家ト爲ス」

【橫目】 人の眼を稱す、莊子に「夫子無ニ意于——之民ニ乎」

【王門ノ伶】 次の故事によりて、富貴の人に諂ふ者を冷評するに用ふ、

【王門ノ伶人タル能ハズ】（不ㇾ能）爲ニ王門伶人ニ人の役を受くるを恥づるにいふ、晉書戴逵傳に「戴逵字安道、博學能鼓ㇾ琴、武陵王晞召ㇾ之、逵對ニ使者ニ打ニ破琴ヲ一曰、戴安道——ーーーーーニ伶人ハ樂人なり、

【王陽明】 明の大儒、名は守仁、字は伯安、陽明はその號、浙江省餘姚の人、弘治乙未の進士、幼時朱子格物の學を講ず、正德年閒、事を言ふを以て、貴州の龍場驛丞に謫せらる、窮荒書なく、日に舊聞を繹ぬ、忽ち格致はこれを心に反求すべく、事物に求むべからざるの理を悟り、喟然として歎じて曰く、道此に在りと、その敎たる、專ら良知を致すを以て主となす、その友人門下と問答せし語を輯めて傳習錄といふ、十五年寧王宸濠反す、守仁討ちて之を平ぐ、大學士桂萼等その功を阻む、嘉靖元年その功を追錄し、新建伯と爲す、七年兵部尙書を以て安南に卒す、年五十七、隆慶の初め、侯を贈り、文成と謚す、著すところ王文成公全書あり、

【王餘魚】 爾雅の注に「比目魚、河東呼爲ニ王餘ニ吳都賦に「雙則比目、片則王餘」の注に「越王餘魚、未ㇾ詳、因以殘半、棄ニ水中ニ、化爲ㇾ魚、遂無ニ其一面ニ、故曰ニ王餘也ニ」

【往來】 「ユキツ、キタリツ」禮記の曲禮に「禮尙ニ往ニ來ニ」

【王覽】 晉の人、字は玄通、王祥の繼母朱氏の子なり、母祥に遇すること無道なり、覽年數歲、祥の毆杖せらるるを見て、輒ち涕泣抱持す、成童に至りて、每にその母を諫む、その母少しく凶虐を止む、丹奈あり實を結ぶ、母祥に命じて之を守らしむ、風雨每に祥則ち樹を抱いて泣く、覽また祥と俱にす、また祥の妻を虐使すれば、覽の妻も亦趨りて之を共にせり、朱之を患へて乃ち止む、覽孝友恭恪の名、祥に亞ぐ、後ち仕へて大中

大夫に至る、

【王屋】（ワウリ）明の崑山の人、字は安道、列朝詩集に「博ク群籍ニ通ジ、郷里ニ教授シ詩文ヲ能クシ繪事ニ工ナリ、華山ニ遊ビ、國四十幅ヲ作ル、安道ノ畫ハ少クシテ夏圭ヲ師トス、評者謂ヘラク行筆秀勁布置茂密、作家ノ士氣咸備ルニ云云」

【橫流】（ワウリウ）その「スヂ」道に由らずして「ホシイマヽ」に流るるをいふ、孟子滕文公上篇に「洪水——」

【王良造父】（ワウリヤウザウフ）孟子滕文公に「昔者趙簡子、使王良與嬖奚乘ニ列子周穆王篇に「主車則造父爲御」按ずるに造父は始めて管子に見ゆ、衡父、造父を生むこと、始めて秦紀趙世家に見ゆ、梁玉繩曰く「韓子ニ造父爲齊王駙馬ト、蓋シ凡ソ後ノ善ク御スルモノ、亦造父ノ名ヲ襲グ也」韓愈の送石處士序に「若驅馬駕輕車ニ就熟路ニ而——爲之先後也」二人は共に古の善く馬を御せし人なり、等

【王陵】（ワウリウ）漢書に「王陵ハ、沛ノ人、高祖ノ起ルヤ、陵モ亦黨數千人ヲ聚ム、高祖ノ項羽ヲ擊ツニ及ビ、迺チ兵ヲ以テ漢ニ屬ス、羽陵ノ母ヲ取リ軍中ニ置ク、陵ノ使至レバ、則チ東向シテ陵ノ母ヲ坐セシメ、以テ陵ヲ招カシム、陵ノ母私カニ使者ヲ送リ、泣イテ曰ク、妾ノ爲ノ

ニ陵ニ語レ、善ク漢王ニ事ヘヨ、漢王ハ長者ナリ、老妾ノ故ヲ以テ、二心ヲ持スル母レ、妾死ヲ以テ使者ヲ送ルト、遂ニ劒ニ伏シテ死ス、羽怒リテ陵ガ母ヲ烹ル、陵卒ニ漢ニ從フ」

【橫歷】（ワウレキ）橫行に同じ、戰國策に「伏軾撫衿、——天下ニ（橫行）を參看せよ、

【汪汪】（ワウワウ）水の廣く深き貌、後漢書黃憲傳に「叔度——若千頃波ニ」

【往往】（ワウワウ）處處といふが如し、文選の西都賦に「神池靈沼、——而在其中ニ」また閒閒といふ義、漢書張湯傳に「於是——釋湯所言ヲ」

【窩家】（ワカ）「ヌスビトヤド」幼學須知に「——窩藏盜賊者」窩は窟穴なり「ムロ」「アナ」窩主ともいふ、

【和諧】（ワカイ）「ヤハラギ、カナフ」晉書摯虞傳に「施之金石ニ則音韻——」

【吾家千里駒】（ワガイヘンセンリノク）圓機活法に「崔昂母ニ事ヘテ孝ヲ以テ聞ユ、崔芬曰ク、此ノ兒ハ、終ニ當ニ遠至ルクベシ、是レ吾ガ家ノ千里ノ駒ナリト」（千里ノ駒）を見よ、

【吾家之明珠】（ワガイヘンメイシユ）梁書の劉孺傳に「七歲能屬文、十四居父喪、毀瘠骨立、宗黨咸異之、叔父璵携以之官、常置座側ニ謂賓客ニ曰、此兒——也」

【和羹鹽梅】（カワカエンバイ）羹アツモノ）は、鹽梅の鹹酸に由りて味を爲す、以て人君が良相の輔導を得て、其の德を成すに喩ふ、書經の說命に「若作酒醴、爾惟麴蘗、若作和羹、爾惟鹽梅」とあり、賦は傳說を斥す、王起の木從繩賦に「補袞惟勤、和羹克正」

【我ガ后ヲ後ツ、后來ラバ其レ蘇セン】（後我后、后來其蘇）孟子梁惠王下篇に引く、商書仲虺之誥の文なり、後は待なり、后は君なり、蘇は復生なり、他國の民、皆夏の桀王の虐政に苦み、湯王を以て我が君と爲し、その來りて己をして蘇息するを得しめんことを待つとなり、

【吾殼中ニ入ル】（ワガコクヲ）（入吾殼中）殼は弓弩を張るなり、射て我が手に落つる義、我が掌中に歸するをいふ、撫言に「唐太宗曰、天下英雄、——詳しくは（英雄吾殼中）を見よ、

【我心石ニ非ズ轉ズベカラス】（我心匪石不可轉）心の確乎として、動かすべからざるをいふ、詩經の邶風柏舟に「我心匪石、不可轉也、我心匪席、不可卷也」の註に「石ハ轉バス可キモ、我ガ心ハ轉バスベカラズ、席ハ卷クベキモ、我ガ心ハ卷クベカラズ」と、また說

苑に「詩ニイフ、我ガ心石ニ匪ズ、轉ズベカラス、我ガ心席ニ匪ズ、卷クベカラズ、已ヲ失ハザルヲイフナリ、能ク已ヲ失ハズシテ、然シテ後ニ與ニ難ヲ濟フベシ、此レ士君子ノ衆ニ超ユル所以ナリ」とあり、

【我ガ心ヲ猼タリ】（猼我心）人の爲したる事が、我が心に思ふ所ろと、よく合するをいふ、詩經邶風綠衣篇に「絺兮綌兮、凄其以風、我思古人、實獲我心ニ」

【吾心悲】（ワガコロカナシム）家語に「曾子曰、吾及親三釜而心樂、後仕、三千鍾而——」

【我心秤ノ如シ】（我心如秤）心に私なき喩なり、楊升庵文集に「諸葛孔明ガ語ニイフ我心如秤、不能爲人作低昂、唐朝會投人啓曰推諸葛之秤心負姜維之斗膽ト、鶴林玉露に「孔明曰ク吾心如秤、不能爲人作輕重ト、至レル哉言ヤ、信ニ此ヲ能クセバ吾ガ心即チ造化ナリ」

【吾ガ室ニ入リテ吾ガ戈ヲ操ル】（ワガシツニイリテワガホコヲトル）その道を學びながら却りてその道を攻擊する義（室ニ入ッテ）を見よ、

【吾ガ室ニ入ル者ハ但清風アリ】（入吾室者但有清風）南史の謝譓傳に「不妄交接門無雜賓有時獨醉曰——對吾飮者唯當明月」

【我ガ烝民ヲ立ツ爾ノ極ニアラザルナシ】（立我烝民）

莫匪爾極」)列子に「堯微服シテ康衢ニ遊ブ、兒童ノ謠ヲ聞クニ曰ク、立我烝民莫匪爾極、不識不知順帝之則ト云云」烝民は衆民なり、言ふ心は、此の衆民を立つるは、帝の徳にあらざるはなし、我は則ち知らず識らず、唯帝堯の法に順ふのみなりとの意、

【吾儕】儕は輩なり、吾輩に同じ、左傳成二年に「文王猶用衆、況一一乎」

【吾ガ手ニ落ツ】(落吾手ニ)吾が物となりし義、杜甫の詩に「不意青草湖、扁舟一一ニ」

【吾ガ徒ニアラズ】(非吾徒)吾徒とは、わが弟子なり、わが弟子にあらずといひて之を絶つなり、論語先進に「李氏富於周公、而求也爲之聚斂而附益之、子曰一一也、小子鳴鼓而攻之可也」と、聚斂とは賦税を取り立つるの急なるなり、鳴鼓而攻之とは、眞に鼓を鳴して攻むるにはあらず、その不都合の罪を衆人に宣示して之を責むるなり、

【吾ガ膝鐵ノ如シ】(吾膝如鐵)一統志に「元ノ李齊、高郵ノ知府タリ、張士誠ソノ城ヲ陷レ、之ヲ誘ヒテ降カシム、齊曰ク、吾ガ膝ハ鐵ノ如シ、豈賊ノ爲メニ屈センヤト、齊嘗テ進士ニ擧ゲラレ、第一タリ、論者謂フ學ブ所ロニ負カズト」

【我百年ノ命ヲ棄テテ公ガ一日ノ恩ニ報ユ】太平記卷十に見ゆ、白氏文集卷の四、井底引銀瓶と題する詩中に「爲君一日恩、誤妾百年身、寄言癡小人家女、愼勿將身輕許人」

【和合】兩家の男女を合せて婚姻せさす、易林に「使媒求婦一一二姓、周禮地官媒氏の疏に「三十之男、二十之女、一一使成婚姻」また互に「ナカヨキ」義、管子に「善之以道則民和、養之以德則民合、一一故能習習故能諧」

【吾ガ道東ス】一番の高弟が、門下を辭し去りたるをいふ、後漢書に「鄭玄馬融ニ事ヘテ、門下ニ在リ、三年見ユルヲ得ズ、高業ノ弟子ヲシテ、玄ニ傳授セシム、玄一日夜尋誦ス、辭シテ歸ルトキ、融喟然トシテ門人ニ謂ヒテ曰ク、鄭生今去ル、吾ガ道東スト」

【吾ガ道南ス】高足弟子の、去りて南にかへるをいふ、圓機活法に「楊龜山、明道先生ヲ師トス、歸ルニ及ビ、之ヲ送リテ門ヲ出デ、座客ニ謂ヒテ曰ク、吾道南矣」

【和議】宋史高宗紀に「紹興八年以樞密院編修官胡銓上書直諫斥一一、除名昭州編管」

【和煦】「アタタカ」にして「ヒヨリヨシ」謝靈運の山居賦に「當嚴勁而蕙得、承一一而芬腴」

【我百年ノ命ヲ棄テテ公ガ一日ノ恩ニ報ユ】太平記卷十に見ゆ、白氏文集卷の四、井底引銀瓶と題する詩中に「爲君一日恩、誤妾百年身、寄言癡小人家女、愼勿將身輕許人」

【和合】兩家の男女を合せて婚姻せさす、易林に「使媒求婦一一二姓、周禮地官媒氏の疏に「三十之男、二十之女、一一使成婚姻」また互に「ナカヨキ」義、管子に「善之以道則民和、養之以德則民合、一一故能習習故能諧」

【吾ガ徒ニアラズ】(非吾徒)吾徒とは、わが弟子なり、わが弟子にあらずといひて之を絶つなり、論語先進に「李氏富於周公、而求也爲之聚斂而附益之、子曰一一也、小子鳴鼓而攻之可也」と、聚斂とは賦税を取り立つるの急なるなり、鳴鼓而攻之とは、眞に鼓を鳴して攻むるにはあらず、その不都合の罪を衆人に宣示して之を責むるなり、

【吾ガ膝鐵ノ如シ】(吾膝如鐵)一統志に「元ノ李齊、高郵ノ知府タリ、張士誠ソノ城ヲ陷レ、之ヲ誘ヒテ降カシム、齊曰ク、吾ガ膝ハ鐵ノ如シ、豈賊ノ爲メニ屈センヤト、齊嘗テ進士ニ擧ゲラレ、第一タリ、論者謂フ學ブ所ロニ負カズト」

【吾ガ道東ス】一番の高弟が、門下を辭し去りたるをいふ、後漢書に「鄭玄馬融ニ事ヘテ、門下ニ在リ、三年見ユルヲ得ズ、高業ノ弟子ヲシテ、玄ニ傳授セシム、玄一日夜尋誦ス、辭シテ歸ルトキ、融喟然トシテ門人ニ謂ヒテ曰ク、鄭生今去ル、吾ガ道東スト」

【吾ガ道南ス】高足弟子の、去りて南にかへるをいふ、圓機活法に「楊龜山、明道先生ヲ師トス、歸ルニ及ビ、之ヲ送リテ門ヲ出デ、座客ニ謂ヒテ曰ク、吾道南矣」

【和議】宋史高宗紀に「紹興八年以樞密院編修官胡銓上書直諫斥一一、除名昭州編管」

【和煦】「アタタカ」にして「ヒヨリヨシ」謝靈運の山居賦に「當嚴勁而蕙得、承一一而芬腴」

【和光同塵】和光とは、我が智の光を隱して、顯はさざるをいひ、同塵とは、塵俗の中に混じて居るをいふ、老子に「和其光同其塵」

【和敬】「ヤハラギ、ウヤマフ」(和親)を見よ、

【和協】和睦協同するをいふ、左傳に「寡人有弟不能一一」國語に「一一輯睦、於是乎興」

【禍】音クワ「マガゴト」福の反なり「サイナン」說文に「害也、神不福也」禮記表記に「君子愼以避禍」史記龜策傳に「禍不妄至、福不徒來」また管晏傳に「因禍爲福、轉敗爲功」老子に「禍兮福之所倚、福兮禍之所伏」說苑の敬愼に「福生於隱約、而禍生於得意」左傳に「禍福無門、惟人所召」

【禍ヲ嫁ス】(嫁禍)己の禍を人に移すをいふ、史記の趙世家の字面、戰國策にも「張儀說魏王一一而安國」此善事也」

【禍ヲ轉ジテ福ト爲ス】(轉禍爲福)禍をかへて、福とするなり、史記蘇秦傳に「古之善制事者、轉禍爲福、因敗爲功」(禍)を見よ、

【殃池魚ニ及ブ】(殃及池魚)「ワザハヒ」が他の物にまで及ぶをいふ、東魏の杜弼檄梁文に「楚國亡猿、禍延林木、城門失火、一一」顧炎武の日知錄に「按ズルニ淮南子ニイフ、楚王ソノ猿ヲ亡ヒ、而シテ林木之ガ爲メニ殘セラレ、宋君ソノ珠ヲ亡ヒ、池中ノ魚之ガ爲メニ殫ク云云」(池魚ノ)を見よ、

【禍常ニ蕭牆ノ中ヨリ起ル】太平記卷九に見ゆ、禍は外より來らず、ただ近くわが住むところより起るとの義(蕭牆ノ憂)を見よ、

【禍ハ懈惰ニ生ズ】(禍生於懈惰)禍は戒愼するところに發せずして怠りて「ユルカセ」にするところより生ずるをいふ、韓詩外傳に「官怠於宦成、病加於小愈一一一、孝衰於妻子」

【禍ハ口ヨリ生ズ】(禍從口生)釋氏要覽に「一切衆生、一一一、口舌者鑿身之斧也」傳玄の口銘に「病從口入、禍從口出」文中子に「禍莫大於多言」

【和シテ同セズ】(和而不同)論語子路篇に「子曰、君子一一一、小人同而不和」和は義理に本づき、同は利益に本づく、君子の人と相與するは常に打ち和ぎて戻ることなけれども、義理の不可なるにあへば「ドコマデモ」論じつめて、彼に同ずることはせざるなり、小人は利のために変るものなれば、利のあるところは、是非善惡に關せず、彼に同じて比黨するものなりとの意、

【和】輯】人の「ヤハラグ」をいふ、漢書南粤王趙佗傳に「使ム一一百粤ニ和集ニ同じ

【和】集】「ヤハラグ」史記衛世家に「武公即位、修ム康叔之政、百姓一一」淮南子に「天下寧定、百姓一一」

【和】親】「ヤハラギ、シタシム」禮記の樂記に「是故樂在ム宗廟之中ニ、君臣上下同聽之、則莫不和敬、在ム族長鄉里之中ニ、長幼同聽之、則莫不和順、在ム閨門之內ニ、父子兄弟同聽之、則莫不一一ニ

【窩主】「ヌスビトヤド」宋信編に「逃人不宜有一一ニ窩家に同じ、

【和】順】「ヤハラギ、シタガフ」和親を見よ、

【和】スルコト琴瑟ノ如シ】夫婦のよく和合するをいふ、詩經棠棣篇に「妻子好合、如ム鼓ム琴瑟ニ」成語考に「如ム鼓ム琴瑟ニ、夫妻好合之謂、琴瑟不ム調、夫妻反目之謂」

【綫ヲ決ム】(挾纊(綫ヲ)を見よ、

【私】】說文に「不ム公也」書經に「以ム公滅ム私、民其允懷」禮記に「天無私覆、地無私載、日月無私照、奉ム斯三者、以勞天下、此之謂ニ三無私ニ」漢書翟方進傳に「方進奏、陳咸與ム逢信、邪枉貪汙、營ム私多欲」管子に「如ム地如ム天、何私何親」

【私ヲ忘ル】(忘私)己の私利を忘れて公上に盡すをいふ、漢書賈誼傳に「爲ム人臣者、主耳忘ム身、國耳忘ム家、公耳忘ム利一」

【和】陵】天氣の「アタタカ」にして「ヤハラグ」王逸の九思に「風習習兮百草萌ム芽華榮」

【和衷協同】中心より和睦して、共に力を合はす義、書經皐陶謨に「同寅協ム恭和衷哉」衷は中なり、一解に善なり、

【僅ニ旋馬ヲ容ル】(僅容旋馬ニ)宋史李沆傳に「沆治ム第ヲ封邱門內廳事前、一一一一、或言ム其太隘ム沆笑曰、居第當ム傳ム子孫ニ此爲ム宰相廳事ニ誠隘、爲ム太祝奉禮廳事ニ已寬矣」

【和】調】「ヤハラギ、トトナフ」史記陸賈傳に「將相一一、則士務附ム易林に「麒麟鳳凰、善政得ム祥、陰陽一一、國無ム災殃ニ

【倭奴】支那にて我が國を稱していふ、元史日本傳に「日本國ハ、東海ノ東ニ在リ、古一一國ト稱ス、或ハ云フ、ソノ舊名ヲ惡ム、故ニ名ヲ日本ト改ム、其ノ國、日ノ出ヅル所ニ近キヲ以テナリ」

【和】同】「ヤハラグ」禮記に「天地一一、草木萌動」

【話】頭】話の「イトグチ」陸游の詩に「不ム用ニ殷勤ム一一ニ

【和】南】敬禮または恭敬と譯す、僧徒の敬禮なり、事類全書に「僧家ニ、掌ヲ合セテ禮ヲ作スヲイヒテ、和南トイフ」註に「此ニハ拱手ヲ以テ敬トナシ、外國ハ合掌ヲ以テ敬トナス、合ハ散誕セズ、專ラ一心ニ至ルヲ表ス」とあり、

【鮒ノ涸ヲ去ル】太平記卷三十八に見ゆ、韓愈の鱷魚の文に「今與ム鱷魚ム約、盡ム三日ム其率ム醜類ム南徙ム於海ニ以避ム天子之命ニ」とあり、かくて鱷魚は、潮州を去りて他に徙りしといひ傳ふ、

【話】欄】「ハナシ」の「タネ」談柄に同じ、羅湖野錄に見ゆ、

【和】買】「アヒタイガヒ」能改齋漫錄に「一一二字、見ニ孔穎達左氏正義昭公十六年ニ」宋史の許景衡傳に「極ム論ス一一和糴斂法之害ニ」

【和】盤】「スベテ」の義、乘機譚に「近世ノ俗語ニ、一一トシテ云フコトアリ、或ハ云フ一片婆心、一一托出ト、或ハ一一妙蘊ト、西湖佳話ノ內ノ詩ノ句ニ、一一都托出、閨閣惹ム風流ト」トイヘリ、皇朝瑣屑錄に「盤盤トモニ持チ出ルトイフコトニテ淵底ノコラズウチアラハスコトナリ、拍案驚奇ニ、托ム出一盤東西ト」トイフコトアリ、コレ等ニテ知ルベシ、東西トハ物ヲイフ、一ヲリノ物ヲ持チ出ルナリ、又人ヲモ東西トイフ、イヅレモ後代ノ俗語ナリ」

【和】風】「ヤハラカキ」春風をいふ、杜甫の詩に「吹面受ム一一ニ」近思錄に「明道先生曰、仲尼天地也、顏子一一慶雲也」(先ヅ一一)を見よ、

【和】平】「ヤハラギ、タヒラカ」詩經に「神之聽之、終ム和且平」

また後漢書桓帝紀に「大ム赦天下ニ、改ム元一一ニ

【和】睦】「ヤハラギ、ムツマシ」孝經に「先王有ム至德要道ニ以順ム天下ニ、民用一一、上下無ム怨」

【和】民】(民ヲ和グ)左傳に「臣聞以ム德一一」國語に「惠ム所ム以一一也」

【盌】】說文に「小盂ナリ」六書正譌に「俗ニ椀ニ作ル」漆盌子は「クロヌリ」の「ワン」

【智】井】智は「メシヒ」一一は水の枯れたる「キド」左傳宣十二年に「目ム一一而拯ム之」注に「廢井也」

【笑ヲ含ミ地ニ入ル】(含笑入地)安心して死するをいふ、宋紀に「唐重知ニ涼兆府、金將圍ム城、重度不ム可ム支、以ム書別ム其父克臣ニ曰、忠孝不ム兩立、義不ム苟生、以辱ム我父、克臣報ム之曰、汝能以ム身殉ム國、吾含笑入ム地矣」

【笑ヒテ頤ヲ脫ク】(笑脫頤)天に笑ふをいふ、蘇軾の詩に「撫ム掌一一ニ(頤ヲ解ク)を見よ、

【笑テ答ヘズ】（別ニ天地）を見よ、

【笑ノ中ニ刀ヲ磨グ】（笑中ニ刀アリ）を見よ、

【吾豈敢セン】 吾は何とてそれに當らんや、當らずとの謙辭、論語述而篇に「子曰、若聖與ノ仁、則ち——」

【吾未ダ徳ヲ好ムコト色ヲ好ムガ如クナル者ヲ見ズ】（吾未見好徳如好色者也）隨分徳を好む者はあれども誠心より之を好む者を見ずとて孔子の嘆息せられし語、論語子罕篇に出づ、好色は人人心の底より出づ、故に喩ふ、

【我ヲシテ身後ノ名アラシムルモ、即時一杯ノ酒ニ如カズ】（使我有身後名不如即時一杯酒）（身後ノ名を見よ、

【我ヲ知ル者ハ其レ天乎】（知我者其天乎）聖人の學の上達する所ろはすべて皆天道天理なれば、人我を知らざるも、天はよく我を知らんとの義、論語憲問篇に「子曰、莫我知也夫、子貢曰、何爲其莫知子也、子曰、不怨天、不尤人、下學而上達、——」

【我ヲ博ムルニ文ヲ以テス】（博我以文）論語子罕篇に「夫子循循然善誘人、——、約ルニ我ニ以禮云云」顔淵が孔子の教育法を嘆美せし語なり、文とは古今の書籍をいふ、博のみにては用をなさず、故にその中より我が身に切なる所ろを約取して實地に行はしむるには、禮儀を以てせしむとの義、

【我ヲ劉豫ニセント欲スルナリ】（欲劉豫我也）胡澹庵の上高宗封事中の語なり、左傳定十年に「欲ス呉王我乎」と同一の句法、劉豫字は彦游、景州阜城の人なり、始め進士に擧げられ、宣和六年河北提刑に除す、金人南侵し、豫官を棄て亂を避く、建炎四年七月、金人豫を冊し皇帝と爲し、國を大齊と號し、大名府に都す、九月豫僞位に即き、境内に赦し、金の正朔を奉じ、天會八年と稱す、建炎七年十一月豫を廢して蜀王と爲す、豫王を僭する凡そ八年にして廢せらる、我を劉豫の如くにせんと欲するの義、

【吾嘗テ終日食ハズ、終夜寢ネズ、以テ思ヘドモ益ナシ、學ブニ如カザルナリ】（吾嘗終日不食、終夜不寢、以思無益、不如學也）論語衛靈公篇に見ゆ、孔子の語、吾嘗て終日終夜寢食を忘れて考へたれども無暗に考へたるばかりにては何の益もなし、學問の上より考へたるにあらざれば不可なり、故に學問するに如かずとの意、

【吾誰ト與ニカ歸セン】 わが身の歸依する所ろに惑へるなり、禮記に「死者如可作、吾誰與歸」また范仲淹の岳陽樓記に「嗟微斯人、吾誰與歸」

【我ニ投ズルニ木瓜ヲ以テスレバ、之ニ報ズルニ瓊琚ヲ以テセン】（投我以木瓜）（木瓜）を見よ、

【我ハ夏日ノ長キヲ愛ス】（人人皆）を見よ、

【我深ク汝等ヲ敬シ、敢テ輕慢セズ】（我深敬汝等、不敢敬慢）法華經の不輕品に「威音王如來滅度後、像法中有一菩薩比丘、名常不輕、是比丘凡有所見、皆悉禮拜讃嘆、而作是言、——、所以者何、汝等皆行菩薩道、當得作佛、（中略）常被罵詈、不生瞋恚、常作是言、汝當作佛、說此語時、衆人或以杖木瓦石而打擲之、避走遠住、猶高聲唱言、我不敢輕於汝等、汝等皆當作佛」この事、十訓抄、第二可離慢事の條下にも引用せり、

【吾猶タリト雖モ、天下肥ユ】（貌猶セタリト雖モ）を見よ、

【我ヨリ古ヲ作ス】（自我作古）我より故事となるべきことを創作する義にて、古禮に拘泥せざるをいふ、宋史禮志に「孝宗欲不用易月之制、曰——何害」

【我ヨリ之ヲ得、我ヨリ之ヲ捐ツ】（自我得之、自我捐之）我が得たるものを、我が失ふことなれば、他人に關する所ろなく、心「イツパイ」なりといふ義、漢書賈嬰傳に「嬰曰、侯——、——、無所恨」史記魏其武安侯傳にも見ゆ、

【我、吾ヲ忘ル】 己の存在するに氣付かざる義、深く思に沈みし時などの「サマ」また無心無想の域に至りたるをいふ、陸游の句に「草庵寂默我忘吾」

故事成語大辭典 終

孔子世家贊

太史公曰、詩有レ之、高山仰止、景行行止、雖レ不レ能レ至、然心郷二往之一、余讀二孔氏書一、想二見其爲レ人、適レ魯、觀二仲尼廟堂車服禮器一、諸生以レ時習二禮其家一、余低回留レ之、不レ能レ去云、天下君王至レ于賢人衆矣、當レ時則榮、沒則已焉、孔子布衣傳十餘世一、學者宗レ之、自二天子王侯一、中國言二六藝一者、折中於夫子一、可レ謂二至聖一矣、

司馬遷

故事成語大辭典 拾遺

【愛育】「カハユガリ、ソダツル」北史鮑宏傳に「宏七歲而孤、爲レ兄泉之所レ―レ」

【埃壒】壒一音アイ 壒は俗字「チリホコリ」塵埃に同じ、班固の西都賦に「軼レ―之泥濁」梅堯臣の詩に「一生蹈レ―軌」

【愛好】「スキコノム」南史謝靈運傳に「出爲二永嘉太守一、那有二名山水一、靈運素所レ―、遂肆二意遨遊一、所レ至輒爲レ詩詠以致二其意一」

【愛幸】「メデカハユガル」史記五宗世家に「膠西王端有レ―二少年一爲レ郎」

【愛姬】「カハユガルヒメ」史記孫子傳に「吳王從二臺上一觀レ見レ且レ斬二大將一姬」姬は衆妾の總稱

【愛玩】「カハユガリ、モテアソブ」晉書樂志に「―レ在二乎雕章一」また葛洪傳に「洪性寡欲、無レ所レ―レ二」

【愛敬】「イツクシミ」と「ウヤマヒ」と、孝經に「―レ盡レ於事レ親、而德教加二於百姓一」

【愛古】古の道を愛する義、北史景穆十二王傳に「下レ帷讀レ書、篤レ志―レ一」

【愛護】「タイセツ」に「マモル」顏氏家訓に「借二人典籍一皆須レ―レ二」

【愛國】己の國を「タイセツ」に思ひて心を盡す義、戰國策の秦策に「明主愛二其國一、莫レ如レ―レ一」如レ家」

【愛山】(山ヲ愛ス)白居易の詩に「木落天晴山翠開、愛山騎馬入レ山來、」嵇軼の詩に「多君貴公子、―レ一如レ愛レ色」

【愛親】親を愛する義、孝經に「―レ一者不レ敢レ惡二於人一、敬レ親者不レ敢レ慢二於人一」

【愛酒】(酒ヲ愛ス)李白の月下獨酌詩に「天若不レ―レ一、酒星不レ在レ天、地若不レ―レ一、地應無二酒泉一」

【愛憐】「カハユガル」と「ニクム」と、穀梁傳序疏に「信ニ—ス意ニ—ン」

【埃塵】「ホコリ」「チリ」塵埃に同じ、晉書儒林傳に「扈氏慘虐、爽德任刑、煬ノ墳籍於—ニ」杜甫の詩に「人生無ク賢愚ト飄飄若ク—ニ」

【愛梅】王冕の詩に「平生—レ頗成ス癖ヲ、踏ム雪行穿ツ一雙ノ屐ヲ」

【愛撫】「ナデカハユガル」宋史范仲淹傳に「仲淹爲リ將ト、號令明白、—ス士卒ヲ」

【鞋韈】次條を見よ

【韈】鞾は鞋に同じ、「カハグツ」「セッパ」「クサグツ」韈は足衣「タビ」唐書儀衛志に「皆有ニ行縢ヲ—ス」

【愛樂】「イツクシミ、タノシム」詩經鹿鳴篇の疏に「—ス其賓客ヲ—ス」

【愛憐】「カハユガリ、アハレム」史記趙世家に「太后曰、丈夫亦—ス少子ヲ乎」

【鴛歌】「ウグヒス」の聲、李適の奉和聖製春日幸望春宮應制詩に「蝶舞飛行飄リ御席ニ、—ス度曲繞ス仙杯ニ」

【鶯哥】「インコ」蓋し—ーの唐音なるべし、印度地方に產す、鸚鵡の屬、形小さく亦人語を學ぶ、羽色赤綠紫黑等ありて最も美なり、本草に「鸚鵡大者爲ス鸚鵡、小者爲ス—ス」

【奧義】「オクソコ」の意味、孔安國の尚書序に「雅誥ハ—ス其歸一揆ニ」

【鶯花】「ウグヒス」と花と、郎士元の詩に「車馬雖ス嫌ト僻ナリ、—ス不ル厭ト貧ヲ」

【鶯簧】鶯の聲の「ウツクシキ」を笛の音に喩へていふ、歐陽修の詩に「煖入リ—ス舌漸ク調ス」

【鶯語】「ウグヒスノコエ」鶯聲・鶯歌・鶯吟・鶯囀皆同じ、孫綽の蘭亭詩に「—ス吟ス脩竹ニ、遊鱗戲ス淵澹ニ」

【鶯兒】鶯の「ヒヨツコ」鶯雛に同じ、曹松の詩に「學ス語ヲ—ス未ダ穩カナラ、放ツ身斜ニ墜ス綠楊ノ枝ニ」薩都剌の過孫虎臣園詩に「—ス老去空ク臺榭ニ、燕子歸來無シ主家ニ」

【鶯唇】「ウグヒス」の「クチビル」陸龜蒙の詩に「—ス映ス花老ニ」

【鶯雛】鶯の「ヒナ」鶯兒に同じ、馬臻の村中書事に「—未ダ省ス逢ヒ人避ケ、直向ニ路傍花上ニ啼ク」

【鶯舌】「ウグヒス」の「シタ」沈與求の春意詩に「宿露園林—ス亂ル暖風庭院蜜脾香」

【鶯啼】「ウグヒス、ナク」鶯鳴に同じ、杜甫の詩に「春日—ス脩竹裏、仙家犬吠白雲閒」孔平仲の春日行に「—ス花笑清明天、黃金買ス酒斗十千」

【秋苗】「イネナヘ」范成大の詩に「竹葉垂レテ頭碧ニ、—ス滿ツ意青ニ」

【鴛鳴】「ウグヒス、ナク」詩經に「—ス嚶嚶」張華の答何劭詩に「屬耳聽ク—ス、流目翫ス儵魚ヲ」

【鶸綠】鶸鵡の羽毛の綠色なるをいふ、陸游の詩に「—ス猩紅極ス天巧ヲ」

【秋高ク馬肥ユ】秋の氣は澄みて天も高く見え、馬も肥えて逞しくなるをいふ、馬は性寒を好む、故に匈奴、この時に乘じて邊境を侵すと常なり、漢書趙充國傳に「匈奴到ル秋馬肥ユル必ス起ス矣、宜ス豫ジメ爲ス備ヲ」杜審言の詩に「雲靜ニシテ妖星落チ、秋高ク塞馬肥ユ」

【惡金】「アシキ」質の金、國語の齊語に見ゆ、

【握齷】本編の（偓促）を見よ

【惡詩】拙惡なる詩をいふ、蘇軾が徐凝の作りし廬山瀑布の詩を嘲るに「世傳ス徐凝瀑布詩ヲ云、一條界破ス青山色ヲ、至ル爲ス廬陋ト乃戲ル作ス一絕ヲ、帝遣ス銀河一條垂レテ古來惟有リ謫仙詩ノミ、飛流濺沫知多少ト、不ル與ニ徐凝ニ洗ハ—ス」謫仙は李白をいふ、本編の（廬山ノ）を見よ、

【惡疾】「アシキ」質の病、大戴禮本命篇の「女有ニ五不ル取ノ」の第四に「世有ニ—ス不ル取ト」とあり、孔子の語、小學明倫篇にも引けり、

【惡少】性質の惡しき少年をいふ、荀子修身篇に「無ク廉恥ニ而嗜ム乎飮食ヲ可ル謂ヒ—ス者ト矣」

【幄幕】幄は四方に引き廻す「トバリ」「ヒキマク」左傳昭十三年の音義に「四合象ル宮室ニ曰ヒ幄ト、在ル上ニ曰ヒ幕ト」帷幕に同じ、

【娃髮】娃は美女、髮は總髻（ワゲ）——は美女の義に用ふ、李賀の神仙曲に見ゆ、

【亞卿】亞は次なり、九卿に次げる官をいふ、史記の樂毅傳に「樂毅遂ニ委ス質ヲ爲ス臣ト、燕昭王以テ爲ス—ス亞卿ト」

【鴉兒】唐の李克用の幼名、五代史記の唐本紀に「李克用少驍勇、軍中號ス曰ヒ李—ス鴉ト」鴉は鴉に同じ、また「カラス」をいふ、元稹の閑詩に「艇子收ル魚市ヲ、—ス噪ク荻叢ニ」

【鴉觜】鋤の一種、形の似たるによりていふ、陸游の詩に「采ル藥常携ヘ—ス鋤ヲ」

【足ヲ忘ル】本編の（忘足）を見よ、

【汗出デテ背ヲ沾ス】（汗出沾背）極めて恥ぢ入る義、史記陳丞相世家に「周勃不ル能ハ對ヘ—ス」また後漢書伏皇后紀に「操出顧ミ左右ヲ、汗流浹ス背ヲ」

【了頭】「カブロ」少女をいふ、輟耕錄に「吳中呼ス女子之賤者ヲ曰ヒ—ス、劉賓客寄ス贈小樊ニ詩、花面—ス十三四、春

來綽約向人時」

【豈辯ヲ好マンヤ】（豈好辯哉）「ナニトテ」辯舌を弄することを好まんや、好みはせずとの義、孟子滕文公下篇に「孟子曰予ー、ー、予不得已也」

【鴉背】「カラスノセナカ」溫庭筠の春日野行詩に「蝶翅朝粉澁、ー夕陽多」

【鴨脚】銀杏（イテフ）樹の異名、葉の形の似たるにより名づく黃山谷の詩に「霜林收ー」ニ本編の（銀杏）を見よ、

【鴨頭】「カモノクビ」水の綠色に喩ふ、李白の詩に「遙看漢水ー綠、恰似葡萄初潑醅」陸游の詩に「一簣湖水ー綠、千樹桃花人面紅」

【敢テ當ラズ】（不敢當）自ら誰して敢てその事に當らざるなり、儀禮士相見禮の「非敢求見」の注に「嫌ー主人ー」ー也」

【阿瞞】魏の曹操の幼字、三國志曹操傳の注に「太祖一名吉利小字ー」「曹孟德」を參看せよ、また唐の玄宗の幼時の自稱、羯鼓錄の注に見ゆ、

【安慰】「ヤスンジ、ナグサメル」唐書の宗室傳に「分遣使者、紱輯ー」其款附者四十有九州」

【安佚】「ヤスケク、クラス」孟子に「四肢之於ー也」佚は逸に同じ、勞することを爲さざるなり、

【安逸】前條に同じ、

【安穩】心安く「オダヤカ」に無事なる義、三國志董卓傳に「海內ー、無故移都、恐百姓驚動、吾書願愷之傳に「行人ー」、布帆無恙」

【安康】「ヤスラカ」吳志孫綝傳に「扶危定傾、ー社稷、功勳赫然」

【安危】「ヤスキ」と「アヤフキ」と、晉書宣帝紀に「凡事置之安地、則安、危地則危、故兵書曰、成敗形也、ー勢也」

【案山子】和名カガシ」竹葦等にて人の形を作り、簑笠を著せ弓矢などを持たしめ、田閒に立て鳥獸の威しとするもの、五燈會元の浩州雲居道膺禪師の條に「僧出問曰、某甲不會、師曰、面前ー、ー也不會」

【弁州山人四部稿】一百七十四卷、續稿二百七卷、明の王世貞撰す、四部とは賦部・詩部・文部・說部なり、續稿は賦詩文の三部のみにて說部を闕けり、簡明目錄に「世貞初羽翼李攀龍、後踔然獨存、爲時耆宿、其聲價遂出攀龍上、而摹擬剽襲流弊萬端、其受攻亦甚於攀龍、要其才學富贍、規模廣闊、實足籠罩群材、尊世貞而薄古人固爲不可、必欲併廢世貞、亦非通論也」（王世貞）を參看せよ、

【安輯】「ヤスンジ、ヤハラグ」輯は和なり、後漢書高帝紀に「共定天下」同ー之」

【安集】前條に同じ、漢書曹參傳に「齊國ー」史記の曹參世家にもー百姓」集は安なり、

【案上】「ツクエノウヘ」韋應物の詩に「幸無職事牽、且覓ー書」

【安處】「ヤスンジテ、ヲル」詩經に「嗟爾君子、無恒ー、ー管子に「使五穀桑麻各安其處」

【安全】「ヤスク、マツタシ」後漢書夏恭傳に「擁兵固守、獨ー」

【鞍韉】鞍は「クラ」韉は鞍の下の被「シタグラ」杜甫の詩に「雪沒錦ー」

【安息】「ヤスラカニ、イコフ」詩經に「嗟爾君子、無恒ー」易林に「年豐歲熟、民人ー」

【案頭】「ツクエ」の上なり、杜甫の題鄭著作虔詩に「窮巷悄然車馬絕、ー乾死讀書堂」皮日休の讀書詩に「ー見蠹魚猶勝凡儕倫」

【案廚】「トリシラブベキ」文書、唐書の李巽傳に「天資長於吏事、治家亦勾檢ー、簿書如公府」劉禹錫の陋室銘に「無絲竹之亂耳、無ー之勞形」

【安寧】「ヤスラカ」詩經に「既安且寧」史記周本紀に「成康之際、天下ー、刑錯四十餘年不用」

【鞍馬】「クラ」をつけたる馬、後漢書桓郁傳の注に「東觀記曰、皇太子賜郁ー刀劒」般韋藩の上巳日贈都上人詩に「ー皆爭麗笙歌盡國奢」

【安貧】（貧ニ安ンズ）續漢書に「王苑字孫仲ー、茅屋蓬戶、藜藿不厭」陶潛の詠貧士詩に「ー守賤者、自古有黔婁」

【安樂】「ヤスク、タノシム」易林に「麟鳳所遊、ー無憂」

【蛙鳴蟬噪】蛙が鳴き蟬が噪ぎて「ヤカマシ」蘇軾の詩に「蛙鳴青草泊、蟬噪垂楊浦」

また蛙蟬の鳴き噪ぐ如く「ツマラヌ」文章をいふ、韓愈の平淮西碑の儲同人の評に「段文昌、以駢四儷六ー之音、易鈞天之奏、直不知人閒有羞恥事」

【阿蒙】（復吳下）を見よ、

仁

【醫】說文に「治病工也」增韻に「療也、或作毉」後漢書に

「醫之爲言意也」周禮天官に「食醫ハ王ノ六食六飲六膳百羞百醬八珍ノ齊ヲ和スルコトヲ掌ル」また「疾醫ハ萬民ノ疾病ヲ養フコトヲ掌ル」また「獸醫ハ獸病ヲ療シ、獸病ヲ療スルコトヲ掌ル」後漢書に「黃憲世貧賤、父爲牛醫、識良見憲蹄、罔然若有失、其毋問曰、汝復從牛醫兒來耶」乳醫は今の產科醫、漢書霍光傳の注に見ゆ、論衡に「堯之使馮治水、猶病水者之使醫也、然則堯之洪水天地之水病也、馮之治水、洪水之良醫也」帝王世紀に「黃帝使岐伯嘗草木、典醫療疾」本草に「俗無良醫、枉死者半、描醫療病、不如不療、楚辭に「九折臂而成醫、李商隱の詩に「蹙頭仍苦學、折臂反成醫」禮記に「醫不三世不服其藥」王建の詩に「隔籬敎喚女醫人」史記に「扁鵲來入咸陽、聞秦人愛小兒、即爲小兒醫、また扁鵲名聞天下、過邯鄲、聞貴婦人、即爲帶下醫、帶下醫は今の婦人科、

【威アリテ猛カラズ】（威而不猛）威嚴あれども「アラアラシカラズ」論語述而篇に「子溫而厲、——、恭而安、孔子中和の德、容貌の閒に見はるるをいふ、

【猗委】風に隨ひて靡く貌、文選の郭璞の江賦に「隨風——」

【意到筆隨】詩文などの心に思ふまま自由に筆の運るをいふ、春渚紀聞に「東坡曰、吾生平作文、意之所到、則筆力曲折隨之、無不盡意」

【勠力】「アハグロク」塗る、勠は黑色の微に青色を帶ぶるなり、李覯の袁州州學記に「殿堂門廡——丹漆」

【幽客】世を避けて閉居せる客、また蘭の異名、三餘贅筆に「蘭爲——、また山蘚の異名、三柳軒雜識に見ゆ、

【熊魚】二ツながら美味のもの、范成大の丙午新正書懷に「胸鷄相安無可笑、——自古不容兼」（熊掌）を見よ、

【幽花】「シヅカ」なる花、幽葩に同じ、杜甫の詩に「——欹湍樹、小水細通池」蘇軾の題畫の詩に「瘦竹如幽人、——如處女」

【軺軒】輕き車、使者の乘用とす、唐書高馮傳に「歲出——」

【幽谷ヨリ出デテ喬木ニ遷ル】（出自幽谷遷于喬木）幽は深なり、喬は高なり、鳥の深き谷より出でて、高き木に飛び遷るをいふ、詩經の小雅伐木篇に「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、——、——、——、嚶其鳴矣、求其友聲、云云」轉じて人の位若しくは德の高くなるに用ふ、孟子滕文公上篇に「吾聞出於幽谷、遷于喬木者、未聞下喬木而入於幽谷者」（遷喬ノ）を參看せよ、

【幽州】唐の河北道——、今の直隸順天府大興縣の西南、

【幽愁】「シヅカナルウレヒ」白居易の琵琶行に「別有——閒恨生、此時無聲勝有聲」幽憂、幽悲と暑同じ、

【幽室】「シヅカ」に人なき「ヘヤ」後漢書張湛傳に「居處——必自修整」

【熊掌】「クマ」の「タナゴコロ」極めて美味なりといふ、孟子の告子上篇に「魚我所欲也、——亦我所欲也、二者不可得兼、舍魚而取——者也、生亦我所欲也、義亦我所欲也、二者不可得兼、舍生而取義者也」

【右丞】後漢書百官志に「尚書省左右丞各一人、掌錄文書期會」唐書百官志に「尚書省左丞一人、正四品上、右丞一人、正四品下、掌辨六官之儀、糾正省內、劾御史舉不當者、吏部戶部禮部左丞總焉、兵部刑部工部——總焉」

【幽遂】「シヅカ」に「オクブカシ」王延壽の魯靈光殿賦に「洞房叫窱而——、孫綽の天台賦に「邈彼絕域、——窈窕」

【有道ノ碑】後漢書の郭泰傳に「泰卒ス、同志共ニ石ニ刻シ碑ヲ立ツ、蔡邕文ヲ爲ル、既ニシテ廬植ニ謂ツテ曰ク、吾碑銘ヲ爲ル多シ、皆德ニ慙ヅルアリ、惟郭有道ノミ愧色ナキノミト」有道は泰の字、

【熊膰】熊の「キモ」藥用とす、唐書柳公綽傳に、仲郢の母の韓氏——を和し丸となし、夜仲郢をして嚥ましめ勤學の助とせし事見ゆ、仲郢は公綽の子、

【郵置】宿驛の義、置も亦郵なり、置郵ともいふ、燕翼貽謀錄に「前代——皆役民爲之」

【熊蹯】熊の「アシノハラ」極めて美味なりといふ、曹植の名都篇に「炙——、——陸游の詩に「烹粟稈芋、美敵——」

【右文】右は上なり、文を、タフトブ宋史の禮志に「廣列聖崇儒——之聲」また同書徽宗紀に「政和五年四月庚戌改集賢殿爲——殿」また潘炎の君臣相遇樂賦に「或——而左武、或先吁而後唱」とあるは文武を左右にする義なり、

【幽約】浮世を離れたる「シヅカ」に風流なる約束、陳高の送陸有章詩に「我性亦愛山、方期結——」

【猗歟】嘆美の聲「アア」文選の班固の東都賦に「——緝熙、允懷多福」

【伊臬】殷の湯王の相伊尹と、唐虞の際の相皐陶と、共に古の良相、後漢書の班固傳に「將軍宜詳唐虞之舉、察——之薦、令遠近無偏、幽隱畢達」

【異客】異りたる地に客たる人をいふ、王維の九月九日憶山中兄弟詩に「獨在異鄉爲異客、每逢佳節倍思親」

【怡顏】顔色をヨロコバス、陶潛の歸去來辭に「眄庭

【衣錦還鄉】富貴にして故郷に歸ることを、漢の朱買臣が會稽太守となりて故郷に歸りしに、郡邸の人々掃道して迎へたる故事あり、文選の恨賦に「朱買臣之徒、既富貴而歸故鄉」

【衣錦之榮】富貴にして故郷に還る榮譽をいふ、歐陽修の相州晝錦堂記に「仕宦而至將相、富貴而歸故鄉、此人情之所榮、而今昔之所同也（中略）一介之士得志於當時、而意氣之盛、固有加於人者、此之謂人情之所榮、而今昔之所同也（中略）一介之士得志於當時、而意氣之盛、固有加於人者、此之謂——者也」

【異鄉】他鄉に同じ（異客）を見よ、

【威鄉】威り盛んなる貌、詩經小雅信南山篇に「零雨——」

【祁祁】徐ろなる貌、文選の潘岳の西征賦に「——徐步、漸漸而流汗」

【伊霍】伊尹と霍光との二人をいふ、國家のために君を放ち若くは廢せしをいふ、本編の伊尹の條を見よ、霍光に關しては漢書に「桓溫陰謀篡逆、不臣之志、及枋頭之敗、威名頓挫、都

超拗溫帝行廢之事、以立大威權、溫遂入朝、白太后、

【棄刻書目】十卷、清の顧修桐川人、棄屋下號、撰す、叢書の目錄なり、後ち朱記榮之を增續して二十卷として刊行す、また松澤老泉、江戸の書肆、通雅和泉屋庄二郎、慶元堂と呼べりは顧氏本の遺を補ひて一一外集六卷を撰せり、別に續——十二卷（清ノ俞

——雲龍ノ撰あり、

【遊恨】「ザンネン」に思ふ、遺憾に同じ、

【衣食】「キモノとクヒモノ、左傳に「——所安、弗敢」尊也必以——」儲光羲の田家雜興詩に「——既有餘、時會時親友」

【委質】初めて君に仕ふる義、質は贄なり、本編の質ヲ委スを見よ、一解に質は形體なり、形體を君に委かする義、この說に從へば質の音シツなり、何にしても質とチと說むは妄ならず、

【遺矢】大便をする、史記滑稽傳に「一俛三——矢」

【伊尹】殷の湯王の相、伊尹と、周の武王成王の相、周公旦となり、二人共に古の良相、故に竝稱す、文選の

【遺體】子たる者が己の身體をいふ、即ち父母の遺し置かれたるものなりとの義、禮記の「曾子曰、身也者、父母之——也、行、父母之遺體、敢不、愼、義に敬

【委遲】「グヅグヅ」して物に臨み進み難き貌、世說容止篇に「——而歸」

【倭遲】回りて遠き貌、詩經小雅四牡篇に「四牡騑騑、周道——」騑騑は行きて止まらざる貌、周道は大路なり、

【一鎰】西京雜記に「遺黃金——貫繫簪」の趙與、蘇洙二解に二十四兩、黃金百鎰、註に「二十兩ヲ一——ト爲ス」また三十兩を鎰といふとあり、

【異中同】異りたる中にも同じき點あるをいふ、朱の黃庭堅の書法を論ずる語中に「同中有異、異中有同」

【一作同】

【一作傑】善きも惡しきも「スベテ」「オシナベテ」一ツにする義、楚辭に「——而相量」

【一月九遷】一月中、九度官位の進むをいふ、文選の任彥昇の范雲謝表に「千秋之——」荀爽之十旬遷方ノ之微臣、未爲速、千秋は前漢の人、高祖の寢郎より、一月に九遷して丞相となれり、

【一言半句】少しばかりの「コトバ」、明心寶鑑に「——

——重価千金」

【一言半辭】 前條に同じ、史記信陵君傳に「公子曰、侯生曾無一言半辭送我」

【一場春夢】 人生の榮枯盛衰は、春の夢の忽ちに「サムル」如く「ハカナキ」をいふ、侯鯖錄に「東坡行歌田閒、饁婦曰、內翰昔日富貴、一場春夢婆」

【一條】 一件の事をいふ、晉書劉實傳の「撰春秋條例二十卷」この顏師古の注に「凡言條者、一一而疏舉之若木條焉」

【一年ノ計ハ春ニ在リ】 一年中の計畫は、春の初に於て豫定すべし、然らざれば空しく何事も爲さずして歲月を過すに至るべしとの義、梁元帝の纂要に「一年之計在于春、一日之計在于晨」（四計）を參看せよ、

【一瓣香】 「ヒトツマミ」の香を燒く義、人を敬ふに用ふ、書言故事に「宋陳思道、字無己、號后山」詩曰、向來一一敬爲曾南豐」

【一暴十寒】 本編の（一日之ヲ暴メ）を見よ、

【一枚】 一箇に同じ、我が國にては紙または板の如き薄き物を數ふるに用ふれども、支那にては廣く物を數ふるに用ふ、說文に「枚ハ幹ナリ、又箇ナリ、樹枝ヲ條トイヒ、幹ヲ枚ト曰フ、故ニ凡ソ事ヲ數フルヲ條ト曰ヒ、物ヲ數フルヲ枚トイフ」史記田完世家に「梁王曰若寡人國小也、尙有徑寸之珠照車前後各十二乘者十枚」

【一面】 一方面の略、史記留侯世家に「良曰、漢王之將、獨韓信可屬大事當一面」

【一樣】 「オシナベ」て同じき義、章碣の詩に「九陌煙花一一飛」

【幃帳】 幃は帷に同じ「トバリ」大方便佛報恩經に「生長深室、臥則一一幃幄、幃幕、幃幔皆同じ、

【一勢永逸】 一度「ホネヲリ」て永く安樂する義、齊民要術に「苜蓿長生、種者一一一一、鍬砍後、復生不煩耕種、所謂一一一一」

【一里一塚】 一里塚をいふ、北史韋孝寬傳に「孝寬爲雍州、改路側一里置一土壠、處植槐木代焉、周文帝令天下效之、一里植二木、二里植二木、百里植百木」字典に「壠ハ土ヲ封ジ、壇ト爲シ以テ里ヲ記スルナリ」とあり、

【汨汨】 水の盛んに流るる貌、楚辭に「浩浩沅湘兮、分流汨兮」轉じて文章の滯りなく「サラサラ」と勢よきにもいふ、韓愈の答李翊書に「當其取於心而注於手」

也、一一然來矣」

【一ヲ以テ萬ヲ知ル】 （以一知萬）一理を推して萬理を知るをいふ、荀子非相篇に「以近知遠、一一一、以微知明」

【一箇】 一个に同じ、箇一に個に作る、揚子方言に「箇枚也」また荀子議兵篇に「負矢五十箇」二个は古字、經典皆之を用ふ、箇は六國の時より、個は漢末より用ひらる、

【一階半級】 僅ばかりの官位をいふ、顏氏家訓勉學篇に「或因家世餘緒得一一一及公私宴集、談古賦詩、寒默低頭欠伸而已」一資半級に同じ、

【一行吏ト爲ル】 （一行爲吏）他事をなげうちて一意官吏となるをいふ、文選の嵇康の與山巨源絕交書に「遊山澤觀魚鳥心甚樂之一一一此事便廢」

【一寒】 甚しく貧寒なる義、史記范雎傳に「范叔一一如此歟」

【一竿ノ風月】 一本の釣竿にて風月を樂むをいふ、陸游の感舊詩に「回頭壯遊眞昨夢、一一一老南湖」

【一粥】 兩手にて「スクフ」を粥といふ、掬に同じ、詩經小雅采綠篇に「終朝采綠、不盈一一綠は王芻（カリヤス）なり、一名青茅、

【一掬】 前條を見よ、

【一局棊】 一の「ゴバン」の圖棊、許渾の詩に「醉斜烏帽髮如絲、曾看仙人一一一」李遠の詩に「長日惟消一一溫庭筠の詩に「一局殘棊千點雨」

【一空】 「スベテ」空しくなる義、五代史唐六臣傳序に「皆誣以朋黨坐貶死者數百人、而朝廷爲之一一」白居易の詩に「萬緣成一一一」

【一薰一猶十年尙猶臭アリ】 （一薰一猶十年尙猶有臭）左傳僖四年、晉の獻公の卜人の語、薰は香草、猶は臭草、十年有臭とは善の消え易く、惡の除き難きをいふ、薰蕕を參看せよ、

【一歲九遷】 一年中に九度官位の進むをいふ、韓愈の上張僕射書に「日受千金之賜、一歲九遷其官」

【一切藏經】 すべて七千餘卷略して一切經ともいふ、佛書の經律論の三藏をすべて稱す、南北朝以後世世選定して、時の天子の勅によりて經藏の中に收むることとせり、我が邦にては宇治の黃蘗寺にて翻刻せり、

【逸材之獸】 「スグレテ」勢の猛き「ケダモノ」司馬相如の諫獵上疏に「今陛下好陵阻險、射猛獸、卒然遇一一一駭不存之地、觸車之清塵、云云」一本逸材を軼才に作る、

【軼才之獸】 前條を見よ、

【一墅】一對なり「ヒトソロヘ」史記の項羽本紀に「白璧一雙欲獻項王」に

【一粲】一笑に同じ、粲は鮮明の義、よりて白き齒を「アラハシ」て笑ふ意とす、穀梁傳昭四年に「軍人粲然皆笑注に「盛笑ノ貌己の作りたる詩文などを人に示すを謙して「博」一笑などと書く、

【逸事】人の行事の、未だ世人に知られざるものをいふ、柳宗元に「段太尉一狀方苞に「左忠毅公一」の文あり、本編の（軼事）を參看せよ、

【軼詩】本編の（逸詩）を見よ、

【豈是】「モツパラ」是は助辭なり、大學に「自天子至於庶人一皆以修身爲本」

【非修】非は述なり、祖先を思ひてその德を述べ修むる義、詩經大雅文王篇に「無念爾祖聿修厥德」一解に非は發語

【一視同仁】平等に慈愛するをいふ、韓愈の原人に「聖人一而一篤近而畧遠」

【一資半級】僅かばかりの官位をいふ、柳氏家訓に「急於名宦躓近權要一一雖或得之衆窓羣猜鮮有存者一階半級に同じ、

【一舍】三十里をいふ（三舍ヲ）を見よ、

【一餉】一飯に同し、一時は「イチド」飯を「タベル」間にて、僅少の時間をいふ、韓愈の詩に「雖得一一樂有如聚飛蚊」

【一觴一詠】酒を飲みながら詩を詠ずる義、王羲之の蘭亭集序に「雖無絲竹管弦之盛一一亦足以暢敍幽情」

【一曙】一旦に同じ、呂氏春秋孟春紀に「一一失之終身不復得」

【一齊】平等の義、莊子に「萬物一一就長就短」

【一則】一條に同じ、もと佛書にいふ、後世は儒書にてもいふ、容齋隨筆に「卷第一、二十九則、卷第二、二十四則」

【一脅】一ツの「サカダル」脅は樽など體に同じ、白居易の酒功讃に「孕和者何濁醪一一」杜甫の春日憶李白詩に「何時一一酒重與細論文」

【一刀兩斷】情實などにヒカサレズ斷然たる處置をする義、朱子語錄に「克己者是從根源上一一一一便斬絕了」

【一簞食一豆羹】少しばかりの食物、孟子告子上篇に「一一一一得之則生弗得則死」

【一致】「オモムキ」を同うする義、易の繫辭に「天下同歸而殊塗一一而百慮」陸機の秋胡行に「道雖一一途有萬端」

【一張】琴を數ふるにいふ、宋書陶潛傳に「素琴一張」

また殺皮紙等のうすきものを數ふるにも用ふ、劉禹錫の詩に「一張短骨艇一一斑鹿皮」

また禮記雜記に「一一一弛文武之道也」本編の（一張一弛）を見よ、

【一朝一夕】少しの時間をいふ、易の文言傳に「臣弑其君子弑其父非一一一之故其所由來者漸矣」一一の解本編にも出づ併看すべし、

【一擲】一度抛ち捨つる義、生命を捨つるには、李白の結襪子樂府に「國君恩重許君命太山一一輕鴻毛」また金錢を捨つるには、晉書裴秀（字ハ彥道）傳に「就人局十萬一一直上百萬」また何無忌傳にも「劉毅家無儋石之儲、樗蒱一一百萬」本編の（一擲乾坤）を參看せよ、

【一杯水】一ツの「サカヅキ」の水、少量の水をいふ、孟子告子上篇に「以一一一救一車薪之火」

【一方之任】一方面を統べ治むる任、淡書終軍傳に「不足以抗一一一」

【一髮】遠方に見ゆる青山に喩ふ、蘇軾の澄邁驛通潮閣詩に「杳杳天低鶻沒處青山一一是中原庾集の詩に「青山一一是江南白頭不歸神獨往」

【一半】半分をいふ、李白の短歌行に「麻姑垂兩髽一一已成霜」李益の登天壇詩に「九州下視杳未旦一一浮生皆夢中」

【一百】白居易の對酒詩に「人生一一歲通計三萬日」

【一餅】「ヒトカタマリ」の金、後漢書樂羊子妻傳に「得遺金一一」

【一片】「ヒトキレ」後漢書周燮等傳序に「日買猪肝一一」

また「ヒトヒラ」杜甫の曲江詩に「一一花飛減却春」

【一畝之宮】一畝ばかりの貧しき家、禮記の儒行篇に「一一一一、環堵之室筆門圭竇蓬戸甕牖」

【戚斗】王莽の作りし器の名、漢書王莽傳に「鑄作一一一者以五石銅爲之如北斗長二尺五寸欲以厭勝衆兵既成令司命負之莽出在前入在御傍」李奇曰く「五色ノ藥石及ビ銅ヲ以テ之ヲ爲ル其ノ群雄ヲ戚懼スルヲ以テ故ニ一一ト曰フ」

【曰ク言ヒ難シ】（曰難言）「ナカナカ」容易には言ひ難しとの義、孟子公孫丑上に「敢問何謂浩然之氣曰難

也、其爲氣也、至大至剛云云」本編の（浩然ノ）を見よ、

【渭濱】渭水の「ホトリ」史記范雎傳に「臣聞昔者呂尙之遇文王也、身爲漁父而釣於——耳」

【伊傅】殷の湯王の相伊尹と、殷の高宗の相傅說となり、二人共に良相なり、後漢書崔駰傳に「美——之選」

【遺風餘烈】後世へ遺せる風化、事業をいふ、烈は功業なり、宋書謝靈運傳論に出づ、

【威福】威を以て人を「ヲドシ」また恩を人に施すをいふ、書經洪範に「臣無有作福作威玉食」また荀悅の漢紀に「作——結私交以立彊于世者謂之遊俠」

【以聞】臣民が君主へ上書するにいふ、禮記曾子問に「有司——曰、古之禮、慈毋無服」

【移文】移書に同じ「フレブミ」また「シラセブミ」本編の（北山——）を見よ、

また文移に作る、後漢書光武紀に「於是致僚屬作文移」注に「文書ヲ屬縣ニ移スナリ」

【遣乘】「トリノコシタル」禾の「タバ」乘は刈り取りたる禾の「タバ」詩經小雅大田篇に「彼有——」此有滯穗」轉じて前人の未だ氣附かざる經說史論などを補ふをいふ、

【家徒二四壁】（壁立）を見よ、

【意味深長】詩文等の義理の深きをいふ、論語の序說に「程子曰、頗自十七八、讀論語、當時已曉文義、讀之愈入、但覺——」

【淫淫】流るる貌、楚辭に「涕——其若霰」

【因緣】「ユカリ」名義集に「因謂先無其事而從彼生也、緣謂素有其分而從彼起也、故因親而緣疎、譬ば穀を地に植うれば稻を生ず、穀は因なり、地は緣なり、稻は果なり、而して之を行ふを業といふ、人事は皆この因緣、因果、因業の關係によりて成るなり、

【印可】許す義、允可に同じ、論語の皇侃の義疏に「皆被孔子——」

【姻家】親類をいふ、後漢書荼嵒傳に「與羊陟——」

【飮器】酒器なり、淮南子道應訓に「大敗智伯破其首、以爲——」一解に溲溺の器とあれども非なり、

【殷勤】本編の（慇懃ヲ）を見よ、

【允恭】「マコト」に「ウヤウヤシ」允は信なり、書經堯典に「——克讓、光被四表、格于上下」

【隱君子】獨り德を修め、隱れて世に出でざる人、蘇軾の留侯論に「秦之世有——者出而試之」

【引業】前世に爲したる行事の報が今世に發するをいふ、俱舍論に「若由宿世善業引發、生於人中、則得珍寶豐足、多受快樂、若由宿世惡業引發、生於人中、則感貧窮困乏、受諸苦惱、是名——」

【蚓操】蚓は蚯蚓、操は執り守る所ろあるなり「ミサヲ」「ミミヅ」は土を食ひ、水を飮み、淸廉にして求なきもの、以て小節に喩ふ、孟子滕文公下に「若仲子者、蚓而後充其操者也」

【陰隲】隲は定なり、天が冥冥の中に在り、默してその民を安定するをいふ、書經洪範に「惟天——下民」

【引伸】文字などの本義より、他の意味に引き伸して轉用するをいふ、易經に「引而伸之、觸類而長之天下之能事畢矣」

【印書】版本をいふ、道山淸話に「張文潛嘗言、近時——盛行、而蜀世者往往皆士人、躬自負擔」

【飮食男女、人人大慾存焉】飮食物と男女の情とは、人の大いなる欲情の存ずるものなれば、謹むべしとの義、禮記の禮運篇に「飮食男女、人之大慾存焉、死亡貧苦、人之大惡存焉」

【允當】よくその事に「アテハマル」左傳僖二十八年に「軍志曰、——則歸」軍志は兵書なり、後漢書張衡傳に「百揆——、庶績咸熙」

【引導】人を導き案內する義、佛者が衆生を案內して善道に入らしむるに用ふ、法華經に「無數方便以——衆生」また導引とも倒用す、淨飯王涅槃經に「佛乃執香爐、在棺前導引而行」

【隕蘀】隕は墜なり、蘀は落なり、また槁なり、草木の凋落するをいふ、詩經豳風七月篇に「十月——」

【飮中八仙歌】唐の杜甫が當時の豪飮家たる賀知章、汝陽王璡、左相李適之、崔宗之、蘇晉、李白、張旭、焦遂の八人の醉趣を敍べたる詩にて、七言二十二句より成り、每句に押韻せり、唐詩選の七言古詩に收む、八酒仙の姓名は唐書李白傳にも見ゆ、

【飮德】德を隱して顯はさざるをいふ、漢書游俠傳に「終不伐其能、飮其德」

【隱忍】苦しき事を「ガマン」する義、史記伍子胥傳に「——就功名」

【印板】書籍を板に刻むをいふ、儒書——の事、唐人は尙ほ未だ盛んに之を爲さず、五代の馮道が始めて五經を印せしより後ち、典籍皆板本と爲す由、沈存中の筆談に見ゆ、

【陰謀】祕密に「ハカル」史記の齊世家に「——修德以傾商政」

また山路などの屈曲せる貌 微微の述懐詩に「—— 陟岵出没望平原」

【鬱金香】ウッキンカウ と訓ず、百合の類にて香のよき草 梁書の扶南國の伝に「普通中、其王闍耶跋摩、天監十八年遣使、和ス献ジ、神ニ奉ズル金香・銀香・火齊珠・懸金鈴合等ノ香ヲ」 李白の詩に「玉椀盛来琥珀光、鬱金香酒緑流霞」

【鬱林】ウツリン 今の廣西省南寧府の東南の地 漢の鬱林郡 唐の嶺南道貴州 一縣 一縣は今の廣西潯州府桂平縣の東隣の揚州 一縣 一縣は今の廣西潯州府桂平縣の南

【烏烏】ウウ 私情 烏はその母に反哺す、以て母に孝養せんとする私情に喩へていふ、李密の陳情表に「臣祖母劉、今年九十有六、臣侍湯藥、未嘗廃闕、烏鳥私情、願乞終養」 烏烏私情 —— 一 烏はその母に反哺す、以て母に孝養せん

【烏頭】ウトウ 「ウツ」とも 漢の名相雍穆侯に茂草 —— 也、江東呼ンデ烏頭ト為ス草名トリカブトまたカブ

【烏喙】ウケ 本編の烏喙を見よ、

【烏啄】ウタク 本編の烏喙に同じ、

【烏帽】ウボウ 烏帽子の略 —— 一 —— 一 —— 一

羽經に「七色夜光——」
また蘇軾の潮州韓文公廟碑に「天孫爲織——」とあるは、織女が文公の爲めに——を織成すとの意にて公の文章の外に見はるるに象りていふ、
また雲錦は朝霞の美しきに喩へていふ、文選の木華の海賦の注に見ゆ、

【運斤成風】（斤ヲ運ラシテ風ヲ成ス）巧みなる工匠の手段をいふ、莊子徐無鬼篇に「郢人堊漫其鼻端若蠅翼使匠石斲之匠石——聽而斲之盡堊而鼻不傷郢人立不失容云云」この故事によりて詩文の添削を乞ふに「乞郢斤」または「成風」などと書するは名手の斧正を請ふとの義なり、

【雲外】雲の「ウヘ」元稹の玉泉道中作に「遐想——寺、窓牕渺相望」

【雲山】雲の「カカレル」遠き山、宋史の樂志に「——浩浩歸何處、但聞空際絲絲聲」蘇頲の扈從鄠杜詩に「——一一看皆美、竹樹蕭蕭盡不成」

【雲棧】雲に入る如き、高き「カケハシ」李賀の長嶽賦に「升——而心慄」白居易の長恨歌に「——縈紆登劒閣」

【云爾】「シカイフ」と讀む「カクカクデアル」と、上文を收ひる辭、論語述而篇に「不知老之將至——」

【雲岫】雲の「カカレル」「ミネ」岫は洞穴ある山をいふ、陶潛の歸去來辭に「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還」陸游の感舊詩に「憶昔初乘上峽船雪灘——過聯翩」

【蘊藉】心廣くして穩かなる義、史記酷吏傳に「義縱敢行少——」蘊一に醞に作る、本編の（醞藉）を見よ、

【運掌】（掌ニ運ラス）事の極めて成し易きをいふ、孟子の梁惠王上に「治天下可運之掌上」

【雲樹】雲の「コメタル」樹をいふ、王維の詩に「天長——徼」

【雲蒸龍變】英雄が時運に乘じて崛起するをいふ、史記彭越傳に「得尺寸之柄——」

【雲霄】「アヲグモノアル、ソラ」晉書陶侃傳に「志凌——」

また高き地位に喩へていふ、朱慶餘の送李處士詩に「——未得路江海作閑人」

【雲濤】雲の「ハルカニ」「ヨコタハレル」海波をいふ、孟浩然の宿天台桐柏觀詩に「日夕望三山——空浩浩」白居易の海漫漫樂府に「——煙浪最深處人傳中有三神山」

【蘊蓄】物を「ツミ、タクハフ」義、左傳に「子家子曰、衆怒不可蓄也、蓄而弗治、將潰——民將生心」蘊は一番ヲン積なり、聚なり、蓄なり、

【運動】「メグリ、ウゴク」嵇仲舒の雨雹對に「——抑揚」

【雲帆】雲閉に「ホノミユル帆」李白の行路難に「長風破浪會有時直挂——濟滄海」

【運開】俗にいふ「ウンガヒラク」といふに同じ、晉の謝靈運の詩に「——申悲涼」

【雲表】「クモノウヘ」また雲外に同じ、魏志衞覬傳に「昔漢武信求神仙之道謂當得——之露以餐玉屑故立仙掌以承高露」

【雲母】和名「キララ」山洞の石に著きて產す、色白く「キラキラ」と光る、火に燒けず、舶來の上品は透明にして水晶の如く、剝げば薄紙の如し、漢書王莽傳に「常翳——屛面非親近莫得見也」李商隱の嫦娥詩に「——屛風燭影深長河漸落曉星沈」

【雨餘】雨後に同じ、唐德宗の重陽日詩に「炎節在重陽物華新雨餘」羣臣應物の詩に「冰泮寒塘始綠——百草皆生」

【雨露】「アメ」と「ツユ」と、大戴禮曾子天圓篇に「陽氣勝則散爲——」
また雨露の萬物を養ふ如き大いなる恩澤をいふ、謝

枋得の却聘書に「某與太平草木同沾聖朝之——」

エ

【英雄人ヲ欺ク】英雄が術策を以て人を欺くをいふ、李嶠龍の唐詩選序に「太白縱橫往往疆弩之末、閒雜長語英雄欺人耳」

【英雄人ヲ忌ム】英雄は己より優れたる者を忌み嫌ふ、三國志に「孫策曰劉豫州英雄忌人」

【榮耀】「ハデヤカ」文選の曹子建の雜詩に「——難久持」

【翳朽】翳は木自ら死するなり「タチガレ」朽は「クツル」なり、柳宗元の石渠記に「攬去——決疏土石」

【詠懷】心に思ふことを詩に詠ずる義、祕府論に「——詠其懷抱之事也」

【盈貫】罪惡の多きにいふ、左傳宣五年に「中行桓子曰使疾其民以盈其貫將可殛也」焦循の說に「貫ハ錢貝ノ貫ナリ、繩ヲ以テ錢ヲ貫キ、一一之ヲ重ネテ盈滿ニ至ル如ク、一次ノ戰ヲ多クスレバ一次ノ民疾ヲ

多クス、コレヲ盈其貫ト爲スナリ」貫盈とも用ふ、書經泰誓に「商罪貫盈」

また弓を十分に引く義、莊子の田子方篇に「引之ニ」

【瀛奎律髄】（エイケイリツズイ）四十九卷、元の方回撰す、唐宋兩代の詩を合編し、分ちて四十九類と爲す、錄するところ皆五七言の近體なり、故に律髄といふ、十八學士登瀛州五星聚奎」の義を兼取して瀛奎と名づく、大旨西崑體を排して、江西派を主とし、一祖三宗の說を唱ふ（一祖トハ杜甫、三宗トハ黃庭堅・陳師道・陳與義ナリ）生硬粗野を以て老境と爲し、又多く字眼の說を標す、纖仄に涉ると雖も、我が國にては、足利氏の世、五山僧徒の閒に行はれ、藤原惺窩も初學必讀の書と評せり、清の紀昀の——刊誤四十九卷を參考すべし、

【榮枯】（エイコ）李賀の嘲ニ少年詩ニ「——遞轉急如レ箭」解は本編の（一一）を見よ、

【翳桑】（エイサウ）桑の木の茂り掩ふをいふ、左傳宣二年に「舍二于——一」

【詠史】（エイシ）古來の史事を題として己の意を寫すをいふ、明の鍾惺曰く「古人詠史、不レ指二定一事一寫レ意而已」

【永州八記】（エイシウハツキ）唐の柳宗元の作りし八篇の山水遊記なり、永州は今の湖南省永州府なり、宗元、貞元中、監察御史裏行となり、王叔文と善し、叔文の貶せらるるや、宗元も亦永州司馬に貶せらる、八記はこの閒に成れり、八記とは「始得西山宴游記」「鈷鉧潭記」「鈷鉧潭西小邱記」「至小邱西小石潭記」「袁家渴記」「石渠記」「石澗記」「小石城山記」是れなり、文は唐宋八家文讀本に載せたり、

【英俊豪傑】（エイシュンガウケツ）「スグレテ、エラキ」人、淮南子に「智過二萬人一者、謂二之英一、千人者謂二之俊一、百人者、謂二之豪一、十人者、謂二之傑一」

【鄒書燕說】（エンショエンセツ）書を讀むに牽强附會して、道理に合せしむる義、韓非子の外儲篇に「鄒人有レ遺二燕相國一書者、夜書レ火不レ明、因謂二持レ燭者一曰、舉レ燭云、而過レ書舉レ燭、舉レ燭非二書意一也、燕相受レ書而說レ之、曰、舉レ燭者尙レ明也、尙レ明也者、舉二賢而任一レ之、燕相白レ王、王大說、國以治、治則治矣、非二書意一也、今也舉二學者一多似二此類一」

【榮達】（エイタツ）高き位に進むをいふ、元倉子に「窮厄則以レ命自寬、——則以レ道自正」

【贏得】（エイトク）「カチエタリ」と讀む、詩に用ふる語、秉燭譚に「詩ニ——トイフハ、贏ハ贏餘、贏利ナドトツヅキテ利得アルコトナリ、コレヲ詩ニ用ヒテハ何事モヨキ事ハナキガ、コレバカリガ利得デヤト云フコトナリ云云」とて蘇軾の詩の「——兒童語言好、一年强半在二城中一」杜牧の詩の「——青樓薄倖名」等を引證せり、

【榮任】（エイニン）光榮なる任務の義、吳志魯肅傳の注に「委レ以腹心一、遂荷二——一」

【榮名】（エイメイ）「ホマレ」史記游俠傳に「與二世浮沈一而取二——一」

【詠古詩】（エイコシ）「——以爲レ資」

【榮養】（エイヤウ）「ヨキヤシナヒ」晉書趙至傳に「至年十三、詣二師受一業、聞二父耕一叱レ牛聲一、投レ書而泣、師怪問レ之、至曰、吾小未レ能二——一、使二老父一不レ免二勤苦一、師甚異レ之」

【叡覽】（エイラン）叡は明なり、通なり、よりて天子の御覽になるをいふ、錢起の蓋地圖賦に「資二重華之——一」

【營壘】（エイルイ）陣營トリデ、後漢書公孫瓚傳に「盛修二——一」

【榮祿】（エイロク）「アッキ」秩祿なり、荼邕の釋誨に「才美者荷二——一而蒙賜」

【瑤琴】（エウキン）「スグレテ」「ミゴト」なる琴、宋之問の上陽宮侍宴應制詩に「倣臣一何幸、再得レ聽二——一」唐彥謙の詩に「松風四山來、淸宵撫二——一」

【瑤玉】（エウギョク）美しき「タマ」江淹の傷友賦に「帶二——一而爭光、握二隋珠一而比レ潤」

【瑤瑣】（エウサ）「ウルハシキ」「タマ」秦嘉の答ニ婦詩一に「詩人感二木瓜一、乃欲レ答二——一、白居易の白牡丹詩に「折來比二玉色一、一種如二——一」

【瑤質】（エウシツ）美しき玉の如き「ウマレツキ」梁簡文帝の明妃詞に「玉豔光瑤質、金鈿婉黛紅」

【繹繹】（エキエキ）絕えざる貌、詩經魯頌駉篇に「以レ車——、思無レ斁」

【奕葉】（エキエフ）累世に同じ、曹植の王仲宣誄に「伊君顯考、——佐二時一」

【奕葉】（エキエフ）奕は棊を圍むこと、棊は「ゴイシ」左傳襄二十五年に「奕者舉レ棋不レ定、不レ勝二其耦一、而況置二君而非一レ定乎」西京雜記に「杜陵杜夫子善——、貧二天下第一一」

【繹史】（エキシ）一百六十卷、淸の馬驌（字ハ宛斯、山東ノ人、順治十六年ノ進士）撰す、開闢より秦末に至る閒の事を纂錄す、首に世系圖年表あり、次に太古十卷、次に夏殷周三代二十卷、次に春秋七十卷、次に戰國五十卷、次に外錄十卷あり、その事毎に各標題を立て、紀事本末體に仿ひて敍述せり、援據浩博考證詳密、大に史學に益あり、

【驛使】（エキシ）飛脚なり、荊州記に「陸凱與二范曄一相善、自二江南一寄二梅一枝一詣二長安一與レ曄幷詩、折レ花逢二——一、寄與隴頭人、江南無二別信一、聊贈一枝春」

【驛亭】（エキテイ）宿驛をいふ、齊書の晉安王子懋傳に「行視二——一、こまた宿驛にて人をとめる「タテモノ」杜甫の秦州雜

詩に「今日明人眼臨池好——」釋名に「亭停也道路所舍人停集也」

【驛馬】宿驛にて旅客の用に供ふる馬、史記鄭當時傳に「毎五日洗沐常置——長安諸郊請謝賓客」

【易林】十六卷、漢の焦貢（字ハ延壽）撰す、易の一卦を以て演して六十四卦とし、各繇詞（判斷ノ詞）を繫く、その文古奥、トふところも亦驗あり、然れども漢易の流れて術數と爲りしは延壽より始まる、簡明目錄にこの書を子部の術數類に入れたるは當れり、

【噦噫噎噁】噦は「シャクリ」噫は「オクビ」噎は「クサメ」噁は欬に同じ「セキ」禮記の内則に「不敢——」

【謁者】秦の世、天子の宮中に在りて賓客を掌る官、史記始皇紀に見ゆ、謁は名刺なり、

【曰若稽古三萬言】經義を解くことの煩妄に失するをいふ、漢藝文志の師古の注に「桓譚新論云秦近君能說堯典篇目兩字之說至十餘萬言但說——」

【越絕書】十五卷、漢の袁康撰す、その友吳平の同定に係る、隋志に子貢の作と稱するは謬なり、原本二十五篇、今五篇を佚す、その紀事、吳越春秋と相出入す、而かも文章の博奥偉麗は趙煜（吳越春秋の撰者）の及ばざる所ろなり、

【噎ニ因リテ食ヲ廢ス】（因）噎廢（食）噎は食物の「ノンド」に塞がり「ムセブ」それによりて食事を「ヤメル」以て少しの障礙によりて大切なる事を廢するに喩ふ、淮南子說林訓に「有以噎死者而禁天下之食則悖矣」

【悅服】心から喜びて服從する、書經に「大賚于四海而萬姓——」禮記に「近者——而遠者懷之」此大學之道也」

【悅豫】「ヨロコブ」後漢何敞傳に「恩澤下暢黎庶——、上天聰明必有立應」

【閱歷】月日の「タツ」をいふ、舊唐書の吐蕃傳に「——三旬」

【越王怒蛙ニ式ス】本編の（怒蛙ニ）を見よ、

【煙霞】「ケムリ」「モヤ」唐の德宗の重陽日即事詩に「令節曉澄霽四郊——空方千の中秋月詩に「涼宵——外、三五玉蟾秋」

【鴛鴦繡出君ノ看ルニ從ス】祕訣を人に授くるを惜む義、元の元好問の論詩絕句に「鴛鴦繡出從君看莫把金鍼度與人」

【園圃】連文釋義に「有藩曰園有墻曰圃」園は草木を種うるところ圃に禽獸を畜ふところ、孟子の滕文公下に「——汙池沛澤多而禽獸至」

【延引】「ヒキノベル」通鑑唐の懿宗紀に「——歲月賊勢益張」

【霪雨】「ケムリ」が「コメテ」靜にふる雨、臥遊錄に「彭城佳山水魚蟹寓居去江無十步風濤——曉夕百變江南諸山在几席」杜牧の江南春に「南朝四百八十寺多少樓臺——中」

【煙雲】「ケムリ」「クモ」林泉高致に「春山——連綿人欣欣、夏山嘉木繁陰人坦坦」唐高宗の謁大慈恩寺詩に「蒼廊——表超然物外心」

【淵海】「フチ」と「ウミ」と、宋書武帝紀に「若涉——罔知攸濟」また物の極めて深く大いなるに喩ふ、抱朴子に「五經爲道義之——子書爲增深之河流」

【沿革】始より今に至るまで相沿ひて動かざるを沿といひ、始め作したる事を今改むるを革といふ「ツツリカハリ柳宗元の陳京行狀に見ゆ、

【偃革】（革ヲ偃ス）戰やみて甲冑を藏めて用ひざる義、偃武に同じ、史記高祖紀に「般事已畢武王——爲」

【猿鶴】「マシラ」と「ツル」と、抱朴子に「周穆王南征一軍盡化君子爲——、小人爲沙蟲」宋史石揚休傳に「平居養——玩圖書吟咏自適與家人言未嘗及朝廷事」

【圓機活法】圓機詩學活法全書の略、二十四卷、明の王世貞校と題す、天文時令節序以下四十四門に大別し更に各部門を細分し故事成語を類聚し作詩者の便覽に供す、我が國にも盛行し數種の翻刻本あり、

【燕許大手筆】大文章をいふ、唐書蘇頲傳に「頲自景龍後與張說以文章顯稱望略等故時號——蘇は許國公に封ぜられ張は燕國公に封ぜらる、故にいふ、

【鉛華】婦女の顏に塗る「オシロイ」康熙字典に「鉛粉亦名胡粉卽——也」鄭史の詩に「最愛——薄薄妝」

【燕語】「ツバクラメ」の雌雄語るが如く鳴くをいふ、杜甫の發潭州詩に「岸花飛送客檣燕語留人」王涯の閨人贈遠詩に「鶯啼綠樹深——雕梁晚」

【鹽菜】「シホ」と野菜と、禮記の樂記の「大羹不和」の注に「不調以——」後漢書和熹鄧皇后紀に「晝夜號泣終三年不食——、憔悴毀容親人不識之」

【豔妻】美しき妻なり、詩經小雅十月之交篇に「——煽方處」疏に「晉秦ノ閒ニ美色ヲ豔トイフ」ここの

――は袞姒を斥す、

【煙草】（エンソウ）「ケムリ」を帯びたる「クサ」李益の送人歸岳陽詩に「――連天楓樹齊、岳陽歸路子規啼」また「タバコ」をいふ、乘燭譚に「沈穆ガ本草洞詮九巻ニ、煙草一名相思草、言人食之則時時思想不能離也ト、マタ四五十年前ニ朝鮮人ノ撰スル芝峰類說十九巻ニ淡婆姑草名、亦號南靈草、近歲始出倭國ニ云云、或傳南蠻國有女人淡婆姑者、患痰疾、積年服此草得瘥故名ト（中略）コレヨリ淡婆姑ノ名、世ニ弘マレリ、近年清人陳淏子ガ花鏡一套東來シ、金絲烟、擡不歸等ノ名サマザマノセ置ケリ、擡不歸モ「タバコ」の唐音トミエタリ（中略）マタ唐詩紀ノ内、李白ガ詩ニ、想思如烟草、歷亂無条理ト云ヘリ、相思草ト名ヅクルハ、コレヨリ出ヅルニヤ、偶然ニ符合セルニヤ、李ガ詩ハ本ヨリ烟草トノコトナリ」

【怨恫】（エンドウ）「ウラミ」て人を「ソシル」漢書禮樂志に「周道始缺――之詩起」

【燕子】（エンシ）「ツバクラメ」玄鳥また乙鳥ともいふ、戴叔倫の蘇溪亭詩に「――不歸春事晩、一汀煙雨杏花寒」本編の（――樓）を參看せよ、

【沿習】（エンシュウ）古よりの「ナラハセ」避暑錄話に「士大夫家祭多不同、蓋五方風俗――、與其家法所從來、各異」

【掩襲】（エンシュウ）敵の不意に乘じて襲ひ擊つ義、晉書羊祜傳に「祜每與吳人交兵、不爲――之計」

【延壽】（エンジュ）「ナガイキ」蘇軾の與李公擇書に「口體之欲、何窮之有、每加節儉、亦是惜福――之道」

【淵靜】（エンセイ）「フチ」の靜かなる義、柳貫の答吳立夫詩に「玉全遵訓足――得藏珍」また淵の靜かなる如く、極めて「モノシヅカ」なる義、莊子の天地篇に「無爲而萬物化、――而百姓定」

【園蔬】（エンソ）「ハタケ」の「ヤサイ」後漢書吳祐傳に「自免歸、不復仕、躬灌――、以經書教授」

【猿猱】（エンドウ）「サル」猱は一音ジウ「テナガザル」李白の蜀道難に「――欲度愁攀援」

【園池】（エンチ）史記王翦傳に「請美田宅――甚衆」宋書竟陵王誕傳に「――之美、冠于一時」

【猿鳥】（エンチョウ）「マシラ」と「トリ」と、王融の巫山高曲に「烟雲作卷舒、――時斷續」吳筠の遊廬山五老峰詩に「雲外聽――烟中見杉松」

【炎天】（エンテン）南方の天をいふ、淮南子に「南方曰――」呂覽の有始にも出づ、また夏の熱き「ソラ」

【延登】（エントウ）初めて仕宦せし時、天子が其の人を延き入れ、殿に登らしめ親ら詔せらるるをいふ、漢書五行志に「――受策」

【煙波】（エンパ）煙の「コメタル、ナミ」崔顥の黃鶴樓詩に「日暮鄉關何處是――江上使人愁」劉禹錫の淮陰行に「――與春草千里同一色」

【偃武】（エンブ）（武ヲ偃ス）戰亂すでに平ぎ、武器を藏めて用ひざるなり、世の治平になりし義、書經に「――修文」

【園圃】（エンポ）・連文釋義に「樹ヲ種ウルヲ園トイヒ、菜ヲ種ウルヲ圃トイフ」周禮冢宰の「以九職任萬民、二曰――」の注には「果蓏ヲ樹ウルヲ圃トイフ、園ハ其ノ樊（まがき）ナリ」とあり、

【緣木求魚】（エンボクキュウギョ）決して得べからざるに喩ふ、孟子梁惠王上篇に見ゆ（木ニ緣リ）を見よ、

【煙霧】（エンム）「ケムリ」「キリ」楊炯の青苔賦に「肅兮若遠山之松柏、汎兮若平郊之――」温庭筠の白鶴觀詩に「仙境日月外、帝鄉――中」

【猿鳴】（エンメイ）猿聲に同じ、水經の注に「巴東三峽巫峽長、――三聲淚沾裳」陸游の詩に「三聲最怕聽――」

【烟滅】（エンメツ）「ケムリ」の如く消え滅ぶる義、文選の陳琳の檄に「隨波漂流、與烟俱滅者亦甚衆多」

【鴈茂】（エンモ）戎なり、本編の（十二支）を見よ、

オ ヲ

【嘔啞】（オウア）音樂などの「ヤカマシキ」をいふ、杜牧の阿房宮賦に「管絃――多於市人之言語」

【歐九】（オウキュウ）歐陽修の詣行は第九に當る、故にいふ、劉克莊の詩に「――平生許可難」劉原父は「――不讀書」と譏れり、

【謳吟】（オウギン）天子の德を稱詠して心これに歸嚮する義、謳歌に同じ、漢書敍傳に「民皆――思漢」また廣く歌を「ウタフ」をいふ、蘇軾の潮州韓文公廟碑に「鈞天無人帝悲傷、――下招遣巫陽」

【應酬】（オウシュウ）人より寄せ來りし書に答ふるをいふ、陸游の詩に「老來萬事嬾、不獨廢――」

【區脫】 次條を見よ、

【區脫】 胡人、境上に土室を作り、漢人を伺ふもの、史記匈奴傳に「東胡與匈奴閒、中有棄地、莫居千餘里、各居其邊爲——」漢書蘇武傳に「區脫捕得雲中生口」區區通ず、

【鷗鳥】 「カモメ」魏志高柔傳の注に「機心萌則——不下」列子に「海上人好鷗、每旦之海上從——遊、——之至者百數、其父曰、取來、吾玩之、明日之海上、——舞而不下」江淹の詩に「物我俱忘懷、可以狎——」本編の（鷗）を見よ、

【甌天】 「カメ」の中を天地とする義にて、見る所の狹小なるをいふ、黃庭堅の詩に「醯雞守——」本編の（甕裡ノ）を見よ、

【甕頭】 始めて熟せし酒をいふ、法書要錄に「河北稱——、謂初熟酒也」劉禹錫の酬樂天偶題酒甕見寄詩に「門外紅塵人自走、——新酒我初開」

【鷗盟】 鷗の閑に沙洲に群れ居る如く、浮世の外の會盟をいふ、朱熹の詩に「浩蕩——久未寒、征驂聊此駐江干」葉隆の詩に「有幸——君與我、無情鶴髮古猶今」

【歐冶】 古の名高き鍛工の名、越絕書に「吳有干將、越有——」

また韓非子顯學に歐を區に作る、同じ、

【鷗鷺】 「カモメ」と「サギ」と、白居易の閑居自適詩に「波閉戲魚籃、風靜下——溫庭筠の西江上送漁父詩に「不見水雲曉有夢、偶隨——便成家」寅庚の漁隱詩に「不羨魚蝦利、惟尋——盟」

【屋稅】 家屋にかかる稅、宋史李處耘傳に「奏減城中居民——民皆悅服」

【億測】 「オシハカル」後漢書李通傳論の字面、億度に同じ、

【億度】 「オシハカル」唐書江夏王道宗傳に「不宜輕——使自猜危」

【億兆】 すべての國民をいふ、晉書周嵩傳に「上爲宗廟無窮之計下收——元元之命」また數の極めて多きをいふ、戰國策に「蘇秦說楚威王曰、從親則諸侯割地以事楚、橫合則楚割地以事秦、此兩策、相去有——之數、大王何居焉」

【屋漏】 爾雅釋宮に「西北隅謂之——」（本編の屋漏の解に西南隅とせしは誤植）詩經大雅に「尙不愧于——」箋に「漏ハ隱ナリ」また「ヤネ」の漏る義、南史江子一傳に「——在上、知之在下」

【敎ハ學ノ半】 本編の（敎ハ）を見よ、

【音韻】 本編の（韻）（二百六韻）を見よ、

【恩讎分明】 恩を受けたる者には恩を以て報い、讎ある者には讎を以て報ゆることを一一「ハッキリ」とするをいふ、呂氏春秋訓に「——此四字非有道者之言也」

【溫習】 復習なり、溫は燖溫（アタタム）の義、袁凱の詩に「朝向春園恣游衍、眼踏雪痕同——」

力

【解顏】 本編の（顏ヲ解ク）を見よ、

【蟹眼】 茶の湯の沸き立つをいふ、蔡襄の茶錄に「候湯最難、未熟則沫浮、過熟則茶沈、前世謂之——者過熟湯也、又魚眼ともいふ、蘇軾の煎茶詩に「——已過魚眼生、颼颼欲作松風鳴」

【涯岸】 水の「キシ」通典に「漲海無——」

【階級】 「キザハシ」の「ダン」をいふ、轉じて官位の等級をいふ、吳志の顧譚傳に「異尊卑之禮、使高下有差、——逾邈」

【海闊天空】 心の廣く大いなるに喩へていふ、本編の（海闊クシテ）を見よ、

【孩子】 二三歲の幼兒をいふ、墨子明鬼篇に「殺絕誅——」本編の（咳嬰）を參看せよ、

【孩兒】 前條に同じ、書經康誥の「若保赤子」の注に「赤子ハ——」

【涯涘】 「ミヅギハ」涘も水の厓なり、三輔黃圖に「照燭——」また「カギリ」の義に用ふ、韓愈の柳子厚墓誌銘に「務記覽爲詞章、汎濫停蓄爲深博無——」涯岸に同じ、

【芥舟】 「チリノフネ」莊子に「覆杯水於坳堂之上、則芥

【蟹行】 「カニノユク」をいふ（郭索）を見よ、

【蟹螯】 蟹の「ハサミ」その中の肉美味なり、晉書の畢卓傳に「卓嘗謂人曰、得酒滿數百斛船、四時甘味、置兩頭、右手持酒杯、左手持——、拍浮酒船中、便足了一生矣」

【海嶽】 恩の高く且つ深さに喩ふ、羅隱の詩に「恩如——何時報恨似煙花觸處生」

【凱樂】 「カチイクサ」の時、奏する音樂、周禮大司馬に

爲之舟、置杯焉則膠、水淺而舟大也」一解に芥は「カラシナ」の子、

【開春】「ハツハル」纂要に「初春曰――也」楚辭九章に「――發歲兮」

【階前盈尺之地】「キザハシ」の前の一尺ばかりの場所、貴人の前に出る義、李白の與韓荊州書に「今君侯何惜――――――不使白揚眉吐氣激昂青雲耶」

【階前萬里】地方の政事の得失は、遠方の處にても、すべて天子の知るところとなり、臣の上を欺くを得ざるをいふ、唐書宣帝紀に「宣宗以于延陵爲建州刺史、入謝、上曰、去京師幾何、曰八千里、上曰卿到彼善惡睽皆知之、勿謂其遠、此階前卽萬里也」――――はもと管子の語、萬里も近く階前に在るが如く明知するをいふ、

【解嘲】人の嘲笑（アザケリ、ワラフ）するを辨解する義、漢の揚雄の作りし文章の名、續文章軌範に載す、その序に「人有嘲雄以玄之尙白、雄解之、號曰――」

【街談巷語】市中の「ツマラヌ」「ハナシ」をいふ、漢書藝文志に「小說家者流蓋出於稗官、――――道聽塗說者之所造也」また曹植の與楊修書には「街談巷說、必有可采」

【階梯】「ハシゴダン」易の繫辭に「亂之所生也、則言語以爲階」の疏に「階梯也、言亂之所生、則由言語以爲――也」すべて事の起る基となる義に用ふ、

【海土】海內の土地をいふ、說苑貴德篇に「武王以積德有――」に

【崖密】「ガケ」の巢中に釀せる蜂蜜、演繁露に「――者蜂之釀蜜、卽峻崖懸壁、其窠不可攀取、人伺其窠蜜成熟、用長杆繫木桶、度可相及、則以杆刺窠、窠破蜜注桶中、」南方草木狀に「楊梅青時極酸、旣紅味如――」

【炕】正字通に「北地煖牀曰――」北盟會編に「環爲土屋牀、燃火其下、相與寢食起居其上、謂之――以取其煖」

【夏雨】「ナツノアメ」皎然の詩に「前林――歇爲我生涼風」

【行雲流水】一定せし形質なく、種種に移り行きて滯ることなきに喩ふ、宋史蘇軾傳に「――――初無定質」

【高歌】大聲にて歌ふ、舊唐書裴度傳に「――放言以詩酒琴書自樂」

【蠻街】蠻夷の邸のある處、漢書甘延壽陳湯傳に「縣頭――蠻夷邸閣」注に「――街名、蠻夷ノ邸、此ノ街ニ在ルナリ、邸ハ今ノ鴻臚客館ノ若キナリ」棄は亦棄に作る

【慷慨死ニ赴クハ易シ】憤を發して死に就くは容易なりとの義、宋の謝枋得（疊山）の却聘書に「司馬子長有言、人莫不有一死、或重於泰山、或輕於鴻毛、先民程子を引す、語は近思錄に出づ、廣其說曰、慷慨赴死易、從容就義難云云」

【綱鑑易知錄】九十二卷、清の吳乘權（宇ハ楚材）撰す、別に朱國標の編せし明鑑易知錄十五卷あり、今之を合刻して一部と爲す、この書は編年體の歷史にして、通鑑の煩を刪り、歷代の事實を知り易からしめんために作る、和版あり、

【康熙字典】四十二卷、清の聖祖の康熙五十五年に成る、大學士張玉書等勅を奉じて撰す、凡そ十二集、一百十九部に分つ、簡明目錄に「六書ニ根據シ、百氏ヲ蒐羅シ、字毎ニ其ノ聲音訓詁ヲ詳ニス、皆今ノ韻ヲ先ニシ、古ノ韻ヲ後ニシ、正義ヲ先ニシ旁義ヲ後ニス、又備サニ古文ヲ載セ、以テ其ノ本ニ遡リ、兼ネテ俗體ヲ列シ、以テソノ譌ヲ訂ス、義例精密、考證賅洽、說文玉篇ヨリ以下歷代ノ字書、此レ其ノ總匯ナリ」

【皐陶稷契何ノ書ヲカ讀ムベキ】皐陶・夔・稷・契の四人は堯帝の時の名臣なり、この時文籍未だ備はらずして讀むべき書あらず、されば人は讀書のみに依賴すべきにあらざるをいふ、宋史に「參政趙抃、無如王安石何、惟稱其苦苦而已、安石折抃曰、君輩坐不讀書耳、抃曰、皐夔稷契何書可讀、安石亦不能對」

【高科】高尙なる試驗の科をいふ、舊唐書元載傳に「天寶初下詔求明莊老文列四子之學者、載策入――」

【膏火】「アブラノヒ」莊子に「山木自寇也、――自煎也」蘇軾の詩に「十年讀易費――、盡日吟詩愁肺肝」

【講貫】業を習ふ義、講習に同じ、國語に「士朝而受業、晝而――爾雅釋詁に「貫習也」

【皓月】明かに輝る月、聞見前錄に「――夜盈軒」李白の友人會宿詩に「良宵宜清談、――未能寢」

【膏血】人の「アブラ」と血と、唐書陸贄傳に見ゆ、宋史王禹偁傳に「竭生民――、以奉無用之土木」

【高梧】「セイノタカキ、アヲギリ」後漢書馬融傳に「棲鳳凰于――、宿鵷鶵于西園」

【巧詐ハ拙誠ニ如カズ】（巧詐不如拙誠）巧に詐るは、拙くとも誠なるに及ばずとの義、魏志劉曄傳に引ける諺、

【香山】舊唐書白居易傳に「會昌中以刑部尙書致仕、與――僧如滿結香火社、每肩輿往來、白衣鳩杖自稱」

——居士ニ本編の（香爐峰）を參看せよ、

【仰止】 瞻望なり、仰ぎ慕ふ義にも用ふ、詩經小雅車舝篇に「高山——、景行行止」止は助辭なり、景行は大道なり、

【皓齒】 白く美くしき齒、韓非子に「曼理——悅レ情而招レ精」司馬相如の美人賦に「雲髮豐豔、蛾眉——」

【考信錄】 三十六卷、考信錄十卷、清の崔述（字ハ武承、東壁ト號ス、直隸省大名ノ人、嘉慶二十一年卒ス、年七十七）撰す、古代儒教の史論なり、——は前錄四卷、正錄二十卷、後錄十二卷に分つ、前錄には——提要及び補上古——あり、正錄には唐虞夏商周の事を載す、文武周公孔子の事は、最も詳述せり、後錄には周代政事の盛衰及び制度等を論じ、孔子の門人の事、孟子の傳記等を述ぶ、翼錄は——の羽翼たるべき考證を述ぶ、引據洽博儒學に補益するもの多しとす、自序に「居今日、欲レ考二唐虞三代之事一、是非必折レ衷於孔孟一、異僞必取レ信於詩書一、而聖人之眞可レ見、聖人之道可レ見也」と以て書に名づけたる所以を知るべし、

【香車】 「スグレテ、ウツクシキ」車、李邕の春賦に「跨二浮雲之資騎一、頓二流水之一——」陳嘉元の上元夜詩に「寶馬金爲レ絡——玉爲レ輪」香車は天子の車をいふ、

【好爵】 「ヨキクラヰ」易の中孚の九二に「我有二——一、吾與レ爾靡レ之」

【皓首】 白首に同じ、李陵の答二蘇武一書に「丁年奉レ使、——而歸」

【篙手】 舟子をいふ、篙は舟を行る「サヲ」眞璞に「海壖呼——一爲二長年一、按杜詩長年三老歌聲裏、白晝擺レ錢高浪中、古今詩話謂川陝以二——一爲二三長老一、蓋推二一船之最尊者一言レ之、篙子篙工皆同レ、本編の（篙師）を見よ、

【香雪】 香ある雪、花に喩へていふ、韓偓の白菊詩に「正憐——飛千片、忽訝殘紅聚二一叢一、黃庚の春寒詩に「怪得曉來風力勁、滿階——落梨花」

【交睫】 （睫ヲ交フ）睫は「マツゲ」——は寐ぬる義、漢書爰盎傳に「盎曰、陛下居代時、太后嘗病三年、陛下不——解レ衣」

【巧智】 巧みに「スグレタル」智識、莊子天道篇に「——神聖之人」

【交質】 （質ヲ交フ）互に人質を取りかはす義、左傳隱二年に「周鄭——」

【高枕】 本編の（枕ヲ高クシ）を見よ、

【好鳥】 「ヨキネノトリ」吳均の與二朱元思一書に「泉水激石冷冷作レ響、——相鳴、嚶嚶成レ韻」唐庚の醉眠詩に「餘花猶可レ醉、——不レ妨レ眠」

【庶寧】 患難なく「ココロヤスシ」書經洪範に「九五福、一曰レ壽、二曰レ富、三曰——、四曰攸レ好レ德、五曰レ考レ終レ命」易林に「冠帶垂衣、天下——」

【高年】 高壽に同じ、漢書武帝紀に「予レ鄉二里一先耆艾、奉レ——一古之道也」

【衡茅】 衡門（カブキモン）茅屋なり、貧者の住居をいふ、陶潛の詩に「衡レ門——下」白居易の詩に「吾亦忘二青雲一——足レ容レ膝」

【好文木】 梅の異名、晉の起居注に「晉武好レ文、則梅開、廢レ學則梅不レ開」

【叉雲】 「ナツノクモ」宣和書譜に「釋懷素觀——隨レ風、頓悟筆意、自謂得二草書三昧一」本編の（春水滿）を見よ、

【商名】 高さ名、後漢書嚴光傳に「少有——」——、與二光武一同遊學」

【行餘】 人の道を行ひし餘力をいふ、論語學而篇に「子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛レ衆而親レ仁、行有レ餘レ力、則以學レ文」

【康樂】 「ヤスク、タノシム」周禮小行人に「——和親」

【嫦和】 嫦一音コウ和睦なり、互に怨をすてて和親しむ義、嫦一に講に作る、說文に「講ハ和解ナリ」史記平原君虞卿傳に「不レ如發二重使一而爲レ嫦」注に「和ヲ求ムルヲ嫦トイフ」唐書に「講和以休息」胡詮の上二高宗封事一に「槍曰虜可二講和一、近亦曰可レ和」

【荷葉】 「ハチスノハ」王勃の夏日登二韓城樓一序に「——滋而曉露繁、竹院靜而炎氣息」高適の漁父歌に「箬皮笠子——衣、心無二所營守一釣磯」

【夏屋】 大いなる家屋、詩經秦風權輿篇に「——渠渠」夏は大なり、渠渠は深廣の貌、

【牙牙】 女子の「カハユラシキ」聲、司空圖の文に「女則——學レ語、元好問の詩に「——嬌語總堪レ誇」

【呵呵大笑】 大に笑ふ、晉書石季龍載記に「直言呵呵、便畢食看レ尸、大笑而去」傳燈錄にも——の語見ゆ、

【鵞眼】 錢の異名、宋書顏竣傳に見ゆ、

【嘉氣】 「メデタキ」氣、李商隱の文に「歡聲雷動、——雲高」

【家畜】 家に飼ふ動物、犬牛の類、大學に「伐レ冰之家、不レ畜二牛羊一」

【河魚之疾】 腹の疾をいふ、左傳宣十二年に「河魚腹疾奈何」河魚の腐るは內よりして外に及ぶ、故に喩ふ、

【閣ヲ閉デテ只聽ク朝暮ノ鼓】（閉閣只聽朝暮鼓）（樓ニ上リテ）を見よ、

【閣下】「タカドノ」の「モト」漢書嚴延年傳に「免冠頓首——」「良久」また大臣の尊稱、因話錄に「古者三公開閣、那守比古諸侯亦有閣、故皆稱——」

【鶴書】「メシブミ」鶴頭書ともいふ、文選李善の注に「——ハ招版ノ用フル所ロ、漢ニ在リテハ之ヲ尺一簡トイフ、鶴頭ニ髣髴タリ故ニ稱ス」孔稚圭の北山移文に「鳴騶入谷、——赴隴」張九齡の詩に「聖朝嚴穴選、應待——徵」鶴版また鶴簡ともいふ、

【學生】生徒なり、後漢書靈帝紀に「光和二年始置鴻都門——」

【閣道】「カケハシ」の如く高くつくりし道、史記秦始皇紀に「周馳爲——自殿下、直抵南山」岑參の送郭僕射節制劒南詩に「劒門乘險過——踏空行」

【學長】學生の長をいふ、能改齋漫錄に「眞宗乃命張耆爲——」

【鶴髮】白髮をいふ、庾信の竹杖賦に「——雞皮、蓬頭歷齒、歐陽修の詩に「錦衣白日還家樂、——高堂獻壽時」

【鶴眠】李白の尋雍尊師隱居詩に「花陂青牛臥、松高——白——」

【格外】例外なり「ナミハヅレ」南史王綸之傳に「——之官、便今日爲重」

【鶴脛】「ツルノハギ」皮日休の小松詩に「葉健似虯鬚、枝脆如——」本編の（鳧ノ脛）を見よ、

【格言】法則とすべき言、法言に同じ、三國志崔季珪傳に「此周孔之——」また孔子家語五儀篇に「口不吐訓ヲ格之言ニ」

【格五】圍棊の類「ゴモクナラベ」漢書に「吾丘壽王以——待詔」

【鶴書】「メシブミ」鶴頭書ともいふ、文選李善の注に「——ハ招版ノ用フル所ロ、漢ニ在リテハ之ヲ尺一簡トイフ、鶴頭ニ髣髴タリ故ニ稱ス」孔稚圭の北山移文に「鳴騶入谷、——赴隴」張九齡の詩に「聖朝嚴穴選、應待——徵」鶴版また鶴簡ともいふ、

【學生】生徒なり、後漢書靈帝紀に「光和二年始置鴻都門——」

【閣道】「カケハシ」の如く高くつくりし道、史記秦始皇紀に「周馳爲——自殿下、直抵南山」岑參の送郭僕射節制劒南詩に「劒門乘險過——踏空行」

【學長】學生の長をいふ、能改齋漫錄に「眞宗乃命張耆爲——」

【鶴髮】白髮をいふ、庾信の竹杖賦に「——雞皮、蓬頭歷齒、歐陽修の詩に「錦衣白日還家樂、——高堂獻壽時」

【鶴眠】李白の尋雍尊師隱居詩に「花陂青牛臥、松高——白——」

【鶴鳴】「ツルノナキゴエ」墨子に「舍子問曰、多言有益乎、對曰、蝦蟇日夜鳴、口乾而人不聽之、鶴雖時夜鳴、而天下振動、多言何益乎」張籍の詩に「月出溪路靜、——雲樹深」本編の（鶴九皐）を見よ、

【閣老】大臣をいふ、唐は中書舍人、また給事中をいひ、明は宰相をいふ、國史補に「宰相相呼爲堂老、兩省相呼爲閣老」唐書楊綰傳に「故事舍人年八者爲——」

【鶴唳】鶴の「ナキゴエ」晉書陸機傳に「嘆曰、華亭——豈可復聞乎」本編の（風聲——）を見よ、

【雅悵】「ミヤビナル」心、李白の春夜宴從弟桃園序に「不有佳作、何申——」

【夏畦】夏の炎天に畦を治むるもの、極めて苦勞なる義、孟子滕文公下に見ゆ、本編の（肩ヲ脅カス）を見よ、

【雅潔】「ミヤビテ」「イサギヨシ」元史載表元傳に「其文清深——化陳慤爲神奇」

【雅言】雅は常なり、常に口にせる語、論語述而篇に「子所——詩書執禮、皆——也」

【家公】己の父をいふ、易林に「卒成禍亂、災及——」

【佳作】詩文のよく出來たるをいふ、北史馮熙傳に「賈元壽撰北芒寺碑、孝文稱爲——」

【下視】高き處より下を視る、舊唐書王方慶傳に「山徑危險、石路曲狹、上嗑跬目、——寒心」魏徵の詩に「側聆天上語、——飛鳥背」

【賈子】一に新書ともいふ、十卷、漢の賈誼撰す、原本五十八篇ありしも、散佚して傳はらず、後の好事者、誼の本傳に載する所ろを取り、その文を離析し、以て五十八篇の數に足ししならん、朱熹曰く、「賈誼新書、除了漢書中所載、餘亦難得粹者、看來只是賈誼一雜記稿耳」本編の（賈誼）を參看せよ、

【佳人】美人をいふ、淮南子に「——不同體、美人不同面、而皆悅於目」蘇軾の薄命——詩に「自古——多命薄、閉門春盡楊花落」

【下情】下民の「ヤウス」管子明法篇に見ゆ、

【家常飯】俗にいふ茶漬飯といふ如し、造作なき義に喩ふ、獨醒雜志に「范文正公云、——好喫」また五燈會元に「佛祖言句、如家常茶飯」

【家塾】古者二十五家を閭とし、同じく一巷に住す、閭門の側の堂を塾といひ、閭中の道德ある者を左右兩塾の師とし、朝夕出入に敎を受けしむ、禮記學記に「古之敎者、家有塾」

【嘉瑞】「メデタキ」「キザシ」吉兆なり、春秋の「西狩獲麟」の注に「麟者仁獸、聖王之——也」

【風ヲ係ギ影ヲ捕フ】（係風捕影）「ツカマヘドコロ」なく到底得べからざるに喩ふ、係は繋に同じ、漢書郊祀志に「求レ之瀲瀲如レレ——、終不可得」

【假設】「タトヒ」と讀む、現在に有る事にてはなけれども「假ニ設ケテイフ」辭なり、漢書賈誼傳に「——陛下居二齊桓之處一」

【家屬】家内の人人をいふ、史記盧綰傳に「燕王詐論二他人一以脫二張勝一——一」

【贏得】（——）を見よ、

【家長】一家の長をいふ、墨子天志篇に「若二處レ家得レ罪於一レ、猶有二隣家所一レ避逃之一」家主に同じ、

【葛衣】「クズカタビラ」史記の自序に「夏日——冬日鹿裘」白居易の夏日作に「——疎且單、紗帽輕復寬」

【褐寬博】褐は毛布、寬博は寬大の衣、賤民の服、よりて下賤なる者をいふ、孟子公孫丑上篇に「不レ受二於——一、亦不レ受二於萬乘之君一」視レ刺二萬乘之君一、若レ刺二褐夫一」

【竭蹶】力盡きて「ツマヅク」なり、荀子議兵篇に「遽者——而趨レ之」

【褐夫】毛布を被る賤しき者（褐寬博）を見よ、

【河圖】本篇の（洛書）を見よ、

【河豚】「フグ」宋史張根傳に「性至孝、母嗜二河豚及蟹一、終、根不二復食一」輟耕錄に「水之鹹淡相交處、產——、——魚類也（中略）味極佳、煮治不レ精則能殺レ人、浙西惟江陰人尤珍レ之」

【假設】「タトヒ」と讀む、現在に有る事にてはなければ

【巖扃】自然の巖石にてそのままにつくりたる門戸、巖扉に同じ、杜甫の詩に「瑞芝産二廟柱一好鳥鳴二門扃一」

【寒暄】「サムサ」と「アタタカサ」と、轉じて時候見舞をいふ（寒溫）を見よ、

【含胡】明かならざる義、唐書顏杲卿傳に「安祿山斷二其舌一、曰復能罵否杲卿——而絕」胡一に糊に作る、本編の（含糊）を見よ、

【雨胡】大いなる宮音をいふ、沈鬱して發越せざるなり、蘇軾の石鐘山記に、石聲を形容して「南聲——、北音清越」清越は角音なり、越は發揚なり、

【寒江】「サムキ冬の江、柳宗元の江雪詩に「孤舟蓑笠翁、獨釣——雪」

【顏厚】「アツカマシク」恥を知らざる義、書經五子之歌に「——有二忸怩一」

【巖際】「イハ」の「キハ」水經の注に「魏土地記曰、梁山北有二龍門山一、大禹所レ鑿通、孟津河口、廣八十步、——鐫跡、遺功尚存」

【岸幘】岸は額を露はすをいふ、幘は巾なり、說文に「髮有二巾曰一レ幘」蔡邕の獨斷に「幘ハ古者卑賤ニシテ事ヲ執リ冠セザル者ノ服スル所ロナリ云云」——は巾にて髻を覆ふのみにて、額を「アラハス」をいふ、後漢書馬援傳に「帝——見二帝」晉書謝奕傳に「——笑詠、無異二常日一」白居易の夏日閑放詩に「褰二裳復——一、閒傲得二自恣一」

【雁山】雁門山をいふ、江淹の別賦に「或乃邊郡未和、負レ羽從レ軍、遠水無レ極、——參レ雲」（雁門）を見よ、

【寒山寺】江蘇省蘇州府に在る寺の名、唐の張繼の詩あり、本編の（絕句）を見よ、

【寒山拾得】天台山の國清寺の豐干禪師の弟子にて、唐の憲宗の時の人、本編の（饒舌）を見よ、

【岸芷】岸に生ずる「ニホヒグサ」芷は藥草の一種「ヨロヒグサ」其の根は、肌膚の「ツヤ」をよくする料とす、李東陽の對鷗閣賦に「若乃——洲蘭灌蓼汀蘋、杞柳橿檉而落蔭、藥荷的歷而敷芳」

【雁字】雁の列を成して飛ぶこと文字の行を成すに似たり、故にいふ、蘇軾の虛飄飄詩に「層樓百尺橫二滄海一、——一行書二絳霄一」雁文に同じ、

【寒疾】「カゼヲヒク」孟子公孫丑下に「有レ——不レ可二以風一」

【艦上】「イクサブネ、ノウヘ」吳志周瑜傳に「建二旌旗一、蓋於二艦上一」

【寒蟬】秋の「セミ」禮記月令に「孟秋之月、涼風至、白露降、——鳴、鷹乃祭レ鳥、用始二行レ刑戮一」注に「——ハ寒蜩、蜺ヲ謂フ」蜺は「ツクツクバフシ」

【寒蟾】寒月に同じ、鄭谷の夕陽詩に「莫レ恨清光盡、——即照二空」本編の（蟾蜍）を見よ、

【寒素】「マヅシク」して質素なるをいふ、宋史劉熙古傳に「性淳謹雖二顯貴一、不レ改二——一」また晉の時、士を取る科名、晉書范喬傳に「喬凡一舉二孝廉一、八薦二公府一、再舉二清白異行一、又舉二一一無所レ就」

【眼中釘】「クギ」が眼中にあれば痛甚し以て甚しく害を爲す者に喩ふ、五代史趙在禮傳に「在禮在二宋州一、人尤苦レ之、已而罷去、宋人喜相謂曰、眼中拔レ釘、豈不樂哉」

【雁陣】雁の列を成して飛ぶをいふ、王勃の滕王閣序に「——驚寒、聲斷二衡陽之浦一」陸游の幽居詩に「風高——斜」

【明二居ル】（居閒）兩者の閒に入りて和解せしむるにいふ、史記滑稽傳に「賓客——レ、遂止俱解」

【堪忍】「タヘ、シノブ」書經湯誥の孔傳に「不レ能」——

唐之甚二魏書李拱之傳に「洪之志性慷慨、多レ所——」

【堪能】才能の「スグレタル」者をいふ、宋書明帝紀に「其文武——、隨二才銓一用」

【韓文】唐の韓愈の文をいふ、舊唐書の韓愈傳に「愈所レ爲文、務二反二近體一、抒二意立言一、自成二一家之新語一、後學之士、取爲二師法一、當時作者甚衆、無以過之、故世稱二韓文一焉」本編の（韓愈）を見よ、

【寒門】貧寒なる家、蜀志張裕傳に「家世——」

【雁門】史記秦本紀に「孝公二十四年、與レ晉戰二——一レ雁」また匈奴傳に「趙武靈王置二——郡一」漢書地理志に「——郡秦置、屬二幷州一」明一統志に「——山在二太原府代州北三十三里一、雁出二其門一、故名」——塞」

【巖溜】岩から落つる「シヅク」劉禹錫の詩に「幽鼯滴——」

【翰林博士】唐の官名、詔勅を草することを掌る、事物紀原に「唐太宗時名儒、時時召以草レ制、待詔、常於二北門一候レ進止一、號二北門學士一、明皇改曰二翰林待詔一、開元二十六年、乃爲——」

【堪輿】天地の總名なり、漢書藝文志五行家に「——金匱十四卷」あり、注に「許愼云フ、堪ハ天道ナリ、輿ハ地道ナリ」と、范汪の心箴に「茫茫——俯仰無レ垠」とあり、後世地理學者を——家といふは非なり、錢大昕の恒言錄に「古——家、卽今選擇家、近世乃以二相一レ宅圖一レ墓者當レ之」と、通俗編に「周禮疏引——經黃帝問二天老一事、似レ言二歷象之書一、史記日者傳以——爲二占家之一、世俗專

降、——鳴、鷹乃祭レ鳥、用始二行レ刑戮一」注に「——ハ寒蜩、蜺ヲ謂フ」蜺は「ツクツクバフシ」

【寒蟾】寒月に同じ、鄭谷の夕陽詩に「莫レ恨清光盡、——即照二空」本編の（蟾蜍）を見よ、

【寒素】「マヅシク」して質素なるをいふ、宋史劉熙古傳に「性淳謹雖二顯貴一、不レ改二——一」また晉の時、士を取る科名、晉書范喬傳に「喬凡一舉二孝廉一、八薦二公府一、再舉二清白異行一、又舉二一一無所レ就」

【眼中釘】「クギ」が眼中にあれば痛甚し以て甚しく害を爲す者に喩ふ、五代史趙在禮傳に「在禮在二宋州一、人尤苦レ之、已而罷去、宋人喜相謂曰、眼中拔レ釘、豈不樂哉」

【雁陣】雁の列を成して飛ぶをいふ、王勃の滕王閣序に「——驚寒、聲斷二衡陽之浦一」陸游の幽居詩に「風高——斜」

【明二居ル】（居閒）兩者の閒に入りて和解せしむるにいふ、史記滑稽傳に「賓客——レ、遂止俱解」

【堪忍】「タヘ、シノブ」書經湯誥の孔傳に「不レ能」——

唐之甚二魏書李拱之傳に「洪之志性慷慨、多レ所——」

【堪能】才能の「スグレタル」者をいふ、宋書明帝紀に「其文武——、隨二才銓一用」

【韓文】唐の韓愈の文をいふ、舊唐書の韓愈傳に「愈所レ爲文、務二反二近體一、抒二意立言一、自成二一家之新語一、後學之士、取爲二師法一、當時作者甚衆、無以過之、故世稱二韓文一焉」本編の（韓愈）を見よ、

【寒門】貧寒なる家、蜀志張裕傳に「家世——」

【雁門】史記秦本紀に「孝公二十四年、與レ晉戰二——一レ雁」また匈奴傳に「趙武靈王置二——郡一」漢書地理志に「——郡秦置、屬二幷州一」明一統志に「——山在二太原府代州北三十三里一、雁出二其門一、故名」——塞」

【巖溜】岩から落つる「シヅク」劉禹錫の詩に「幽鼯滴——」

【翰林博士】唐の官名、詔勅を草することを掌る、事物紀原に「唐太宗時名儒、時時召以草レ制、待詔、常於二北門一候レ進止一、號二北門學士一、明皇改曰二翰林待詔一、開元二十六年、乃爲——」

【堪輿】天地の總名なり、漢書藝文志五行家に「——金匱十四卷」あり、注に「許愼云フ、堪ハ天道ナリ、輿ハ地道ナリ」と、范汪の心箴に「茫茫——俯仰無レ垠」とあり、後世地理學者を——家といふは非なり、錢大昕の恒言錄に「古——家、卽今選擇家、近世乃以二相一レ宅圖一レ墓者當レ之」と、通俗編に「周禮疏引——經黃帝問二天老一事、似レ言二歷象之書一、史記日者傳以——爲二占家之一、世俗專

以談地理者爲——非矣」

【嘉樂】「ヨキホマレ」國語に「令聞——」

【雅量】「ミヤビヤカ」にして弘き「ココロ」晉書謝安傳に「——編急廡爲之、卽今俗呼爲龍具者」

【家累】妻子奴婢をいふ、晉書裴洋傳に「欲迎其——」

【嘉禮】「メデタキ」典禮、周禮大宗伯に「以——親萬民」宋史の禮史に「舊史以飮食昏冠賓射饗宴脤膰慶賀之禮爲——」嘉典に同じ、

【可憐】「カハユラシ」李白の清平調詩に「借問漢宮誰得似、——飛燕倚新粧」

【几案】「ツクエ」齊書劉善明傳に「質素不好聲色、所居茅齋、斧木而已、牀榻——不加刻削」劉長卿の詩に「靈鼉招過客」——無留事」

【喜雨】雨の降るを喜ぶ、穀梁傳に「雨云者——也、——者有志乎民者也」蘇軾の——亭記に「亭以雨名、志喜也」

【牛衣】「ウシノキモノ」漢書王章傳に「章爲諸生學長安、疾病、無被、臥——中、與妻訣涕泣、後爲京兆尹、欲上封事、妻曰、人當知足、獨不念——中涕泣時耶」注に「——編亂麻爲之、卽今俗呼爲龍具者」

【九逵】四方に通ずる都市の街路をいふ、說文に「逵ハ九達ノ道ナリ」何遜の詩に「門外黃塵沒——」

【牛驥同皁】牛驥は牛馬なり、皁は槽なり、賢人が不肖者と同一の「アッカヒ」にせらるるに喩ふ、鄒陽の獄中上梁王書に「使不羈之士與——同皁」文天祥の正氣歌に「牛驥同一卓」とあるは、牛と千里の馬とを同一の「アッカヒ」にする義に用ひたるなり、

【究竟】畢竟に同じ「ツマリ」備要に「如此——何如」

【久閱】久しく無沙汰する義、蜀志許靖傳に「——情愫、非筆墨所能寫陳」

【九經】天下を治むる大道九ッあるをいふ、中庸に「凡爲天下國家有——曰修身也、尊賢也、親親也、敬大臣也、體羣臣也、子庶民也、來百工也、柔遠人也、懷諸侯也」

また九ッの經書、小學紺珠に「——易・書・詩・周禮・儀禮・禮記・春秋・孝經・論語」本編の（——）を見よ、

【九賢】九人の賢人、明一統志に「——祠在河南府嵩縣治北、——宋周敦頤・程顥・程頤・邵雍・張載・司馬光・呂祖謙・朱子・元許衡」

また同書に「——祠在吉安府學明倫堂、祀宋歐陽修・楊邦乂・胡銓・楊萬里・周必大・胡夢昱・歐陽珣・歐陽守道・文天祥」

右の外饒州府治内に——堂、潮州府に——祠あり、ここに略す、

【窮愁】困窮して愁傷する義、史記の平原君虞卿傳の贊に「虞卿非————亦不能著書以自見於後世云」

【牛溲馬勃】牛溲は牛の溺（ユバリ）馬勃は馬屁菌（ウマノクソタケ）共に賤藥なり、一解に馬勃は馬糞なりと、本草綱目獸部に「牛溺、氣味辛溫無毒」菁草部に「馬勃、氣味辛平無毒、韓愈の進學解に「敗鼓之皮、倶收並蓄、待用無遺者、醫師之良也」

【宮室】「イヘ」易の繫辭に「上古穴居而野處、後世聖人易之以————云云」

【窮而後工】詩人は困窮すれば益その詩が巧みとなるをいふ、歐陽修の梅聖俞詩集序に「予聞世謂詩人少達而多窮、夫豈然哉、蓋世所傳詩者、多出於古窮人之辭也（中略）蓋愈窮則愈工、然則非詩之能窮人、殆窮者而後工也」

【窮愁】困窮して愁傷する義、史記の平原君虞卿傳の贊に「虞卿非————亦不能著書以自見於後世云」

【牛溲馬勃】牛溲は牛の溺（ユバリ）馬勃は馬屁菌（ウマノクソタケ）共に賤藥なり、一解に馬勃は馬糞なりと、本草綱目獸部に「牛溺、氣味辛溫無毒」菁草部に「馬勃、氣味辛平無毒、韓愈の進學解に「敗鼓之皮、倶收並蓄、待用無遺者、醫師之良也」

【宮室】「イヘ」易の繫辭に「上古穴居而野處、後世聖人易之以————云云」

【窮而後工】詩人は困窮すれば益その詩が巧みとなるをいふ、歐陽修の梅聖俞詩集序に「予聞世謂詩人少達而多窮、夫豈然哉、蓋世所傳詩者、多出於古窮人之辭也（中略）蓋愈窮則愈工、然則非詩之能窮人、殆窮者而後工也」

【窮途】「——ノ哭」晉書阮籍傳に「籍嘗獨駕車、不由徑路、車迹所窮、輒痛哭而返」

【窮年累世】窮年は己の一生涯、累世は子孫代代をいひ、

ふ、荀子榮辱篇に「人欲ㇾ夫ㇾ餘財蓄積之富ㇾ也、然而——不ㇾ知ㇾ足」

【九拜】　拜禮に九種あるをいふ、周禮大祝に「一曰稽首、二曰頓首、三曰空首、四曰振動、五曰吉拜、六曰凶拜、七曰奇拜、八曰褒拜、九曰肅拜、以享ㇾ右祭祀」

【牛背】　牛の「セナカ」陸游の詩に「兒童踏——、安穩如ㇾ乘ㇾ舟」

【丘蕘】　「ハカバ」漢書司馬遷傳に「僕以ㇾ口語ㇾ遇ㇾ遭ㇾ此禍、重爲ㇾ鄉里所ㇾ戮笑、以汚ㇾ辱先人ㇾ、亦何面目復上ㇾ父母之——乎」

【窮骨ニ到ル】　（窮到ㇾ骨）困窮の極に至るをいふ、杜甫の詩に「已訴徵求——」、更思戎馬淚沾ㇾ巾」

【窮理】　天地間の道理を推し窮むる義、易の繫辭に「——ㇾ盡ㇾ性以至ㇾ於命ㇾ」盡性は人の性を盡すをいふ、

【九流】　九種の學派をいふ、漢書藝文志に、儒家者流（五十三家）道家者流（三十七家）陰陽家者流（二十一家）法家者流（十家）名家者流（七家）墨家者流（六家）縱横家者流（十二家）雜家者流（二十家）農家者流（九家）を載す、別に小說家者流（十五家）を載せ、且つ曰く「諸子十家、其可ㇾ觀者九家而已、皆起ㇾ於王道既微、諸侯力政、時君世主好惡殊ㇾ方、是以九家之術、蠭出並作云云」

【丘陵】　「ヲカ」禮記の曲禮に「從ㇾ長者ㇾ而上——ㇾ則必鄉ㇾ長者所ㇾ視、周禮大司徒の注に「土高曰ㇾ丘、大阜曰ㇾ陵」揚子法言に「百川學ㇾ海而至ㇾ於海ㇾ——學ㇾ山而不ㇾ至ㇾ於山ㇾ、是故惡ㇾ夫畫ㇾ也」

【虯龍】　龍の一種、坤雅に「有ㇾ角曰ㇾ——」王逸の離騷章句序に「——鸞鳳、以託ㇾ君子」

【義ヲ見テ爲ザルハ勇ナキ也】　（見ㇾ義不ㇾ爲無ㇾ勇也）義は人の爲すべき道なり、その義を見て而かも避け怯れて爲さざる者は、勇氣なきなり、論語爲政篇、孔子の語、

【芰荷】　「ヒシ」と「ハチス」と、大業雜記に「池沼之內、冬月亦剪綵爲ㇾ——」楊萬里の詩に「船入ㇾ——香處去、人從雲水國中還」

【龜鶴】　宋九域志に「鄧州有ㇾ——池、圖經云、梅福養ㇾ——之所」

また長壽に喩ふ、梁肅神仙傳論に「仙人之徒、化ㇾ金以爲ㇾ丹、鍊ㇾ氣以存ㇾ身、覩千百年居ㇾ於六合之內ㇾ、是類ㇾ——大椿、愈長且久不ㇾ足ㇾ尚也」郭璞の遊仙詩に「借問蜉蝣ノ蜚、寧知ㇾ——年」

【蹔ク一躍十歩ナル能ハズ】　（蹔躍一躍不ㇾ能ㇾ十歩）千里の馬も一度躍りたるのみにて十歩の前へ進むこと能はざるが如く、いかに賢人と雖も學を爲すには漸を逐ひて進むべきをいふ、荀子勸學篇の語、下に「駑馬十駕功在ㇾ不ㇾ舍」とあり、

【龜胸】　「ハトムネ」雞胸ともいふ、雞書錄に「樊昌高八尺、舍之家、軒昂明、喜鬪數年、生育至ㇾ百餘、其家產ㇾ子四五人、皆——傴僂、蓋孕婦感ㇾ其氣ㇾ所ㇾ致」

【鼈局】　「ゴバン」晉書天文志に「天員如ㇾ張ㇾ蓋、地方如ㇾ——」

【歸去來辭】　晉の陶淵明の作れる文なり、宋書の本傳に「陶潛字淵明、或云字元亮、潯陽柴桑人也、爲ㇾ彭澤令、郡遣ㇾ督郵至、縣吏白ㇾ應ㇾ束帶見ㇾ之、潛嘆曰、我不ㇾ爲ㇾ五斗米折ㇾ腰向ㇾ鄉里小人、即日解ㇾ印綬去ㇾ職賦ㇾ——云云」本集には「程氏妹喪ㇾ于武昌ㇾ情在ㇾ駿奔ㇾ自免去ㇾ職」とあり、辭は賦の類にして全篇韻を押せり、大旨富貴の念を拋ち田園に歸りて悠悠自適以て天命を樂む所以をいへり、

【麴糵】　酒母（カウジ、モヤシ）なり、書經說命に「若作ㇾ酒醴、爾惟ㇾ——」

また直ちに酒の義に用ふ、柳氏家訓に「崇ㇾ好優游、耽ㇾ嗜麴糵」麴は麴に同じ、

【掬水】　本編の（水ヲ掬スレバ）を見よ、

【鬼火】　「オニビ」燐火なり、王逸の九思に「——兮熒熒」淮南子の注に「兵死之血爲ㇾ——」

【機會】　「ヨキ、ヲリ」唐書陸贄傳に「疾徐失ㇾ宜則——不ㇾ及、——不ㇾ及則氣勢自衰」

【劓刑】　「ハナ」を刖る古の刑の名、說文に「刖鼻也」

【期月】　滿一ケ月をいふ、中庸に「擇ㇾ乎中庸ㇾ而不ㇾ能ㇾ——守ㇾ也」

【蟻穴】　「アリノアナ」應璩の雜詩に「細微可ㇾ不ㇾ愼、隄潰自ㇾ——」本編の（千丈ノ堤）を見よ、

【貴顯】　位の「タカク、アラハル」南史臧燾傳に「雖外戚——而彌自沖約、茅屋蔬食、不改ㇾ其舊」

【義士】　（臨濟）を見よ、

【機梭】　「ハタノヒ」白居易の朱陳村詩に「——聲札札、牛驢走紜紜」

【龜山】　山の名、琴操に「季桓子、受ㇾ齊女樂、孔子欲ㇾ諫ㇾ不ㇾ得、退而望ㇾ——作ㇾ之曲、以喩ㇾ季氏之蔽ㇾ魯也、操云、予欲望ㇾ魯兮、——蔽之手無ㇾ斧柯、奈ㇾ——何」同名の山、處處にあり、明一統志に「——在ㇾ延平府將樂縣北三里、形如ㇾ龜、宋楊時歸ㇾ休於此、因號ㇾ——」（楊時）を見よ、

【起死】　死人を生き回らす、轉じて大いなる惠を施すを見よ、

にいふ、國語の呉語に「起二死人一而肉二白骨一也」本編の（死ヲ生シンを見よ、

【喜子】　蜘蛛（クモ）の異名、爾雅の「蠨蛸長踦」の注に「小蜘蛛長脚者、俗呼爲二——一」詩に「一名長脚、荊州河内人、謂之喜母」郷媛記に「廿有二母子一離別、母毎見二蹐蛸一垂レ絲著レ衣、則曰、子必至也、果然、故名二——一、子思二其母一亦然、故號曰二喜母一、均之一物也」和名、ササガニ　允恭紀の「わがせこが來べき宵なりささがにの蜘蛛のおこなひ、こよひしるしも」の歌はこれに本づく、

【旗幟】　「ハタ」幟は標なり「ハタシルシ」ノボリ」史記高祖本紀に「——皆赤」後漢書光武紀に「——蔽二野一、埃塵連レ天一」

【蟻聚】　蟻の如く多く「アツマル」北史于仲文傳に「河南——之徒、應時殲二殪一、蟻附蟻萃、蟻集皆同じ、

【鬼神】　造化幻妙の理を斥していふ、禮記禮運の鄭注に「鬼ハ精魂ノ歸スル所ロ、神ハ祖廟山川五祀ノ屬ヲイフ」中庸章句に「程子曰ク、——ハ天地ノ功用而シテ造化ノ迹ナリ、張子曰ク、——ハ二氣ノ良能ナリト、愚謂ヘラク二氣ヲ以テ言ヘバ、則チ鬼ハ陰ノ靈ナリ、神ハ陽ノ靈ナリ、一氣ヲ以テ言ヘバ則チ至リテ伸ビル者ヲ神ト爲シ、反リテ歸ル者ヲ鬼ト爲ス、其ノ實ハ一物而已」

【機心】　「タクミ」に「ハタラキ」ある心、劉長卿の詩に「牢落——盡、惟憐鷗鳥親」本編の（機事アルモノ）を見よ、

【貴壽】　「タフトク」且つ命「ナガシ」易林に「隆二我福祉一——無レ極」

【歸省】　故郷に歸りて父母を見舞ふ義、朱慶餘の詩に「——及二花時一、行吟落第詩」

【嬉笑怒罵皆成二文章一】　黄山谷の蘇子瞻像贊の語「タノシミ、ワラヒ」「イカリノノシル」勿卒の語も皆文章を成すとの義、

【喜雪】　坤雅に「犬——レ二馬喜一レ風」

【貴寵】　「タフトク」愛せらるる、國語に「尊」——賞功勞一」南史趙倫之傳に「倫之雖二外戚一——而身居二儉素一」

【吉日】　「ヨキ」日なり、儀禮冠禮に「令月——」注に「令吉皆善ナリ」

【狐死シテ丘ニ首ス】　（狐死首レ丘）本編の（丘ニ首ス）を見よ、

【豺突】　豺は豕なり「キノシシ」の突きかかる如く猛く進む義、漢書食貨志に「王莽大募二天下囚徒一、人奴名曰二——一豺勇一」

【奇而又奇】　奇妙なる上に更にまた奇妙なる義、論衡

超奇篇に「山以二土石一爲レ體、其有二銅鐵一、山之奇也、銅鐵既二——一自優孟抵二掌孫叔敖一實始濫觴」

【急流勇退】　「オモヒキリテ」官位を辭し去る義、名臣言行錄に「一僧謂二錢若水一曰、公急流中勇退人也」本編の（勇退）を參看せよ、

【器皿】　器物なり、孟子滕文公下篇に「牲殺——、衣服不レ備、不二敢以祭一」

【君ト共ニ一夜話ス、十年ノ書ヲ讀ムニ勝ル】　（共レ君一夜話、勝二讀十年書一）君と一夜談話するは、十年閒の讀書よりも益多しとの義、程伊川語錄に「古人有レ言曰、——、若一日有レ所レ得、何止勝二讀十年書一耶」

【機務】　「タイセツ」なる政務、宋書王弘傳に「參二讚——一

【琴高】　鯉に乘りて天に昇りしといふ仙人、列仙傳に「——者趙人也、以レ琴爲レ姓、宋康余人、明二一統志一に「——山在二寧國府涇縣東二十里一、旁有レ臺、相傳——控レ鯉上昇之所」又曰く「——涇縣人、有二道術一、入レ水不レ濡、嘗游二襄州涿郡一二百餘年、一日餅衆入二涿水一、他日乘二赤鯉一而昇、其弟子見レ之」

【金閣】　黄金にて飾れる樓閣、宋史曹修古傳に「廟議

禁——一般不可勝計」高適の雪中詩に「——倚雲開、朱軒犯雪來」

【琴鶴】「コト」と「ツル」と、宋史趙抃傳に「神宗曰、聞卿四馬入蜀、以一琴一鶴自隨、爲政簡易亦稱是乎」鄭谷の詩に「夫君清且貧——最相親」

【琴棋】「コト」と「ゴ」と、共に風流韻事なり、法書要錄に「辯才博學工文、——書畫皆得其妙」沈約の齊太尉徐公墓誌に「愛重——、流連泉石」

【欹嶮】山勢の聳立する貌、嶮は山相對して危險なるなり、南都賦に「崖峯詭異——屹嶫」

【金玉滿堂】金玉の寶物が家に滿つるをいふ、老子に「——、莫之能守」

【椹花】「ムクゲ」その花朝に開きて夕に萎む、說文に「椹木樓也、朝花暮落」よりて移り易りの速なるに喩ふ、孟郊の寄友詩に「小人——心、朝在夕不存」

【錦官】成都府城の一名、杜甫の蜀相詩に「丞相祠堂何處尋——城外柏森森」明一統志に「——樓在成都府治東、宋元豐中、呂大防建、錦工錦を織り、之を江流に濯へば錦色極めて鮮明なり、故にこの地を錦里と名づけ、亦城を——といふ」山水經注に見えたり、

【錦殿】文章の十分に鍛鍊して一字も「ユルカセニセ

ザル」義、韓愈の進學解に「春秋——」

【噤口】本編の（口ヲ噤ム）を見よ、

【筋骨】「スヂ」と「ホネ」と、孟子の告子下篇に「勞其——餓其體膚」淮南子兵略訓に「人無——之強」

【錦字】侍兒小名錄に「前秦安南將軍竇滔、有寵姬趙陽臺晉之別所、妻蘇求而獲焉、苦加撻辱、滔深恨之、滔鎭襄陽、與陽臺之任、絕蘇氏音問、蘇悔恨自傷、因織錦、爲文題詩二百餘首、計八百餘字、縱橫反覆、皆爲文章、名璇璣圖、遣苍頭賫至襄陽、滔覽——、感其妙絕、因具車從迎蘇氏」趙嘏の織錦贈家妻詩に「——行行苦羅幃日日啼」本編の（回文ノ）を參看せよ、

【金州】唐・五代・宋・元の州名、今の陝西興安府安康縣治、

【禽獸】「トリ、ケモノ」書經旅獒に「珍禽奇獸、不育于國」禮記曲禮に「猩猩能言、不離——」

【巾櫛】巾は「テヌグヒ」櫛は「クシ」禮記曲禮に「男女不雜坐、不同——」後漢書列傳に「使賤妾侍執——」

【琴瑟】說文は「琴ハ禁ナリ」白虎通に「琴以禁制淫邪、正人心也」琴論に「伏羲氏削桐爲琴、面圓法天底方象地（中略）五絃象五行、大絃爲君、小絃爲臣、文武加治、

二絃、以合君臣之恩」瑟は琴より絃多し、十五絃、二十三絃、二十五絃、五十絃等種種あり、書經の益稷に「搏拊——」詩經周南關雎に「窈窕淑女、——友之」朱註に「琴五弦或七弦、瑟二十五弦、皆絲屬」

【禁城】天子の「ゴテン」一に皇城ともいふ、岑參の早朝詩に「銀燭朝天紫陌長、——春色曉蒼蒼」本編の（禁掖）を參看せよ、

【金城湯池】城の極めて險固なるをいふ、漢書の蒯通傳に「——、不可攻也」本編の（——）を見よ、

【錦上花】美くしき上に美しきを加ふる義、王安石の卽事詩に「麗唱仍添——」

【琴酒】「コト」と「サケ」と李太玉の言懷詩に「白鶴高飛不逐琴、稽康——鮑照文」

【琴書】「コト」と書籍と、魏志崔琰傳に「年二十九就鄭玄受學、自去家四年、乃歸、以——自娛」南史宗少文傳に「少文妙善——圖畫、縉紳言理、每過山水、往輒忘歸」白居易の自喜詩に「身兼妻子都三口、鶴與——共一船」

【琴聲】劉長卿幽琴詩に「月色滿軒白、——宜夜閑」琴音に同じ、

【金石索】十二卷、清の馮雲鵬（字ハ晏海、江蘇通州ノ人）

レ手、作「推敲之勢」ニ

【琴筑】 筑は箏に似たる絃器、竹にて之を鼓す、五絃又は十三絃、風俗通に「狀如レ瑟大頭、安レ絃、以レ竹擊レ之故名曰レ筑」陸游の冬夜聽レ雨戲作に「遙窓點滴如ニ——一、支レ枕幽齋聽始奇」

【欽定古今圖書集成】 一萬卷、清の蔣廷錫等敕を奉じて撰す、雍正三年十二月成る、類書中の最も浩博なるもの、暦象・方輿・明倫・博物・理學・經濟の六彙編に大別し、更に之を三十二典六千一百九部に分ち類聚せり、

【金枴】 高等の試驗に及第するを「名ヲ——ニ掛ク」といふ、西京雜記に「將相——其次銀枴、州縣小官蓋是鐵枴」

【金箔】 宋史仁宗紀に「禁レ以ニ——一飾ニ佛像一」

【金風】 「アキカゼ」秋は五行の金に配す、故にいふ、張協の雜詩に「——扇ニ素節一、丹霞啓ニ陰期一」

【金不換】 萬金にも換へ難き貴重の品をいふ、墨經に「凡墨日日用レ之、一歲綴減半分、如レ是者萬金不レ換」

【吟哦】 詩歌の趣味をいふ、釋禪月の寄ニ樓上人一詩に「雨聲難レ到レ夜、——不レ如レ秋」また詩歌を吟じ味ふ義、唐才子傳に「賈島得レ句云、鳥宿池中樹、僧敲月下門、又欲レ作ニ僧推一レ敲之未レ定、——引レ手、作ニ推敲之勢一」

【金罍】 黄金にて飾りたる「サカダル」罍は雲雷の形を畫きたる酒樽をいふ、詩經周南卷耳篇に「我姑酌ニ彼金罍一、維以不ニ永懷一」

【錦鱗】 「ウックシキ」魚、鮑照の芙蓉賦に「戲——而夕映、曜ニ綵羽一以晨過」宋高宗の漁父詞に「青草開時已過船、——躍處浪痕圓」

【鬼門】 萬の鬼の聚まるところ「ウシ、トラ」の方をいふ、隋書誠吉傳に「迴風從レ艮地——氷」文選の注に「海東經云、東海有レ山曰ニ度索一、名曰——、萬鬼所レ聚」

【期門】 軍門なり、漢書東方朔傳に「建元三年、微行初出（中略）與ニ待中常侍武騎及待詔隴西北地良家子能騎射者一、期ニ諸殿門一、故有ニ——之號一、自レ此始」李華の弔ニ古戰場文一に「主將驕敵、——受レ戰」

【強項】 容易に低屈せざる剛直の士をいふ、漢書に「楊震孫奇、立レ朝剛直、靈帝曰、卿——、眞楊震之子孫也」本編の（——）を見よ、

【強圍】 十干の丁の異名、本編の（十干）を見よ、

【鏡花水月】 鏡に「ウツリタル」花と、水に映りたる月と、見るべく、取るべからざるに喩ふ、詩家直說に「詩有レ可レ解不レ可レ解、若ニ——一、勿レ泥ニ其迹一、可也」

【鄉貢】 唐の世、士を取るに、州縣の長官の選拔に係るものを——といふ、唐書選擧志に「唐制取レ士之科、多因ニ隋舊一、然其大要有ニ二、由ニ學館一者曰ニ生徒一、由ニ州縣一者曰ニ——一、皆升ニ于有司一而進退之」

【強將下無ニ弱兵一】 （強將下無ニ弱兵一）強き大將の部下には弱き兵卒なしとの義、蘇東坡集に「題ニ連公壁一云、俗語云、——、眞可レ信、吾觀ニ連公之子孫一、無ニ一不レ好レ事者一、此寺當レ日盛矣」

【鏡臺】 北史齊幼主紀に「宮女寶衣玉食者五百餘人、一器直萬匹、——直千金」

【京都】 京師に同じ、學山錄に「稱ニ京師一爲ニ——一、始ニ于司馬晉時一、蓋景王諱師、故晉人避レ之也」また同書に、晉以前に——の語あるは後來史臣の諱みて追改せしなりといへり、後漢書班彪傳の注に「京師——也」本編の（京師）を參看せよ、

【強半】 半分過ぎをいふ、歐陽修の詩に「無窮興味關中得、——光陰醉裏消」蘇軾の詩に「扁得兒童語言好、一年——在ニ城中一」

【狂藥】 酒をいふ、人の心を狂亂せしむるによる、晉書の裴楷傳に「足下飮ニ人一——、貴人正禮不ニ亦乖一乎」宋の范質の詩に「戒爾勿ニ嗜酒、——非ニ佳味一」

【鏡奩】 「カガミバコ」後漢書陰皇后紀に「親ニ太后一——中物、感動悲涕」鏡匣に同じ、

【匡廬】 廬山の異稱、本編の（香爐峰）また（匡裕）を見よ、

【脚色】 出仕する時の履歷書をいふ、朝野類要に「初入仕、必具ニ鄉貫三代名貫一、謂ニ之——一」元明以後轉じて演劇の仕組書の義に用ふ、

【起予】 陸游の詩に「稚子談ニ經旨一——」本編の（予ヲ起ス）を見よ、

【御宇】 人君が宇内を統御する義、晉書武帝紀に「握ニ圖一——、敷ニ化導一レ民」轉じて御世の義にも用ふ、

【胸襟】 胸中に同じ、襟は胸に當る、故にいふ、劉伶の詩に「閑レ此消ニ——一」

【凝結】 脂の凝り「カタマル」如きをいふ、淮南子に「——而不レ流」

【蛩聲】 蛩は蟲に同じ「コホロギ」蟋蟀ともいふ、白居易の禁中聞レ蛩詩に「西窗獨閉坐、滿耳新蛩聲」蛩語・蛩吟・蛩唱・蛩鳴皆同じ、

【胸中成竹】 （胸中有ニ成竹一）竹を畫くに先ちて胸中已に出來上りたる竹あり、而る後ちに筆を下す義、蘇軾の偃竹記に見ゆ、本編の（成竹）を見よ、